女學世界定期增刊

第壹卷第十二號



太陽増刊

世界國勢要覽

九月十日發行
第七卷第十一號
正價金參拾錢
郵稅參錢

世界の交通頻繁なるに從つて各國民は世界萬國の形勢に曉通せざる可らず是れ獨逸國に「ホーフカレンダー」佛國に「アルマナック」英國に「ステーツマン、イーヤブック」其他歐米の各邦亦世界形勢通覽とも稱すべき書籍の年毎に出版せらるゝ所以也我國に至つても亦此種一二の書あれど材料既に陳腐にして活世界に用ふ可らず玆に本館が太陽定期增刊として發行する者は最新の材料を基とし世界現在の形勢を傳ふ其編纂の法は繁雜に流れて却て讀者に不便を感せしむることを憂へ勉めて簡潔に而も明細に記述して毫も遺漏なし讀者若し一書を坐右に置かば地球上諸邦の成立より現今各方面の狀況に至る迄一國の漫遊をも試みずして而も明瞭に會得し得べく以て世界の形勢を論じて言肯綮に當らざるなからむ

目次

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(甲の一)

通俗百科全書

全部五拾册　全壹册菊版三百二十頁　毎月壹回發行

第貳拾貳編

河上清君著

通俗獨逸歴史

（製本出來）

全壹册　菊版　三百廿頁　正價卅錢　郵税八錢

本書は先づ第一編に古代史を記し日耳曼人の風俗日耳曼人と羅馬人との關係を詳明ならしめ第二編中世史には最初の日耳曼種族の狀態それよりフランク王朝時代サクソン王朝時代ホーヘンスタウヘン王朝時代ホワルクセンブルヒ王朝に移る過渡時代の諸王に及び夫より墺太利王朝即ちハプスブルヒ王朝の勃興より文藝の復興までを詳記し第三編近世史に入りて更に墺太利王朝カール五世即ち宗敎改革より日耳曼帝國の解體に及べり進んで四編には十九世紀史として日耳曼列邦と那翁一世との戰爭を記し各聯邦の成立文藝の發達聯邦に於ける革命的運動より普佛戰爭日耳曼の統一憲法の制定及び最近の狀勢に記及して精細洩す所なし近來稀有良好の獨逸史は夫唯だ本書あるのみ

既刊目次

- ●第一編　通俗日本歴史……足立栗園君編
- ●第二編　通俗世界歴史……長谷川誠也君編
- ●第三編　通俗明治歴史……坪谷善四郎君編
- ●第四編　通俗德川十五代史……岸上操君編
- ●第五編　續俗文學汎論……奥村信太郎君編
- ●第六編　通俗倫理學……足立栗園君編
- ●第七編　通俗法學汎論……法學士桐生政治君著
- ●第八編　通俗商業簿記……高橋邦次郎君著
- ●第九編　通俗政治汎論……鳥谷部銑太郎君著
- ●第十編　通俗英語案内……長川太之助君著
- ●第十一編　通俗言語學……宮田修君著
- ●第十二編　通俗銀行簿記……窪河眞澄君著
- ●第十三編　通俗會社簿記……高橋邦治郎君著
- ●第十四編　通俗經濟汎論……青山育次郎君著
- ●第十五編　通俗工業官廳簿記……高橋邦次郎君著
- ●第十六編　通俗理化一斑……藤野修吉君著
- ●第十七編　通俗日本地理……大和田建樹君著
- ●第十八編　通俗文章學……宮川鐵治郎君著
- ●第十九編　通俗世界地理……澁江保君著
- ●第二十編　通俗動物學……河村守義君著
- ●第廿一編　通俗教育學……永持德二君編

正價前金　●自一編至十五編一册廿五錢●六册壹圓四拾錢●十二册貳圓七拾錢　●十六册以下一册參拾錢●六册壹圓七拾錢●十二册參圓參拾錢

（甲の二）

發兌元　東京　博文館

（新版廣告）

文學士 久保天隨君著

檜木笠

（九月中旬發行）

現時の詞壇行文を以て其能を稱せらるゝ者固より少なからずと雖も天隨氏の如き確かにその上位に在るべきもの天下の公論之を證して餘あり鴻爪雪泥游踪尤も廣く隨處の江山悉く記あり而して翻山攪海の筆一種豪健疎宕姿致到底他の摸倣追隨を許さゝる者あり誠に百代の珍と爲すべし本書は氏が最近の記行文二十餘篇を蒐めたるものにして文中時に詩俳を加ふ閑窓の下淨几の上試に一讀すれば紛々たる俗塵を隔離して相伴うて遠く去り青山白水の寰區に逍遙するの感あるを得む

全壹冊
洋裝袖珍
正價金四十五錢
郵税八錢
寫眞銅版風景十六葉入

發兌元 東京 博文館

堀内新泉著

家庭讀本夏の卷

家庭小說の新旗色を目下の文壇に翻して、高く世道人心を風發し、純潔多趣味を敎へて樂ましむる堀內新泉子前著『春の卷』に於て、夙に世の喝采を博し、今又玆に『夏の卷』を發行す。開卷直に淸風明月の下に和氣靄靄たる家庭の嘉樂を示し。その着想着筆のいかに爽快藝實にして藹靄なるかは、子が近頃『國民新聞』に連載せし一大長篇『女樂師』の近年稀有なる世の激賞を招きたるに於ても知る可し。世の敎育家父兄子弟婦妻の座右には一日もこの可憐の書冊無かる可からず、家庭及び學校にも亦必ずこの種の冊子を備へざる可らず

目次 （一）庭の若葉（二）螢狩（三）游泳の名人（四）雨後の月（五）蚊やり火（六）姫百台（七）夕すゞみ（八）夕立（九）撫子

挿畫入 定價拾六錢 郵税四錢

家庭讀本春の卷

挿畫入 定價拾六錢 郵税四錢

目次 ●古稀殺●自愛●老船長●花ちる里●おもちや●御國の風俗●母の面影●族●おぼろ月夜

發行所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 電話本局二二四一〇番 開發社

（甲の一）

▲教科用書新刊廣告▼

FAMOUS STOREIS
RETOLD BY
JAMES BALADWIN,
ADAPTED BY
H. SAKURAI.

櫻井彥一郎君校訂　女子英學塾藏版

逸事叢譚 フエーマス、ストーリーズ

美裝全壹冊　正價金卅五錢　郵稅四錢

當時英米の學校にては從來の如く學生に授くるにリーダーを以てすることを廢し、之に代ふるに古人の逸話、名家の小品文並に歷史等の類を編述したるものを以てすることゝなり、此書の如きは即ち其一にして目下米國各州の學校に於て一般に採用せらるゝものなるが今之を譯して我邦初等英學生の用に適せしめんが爲、幾多の訂正を施して出版することゝなれり

其特色とする處は

一古今の英雄哲人名婦の逸話四十餘編を綴りたるものなれば學生に與ふるに多大の興味を以てする事

一主として單音字を用ゐ固有名詞等には發音譜を施したれば第二リーダー程度の教科書に最も適したる事

一文章は米國の知名の教育家ジエイムス、バルドウイン氏が精錬の筆に成り、實用英語を學ぶに適切なる事

等の諸點に在りて高等小學校尋常中學校高等女學校及各種の學校の教科書となすに頗る其好なりとす

明治卅四年六月十九日　**文部省檢定濟**

ENGLISH STORIES
SELECTED
BY
MISS TSUDA.

津田梅子女史編　女子英學塾藏版

名家小品 イングリッシユ、ストーリーズ

美裝全壹冊　正價三拾五錢　郵稅四錢

此書は津田梅子女史が多年教授上の實驗に基き實用英語の主旨により歐米大家の作に成れる小話數篇を撰ひ出で難解の字句には一々詳註を加へたるもの也殊に印刷紙質は共に文部省規定に準じて鮮明頁好なれば尋常中學高等女學校にて第四リードルを程度とする學年一期間の譯讀會話等の教科書となすに適し學生をして歐米の俗諺を知らしむるに甚た便なり本書は既に日本女子大學校、女子高等師範學校、華族女學校明治女學校、女子英學塾其他男女學校の教科書に採用されたり

發兌元　東京日本橋本町三　**博文館**　大賣捌　東京神田表神保町　**東京堂**

（甲の四）

『糸すゝき』目次

普通文

和歌

新體詩

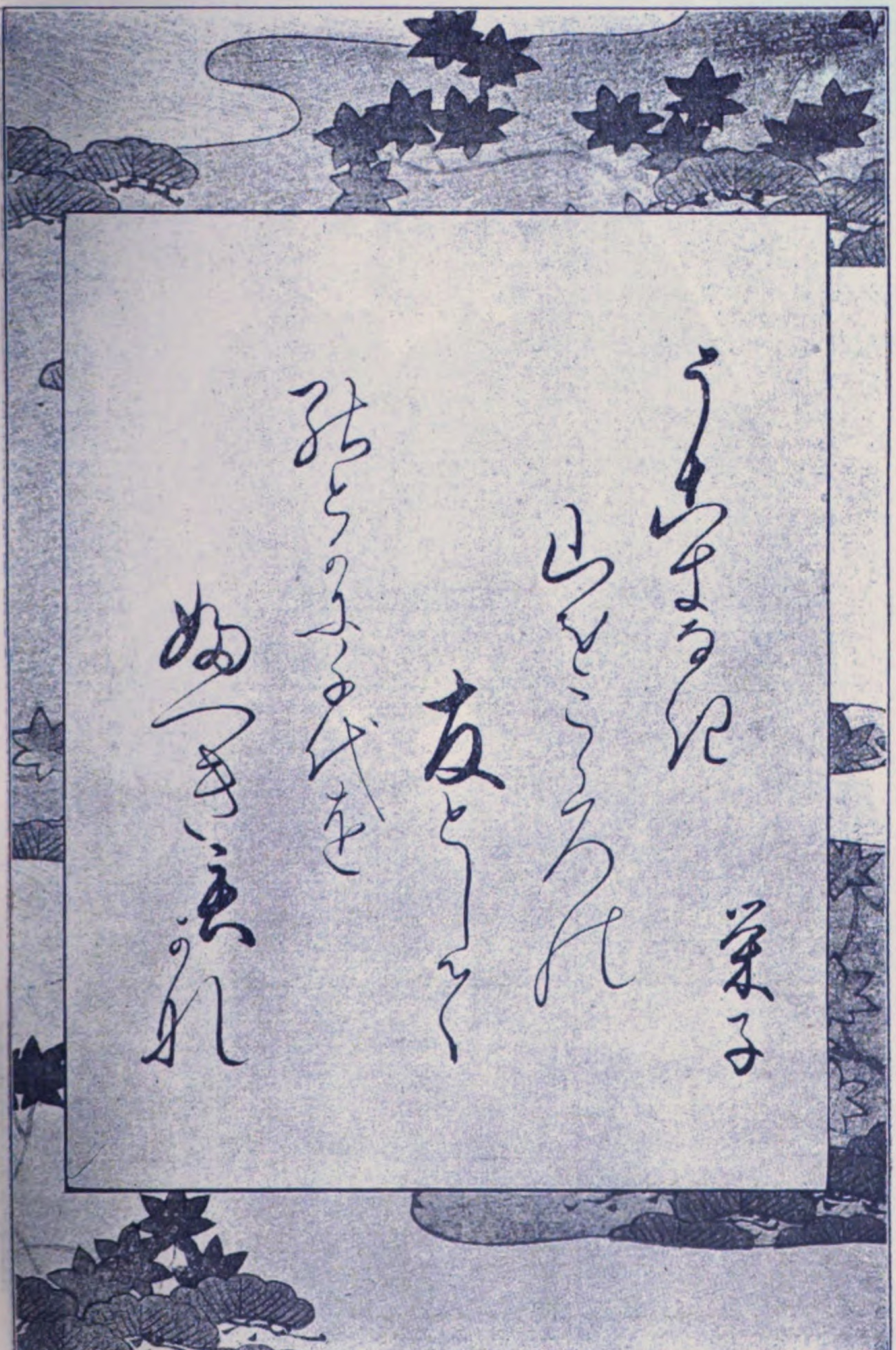
名流雜俎

雜録



和蘭女皇陛下と其母后

（女皇幼年の撮影）

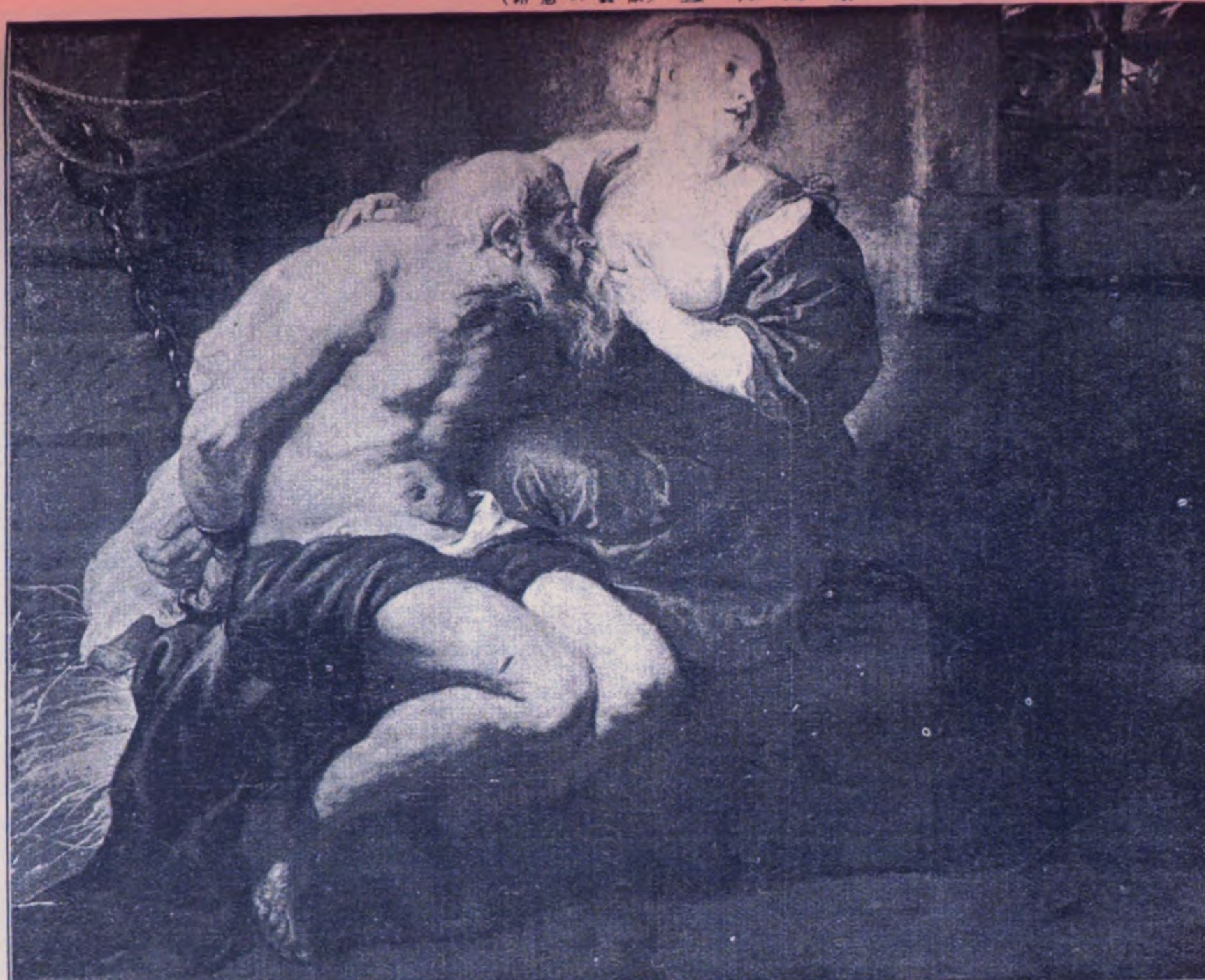


鍋島侯爵夫人の筆跡



不二の高根

泰西名畫　（俠義の慰藉）



ルーベン畫伯の筆

續帝國文庫

既刊

●第一編……眞田三代記
●第二編……近世説美少年錄
●第三編……日本歌謠類聚 上
●第四編……日本歌謠類聚 下
●第五編……偐紫田舍源氏
●第六編……竹田出雲淨瑠璃集
●第七編……朝夷巡島記
●第八編……兒雷也豪傑譚
●第九編……江戸作者淨瑠璃集

●第十編……前々太平記
●第十一編……太平記
●第十二編……紀海音淨瑠璃集
●第十三編……近松淨瑠璃集
●第十四編……後太平記
●第十五編……近松半二淨瑠璃集
●第十六編……脚本傑作集 上（發賣禁止）
●第十七編……京山全集
●第十八編……落語全集

第卅六編

鶯亭長井金升君校訂（製本出來）

校訂 俗曲大全

義太夫、一中、河東、富本、新内、薗八、常磐津、清元等を始じめ端唄、祭文、都々逸、その他の小唄に至るまで、三筋の絲に合せて語るもの、謠ふもの種類を網羅し、古今の歌曲を集めたれば、眞に大全に負かず文藝に遊ぶ者、座右に一部を備へざるべからず

全壹冊洋裝總クロース金文字入
●正價金六拾錢
●郵税拾六錢

既刊

●第十九編……並木宗輔淨瑠璃集
●第二十編……紀行全集
●第廿一編……一九全集
●第廿二編……漂流奇談全集
●第廿三編……邯鄲諸國物語
●第廿四編……續紀行文集
●第廿五編……續水滸傳
●第廿六編……文耕堂淨瑠璃集
●第廿七編……傾城水滸傳

●第廿八編……白縫物語 上
●第廿九編……白縫物語 下
●第三十編……北越軍談 時代鑑
●第卅一編……常山紀談
●第卅二編……萬物滑稽合戰記
●第卅三編……續一九全集
●第卅四編……黄表紙百種
●第卅五編……俳優全集
●第卅六編……俗曲大全

正價 壹冊 六拾錢
十二冊 六圓九拾錢
●六冊 參圓五拾錢
●廿五冊 拾參圓
郵税壹冊拾六錢

（乙の一）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

近刊廣告

坪谷善四郎君著
市制町村制釋義
（製本出來）

市制村制の始めて施行せらるゝや坪谷君は市制町村制註釋を著し盛に世に行はれて版を重ぬると既に十七回に及ぶ然れ共其後法令の改正せられ又は解釋の進化せるもの多く今に及べは註釋の不備なるもの又は誤謬あるもの少なからず坪谷君近來自ら東京市會及牛込區會等の議員となり平生經驗する所多し故に今回新たに本書を著はし最も簡易明白に法律の理由を解釋し且つ市町村制に伴ふ一切の法令を附記し以て市町村の吏員及議員の爲に座右の寶典たらんとを期せり既に出版に着手せり近日公にせらるべし

全壹冊洋裝　菊判二百餘頁　正價四拾錢　郵稅六錢

市岡正一君編纂　改正 戸籍事務取扱全書　全壹冊 洋裝　賣價金壹圓廿錢　郵稅拾六錢

宮川大壽君註釋　理由詳說 改正戸籍法典　全壹冊 洋裝　正價金三拾錢　郵稅八錢

坪谷善四郎君著　改正 府縣制郡制釋義　全壹冊 洋裝　賣價金三拾錢　郵稅六錢

鷲見金三郎君編纂　改正府縣制並郡制關係法規　全壹冊 洋裝　正價金五拾錢　郵稅拾錢

市岡正一君編纂　戸籍吏必携 戸籍事務實行問答　全壹冊 洋裝　正價金貳拾五錢　郵稅四錢

神津禎次郎君著　民法 戸主必携　全壹冊 袖珍　正價金三拾五錢　郵稅六錢

博文館編輯局編纂　卅四年 新法令　全壹冊 洋裝　正價金三拾錢　郵稅三錢

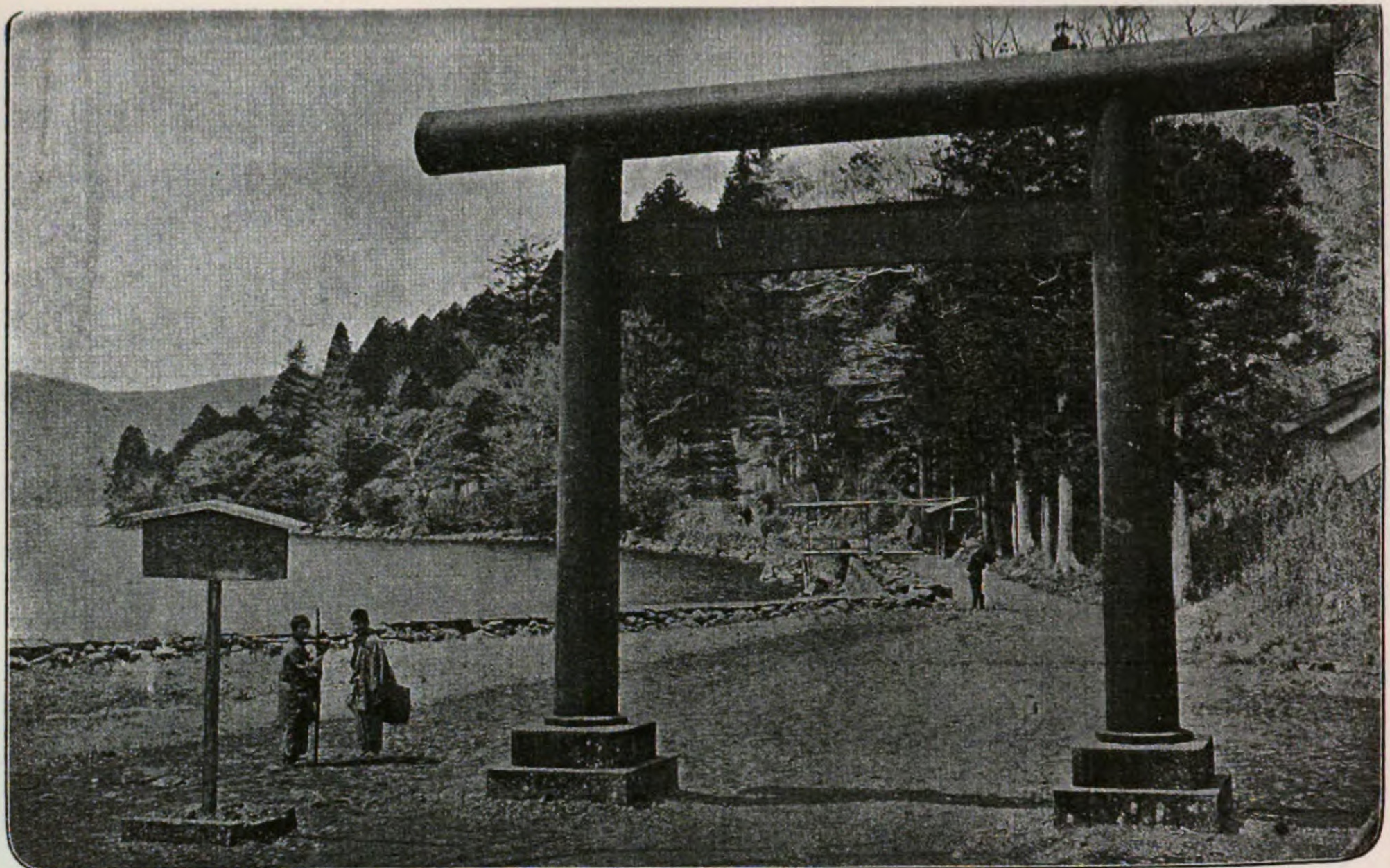
發兌元　東京　博文館

（乙の四）

北米の絶塵境



ロッキー山麓の避暑荘



相州箱根權現社頭



ヂエンネス、ミルラー女史（米國女服改良論者）



アンナ、カザリン、グリーン女史（米國小說家）



獨逸公使井上勝之助夫人すゑ子

（丙3一）

（丙の二）

◎文武堂藏版近刊豫告

少年史譚

全部拾貳册洋装大判 美本

毎月一回發行◎毎編一册讀切◎寫眞數個挿入

定價 金拾五錢◎六册前金八拾七錢◎拾二册前金壹圓四拾錢◎郵税壹册四錢

偉人の傳紀は人生の嚮導者なり、慰籍者なり、譬へば雪中に印せられたる足跡の如し、後人之に據りて進むを得べし、人を鼓舞して勇往せしめ、又人を慰籍して艱苦の中にも失望せさらしむ、書を讀み志を立てむ者、座右常に傳紀なかるべからず。言ふ勿れ古人の傳のみと、觀察の新を以てすれば、數百年前の古人の傳にも、豈新世紀の餘師なからむや。少年史譚の著者は、見識筆力共に當代の撰、而して平生私淑せる古人を擇び、滿腔の同情を寄せて、以て描寫せられたるもの、血わり、涙わり、古英雄の面目紙表に躍動す、實に傳紀中の好傳紀也。

第壹編 **平相國** 文學士 高山樗牛君著 小堀鞆音君畫 九月下旬發行

第二編 鎭西八郎 國府犀東君著 武内桂舟君畫

第三編 鬼吉川 文學士 大町桂月君著 水野年方君畫

第四編 旭將軍 文學士 中内蝶二君著 筒井年峯君畫

第五編 俠僧文覺 文學士 高山樗牛君著 鈴木華村君畫

第六編 北條時宗 國府犀東君著 村田丹陵君畫

第七編 小楠公 文學士 大町桂月君著 梶田半古君畫

第八編 眞田幸村 文學士 中内蝶二君著 尾形月耕君畫

第九編 上杉謙信 國府犀東君著 武内桂舟君畫

第十編 俠商利兵衛 文學士 大町桂月君著 富岡永洗君畫

第十一編 北條早雲 文學士 中内蝶二君著 小林永興君畫

第十二編 常盤御前 靜御前 奴小萬 文學士 大町桂月君著 國府犀東君著 文學士 中内蝶二君著 小林永興君畫

發兌元 東京日本橋本町三 博文館◎大賣捌 東京神田表神保町 東京堂

（丙の三）

全國各女學校職員夏季講習會撮影



（雜錄參照）

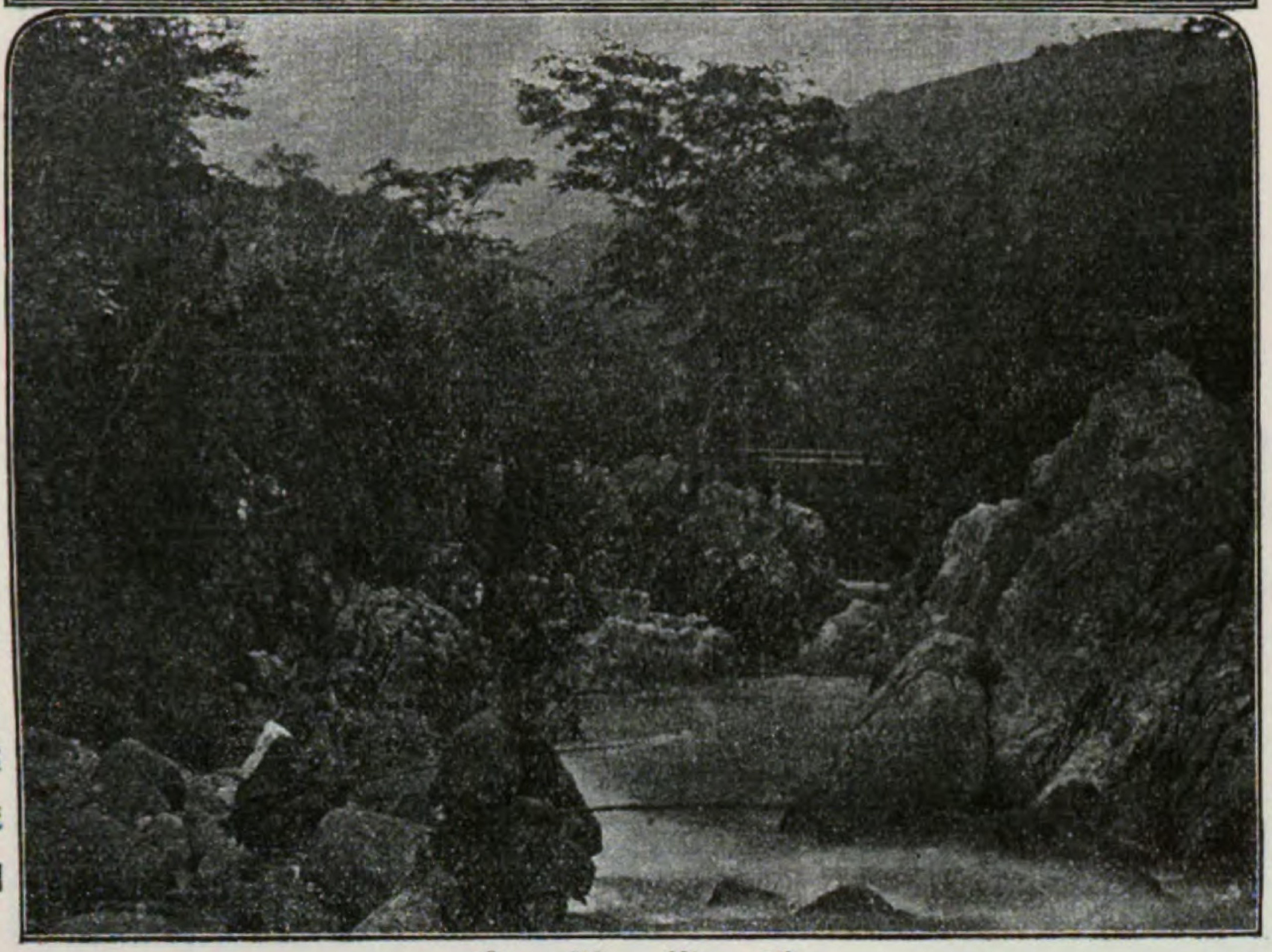


北米バンクーバーの市街

翠松白瀑



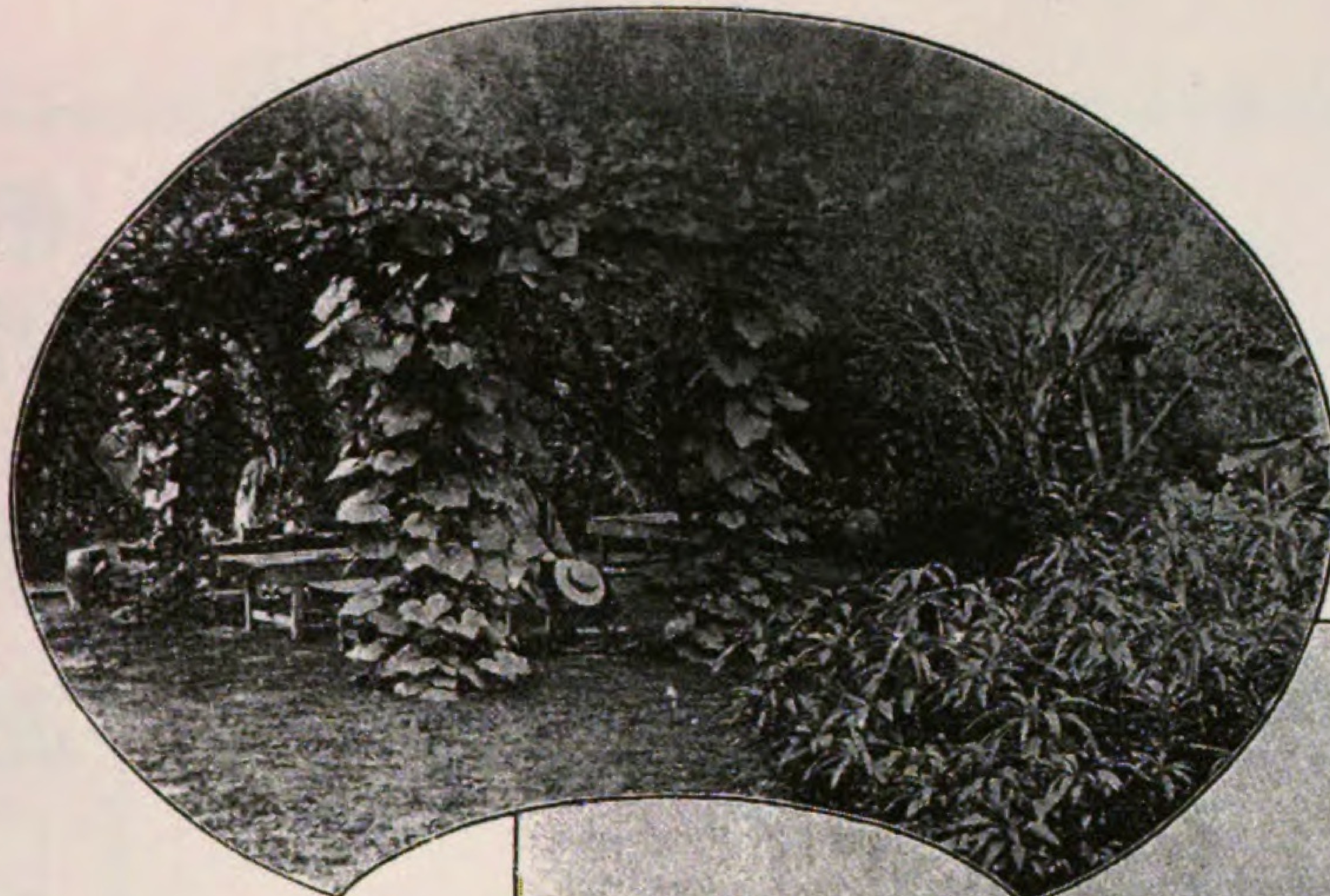
加賀山中溫泉黑谷橋



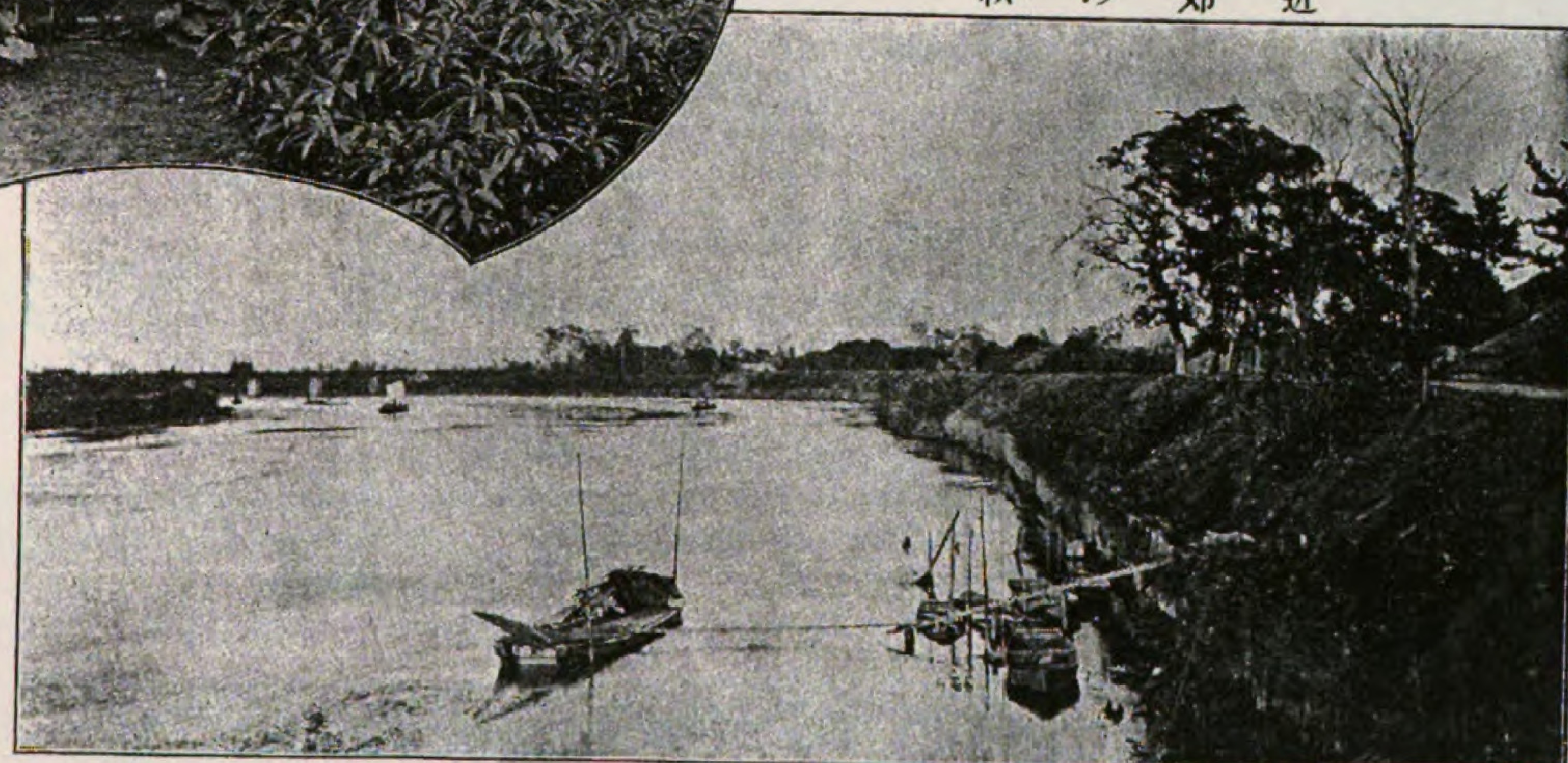
同上溪流間

碧巖溪水

近郊の秋



百花園の秋草と夕顔棚



中川の秋景

（續錄參照）

工業叢書

工學士　市川俊雄君著

第壹編　水及油

（製本出來）

全壹冊洋裝
菊判上製

正價五拾錢
郵錢六錢

水と油とは人生秒時も缺く可らざる必要品なり、人類之に由て生活し、機械之に由て運轉し、萬種之製產之に由て運轉し、萬種之製產之に由て始めて成る、而して其工業上に於ての作用を詳論したるもの、從來我國に此の如き良書なし、世の工業家、機械家及化學者を始めとし艦船鐵道の機關士工業學校の敎員及生徒は勿論其他總ての技師、技手等の必讀すべき良書なり

獨逸國カール、ランゲンベック氏著
東京高等工業學校敎授 東京帝國大學講師 工學士細木松之介君校閱
尾州瀨戶陶器學校長黑田政憲君譯

第貳編　陶器製造化學

（近刊）

全壹冊洋裝
菊判上製

近刊

本書の譯者黑田氏は我國陶器の最も盛んなる產出地なる尾州瀨戶の陶器學校長にて、校者細木氏は工科大學に於て專門として陶器の製造を研究したる工學士なり而して本書の原著は歐洲に於て陶器の產出の最も盛んなる獨逸國のカール、ランゲンベック氏が多年苦心して研究したる陶器製造の原理及方法を編述したるものにて方今世界の各國を通じて斯業の爲めに唯一の原理として賞贊せらるものといふ、當業者の爲めには無上の參考書たるべし近日工業叢書の第貳編として出版せんとす

●瀛關車

工學士糸山孝吉君著

（續刊）

發兌元　東京　博文館●

（丁の二）

洋裝菊判美本

著名文學大家執筆 ※ 有名和洋畫伯挿畫

少年讀本

全部五拾冊 ※ 毎月壹回發行

壹冊百卅頁餘

- 第壹編 高島秋帆　福地櫻痴君著
- 第貳編 白河樂翁公　中村秋香君著
- 第三編 河井繼之助　戸川殘花君著
- 第四編 三條實美公　依田學海君著
- 第五編 曲亭馬琴　饗庭篁村君著
- 第六編 井伊掃部頭　巖谷小波君著
- 第七編 山田長政　遅塚麗水君著
- 第八編 錢屋五兵衞　桐生法學士著
- 第九編 春日局　岸上質軒君著
- 第拾編 水戸烈公　野口珂北君著
- 第拾壹編 桐野利秋　春山鶴峯君著
- 第拾貳編 藤田東湖　大和田建樹君著
- 第拾參編 伊能忠敬　幸田露伴君著
- 第拾四編 新井白石　武島羽衣君著
- 第拾五編 水野越州　中村文學士著
- 第拾六編 池大雅　田山花袋君著
- 第拾七編 木内宗吾　松原廿三階堂著
- 第拾八編 西郷隆盛　川崎紫山君著
- 第拾九編 坂本龍馬　坂崎紫瀾君著
- 第貳拾編 横井小楠　大野酒竹君著

大鹽平八郎

堀紫山君著（第卅八編）

中川葦舟君畫

正價金拾三錢　郵稅四錢

平八郎は卓犖奇偉の士なり、其學陽明王氏を主とす、大阪市吏として深く市尹矢部駿河守に知られしも、跡部山城守矢野氏に代るに及びて、復た平八を重んぜず、偶ま大兇歉の事あるに際し平八の救濟策用ゐられざりしため、憤然兵を擧げて大阪城に據らんとす、事成らずと雖も、一生の傳記壯絶快絶を極む、

- 第廿一編 貝原益軒　石原笠堂君著
- 第廿二編 渡邊崋山　渡邊霞亭君著
- 第廿三編 中濱萬次郎　石井研堂君著
- 第廿四編 近衞忠煕公　鷲多寧之君著
- 第廿五編 間宮倫宗　笹川文學士著
- 第廿六編 周布政之助　堺枯川君著
- 第廿七編 荻生徂徠　内田魯庵君著
- 第廿八編 松平伊豆　森山吐虹君著
- 第廿九編 中江藤樹　國府犀東君著
- 第卅編 島津齊彬公　春山鶴峯君著
- 第卅一編 高野長英　干河岸貫一君著
- 第卅二編 橋本左内　桐生法學士著
- 第卅三編 釋月性　干河岸貫一君著
- 第卅四編 平野國臣　白河文學士著
- 第卅五編 熊澤蕃山　幸田文學士著
- 第卅六編 雲井龍雄　玉木椿園君著
- 第卅七編 野中兼山　北村香陽君著
- 第卅八編 大鹽平八郎　堀紫山君著
- 第卅九編 石川丈山　田岡嶺雲君著
- 第四拾編 烈女お藤　藤本藤陰君著

正價　前金壹冊拾三錢 ● 六冊金七拾錢 ● 拾貳冊金壹圓三拾五錢 ● 郵税壹冊に付四錢

（丁の二）

志賀重昂先生著書　文武堂藏版

日本風景論

本書は審美的と理學的とを調和し、以て日本國の風景洵美なる所因を親切に立論せしものにして、獨り日本人のみならず外國人の批評に據るも、日本近代期の稀有なる名著述として普く知られ、世に敷くと既に五萬部、版を改むると十三、一版毎に材料と圖書とを補閲せば殊に趣味の言ふべからざるものあらん。

増訂拾三版
全壹冊大本洋装頗美本
正價金五拾錢
郵税拾錢

山水叢書 河及湖澤

是れ河と人文との關係を立論せるもの、第四版までは河と人生日本史、朝鮮史、支那史、支那の三大河の文學、西洋史、米國史等十三章に叙説せしも更に河と破壞、濠洲史、湖と人生等の新篇十一章を加へ新に百多の材料を補充し、舊版よりは紙數正しく二倍となれり

大増訂五版
全壹冊大本洋装美本正價四拾錢郵税八錢

地理學講義

本書は東西在來の地理學講究の方法に全く別機軸を出したる者也、日本全國の公私學校にて或は教科用に、或は教師用に舉りて使用するのみならず、清國福建省の首都福州府の學校にても同國人は專ら此書を使用せり。ジヤパン、メール記者批評して曰、地理學を講究するには眞に適當なる著述なりと亦以て本書の眞價を知るべし。

大増訂拾版
全壹冊中本洋装美本
正價三十五錢
郵税六錢

（その三）

發兌元　博文館　◉　大賣捌　東京堂

四書新釋

文學士（漢文學專攻）久保天隨君著（製本出來）

四書新釋 大學

全壹册 洋裝菊判美本 正價拾五錢 郵税四錢

先秦時代の聖經賢傳古今の註疏紛々雜々その多きに堪へざるは何の故ぞ中外學者の短見なるや絶えて當時の社會狀態を詳にせず今を以て古を律し遂に原始の意義を失ふを悟らず私見を逞うし新説を出ださむを力む而かも馬を指して鹿となすの愚に陷りしを知らざるに出るのみ。解義箋釋、必ず之を一に歸するは、學者の重任にして現時の急務たり。天隨氏、文を以て世に稱せらるゝと雖も、その本領は、實に支邦古文學の研究にあり。本書は氏が如上の一見を以て、聖門第一の教科たる四書に就いて、新釋を試みられし者にして、一一據る所あり、引證該博、議論周匝、その要を提げその玄を鉤し、譬へば、痲姑を倩うて痒きを搔くに似たる者あり。その業勸めたりといふべくその勞固より多とすべし。今や第一卷大學刻成る、故に好學の士に一讀を勸む。

四書新釋

全部六册（目次）

- 大學 全壹册
- 中庸 全壹册
- 論語 全貳册
- 孟子 全貳册

以上全部六册隔月發行仕候間陸續御愛購あらんことを希上候

每册價格不同

（子の四）

發兌元 東京 博文館

女學世界定期増刊 第七巻第十二號

才媛詞藻 秋乃巻



小説

特賞（賞品婦人用懐中時計一個）

友千鳥

近江 しらつゆ女史

上 根なし艸

如何なれば妾はかく忌はしき言を歌はるゝならんわが德の足らぬ思慮の淺き故なるべけれど、さりとは餘りに世の人は無情に侍らずや、み冬の朝降る白雪よりも清きこの身を聞くだに耳惡ろき汚れたる者として……今更云はんはことわりめきてをこがましけれどかの池の邊に會ひしは意の外に侍りしよ、妾は叔母上許訪ひ行きての歸途片山の君はゆくりなくも夕飯たぶべてのそぞろありきにやおはしけむ唯一人彼方より來ましき、他に過ぎんも失禮なれば一つ二つ言かはしゝをりしも心よからぬ横田の君は通り掛り給ひて氣味惡るき笑浮べ給ひしと思ひしがやがて其翌日より忌はしき噂は種種にいひなされて人の口に上りぬ思ひ忍ばずの池に心語りしとか手紙を贈り寫眞を交はしゝ或は兩國橋に對の浴衣の袂連れし由されど我友よ君は太陽の光の如惠普き同情もて日々妾を照らして知り給ふべし妾には藥末に結ぶ露だにもかゝる事のおらぬを浴衣の縞の同じなりしは過ぎし六月の末故郷のたらちねより濡衣にせ

よとては送らざりし浪に千鳥の白地の縮なるを、この他の根無草は春の夜の手枕に結ぶ夢にだに覺えず、昨夜横田の君來ましていひ給はく、君がさるたけ〲しき事いひつのりこの親切に諫め參らす友の言の葉をも仇にのみなし給へど我には慥かなる證據物ありとて懷より青色の封筒出しつゝこは覺えなしとは云はせじいかに〲とさながら物語なんどの繼子苦しむる母の如く妾が前につきつけ給ひぬ取り上げて見定めしに節々は堅けれどげに妾に似通ひたる手にて片山君御直披ふみをとの文字侍り妾の驚ろきいかばかりなりしと思し給ふ……横田の君はなど妾をかくも惡くしみ給ふならむ人を落しむるは彼の人の得意なる由は師の君初め友の君達ものたまひしかどもかばかりとは思はざりき、あはれ妙子の君よ無限の苦しみを推し給へこの事の何も知り給はぬ彦根なる父上に聞えなば如何に御心惱ませ給ふらむ。かく云ひ來りし滋野文尾は堪えやらで泣きふしぬ、あはれ美はしき天つ御神の御使とも見まがふ少女をなどかくばかり世は苦しむるならむ。されど未だ其燃ゆる思を燃ゆる如き紅の口唇にいひえぬ苦しみの泉は眞玉の如き清き目にひそめるなり、同情の涙押さへつゝ聞き居る友は清川妙子とかいひし、磯立浪も心隔てぬ千鳥共に〲と故郷の野邊に菫摘みしをそのまゝに四年の昔より袖ふりはえて都なる某てふ學の林に分け入りつるなり、其の輝くばかりの姿と類なき才は優に校中の花として世に聞え高く溫和なる性質と情ある言の葉は常に同窗の友をして敬慕の心を起さしめぬ、わきて文尾は師とも友とも賴み懷かしみて朝夕姉妹の如く睦み合ひ共に來ん春月の桂枝手折りて故郷へ飾る錦ともなすべくかたみに勤め勵みつるをわりなくも悲しき事の何處よりか湧き來て二つの小さき胸を此上なう痛むるなり。さな歎き給ひぞ文尾の君よ彼の玉章はいさゝかの事の違ひなりしにて片山ぬしの下級に山本文雄てふ人ありてそが許より彼の君に送り給ひしなりとか、かくの如君の清きは神も佛もみそなはし給ふなり陸奥のなき名取川に濡衣よし着給ふともいつかは乾く時のなからでやは、大空に輝く月さへ村雲に掩ばれては暫し光も見えざれどやがては元の眞如に歸るべく君いかに世の惡魔の雲にせめられ給ふとも妾は風となり力の限り吹きにふきて拂ひ參らすべしかばかりのはかな事など心にとむる程に侍らむ、されど

それにもまして百千倍なる悲しみの侍るなりなそは他事にも侍らず君がこの日頃夏の夜に飛ぶ螢と身を售し音にだに出し給はぬ苦しみのおはさむ……樂を分つ耳友の道かはいかで〳〵苦しき事の半をゆづり給はらずや。聞きつる人の頰のあたり淡き紅をおびつ、新らしからぬ君が情けはいと嬉しうなむされど君が知り給ふ外になやめる事は露侍らず。といひはなてども燃ゆる思燒くらん胸の中は双の眼の輝きに知られけり。

中　君のうつしゑ

妙子はいとゞ悲しげに、幾年の昔より中垣の隔てなきかひある睦まいに如何なる事もかたみに語り交はしつゝ一人の樂しみは二人の喜びとなり一つの憂ひは二つの胸を痛めてしを今更に隔ある御言こそ似るものもなう恨みに侍れか弱き妾の承りたりとて露がひなき業に侍れど谷間流るゝ水ともなり深山隠れの花筏都の人にこれありと知らする事のなど難からん、君非ずとのたまへど過ぎし頃よりのやつれ給ひし御姿は側目にもしるく常の快活なる御振舞も失せて何となう物思はしき御有樣何として事なき御身にておはさん獨り悶えたまひて彦根に在み父母の君の君が手の紫水晶の指環ゆるみぬと聞し召さば如何に驚ろき給はん、取る年一つ多ければとて出郷の際呉々ものたまひし父君が御言は今も殘りて耳にあり朝な夕な束の間も忘るゝ暇しあらざるを誓ひてし言に違ひて君の仇事のありなば妾は如何にすべき、文尾の君よ妾を哀れと思ほさば之の願ひ許し給ひね。身に引き比べて友を思ふの眞心は夜光る珠といへどもいかで及ぶべき其尊さ。文尾の苦しさいかばかりぞ、優しく親切に云はるれば云はるゝ程いよゝ悲しくなどて我はこの信との情に滿ちたる愛の化身ともいふべき友に隱したりし如何なればかく苦しましめし同じく苦しましむるならば分つ方なか〳〵に我も友も心安かるべきに、我はそも何てふ者か……我心はそも……さりとて今更言はんも恥かし、いかにせばやいかにせばや……。煩悶、懊惱は交々胸に荒れ立ちて荒波の怒るが如、感謝後悔の涙は滾々として盡きず、漸漸にして懷中より一葉の寫眞妙子の手に渡しぬ。見れば手札形に半身の肖像、大學の制帽裕かに、秀でたる眉涼しき目凛々しき鼻口元、淡色の服のこよなう移りよき、襟よりこぼれて出づるは我手づから縫ふて贈りしフラネルの襯衣なり、妙子の顏は紅くなり青く

なり鬢のほつれ毛怪しう振ひて寫眞持つ手は落さん計りに――

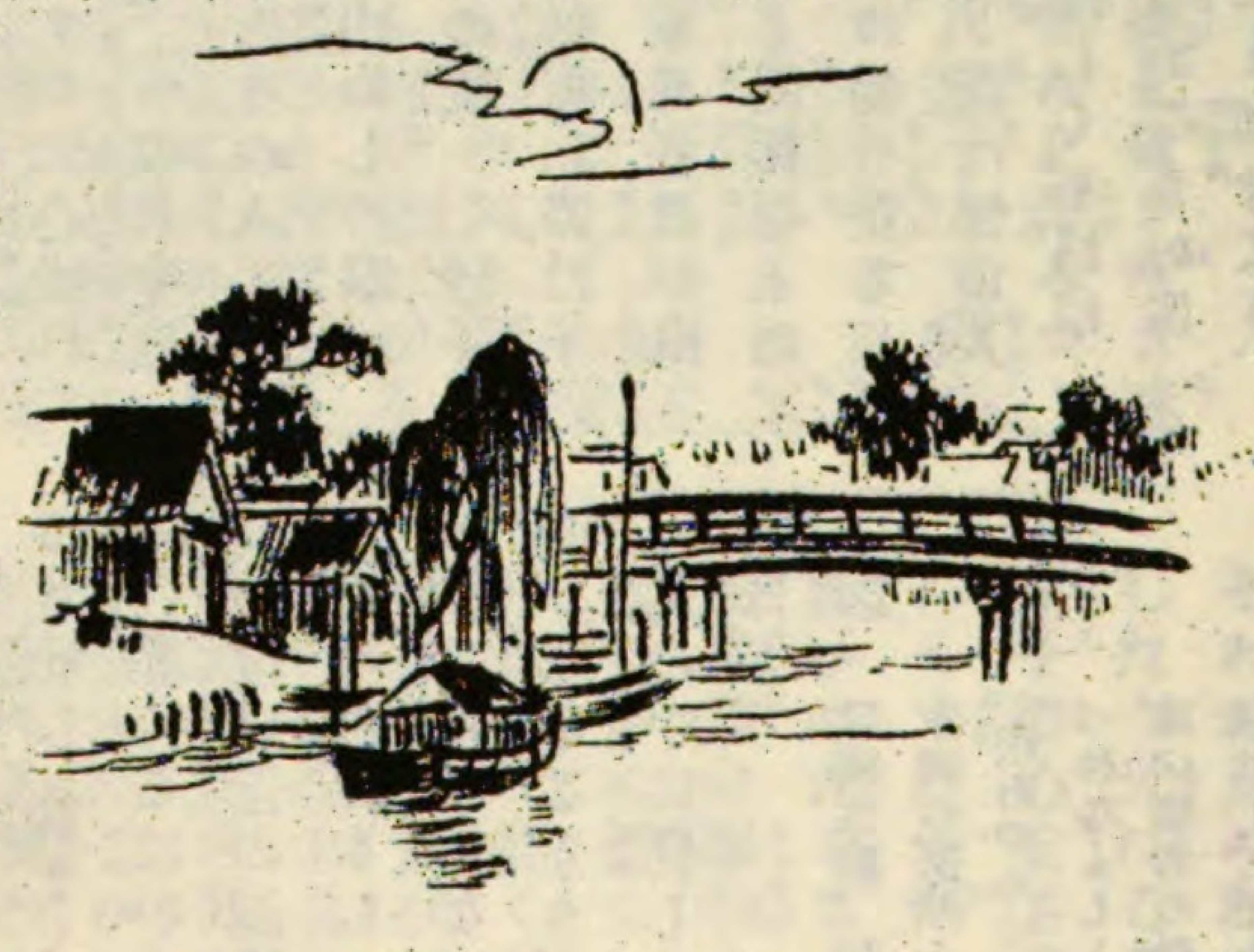
驚ろきぬ驚きぬ二なき睦魄の友が命を懸ての戀人は我身をさゝげて慕へる白井潔の君ならんとは、彼の君はのたまひき、我のかく校中秀才とたゝへらるゝは汝てふ動機のあればなりと我も事なう學の道にいそしむは樂しき園に到らん事を願へばなり我は如何すべき、友の苦しみを他にしておのれのみ幸を貪ぼらんは我本意ならず、さらばとて友にのみ春の光りの暖かきを讓りて我は秋の冷風物悲しきにふしわびなば霜氷る冬の寒き日土裂くる夏の暑さをうしともせで學びし事もかひなき悲しびの種ともなりはてまし、今更かなしき別れして逢はすは何を玉の緒にせん。

妙子の君よ卑しき者と下げすみ給ふらん、されど妾は露汚れなき戀の眞にあこがるゝ身にてかなはざりせばとて世をも人をも恨み侍らず少女心の一筋に千筋の黑髮惜しからず尼ともなりはてゝまし、我世唯一度の初戀の恥かしき思の穗に出でゝ君に明かし參るらしゝをわはれと推し給ひてむや。この言を聞此の心を知れる妙子はいよゝ思ひにまどひつ、たゞ哀のみ催され前後わかで、御心安め給ひね、この君は妾が知り人におはせば、君が思ひにたへかね給ふよし傳へ侍らん

下　友情のいけにえ

水底にさへ春を添へし堤の櫻も世の人々の夢にまかして今は葉のみ紅にかへりの錦を織り出づる秋の向島に夜目にもしるき二人の若き男女は語り合ひのゝ行く。來ん年の夏は我も汝も業なし卒へて喜び多び身ともなりぬべきなり、さらばみ空に澄めるあの淸き月の如まどかなる家庭を作り家族打揃ひこの川の面に納涼せんその時は汝が妙なる聲もて、幼き昔故郷の濱風に二人の振分髮そよかしつゝ唱ひにし彼の夕涼の歌きかせねや。今しも黑き櫻の梢に上るらん鏡の面曇りなき月を仰ぎつゝ理想にあこがるゝ青人は喜びに滿ち滿てる胸の一ふしを漏らしぬ、あなをかしの夜や月はみ空のみならで水の底にも眞玉しづめり、上と下よりそれにも似たる我等二人を守り給ふなるべし、行末かけてとことはに。いよゝ嬉しげなる聲は冴ゆる月影と共に淸し少女は先程よりの言の聞えぬものゝ如く頭垂れつゝ歩みしがふとあふぎ見し目よりは涙かあらぬかはふり落つる露の白玉。あな怪し、など泣くぞ。青年は見とが

めぬ、問はれて悲しげにむせび入れば、こなたいと心元なく、心地にてもなやましきか秋の夜は冷ゆるものぞ、いざとく歸らん今しばし行かば車もあるべし、暫時忍びね。束ねし夜會卷少しく亂れかゝりしを眞白き手になほしつ、いなとよ潔の君よ妾は身體のなやましきには侍らず先よりの君がみ言の餘りに嬉しさになかなかに苦しく、まことと妾をさはかり愛し給ふや。今さら何をか糺すらん、眞ならでやは。さらば妾が命をかけての願言侍り、きゝ届けたまはらずや。いとむつかしき事かな、とく云ひいでねいざ聞かん。この少女こそはかの清川妙子なりけれ、今は決心の色面に見せて涙のあとだに止めず、君は、君がこの地へ上り給ひし明の年岡崎より我が故鄕へ移り來し給ひし妾が二なき友にて今は同じ學びの校に敎草つむ滋野文尾てふ美はしき君を知らせ給ふが、彼の君は行ひ才學共に秀で給ひ、師の君等も行末かけて望ある人の中に入れ給ふ計りにおはせり、



潔の君よ妾に情厚からば文尾ぬしを妾と思したまはらずや、彼の君はながくもがなと願ひ給ひし命も君が爲にはをしからずと身を痛め給ふを、君あはれとおぼし給はずば春の盛りにも逢ふべき莟の花の望ある身も仇し野の露と消え給ふべし、妾が命をいたしての願はこの事に侍りかの君の玉の緒つなぎとめずば妾は故鄕の父母の君に誓ひし言を何とせん、如何で承かせ給ひてよ、聲はか細く虫の音の如悲しげに手を合さぬ計りの賴、潔は痛く〳〵驚ろきつ、汝をおきて汝にかふべき人あらぬ我心はよく知りつらむ、さるを今かゝる言聞かんとは思はざりき、滋野とかやは二三度見たりし實に美はしく又才能勝れたらむされど品行は世に後指さゝるゝ事多かるべく聞きぬ、さる汚れたる罪の子を淸く尊き女神の如き汝と見なせとは常にもあらぬ言かな。汚れたりとは此頃世に唱はるゝ片山ぬしとの事をのたまふか、そは人違なるを。彥根より來つるは御身と滋野との二人

ならん。妙子の身極まりぬ幾滴の涙は雨と降りつゝとばかりに泣き悶ふ。

妾の罪深きをいかにせん……この汚れし身を……今日や明さん明日や云はんと君に逢へばしかすがに心後れて今迄つゝみてし空恐ろしさよ、許し給へ、潔の君今更云はんは一じほ苦しけれど云はであらばあらぬ人も罪の子と呼ばれ給はん悲しさに……かの片山ぬしの事は文尾の君にはおはさで實は……こ……この妾……妙子に侍り、許嫁の夫ある身も打忘れ二つ心持ちし罪は千々にきざまれてもあがぬこの身いかになりとも君が御心の儘になし給へ……。潔の顔の色は見る間に變りぬ怒に滿てる口唇のみは振ひに振ひて化石の如く立ちしまゝ身動きだにせず、月も水も目におらで、我は悔ゆ人を見るの明なかりしを。かくさけびし折怪しくも目は、うるほへり、妙子は糸より細き〳〵聲あるかなきかに、文尾の君は露汚れなき、げに月にも例ふべき御身なり、彼の君を愛し給ひなむや……己れを犠牲となし萬の希望、抱きし理想も樂みも悉く打ち捨て友に盡す眞心―あなあはれ、清き心はみ空の月も知ろし召さんに……、潔は言をもかけて足とく去らんとす　妙子はあわてゝ、やがて君が樂しき新婚旅行し給はん時、故郷の篠の宿に唯ひとり不幸に泣く者ありと思ひ出で給ひてよ。我願うべなひ給ひしか……さかるゝも恨めしきかれざるも悲し、其まゝに大地に打ちふし泣きに泣きつ、涙の種の盡くるばかりに。

其の後琵琶の湖邊彦根の里に、美はしき才子と佳人の新婚の祝ありしとは聞かざりし、されど失戀に泣く少女子二人今もなほ――

明けし年なりき、文部省より派遣せらるゝ獨逸留學生三名の中に怪しや見なれし文字、白井潔の名はもれざりけり？

（をはり）

（評）詞藻富贍、辭句優麗、言ひ廻し方に長じて才情流るゝがごとし女流の文章として上乘の者也、作者は嘗に「夜渡月」と題して「花あやめ」に秀逸を取りたる人なるが、文は當時に比して、いづれをよしとは言ひ離くも、趣向は彼に比し一段の進境を見る殊に撰者の敬服せしは、斯る錯雜せる思想を、この短冊中に言ひ顯はして而かも露骨ならずの點にあり。



特賞（賞品金入用高等四季袋）

八重子

田中はる風

青葉しげりたる木蔭に竹にてあみたる臺を据き吹き來る風を此世なきたまものとして片頬に笑みを含みつゝ絹絲もて編物するは年頃十九あまりの八重子とて圓顏なる見るから快活らしき乙女なり八重子は去年さる高等女學校を最優等にて卒へ其後引き續き學問せんと父にこひしかど許されず日毎に琴の師の家に通ふのみにて折々母の縫物を手傳へども大方はなす事なくて心安く暮し居るなりまして此頃は心に嬉しき節のあれば落附きて家にも居ず常に此涼み臺に腰打ち掛け様々なる思ひを胸に浮べては一人樂しみ居るなりけり抑もうれしき事とは何ぞ他にあらず八重子の兄の友なる松浦殿とて今年文科大學を卒業したる人八重子を妻に給はらずやと兄なる人に求めたるに兄は父母に言はんより先づ妹の心を聞きてと其事を話したるなり其時の八重子の喜びはいかばかりなりしよ中々筆には書きつくし得ぬ程なりきそも彼の殿と知り初めしは今より三年前なりしよ其折はあまり柔しくて男には物足らぬ君よと思ひゐたるに折々問ひ來て互びに親しう交ばる内に柔しき中にも威ありて雄々しく事に當りて砕け給はぬ性にておはすよと見極めたるに何となくしたはしく此君こそわが兄の誠の友なれと來給ふ毎に眞心込めてもてなしたり兄はこを見て竊かにほゝゑみ折々事に寄せて八重子の心をさぐれどもつゆやましき様なければ兄も嬉しく末は如何にもして松浦八重子となのらせん物をと思ひゐたるなり

八重子は編物もあきて手を休め見るともなしに眺むる目先きに美くしき朝顏の花咲きゐたるに何思ひけん差し寄りて輕く其頬におしあてしが人やあるとはつと顏赤め急ぎ飛びのきしが誰もあらぬに胸なで下しなつかしげに花を見つめて「あはれ此花こそ優しき君の御手づから必ずよき花の咲かん程にながめ給へとのたまひて植ゑたまひしものよげにうつくしき花かなわが身を近き内此花のぬしのかたはらにかしづきまつる事となりぬあなうれし其折は常々思ひ居たる理想の家庭を必ずつくりて世の鑑とならんさる人は云ひき高き理想は行はれずとされど君とならばなど難き事のあるべきか

なし遂げし折はいかに樂しき事ならん速く其折の來れかし和氣藹々たる家の中に幼き子等と諸共に住みなば又となき幸ひならめされど〳〵もし君の御心わらはをいとひ給はゞいかにせんなど一人思ひにくれゐたる折しもはしための文もち來りたるを受け取り見ればしたしき友山中初子の君よりなればいそぎ開き讀み下すうちに顏の色青ざめ手さへぶる〳〵と打ちふるへかたく齒をくひしばりおつる涙とゞめあへぬ樣なりやう〳〵讀み終へてばたりと身をなげふし人目なければ思ふ樣泣きね泣きて泣きて氣も心も身にそはず暫時は物もおぼえぬ程になりぬあゝ今の今までうれしげに樣々の空想に思ひを走らせゐたるに唯此文を見しのみにてかく變りしよ變りし文のはじ〳〵は己れを妻にとのたまひし其松浦の君を初子もこひしたひ今は病ひの床のうちに朝夕えたへでかはくひまなき涙のあとを眺めではあぢきなき身をかこち居たるが思ひあまりて恥もわすれ心の底をうちあけてひたすら八重子の力をもて松浦に嫁ぐ樣たのみまつるとくりかへし書きあるたるなりわゝ天は無情なるかな妻にならんと樂しみゐたる八重子の許にかゝる文を送りたるは朝顏の花は萎みそめぬ心

あるに似たり「いかにせんわが夫となり給はん君を初子の君も戀ひ給ひわらはに御心うちあけて力を貸し給はれとのたまふ心はうれしくも有難けれど今は中々つらく侍るよ若今少し速かりせば又何とかわらはゝ思ひかへして病みてまでしたひ給ふ君の御心ゆかせ給はん樣にはからひまつらんがはや父母の君も此事を知り給ひてよろこびゐ給ひ近きうちにゆひのふ取りかはさんとまで進みたるをいかにあせるとも此事を君にゆづらんはゆるし給ふまじさらばはや君の望みはかなうまじわらはが近きに往き侍るをよも言はれじとはいへわらは身を後ぞきて君を進めんはいかにしてもつらし譬へ身一つは難くしのぶとも兄君はじめ彼の君の御心の程はかりがたしさりとて我か身の幸福を希ひて友の苦るしみまして生死の堺ひにさまよひ給ふを見捨つる事はいかにしても〳〵しのびずあゝ友を幸ひになしまゐらせんも又不幸の中に沈めまつらんも此の身ツ進退一つによりて定まるなりされど世に彼の君の他わが夫とかしづく君のあるべしとも思はれぬに友の爲なればとて一生を冷たく淋しく送らんは憂き事なり」とやせんかくやせんと天を仰ぎ地にふして思ひの丈けをかきく

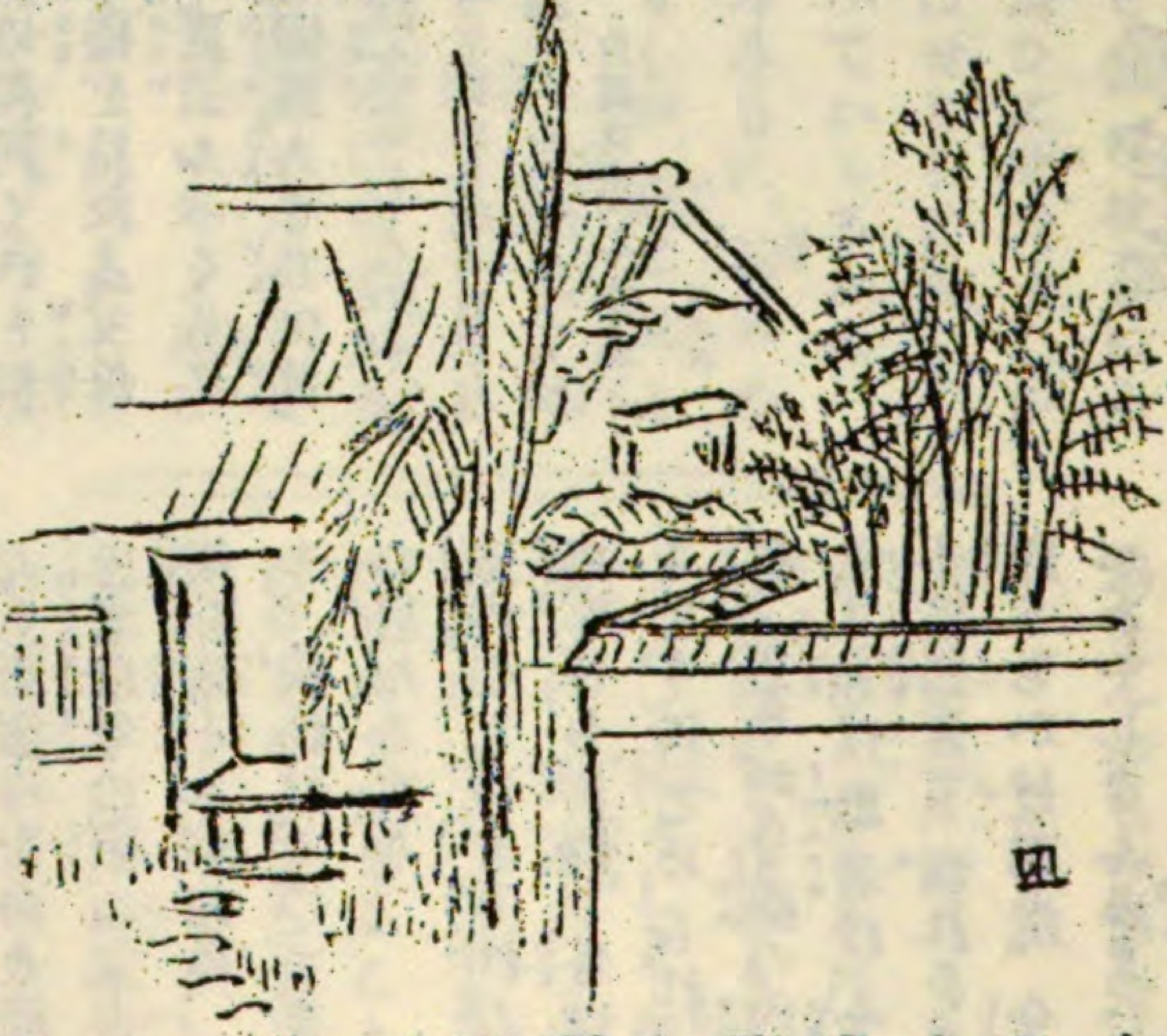
どき〳〵小さき胸ははりさけんばかりに亂れて身も世もあられぬぞあはれなる其夜八重子は頭重しと速く床につきしがいかでかねふらるべき夜一夜思ひにくれて泣き明かしぬ

八重子の親友初子は五才の折父を亡ひ續きて母にも死に別れて兄弟とてあらぬ身の世話する人もなく西東さへ知らぬ幼兒なれば唯朝より夕まで父母をしたひては泣き居たるを伯母はいとおしく思ひ嫁入りせし先きに引き取りぬ此時に伯母の姑はいたくも反對したるなりされど伯母の夫西川勇二郎は遂に母を説きて家に初子を引き取りたり尤も其養育費はすべて父の遺産をもてなす事と定まりたるなり其當時初子は伯母のなさけ深き手の中に人となり十才まで事なく殆ど父母を忘るゝばかりなりしが天は未だ初子に幸福を與ふるを望み給でや其年の秋のはじめつ方より伯母は病ひの床に臥しけるが漸々重りて霜月半頃今はあやふしと思ひしかば夫に向ひくれ〳〵も初子の事をたのみて朝の霜の消ゆると共に墓なくなりぬ人々のなげき中にも初子の悲しさやる方なく冷きりたる躰に取り附きて「伯母上よおとなしくのたまふ事を聞き侍れば今一度息ふき返し給はれ」とすがりつき〳〵答へなきにいとゞ堪へ得て人目もいとはで聲をかぎりに泣きさけべども死せし人は一言もいはず猶も取りつき樣々の事云ひては人々を泣かしめぬそれより後は姑一人にて今迄もつらくあたりしが氣兼すべき人なきにいよゝ我意をつのらせ初子うるさしと思ふ心はげしく家婢にてもよも斯く迄はと思ふ程むごく逐ひ使ふにぞ初子の苦しさやる方なく父母戀し伯母懷かしと袖に涙のひまなくかゝれば近き傍の人々もいたいけなる小女をはなど無慘にもと哀れがり居たりし程に二た年の後勇二郎は或る人の世話にて妻を迎へぬ之れが爲に初子の苦痛はまさりぬかくて今年十九まで生ひ立ちしがいとやさしき心をもちたる乙女なればつゆひがまず見上げたる女となりぬ學問もさまで出來あしきとにはなく顏立てもよく唯惜しむべきは何處となく沈み居るなり松浦には折々八重子の家にて出でわひ交際のかさなるにつけておな優しき君よかゝる君と終生共にあらばいかに樂しき事ならんあゝわらは程世にあぢきなき身はあらじ父母には早く別れ天にも地にも唯一人の伯母にも十才の折にわかれてより一向他人の手にて養育せられしが思へばつらかりしよ

定めし我が心も曲りたらめなど考へては一人涙を流し居たるが先き頃よりおやしく思ひ亂れて何とかして松浦の君にと戀ひ初めしがなどわが身の如め不甲斐なき者を君の娶り給ふべくもなし思み止まらんと決心すれど其下よりしきりにおこり來る物思ひ途におさへ切れで己れの境遇になきかゝる折たれかいまさばと亡き人を思ひ得堪へで八重子に文を送りたるなり

朝未だ暗くやう〳〵東の空の白ら〳〵となりたる頃八重子は起き出で雨戸くり明けつく〳〵と思ひを走らせ居たるが彼れは己が身をしりぞきて友に幸福を與へんと思ひ定めたりそは初子の境遇の哀れなるに深く同情を寄せたるなり今のまゝにて初子を置かば末はいかになる事ぞと思ひやり又己れの松浦を思ふ心の切なるにつけても命を取らるゝとものこがるゝ友のくるしさはいかばかりぞやと思ひやりては同情の涙せきあへず次でおこりたるはよりいかにくるしくとも又誰れが何とのたまうとも我れは行かじ必ず行かじ友の不幸をすくうはこれにましたる事なしまして初子の君は樣々なる困難の瀨戸を過ぎ來給ひし程に世の事にもなれ給へり又女德の正しき君なり松浦の君と共になしまつらば此上なきよき夫婦となり給はめ其折わらはゝいかにせんわしかなしいな〳〵友をすくうになど悲しき事のあるべきかおおそれよわらはゝ外つ國に渡りて今少し學問せん其後は教育事業に力をつくさんさなり必ず父、母にこひて此事をなしとげん神にちかはん若し事ならずば我が命を取りて罪をつぐなひ給へ我が心哀れと思し召さば事成就なさん樣御力をかし給へと東に向ひて一心にいのりやがて室の中にぞ入りにける折りしも朝日は華やかに此義俠心深き乙女をうれしげにながめつゝ差し昇りぬ今日は幸日曜なれば八重子の父は暇も得て家にあり母は近き内に愛娘の輿入れする事と思ひ居れば其仕度に餘念なしかゝる所に入り來りたる八重子父も共にましますに折しよしとうち笑みつゝすはりたれど母上の此樣を見まゐらせてはあゝ此事知らせ給はて樂しげに縫ひ給ふに言ひ出でなば何とのたまふぞあゝつらし御二方に御なげきかくる事何よりもつらしいかにせんとさすがに思ひ亂れて今云はんかいな〳〵と思ひかへしては又言はんとし物言ひたげなる樣子なるに父はさとくも見て「八重子何ぞ」とのたまへばはつとばかりに胸とゞろきさしうつむきて太きためいきそつ

き早申しおぐまじきかとまで思ひしが何とて心よはきぞとはげましてやう〳〵言ひ淀みつゝ「父上何卒此の度びの緣談御ことはり給はるやうねぎまつる」と言ひ終へて父の様子をうかゞへばびりびりとまゆをうごかし給ひ「何故ぞ今迄一言の不承知も言はざりしに今に至りて」ときつとなり給ふに八重子は昨日よりの事又己れの決心の程をかたりて曲げても御ゆるし給とこひぬ父は靜かに聞き居給へり他事に思ひ掛けぬことこれで打ち驚きとかくの返事なく目をぬぶりて深く考へ給へり母はきくやいな「なう八重子御身は狂ひ給ひしかなさけなき事を言ひて母を泣かせ給ふなこゝにある此仕事は皆御身の爲に心をつくして末を樂しみにつくりたる物ぞよ初子どのも哀れなれど御身は先方よりこはれたるになどさる義理の入るべきぞ父上は何とのたまふとも母はゆるさじ八重子思ひかへして給はれ」とさすが女のこゝろへ得て我が子を思ふ一心に涙流してかきくどけど八重子は何のいらへもせで一々母の言の葉をうちきけばひく〳〵と胸にあたるはし〳〵つらき悲しさ込み上げて泣かじとあせれどあやにくにおつき涙は玉をなしておつるにぞ今はこらへかね「母上の御心有難くは侍れども友の命にかゝる事なればまげて御きゝとり給はりてよ」と言ひも終らでむせび入りぬ「否ゝ友の命と御身は言へどももし御身が一生嫁入らであらば此母は必ず死すべし友と母といづれが重きぞ」とうちふるひつゝせちに思ひかへせと進むるを父は靜かにおしとゞめ八重子に向ひ「御身の言の葉いと感ずべし己れの心に比べて友を思ひ切つなき胸をたふる事よく〳〵思ひつきしよされど父一人にても定め難し何れ後刻返事せん程に一と先づ室に引き取れよ」といはれて八重子は「父上必ずよき御かへしを待ち侍る」と涙をおさへてわがいまに入るや否や「母上ゆるしてたび給へ」とばかりたほれふしぬ



四

日ならず父と兄とは松浦を說きて其心を動かしたり其苦心の程中々筆に及ばずあゝ初子の望はかなひたるよ此報を得たる彼れは天を拜し地をおがみ是れひとへに八重子の力ぞとよろこびて深く謝しぬ程なく結婚の式は擧げられぬ其折八重子は親身も及ばぬ程何くれと世話をなし萬腔の同情もて喜びを述ぬ此樣を見たる父母はじめ兄だちはいかに苦しかりしぞ今更云ふべくもなし其後半月あまり後八重子は知れぬ英國婦人と共に彼の國に渡り今に彼所にて學術研究に餘念なしとかや。

（評） 友情の爲めに戀を捨て、其戀人を友に與へて自から慰め自から忍び自から滿足すといふ筋なり、切なる情を描きたるが如きも人情の秘を穿ちて未だ其髓に入らざるは惜むべし、白露女史の友千鳥と同工異曲の作なり、

甲賞 （賞品圖書切符金參圓）

秋の空

和歌山 藤田いさを

一の卷

夜はまだ八時にはならぬならんに あたりは早や寂然として、隣室の病人の憐れにさびしき咳嗽のこゑも漸くしづまり、長き廊下に上草履の音はいつしか絶えはてぬ。折しも八日ばかりの月は、我が附屬せる病室の硝子窓より其の光をさし入れ、寢台の上によこたはりたる患者の青白き顔をてらしぬ。

患者は年の頃、二十一か二かの女にて、脇腹の腫物に手術を施さんがため、一週間程以前より入院したるなりき。我れはそのとき看護婦として、此の病人につきそひ居たるなり。

室内のしめきられたる空氣をかへんとして、硝子窓の半をひらきぬ。外は秋の末のことゝて、いつしか月はさぎりにこめられ、植込の木立などの模糊としたる景色、さながら夢の内に見るそれにも似たり。窓の開きたる音は患者は、今まで閉ぢ居たる目をみはるがごとくに開きて、我れをながめぬ。我れは、枕元なる椅子に腰うちかけたり。今宵こそは、日頃解しかねたる彼女があやしきふるまひ、さては、言の葉などにつきてのこることなく聞きたゞさんものと思ひしなり。まことや彼女は服藥をいとふこと甚だしく、時としては我れまで腹立たしくなることさへあり。それのみな

ちず院長の君の診察に來たられしときにも一たびとして、其の親切なる質問に對して自身の病狀をかたりしことゝてなし。また時としては、夜半に目をひらきて深き太息をもらし、あるは、さめ〲と涙に枕をぬらすことあり。母親なりとて二三度見舞ひに來たりしが患者は涙ぐみて、一ことも言葉をかはせしことなし。あはれ、如何なるひめごとの、ひそみてかゝるらん。くさ〲にことをつくして問ひこゝろみしに、始めの程はかたく口をつぐみて泣くのみなりしが、遂に涙ふくめる光の目もて我れをみあげつ、あゝ、妾れはこの病氣の、なが快くならぬことを祈り侍るなり、もしや平癒することのありとも、死なねはかなはぬ妾が身なりけるよ。退院のとき來たりて君と別れまゐらするときは、妾れは死出の旅路に出で立つかどいでと思ひたまへ。あつき御心の情ふかきにあまへ、はづかしきわざながら、さらは語らんきゝたまはれよや。あゝ、妾がこのくるしみも、罪のむくいなりけるか。

月はいよ〱西へ〲と落ちゆくに、いつかさぎりさへはれければ、月の光に四隅のちりさへもみらるべうおぼえぬ。深夜のごとく靜かにて、庭にすだける虫のこゑさへ、このあはれなる患者の爲めにむせぶやう。彼女は、しづみはてたる言葉もてかたり出しぬ。

きかんか、このむせび、恨みはつきじよろづよまでも。
かゝんかこの恨み、涙にうかぶうき世なり。

二の卷

實に妾が身ほどさちなきは侍るまじ。おさなきとき、父上母上にさきだゝれ、たよるみよりとてなく、はなれ小島にたゞひとりとりのこされて、詮すべもなくばかりにて侍りしを、僅なるしり人のあはれがりたまひて養はれ、御惠のつゆにうるほひて飢うることなくやすらにか、十六の年まで暮しきたりしが、其の人々の妾が身をめでたまふこと一方ならず、たゞも心の無理なるねだりも、さまてさからひ給はできゝ入れたまひしことのしは〲なりしは、妾れものごゝろ覺えしとき始めて知りぬ。村の學校にさへかよはしたまひて、はげみし甲斐のあらはれ、十六の春めでたく卒業のしるし文たまはりしときのうれしさ、未だに忘れ得じ。養父の御子にて春雄の君とて、其の時二十二になりたまふがおはしけり。幼きより兄上々々となつきまつれは、妹よ〲とめでたまふに、妾れはことなきものゝご

とくしたひまはりぬ。
兄上の父上にむかひて、妾れを東の都につかはしいよゝ心の玉を研かしめんことを勸め給ひぬ。妾れは元より願ふ所にてはあり、養父母も快く許し給ひしかば、いよ〳〵故さとをあとに、みやこのそらに旅だつことにさだまりぬ。
其の明日たゝんといふ前日のことよ、養父は妾れをよびてのたまふ樣、早くより申さんと思ひ居たれども、おだやかなる御身の心をさはがさんことの、そゞろ心もとなく思はれしまゝ、今日まですごし侍りしが、今日こそ御身のこゝろのこるかたなくきゝたさに呼びしなれ、されば、つゆはづかしき事はあらぬ程に、何事もつゝまずに云ふてたまはれとて、やがてのたまふやう、今更あらためて云はんもをかしき事ながら、春雄も早や二十二とはなりぬ、よき嫁にても定め置かんとおもひたるに、幸ひ御身は幼きときより一つ家にすまひて、氣も心も、しりつしられつしたる間なれば、他家より見もしらぬ人を貰ひうけんよりはと思はれしまゝ、妻にも相談し春雄にもこのことと如何にとたづねしに、身のことゝいかで心にかなはぬことのあるべき、二つ返事によろしきよし答へたり、御身の心やいかにおぼしめす、我れ等のゝぞみを納れたまふか、はた春雄は心にあはぬにや、しかとしたる返しごとしたまひてよと、長々とものがたり給ふに、妾は一言々々心さはぎもてゆき、終りつかたの御言葉は、よくも妾が耳に入らざる程なりき。
さるにてもかゝること何とこたへまつりてよろしきにや、よろづおとなげなりし妾が心には、とみに云ふべき言葉に浮ばざりき。ひたすらにはづかしくて心に合はざれば、さることのたまふなどまで答へ奉らんかとも思はれぬ。さりとてうれしき心の思ひを、何として口に云はるべき、まどひにまどひて、首を垂れたるのみにて侍りしが、養父は語をつぎたまひて、いかにいかに、心にそまぬにやと云はれしが急にはづかしさまさりて、耳熱し胸さはぎてたえがたう覺えぬ。されどかくてはゝてじとておくるゝ心をはげましつ、やう〳〵に口をきりて、よしなに謀らひたまへとて口ごもりぬ。其の言葉のいたくふるへつることは後にてさとりけり。其の後は何とせしか知らず、夢うつゝの内に其の夜は明けぬ。

いざや立たんとするとき、養父母は門口までみ送りたまひて、旅の中は心せよ、一條に御身が業をはげまれよ、かまへて〳〵惡しき友にな交りそとの給ふに、妾れはたゞさらば、さらばとのみいらへまつりてけり。春雄の君はかしこまで送りまゐらせんとて歩ませ給ふに妾れは御後に從ひて進まぬ足をはげましぬ。道のまがりを折れんとしてふとかへりみれば、養父母はまだかどぐちにたゝずみたまひて、二人のうしろ影をほゝゑみつゝ見送りたまふなりき。村はづれなる小川の橋の上にて、いざとて別れつ、渡りゆくに心あとに殘りて後がみひかるゝ心地し、幾度かふりかへらんとしては清き水にうつれる妾がすがたを見てやみぬ。

三の巻



文は幾度となくかよひて、妾が身も暑中のやすみには必ずかへりはべりき。其のたびごとにおとなびたりとて人々のもてはやすに、妾れはたゞはづかしき思ひしつ。

妾れの都に上りてより三年目の秋なりき。そのとしの夏期やすみをへて、都にかへることのわきて物うかりしは、かゝるしらせにやと思ひあはされぬる。

或る日の夕方、まなびの業すこしひまなればとて、竹椽にはし居しつ、幾通ともしれぬうれしき故里よりのたよりを、人しれずくりひろげてはまき、まきてはかへす賤のをだまき、盡くるはしなき思ひにふけ居しをりしもあれ、電報とて前に置かれぬ。とゞろく胸をおし靜めつゝ、さだかならぬ文字のあとを讀みゆくこゝろ根、驚きしもことわりや、なつかしき春雄の君は、病氣危篤とのしらせなり。かく思ひもかけぬ出來ごとに、およづれごとかそらごとか、

その一片の電信の、文うちかへしくりかへし幾度となくよみたれど、夢ならず現ならず、君が病ひやまことなり。しばしはまどふ妾がこゝろの、やうやくもとにかへるとき、只御有さまのみしのばれて、起ち居にさへも涙交りつ。身支度そこ〱にすまして、汽車にうちのりぬ。心は早くふるさとの空にとび、はやる心にくらべては、一瞬千里の汽車さへも、蟻の歩みとかへこちけり。二日、三日と過ぎゆきて、漸く妾が家までたどりつきぬ。胸先づさはぎて家に入らんとするも、何物かおそろしきやうなる心地して、ためらひつ、しばし様子をうかゞひてありしに、あまたつどへる人々の、のゝしること葉はそもや何。一人は早くも妾れのすがたを認めてとく来たまはずや、何してそこにたゝずみたまふぞ、さても、今しばし遅かりつる口惜しさよと、叫びぬ。その後はいかにしけん知らず、さめ出づれば、香けぶりのにほひは、まことや萬事休す。やさしき光に妾れをみたまひし目は、とぢてひらかず、妾れをよびたまひし口は、堅くしまりてうごかぬ御有さま、早やこの世の人にはあらぬこひしき春雄の君の、枕のかたへに泣きしづみつゝありき。そのときの妾れのかなしみいかばかりと思ひたまふ。春雄の君は、妾が養父母だちの杖ともたのむいとしごにて、妾れの身には柱ともたのむいとし夫なり。旅のそらにてものまなびしつゝも片時もわすれしときなく、わざをへて家にかへらんときのたのしさを、心まちにまちくらせしも、末にたのしきのぞみの光あればこそ、今はゝや何のたのしみあるべきや、妾れも共にとまで思ひつめてき。まだ盃はかはさねど、同じ家居に人となりて、めで〱られし君と妾れなり、よしやうつし世の夫婦のえにしは短くとも、なとて妾れの君のみこゝろにそむきまつるべき。かたみにつまと呼ばねども、心ゆるせし君と妾れなり、許しませきみ此の暖きわが握手にぎりしむる御手の冷えはてたるよ、あゝ甲斐なしや、甲斐なしや。」枕邊去らずくゆるなる、香の煙はつくれども、つきぬは恨みようつゝよの、人の命のはかなさに、夢のうきよとさとり得しも、實にこのときなりけるよ。床ひき直す折り、ふと出できし枕の下のかみづゝみ、中開き見れは二通の文なりき。一つは妾れより或るとしの春のくれつかた、まどろむともなき閑窓夜半の雨

に、ちるとみたりし花の俤は、春雄の君にそのまゝなるの夢におどろき、さめてのちもうつゝなの妾が思ひのたえがたきに、夜のあくるもまたで燈かゝげてしたゝめてたてまつりし、眞心こめたる文なりき。一つはあゝ一つは、書きおきかあらぬか、宛名はまさしく妾が名なるに、うちふるひつゝ封きりてよみもて行けば、にじみし筆のあとうすく、おぼつかなげなる字のさまは絶え入るまへのふでならん、一句々々、一字々々、そゞろ血をはく思ひせられぬ。

こま／＼としるされし文言葉、人の世のうらみはいよゝますのみにて、つきぬ御心のかなしき情の、今にはじめぬことながら、かゝるときまても忘れ給はぬ妾が身のこと、さても流るゝ妾がなみだ、かなしみの涙かはた、御心うれしやの涙か。

さて、かくて果つべきにあらねば野べのおくりも、しぐるゝ空のしめやかにうちすましつゝ、四十九日もせきあへぬ涙の、流れてしげき思ひの内に過ぎゆきぬ。妾れはゝや春雄の君の此の世におはさぬかぎりは、このまゝにて都に上らじと思ひしも、養父母は、中途にてやめては何の役に立つべきぞ、今少しの間にてもあるなれば、行けや／＼といとねんごろにすゝめたまふにわなみもかねつ、また／＼都に客人となりぬ。されどまだ去らぬかなしみごとに、あしたゆふべ心をなやますのみにて侍りしが、さすがによはき妾がこゝろには、色に出でゝや友どちの、何くれとなぐさめ給ふも一入のなみだなり。

四の巻

明けし年の春にめでたく試驗もすみ、故里へかへりけり。あゝ、この時まで春雄の君のおはせしならば、いかによろこびたまふらん、また妾れのうれしさ如何ばかりぞや。されど今は其のよろこびうれしさゝへ、君を送りしときの野べのけむりと消えうせて、思ふもあだになりき。頼もしき養父母の、口々妾が心をなぐさめたまふうれしさはあれど、なほ松をはなれし姫蔦の、立つよしもなく土にはひては、心なき人々にふまるべうの、はかなき／＼思ひしぬ。

過ぐるに早き月日かな、春雄の君がみまかりたまひしより、はや一年をへぬ。此の夢の間に妾が運命のさても急奔したることよ。

今日は、春雄の君が命日とはなりぬ。曇りがちなりし

時雨のそら、雨さへそぼ〳〵と降り出でゝ、庭なる紅葉の色も、うつろひぬべう覺えぬ。

ひの間はつどひし人々のものさわがしきに紛れて、左程にも思はざりしが、一人去り二人去りての後のさびしさ、心ぼそさ、またなくこそ。

雨も夕ぐれがたよりをやみとなり、月さへ出でければ春雄の君のみはかに詣でばやと思ひ立ちひとりして家を出でぬ。そは妾が家より程とほき小山の上にあり。つゆふみわけつゝたどりゆけば、流るゝ小川のせゝらぎにも心あるかとうたがはれぬ。野菊、女郎花のところせきまでさきみだれたる中に、一本のとしふりたるさくらの木のたちたる根こそ、妾がこひしやなつかしの春雄の君のとこしへに眠りたまふ處なれ。いざとて立ちよれば、落葉ほろ〳〵と風なきに散りて、塚の上、妾が衣の上にふりそゝぎつ。

其の時の妾が思ひは云はじな、たゞ推したまへ。妾れの此の世にあらんかぎり、ゆめ、心のかはらぬことを誓ひけり。御墓の上にそゝぎたる朝の露にもまさりてしげき涙は、百千のひぢりがたうとき供養に、まさるとも劣ることそのあらぬことを心に信じぬ。胸はりさけんばかりなる折しも、春雄の君のやさしきみこゑもて妾が名をよびたまふごとくきこゆるに、おどろきて見わぐれば、ふくかぜ山の上の松の梢をはらひて聲さへもかすかに〳〵遠ざかりゆく。

如何にながく止まるとも思ひのつくることなければ、いざとて立ちわかり、元來し道をたどりぬ。とぎすましたる鎌の月は、今や西なる山のはに落ちなんとしてあたり小暗く、露にぬれたる叢にすだく虫の音は、世をかこつこゑにも似たり。ふりかへりて再び見ばやと思ひし折りしもあれ、櫻のこずゑのあたりに輝き居し星ならん、ひとしほ靑く、うつくしき光の尾をひき、西をさして飛びぬ。あれは、あはれ、春雄のきみはあらずやも。

この頃の妾が心は、實に一すぢなりき。春雄の君のため袖さしかへてなびきねし、綠のくろかみ霜とふりなん時までも、かたき操を守らんとより外に、心はあらざりき。

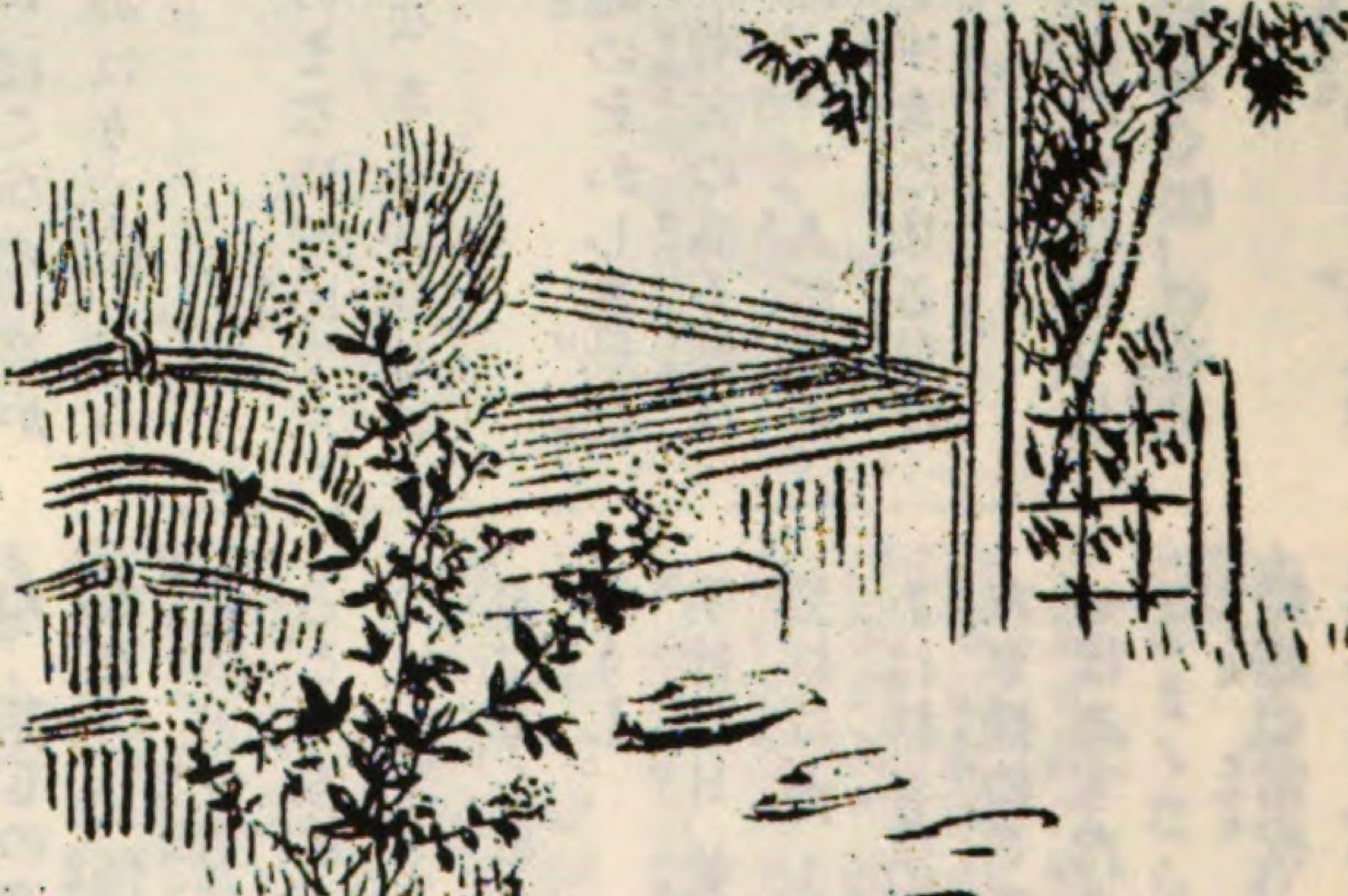
五の巻

さるに、さるに、あゝさるに、實にはづかしの妾が心かな。思はぬことに思ひをなやます身とならんとは、おも

ばざりきよ。其の時の心あまり弱かりつるよ、弱かりつるよ、春雄の君はさだめてたのみがたき人の心と、にくしみたまひならめ。うつろひやすかりし妾が心の花、罪にけがれ〳〵し不貞の女となりはてぬ。今の甲斐なき妾が身となりしも、あゝ、此のつみ、このむくい。

されどこの事はあまり詳しくは語らじな、そは、つゝましからぬしわざの、今のこゝろよりは、思ふもいとはしきかぎりなるに、語るなどいはましてたえがたきことなれば。

大みそかすぎて世はのどかなる春にかへりぬ。妾れも二十の春をむかへけり家ごとに門松ひきたて、兒共少女はきかざして遊びまはれる頃なりき。妾れは樂父のかはりとなりて、所々のみより許うち訪ひて廻禮しつゝ或る家に參りておとなひ居る折しも、門口に車のとまる音して、靴音しづかに入り來たる紳士あり。顔見らるゝもはづかしと思ひて、隅の



かたへとさけしもあまりことの急なりしため、かなたの顔とはたと見合はしぬ。しかとは見わかずありしが年の頃二十五か六か、絹帽を戴き、厚き外套をかゝへ擧動いと優美なりき妾れのかほを見たまひて輕く會釋したまひぬ。あはれ妾がこゝろ、つゝましからぬ妾が心かな、この時、やさしき都の人かなと思へり。

おやしくゆらぐ妾がこゝろは、家にかへりし後も久しくしづかならざりき。

其ののち四五日を經て、かなはぬ用事できて同じ家を訪ひしとき、誰やらん客人のありと見えて、客室の内にて主人の君と高らかに話したまへる聲きこえぬ。お發しなされと會釋して其の前を通りすぎんとせしとき、ふとこなたを向きたまふ君、思はざりき、先きつ日ちらと相見し其の人ならんとは、妾が心はまたにはかにさはぎぬ。うれしき、はた耻かしきやうなる心地したり。おやし、如何なる故にてか。

其の後かの君は、いかなる用事のありてかしらねど、同じみよりの主人の君と共に、妾が家を音づれたまひけり。粗茶さし上げよと養母にすゝめられて、せんかたなく、養父と三人はなしたまへる間にはこびつ、妾が手はいたくふるひぬ。しらず顔の色かはりしか、あらずか。あやし如何なる故にてか。

かの人は、隣村の人にて、都なる大學のまなびや出でたまひ秀才のほまれ高しとか、聞くともなきにいつしか耳に入りぬ。

はや夏となりけり。或る日の夕ぐれ庭のをかしき景色を、うちながめ居たるが、ふと客室にて養父の高く笑ひたまふこゑきこえぬ。耳そばだつるに、今一人はまさしく先つ日のみよりの主人なり。たえずきこゆる笑ひごゑは何れ面白きことのあればなるべし。

空を仰げば星またゝけり。いかに其の數のおびたゞしかりしよ、銀砂子をまきちらしたらんが如くに、いと美しかりき。

養父の御言葉にて、彼れにかぎりて不承知など云ふべき事のあらざればと、何の意ぞ、彼れとは誰ぞ、つゞく言葉　先方にゆきてしかと定めてきたまはれよ、彼れには明日にても妻の口より諾はしめん程に、こなたのよはつゆきづかひ給ふなと。

恐しき樣なる心地しつ、妾れはふるひぬ。はては泣きぬ。話しの意味は解けぬ、先日より養父母が妾れにのたまひし、怪き言葉と思ひ合はして。

されど先方とは誰ぞ、もしや彼の君にてはおはさぬかとこゝろにうかびしとき、心おどりぬ、淚はゝれぬ。あやし、如何なる故にてか。

星はきらめき〱たり。紫の色のそのときわまりつよかりし。

明けし日、養母は妾れを召したまひつ、何と云はれしか、妾れはたゞ、御心のまゝにと答へてき。

あはれ、其の時の妾がこゝろ、あまり弱かりつるよ、かたき操のさてもゝろかりつるよ。其の夜春雄の君のやせほそりたる御姿は、惡鬼となりて妾がゆめをおそひぬ。

結婚の當夜、三々九度のさかづきの、妾が手の上におかれしとき、あやしや妾が身は電氣にうたれしごとくおのゝきぬ。忽ち見る春雄の君の、あざわらひ給ふが如きおもかげ、浮べるが如く思はれて、玉のさかづきに人

しれぬ涙の一しづく、けがれにし其のあとは、飲みこむ胸のくるしさと共に、誰しるものとてなきこそあはれ。あゝ、春雄の君を欺きし罪おそろしや。

六の巻

彼の君は今の夫よ、始めの程はいとしたしくなしたまひしも、今日此のごろは、何となうへだてのまがきゝづかれし様の心地せられぬ。されどこれも妾がこゝろの及ばぬ故にてならんと思ひつゝ、ひたすらにつかへまつりしも、あはれ、夫には少しも推したまはで、家におはす時とていと少なければ母上までも妾が身の至らぬ故ぞ、ちと心したまへなどゝ責め給ふ。

折りも折りよ、妾れはこの重き病ひにかゝりぬ。これを口實として離縁せしめんとの噂ありとか。里の養父母は、妾れのあしきことをのみきゝたまひて、妾が身をにくしみ居たまふとか。もし離縁せられしとき、何としてまたそだてられし家にかへり得べき。その時こそは、あゝ、そのときこそは、美はしき死の神よ。御手にすがらん。

かゝればこそ藥ものまず、うれしき御言葉にも從はで過ごすなれ。

あはれ、春雄の君のみまかりたまひしとき、妾が身に罪造らぬことを世ゆるせば、妾が心それを破りき。あはれ、この上の罪はつくらじと妾が心にかたく思へば、世ゆるさず。あゝ如何にせん、それよ死。

心のまゝならぬ世にありて、何おもしろかるべき。生は實に夢の世なりけるよ、苦しみの世なりけるよ。死は實に光明の世なりけるよ、樂しみの世なりけるよ。浮世の花と神の持ちたまへる百合の花と、浮世の月と月の世界の月と、之れをたとふれば、實にや生と死とよ、美はしからずや、死、百合の花、月世界の月、樂しからずや。けがれたるかな、生、浮世の花、浮世の月、げにうたてきかな。あゝ。

七の巻

一言一句恐く血をはく思ひなりしならん、聽き居たる我れさへ、故里の別れ、病床のかなしみ、秋の夕の墓畔、結婚の時の彼女が心を細想して、心は磯うつ波とみだれかへる。

月はますく〜すみて、この哀れなる患者の涙にさへ其の影をうつしぬ。窓を通して仰げば、氣の故にてもあるらんが燦爛たる星斗も常よりも光うすく、風さへも

死せるが如く、時に梢を渡る音、何となく哀れをそへて、散るやおちばの二三點。露は涙よ鳴く虫の、命はかなみ我れも泣く。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其の翌日彼女は手術を受けぬ。以後の經過よろしく不日退院せんとす。

或る時彼女に卒然、はや退院の日も近づきぬ。君と別れまゐらするも日ならじ、退院してより後は、生あるか死あるかわかぬ妾が身なり。よしや萬一生あるも、君に再び遇ひ得べき妾が身ならじよ、妾れ退院してこゝを去らんときは、あゝ君よ、妾れ「藤田その」と云ふものは、早や世にあらぬものと思ひ給ひてよ。と。

我れはあはれさこみ上げ云ふべき言葉もしらざりき。

廊下には看護婦などの往來する草履の音いとかまびすかりしが、此の病室のみは、深夜よりも靜かにて、しばし彼女とわれとのすゝりなきする聲のみなりき。

彼女は退院するとき車にのらんとして、我が手をにぎりつ、さらばよ、別れまゐらすと一言、われはそゝまゝひきとめたくも思ひしが。

此の一語、蓋しかなしむべき彼女自身の運命を豫言せしにはあらざるか。

あはれ、あはれ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

彼女と別れてより早や三年！

思ひ出づるごとに、此のましろき制服に、そまる涙のあと、乾くひまぞなき。

今年も早や窓ごとに秋風おとづれて、浮世に秋ふけぬ。

あゝ、雲あしの早きことよ！

あはれ、藤田園は、今いづくに、此の雲を……。

（評）文章親切にして俗にいふあぶなげなき筆つきなり、其の詞藻と其の才情とを以て本篇は特賞にも入るべかりしを「花あやめ」に出でし「浮世」と其の工を異にして、其の想を同ふしたるものなるをもあげて他に讓りぬ。

乙賞（賞品圖書切符金貳圓）

新と舊

たまその

さすがにお正月とて常から人通りの多い町も今日はとり分けて賑はしい鬚の生えてるお役人風——平生は大

切に〳〵して藏っておく勳章を惜氣もなく重ねて胸一杯にかけた軍人――香水をあびる程かけて自分から色男がる嫌な奴――何らかの小遣を貰つて嬉し相な顏してる年季小僧――大丸髷の奥樣に文金の高島田銀杏返し――上品な稚兒髷に下品な稚兒髷――いくつ寝てなどゝ樂しんで居た坊樣孃樣――數へても數へきれない程の賑かに引換て評判の芋屋の横町は至極淋しい――代りには其の大通の人達が羽根がつけないから此方へ來ると見えて羽子の音だけは中々喧ましいがさて人通は少ないで其通つた人は一目に此處は貧乏人の集合だなど云ふ事が分るろくに松飾りもしてなければ旗も數へる程より出してない其中に松竹梅の飾附立派に旗も二ッ交叉して間口も廣く奇麗な家がある恐らく此町内では第一とせらるゝ丸持であらう――何と云ふ人の家かと門の標札を見れば割合に拙き手にて河島治平

ポコ〳〵と可愛らしい下駄の音をさして出て來たのは此の娘である年は十一今日から十一になつたのかとも見える美しい友禪縮緬に緋縮緬を重ね緋繻珍の帯にうつりのよい鶸のしごきをダラリと結び下げてある

「美ちやんも喜ちやんもお出な一處に遊ばう」

「アラお孃樣が」とむこふで羽根ついてた二人は驅けて來たこゝらの子であらう一ィ二ゥ三ィと鞠をついたり羽根をついたりして居たがやがて倦たと見えて色な話をして居る

「喜ちやんも美ちやんもお小遣幾何貰たの」

「エ少し計り」と耻かし相に下を向いてしまつた

「お孃樣の處なんかお金持だからいゝわねいゝ着物もきせて貰はれるしお祭の時でもお正月でもお小遣は多さんだし……私なんかは眞實に……」と愚痴をこぼす「誰でもいゝからお芋買て來ておくれな分けて上るから」と幾何かのお金を出した「私が行て來ませう」と美ちやんは驅け出した――と思ふ間に大事相に袂を抱へてくる「早い事ね」三ッに分けて各自食べだした九尺二間の裏棚の子は仕方がないとしてこんな立派な家のお孃樣が往來で芋の立喰ひ！其家庭の敎育迄が聯想される」「オ兄さんが」指さす方を見ると洋服着た十四五の少年が靴音優かに歩いてくる

「花ちやんお前其度で何してるのもうお歸りな」と云ひながら足許に落ち散てある芋の皮に目をつけた

「私寒くなつたから歸ります又明日遊ぶは」

二人連れ立て門の中へ入て行た
引き開けた障子に寄り掛つてるのは兄の治三其の前ににちり足して坐つてるのは妹の花子
「花ちやん先刻のやうなあんな行儀の惡い事しちやあ不可よお芋の立喰なんか然も外で」「どうして」と詰るやう「でも見ともないぢやないか先生にでも見つかつたら必叱られるよ」「だつてお母さんが何でも好なものを買へつて仰有いましたもの」「そりやあお母さんは何と仰有つたか知らないけれどもあんな事すると皆に笑はれるよ笑はれちや嫌だろうねそいだからもうおやめにおし」
笑はれると聞いてどんなに辛いと思つたのか優しく頷いた治三は云ひ甲斐があると云ふやうな樣子で昵と花子を見て居たが思ひ出したやうに口を開いた
「お前何かい家は金持だから方々へお金を貸してるのだと思つてるの」「エヽお母さんに聞いたらそう仰有つてよ金持だつて」「フーンそうかいだけれど其な事人に云ふのぢやないよ貴女の家の商賣は何ですと聞いても何も仕て居ませんと云つておき」「其うそついたらそれこそ先生に叱られますわ」と先刻の仇討

さすがの治三もこれには返答が出來なかつた
「家の商賣を言つて上るからよく覺えてるんだよアノ子お金は貸してるけれど返してもらう時には貸した時よりも多さんに貰うの」「マー得ねえ」「それで何日に返しますと約束をした日にお金が出來なかつたらお父さんが自分で行てそこの家の何かよさそうな物を取てくるの若し貧乏人で何も無かつたら釜でも鍋でも手當り次第に持つて歸つて來なさるのだよ」「そんなら其貧乏人はお飯炊く事も何も出來あしませんね」「ア、出來ないとも」「可哀想ね……そんなにひどい事をして」
この花子の言葉は心から底から湧き出たのであつた以後の花子は從來の花子では無かつた全く樣子が一變した學校から歸つて來ても外へ出ない遊ぶのにも家の内で遊ぶ而して注意深く父母の擧動に目をつけるやうになつた
桃櫻咲き匂ふと言ふ春になつて治三は目出度高等小學校を卒業し花子は尋常小學校を卒業したて二人とも新に中學校と高等小學校に入學する事になつたが治三は其を拒んだ「東京の學校でなけりやあ嫌だ僕は東京へ行て修行したい」と言ひ續けて居たで治平夫婦も年

の割にませた事を言ふと思つたがどうせ遲かれ早かれ上京させるのだから何時でも同じ事だと話がついてやがて治三は東京の親類で世話して貰ふことになりそこから學校へ通ふやうになつた
この時の治三の心を知つてた者は花子一人のみであつた

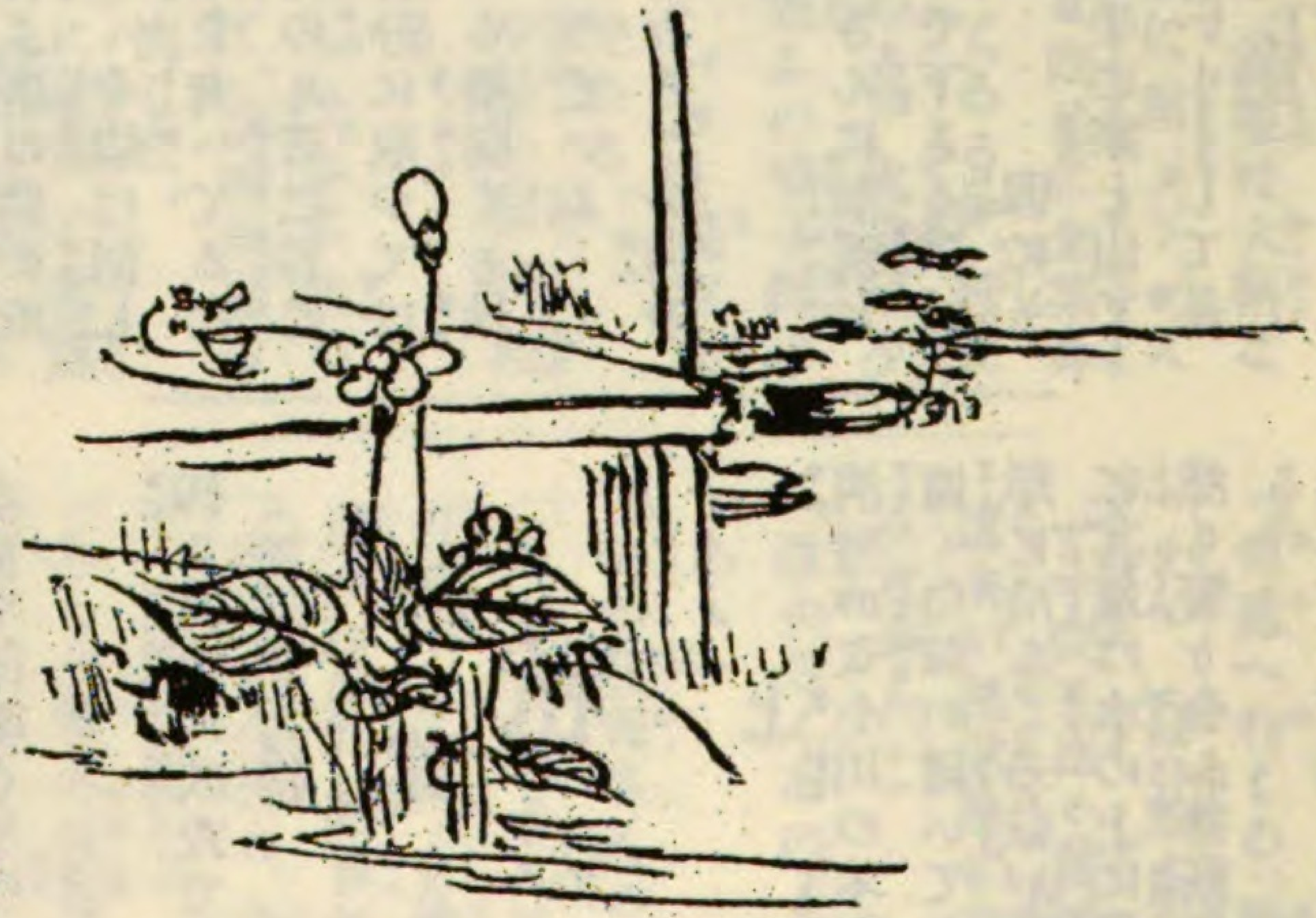
＊　＊　＊　＊　＊

此處は某女學校で今は遊歩時間である一人の生徒は隣に居る人を顧つて「アノ村石さん先刻ね先生が菜種から取る油を種油といふのだと仰有つたでしよう」「エ、」「そんなら人から取る膏血は人油とでも言ふのでせうか」「ホ――然うね」二人の目は言ひ合はしたやうに河島花子の方へ注がれたがやがて二人とも目と目を見合せて妙に笑つた村石といふ方は口を開いた「アノ子弟が可笑しい事を言ふのよ此間何だかの繪に鬼がついてたらね鬼といふ者は眞實にあるのかつて私に聞くのよ馬鹿なそんなものが有つて何うすると云たらでも〇〇の鬼が昨日も一昨日も家の前を通つたつて臺所で話をして居たから有る者かと思つたつて……そりやあ金貸の事をいふので情も何も知らない殆ど鬼のやうだから皆がそう言ふのだと譯を云てやつたら可笑しいのよそんなら僕も大きくなつたら桃太郎のやうに其鬼を退治するつて」「マア可愛らしい事」聞えよがしに話すので花子は堪らなくなつた何の氣なしにそつと机を放れて廊下の外へ行て暫く風に吹かれて入てくると今迄笑ひ興じてた人々が急にハタト靜まり返つて互に顔を見合はせて居るので又自分の事を言てるのだなと悟つたと同時に復今更のやうに我身の境遇の辛いと云ふことを感じた
面白からず授業を終つて歸つてきた花子は自分の居室へ入て力なさそうに机によりかゝつた
「ドレこれから行てこようかな」と立上つたのは治平である「昨日の處へですか」と顔を見上たのは妻の君枝「ア、今日は是非とも……」「眞實にねえ待つてゝも限りなしぢやあ」話のうちに羽織だけぬぎ換て出て行た次の間で殘らず聞いてた花子は「可哀想に」と口の中で呟いて襖を開けつと歩み寄て母の傍へ坐つた
「只今お父さんは又アノ車引の所へ入らしやつたの」
「ア、今日で三遍目だよ徒足ばかりさして」花子は君枝の顔を一寸見て「お父さんは何うしてあんなでせう五

十圓だの百圓だのつて義捐する人もあるのに僅三圓ばかりにやい〳〵言はなくつても……落した積でそれだけ遣たらどんなに喜ぶてしよう鬼と云はれるのも佛と云はれるのも此方の氣一ッで」猶も言はんとするを引奪やうに「マアお前どこて其事を教はつてきたんだい何も家一軒がこんなだと言ふのぢやなしさね高利貸といやお皆何所だつて同ものさ」「だつてお母さん世間の人は高利貸の事を鬼だの何だのと言ひますよいくら儲て金持になつたつても人に嫌はれちや何もなりやわしませんわそれより今の中に商賣換でもして今迄人を苦しめた代りに困つてる者を救けてやつたらどれだけ罪滅しに」「人を苦めたつて——馬鹿な事をおいひでない」と君枝は一口に叱り付けた「喰べるものも無くつて難儀をするから何卒貸してくれつて頼みにくるから貸してやるのさして見れば救けてやつたも同ぢやないかそれが返せないのは自業自得でどうも仕方がない」「そんなら……救けてやる爲にお金を貸すのなら初め貸りに来た時よりもまだ辛い目に逢せないでも可ちや有りませんか夫も百圓とか二百圓とかの大金なら何だけどたつた二圓か三圓に」君枝は遮つた「たつた二圓か三圓おいひだけれど是でも何だよ一錢二錢と集まつてこれだけに」花子も中々默つて聞いて居ない「其位の事は女學校へ通つてるものですもの小さい時から何遍聞いたか知れやしませんわ——例へ一厘一錢のお金でも貴いものには違ひありませんけれど唯惜い〳〵と大切に藏つておく計で世間の融通を計らなかつたら金錢の價値といふものは少しもないやうになる道理でせう其なら何も貯める計が能ぢや有りませんわ困つてる人があつたらどん〳〵助けてやるやうにしたら如何程世間の爲になるか分りやしない」と先生に質問する格で思つてる事憚もなく言ふ顔を君枝は眤と見て居たがやがて沈だ調子で「女學校の生徒は皆生意氣だと言ふけれど眞實だね親に口答するやうに理窟を覺えるやうにつてわざ〳〵お金を掛けたのも同じ事だ馬鹿〳〵しい……こんなになると不可と思つたから止めにおしつて留めたのに夫に無理に入れて呉れと云ふから女學校へ行たらどんなに能くなる者かと思つてたのに何の—へボ理窟言ふのと色が黒くなつた計さ女といふものはそんなに讀書が出來なくつても……高等小學校さへ卒業すればもう立派な者だ美ちやんや喜ちやんをご

寛なお前と一所に尋常を卒業して直に裁縫ばかり習に行たんだがいかにも女らしく一寸外へ出るにも白粉つけたり着物着換たりするのに其にお前はどうだい常着のまゝ眞黒な顔して恥かしいとも思はず能くのこ〳〵歩けたもんだ近所の手前見つとも無いちやないかねえ」と叱るのだからほすのだか「そりやお昔の人は皆白粉てもつけてべた〳〵してる人を好ますけれど是からはもうそんな人は駄目てすよ外國人のやうに活潑にしないと國が弱くなつてしまふわ」「又生意氣が始まつた」と殆ど犬と猿のやう家庭に於ける新舊の衝突は重にこんな事から來るのである

十時が鳴るのを待ち兼て床に入てからは白河夜船何も知らない……もう何時頃だろう何處の時計が鳴らないかしらと耳を澄ますと幽に聞こえるのは隣室の治平と君枝の話聲である「……そんな事を言ふのですよ眞實に返事も何も



出來やしませんの」「ウムそれはどうも……然しそんなに生意氣になつては困るナ」「いつそ退校させましようか」「そうだナ然し承知しまいよ」「そりやあ言ひ聞かしても不可から知らせないで內所に退校届を持て行たらいゝでしよう其樣すりやお後から何も斯も出來ませんから」「フ、ン成程夫ちや二三日の中に書いておこう」これで話は終になつたらしい後に夜の寂寞を破つて聞えるものはセコンドの音のみ淋しくカチ〳〵〳〵

お父さんやお母さんは何して斯樣に頑固で慈悲も情も知らないのであろういつそ自分が男か又は立派に獨立して行れるのであつたなら例叱られても怒られても搆ない諫めて〳〵是非とも此樣な嫌な商賣は止めさせるのだけれど何を言にも親掛りの身であるから如何する事も出來ない小さい時はお美加さんやお喜代さんに羨ましがられ自分で

もあの時は嬉しいと思つたけれど今は中々あの人たちの方が羨ましいが夫よりて猶羨ましいのは兄樣である金貸の子よ高利貸の子よと言はれるのが辛さに無理にせびつて東京へ往かして貰つたのだと言ふ事は別に誰からも聞かないけれど能く分つて居るアヽ今頃は何していなさるであらう私が一人で色々な事を考へてるなどゝは夢にも御存じないだろう學校へ行のも皆に當こすりを言はれて隨分嫌ではあるが併し自分に取つては家に居て始終むしやくしやする心を慰める樂園とも仙境とも思はれるのに夫をしも罷めさせやうといふ……アヽ自分は何して此樣兩親を持つたのであろうか何の因果で此樣所へ生れて來たのであろうか

いつその事東京へ行うかしら而して叔父さんに事情を打明やうかしら事情を話たら我心を酌んで下さる事は知れきつた話であるけれど……けれど……假にも親と名のつくものに一言の相談もせず勝手に家を出て善いであろうか惡い〳〵惡い——甚わるい——して見ればやつぱり家に居なければならないかしら

然し〳〵目前の事に躊躇して未來の事を思はないのは一生を誤る基である例へ今は何と云はれても……未來に確固たる希望さへ輝いて居れば……寢られないまゝに色々の事が浮んできて我身一身は今胸の中へ葬られて居るやう

夜も早薄明くなつて彼方の森の鴉も塒を放れた

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

扨も其後何成たであろうか聞度のは花子の消息である

（評）筆力捷遒

丙賞　（賞品圖書切符金壹圓）

秋の夜

[illegible]島　波間花子

上

清らかな小川の不斷潺々と流れて、其邊りから一面に、遠く白萩が續いてゐる。

岸に沿ふて糸萩が零れそう、花の重みに堪え兼ね、優婿に其端は水の上に浸して、只一蛇の流れ花の姿を寫し然も繁り合ふ葉蔭の緑は、水の色を藍色に淀ましてゐる。

此美しい景色の中を、淺る〳〵見惚れつゝ、一條の野道を來かゝる年頃の少女がある。此邊には珍らしく色の

白い、嫋娜とした氣品のある妻で、髪は濡れ色の艶のあるのを、根の高い銀杏返しに結ひ、掛もの丶赤いのが仄見えて、少さい獨乙花の簪を翳してゐる、衣服は大柄な銘仙の袷衣に、水と流れ紅葉の友禪縮緬に紫メリンスの打合せの帶をお太鼓に結んで、華車な跣足に金茶鼻緒の吾妻下駄を穿き、惡い道を歩みつけてゐるか、苦にもせず夕風に袖を吹かせながら歩んでゐる。太虛は夕映の赤々と、左手の稻田に照り渡つて、遙ふの鳴子繩ゆるんでゐる周圍、一群の鴉が落ちてゐて、バッと飛び立つ時、點々空に面白く黑い影を印するのである。

見渡す限り豐かに實のつてゐる田面に、夕榮の雲は相映じて、こゝに深い秋の色は含まれてゐる。

少女は今更に左右の風光を飽かず、珍らしそふに眺め乍ら、遇と二三間迴ふに人の影を視留めて、暫時視線は其物に濺がれてゐたが、急に足早に歩み出した。

紅に染めてゐた空は斂まつて、四邊次第に淡黝く暮靄罩めて、杳ふの山の陰影何とやら物凄く、小川のせゝらぎも遽かに耳立ちて聞こえる。

「道夫さん―」可愛らしい小さい聲で呼ぶと、前に歩んで居た紋の兵子帶を結んで、手に葉卷の火の明いのを挾んでゐる、廿二三の人が此那邊へ顧向ひた。

「あー美代さんですか、」優しい調子で、

「何處へ行くの、散歩に？」

「えゝ、」自分で疑ふやうな返答し乍ら、美代子は道夫を一寸視て直ぐ俯面いて了ふ。

道夫が無意味に徐々前に運ばすと、美代子も跟いて歩みながら、

「道夫さんあのー、お內に此頃絹子さんお出で丶」

「あゝ」

「何か叔母さんのお手傳いにでも」

「あゝ」可厭そふに氣のない返事をして、葉卷の吸殼を打ちやるやうに捨てゝ了つた。

道夫は暫し無言でゐたが、思ひ返したやうに、

「美代さん僕ね、今貴婦の內へ行かうと思つて、漫歩〳〵ていたんですよ、貴婦內へ來ると謂つて出たの」

「あゝ池邊の叔母さんの內へ行くといつて」

「爾う、ぢやお內へ行かう？」窺ふやうに視ると、何んだか餘り美代子が進んでゐないので、

「美代さん何日やらの處へ行かうかね、靜かだから」

「あゝ」嬋娟に嫣然笑みを湛え、衝と道夫の手に縋りつ

ゝ、嬉しそふに空を覩仰ひで、おゝ善い月、秋の蒼空の心ゆくばかり澄み彌つて、萬顆の星は麗しく瞬き、今十三日の月は鮮やかにさゝ登つてゐる。

田面からそよく吹き送つて來る風は、四ッの袖を飄がへして、萩の上葉靜に打寄する漣の碎くるやう、白く動いて眞珠の露は光つてゐる。

兩人の袖と袖とは重なり合ひ、あたりの景色も眸に入らぬやう、睦まじそふに語り乍ら、細逕を歩んで行く。

此那方の淋しい柳の木影には、先程からまだうら若い少女子の只獨り袂を咬み締めつゝ、可怨しそふに遙ふの男女の影を瞻送つてゐる。

サッと水を含んだ冷たい夜風は、稻田を靡びかして小草の露の珊々と零れ、其下からは松蟲鈴蟲の聲が一時に和して、金鈴うち振ふかのやう、一しきり烈しく鳴き出した。

下

汀には蘆の一叢繁く、ざわ〳〵風に習いで水淺き邊り、一艘の小舟が漂ふてゐて、其處に二ッの人影が乘つてゐる、此寂寞な中に小さい話聲は、絶えず聞こえてゐるので、

―道夫さん本當に妾絹さんが可哀想だと思ひますよ　貴郎を那麼迄に愛してゐるのに」道夫が無言てゐるから尚も美代子は、

「眞當に絹さんの心の内は怎んなでせうね、」悲しい音で息を昫いて、熟と道夫の月を浴びた美しい横顏を覗上た、今更に戀人の姿の高尙しく、懷しいのに胸が逼まつて、涙は兩の瞼に泛んで來る。

「美代さん！」其聲が非常に優しく力を極めて謂つたので、霑んでゐる眸に嬉しさが溢れるやう、殆ど刹那の思ひを何もかも忘れて、無邪氣なく打瞶もつた。

「美代さん僕がね、怎うしたつて仕方が無いのだからね、母だつても……僕はね、一生絹さんと共にする氣はない、其麼事にでもなれば、僕は生涯の不幸だもの、長く失戀の人となつて、絶望に墮ちて了ふのだ……」苦しい息を昫いて、嘆息するやうに默頭いて了つた。

美代子も暫く離れし後の悲しい想ひに耽けてゐたが、思ひ出したやうに、

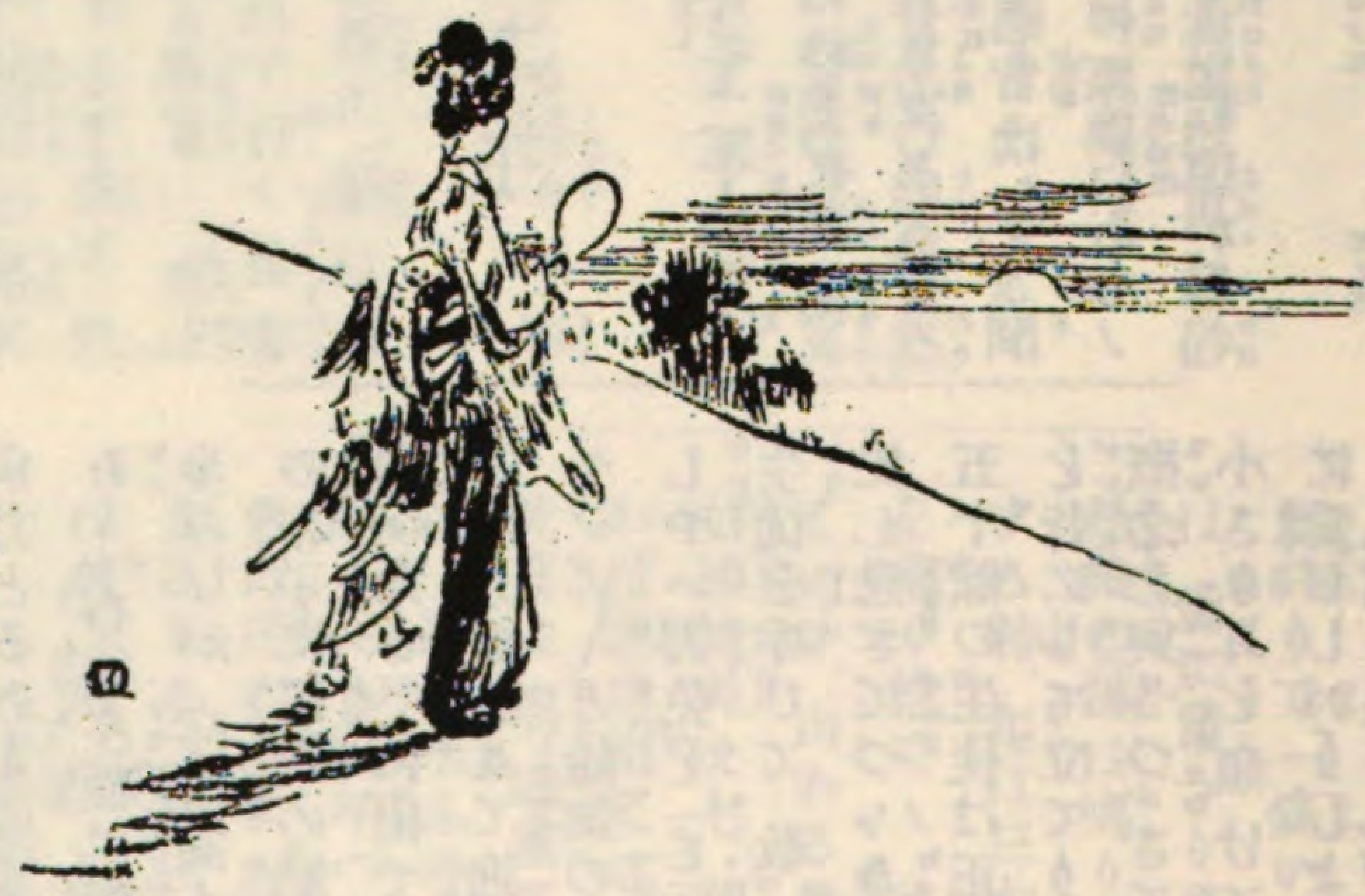
「だけれどもね、貴郎何日やらでしたよ、叔母さんが居らしつて、絹子は從妹でもあるし、溫和しいから丁度道夫のお嫁にしたら怎うだれうと思つてゐます、など私

の母様に謂つて居ましたよ、そして妾に美代さんだと謂いのだけれど、一人娘だから仕方がないつて、其時妾怎んなに悲らかつてよ、眞當に絹さんが羨ましくつて……」放すまじと道夫の手を緊と握つて、

「だから絹さんが此頃來てゐるんだわ、そして貴郎を兄さん兄さんつて慕つてゐるのだもの、それが妾は……」氣が喘づんで來て激するやうに謂つたが、道夫が悲しそふに沈んでゐるので、

「貴郎怎ふしたの、え丶」昵と窺き込んでゆくを、道夫は憂はしげに美代子を見たが、其冷しい眸の内には浮世の波も、何にも知らない純潔な罪のない心が懵つてゐるので、可憐なものだと一しを可愛さは増すやう。何に感じてか道夫は失念と空を視仰げた。

更けゆく曠い大空は愈々冱えて、水々しい星の光り燦



々浮び、銀河は薄白う横たわつて、澄み切つた他界を月は青白く照してゐる。

心は落ち靜まつて、人の世の喧囂なる事や、物騷しい浮世の哀れな樣は頓に消え去つて、只永遠の戀と、無限の高倘い思想のみが滿ちて來るばかり。

那處からか一羽の雁が、蘆の一叢に隋ちて來て、何に駭いてか、亦羽撃しながら、悲しそふな一聲を殘して飛んでゆく。

夜風は冷々水の上を渡つて、蘆の葉騷がしく戰ぐ中より、突如朦朧人の影が現たれた。亂れ髮は頰にかゝつて、血に咽ぶやうな忍び音を洩らしじつと船の內の男女の影を見詰めてゐる。

軈がて悄惱と後影になつて、哀れな月を浴びながら那處へか妾を隱して了つた。

露は濕々と連に襲ふて、虫の聲遠くの方に絕えぐに

鳴いてゐる。（をはり）

（評）叙景の文としては鮮麗巧緻ならざるにあらねど、趣向もなく、立案もなく、唯一刹那の光景を叙したるに止まり小説としては甚だ物足らぬ心地ぞさる

丙賞（賞品圖書切符金壹圓）

参観記

麹町　浦上ふぢ子

（上）

「可笑しく物に狂へりと世の人は云ひき、今年二十四迄の處女とは、實に狂はしの身なるべき、さはれ妾に此勤なくば如何で今日迄の命を保たむ」と、親しき友なる女教師の嘗て語りしを思出でゝ、俄に其人に遇まほしく、今朝より春の野の景色寫さむとて、此戸山の原にありし妾は、畫筆收めて立上りぬ、渠は此處よりは程遠からぬ高田村の小學校に職を奉ぜるなり。

蒲公英咲き亂れたる野を出て、土筆芹薺なんど處狹げなる田の畔を過ぎて、妾はかゝる美くしき里に濟く世を送る渠を羨ましと思ひぬ、

小學校に着きしは午前十時頃、恰も遊歩時間なりき、門に續きて遊歩場あり、全校二百餘の生徒、旗取するあり角力とるあり、護謨鞠擲くあり、土掻き集めて築山作るあり、右往左往に驅け違ふ機に妾は眼も黒白になりて歩みしが、砂塵高く立つ玄關の側にて、垢付かぬ二子縞の布子に黒紬の羽織着て、髮は油氣なき英吉利銀杏に結ひたる渠に出で會ひぬ、

優しき微笑もて迎へ「よくこそ」と渠は云ひしが、丁度チン〳〵と始業の鐘鳴りければ、「直に教場へゐらつしやい御免を」と云ひ捨てゝ、己れの受持なる最下狀の生徒を率ひて教場へと入りぬ、妾は參觀簿に氏名を記し急ぎてつゞきぬ、

五十餘の生徒は正しく机に居列び、渠は一段高く黒板を背にして立てり、修身の時間なりき、渠は先老行なる概念を與へつ、さて後孝子萬吉の話を說き聞かしぬ、小さき耳を傾けて謹聽せりし、渠の教へ子の顏の如何に愛らしかりしよ、實に藹然たる渠の態度、熱心なる渠の口調は、善き人には神の褒詞を傳ふる如く、罪ある人には誨を促がすが如くなりき、妾は思はず襟を正しぬ、修身の時間は終りて作文の時間となりしが、「石盤の字

が消えませぬ」、「墨が溢れました」など訴ふる兒に、渠は一々石盤を消し墨を拭ひ、蒼蠅き顔もせざりし、かくて此時間も終りて、渠は復生徒を遊歩場に導きぬ、妾も隨ひぬ。

頓て全校の年上なる生徒も出で來て、遊歩場は再び砂烟の修羅場となりぬ、小さき口々に笑ひ叫ぶ聲は、かゝる景色に馴れざる妾には、遠く荒磯の波の音にても聞けらん如く囂々と響きぬ、此すさまじき景色の內に、悠々として幼き生徒を護りつゝ、立てる渠の姿は、曾て寫し畵にて見しムリリヨの聖母の畵の如、いと尊くぞ見られし、

垣根に沿へる椿の樹の影にて、生徒に關する種々の事聞きぬ、

忽ち「先生先生」とかしましく生徒の呼ぶ聲に、渠はあわたゞしく彼方に走せ行きぬ、塵にまみれて行く後姿を見つめて、滿身の愛を此清き無邪氣なる事業に傾注する、渠の心の如何に神々しきよと減ずると共に、色白く眉黑く文の道にさへ明らかなる渠に、袖口の墨に汚れたる布子纏せて、片田舍に一生を過させんを、いとどあたらしく思ひぬ、

頓て渠は溢るゝ淚を拭ひもあへぬ、盲目縞着たる兒を伴ひて來ぬ、右の親指のわたり血ににじみたり、流るゝ血を口ずから吻り、袂より手拭出し引裂きて繃帶など爲終りて、「痛いでしょう」と心配らしく尋ねし渠の聲は、愛に震へりき、

始業の鐘は鳴りぬ、妾も再びつゞきて敎室に入らんとする時、年は三十餘り洋服着たる紳士の、校門にて白馬を乘り捨てゝ、此方に進み來るを見つ、品格と云ひ出立といひ、由ある貴公子の遠乘の歸路に、小學校參觀する好事と見えし、何處かにて相見し人と思ひしが、誰なるかは思ひ出でざりき、

此度は唱歌室に至れば、渠は既に風琴に倚り居て、「蒲笛一聲を唱ふのですよ」と云ひ聞せしところなりき、嚠喨たる風琴の音は愛らしき聲に化して起りぬ、樂しさは渠の顔に、嬉しさは生徒の聲にあらはれぬ、妾も引き込まるゝ樣に覺えて、微笑を禁ずる能はざりき。曲は終へぬ、新に敎へむとて渠の優しき聲の、

　　靑葉しげれる櫻井の、
　　　里のわたりの夕まぐれ、
　　木の下影に駒とめて、

世の行末をつく〴〵とと、と、靜かなる唱歌室に冴へわたる時、風琴の音怪しく震ひしが、やがてばつたりと止みぬ、渠の頰には刷けるが如き紅を張し、痛く物に恐れたらん如き氣色なり、後を顧みれば何時の間にか、先刻見し洋服紳士の來て立てるありき、

さはれ生徒のいぶかりて渠を視し時には、既に淸き冷然たる面相に返りて風琴を續けぬ、只、今迄生徒と共に唱ひし、樂しげなる聲は續かざりき、

此時間を終るや否、渠は氣分惡しとて校長に乞ひ、愛見等を助敎授に托して家に歸りぬ、門前にて別るゝ時、妾の行きて看病せんと云ふを辭し、「今日は失禮致しました」と、云ひしは最沈みたる調子なりき、

(下)

數ふれば早や四年前の事よ、其頃の渠は妾と同じく、さる美術學校の學生なりき、十月十日手を携へて瀧の川に遊びぬ、斷崖の楓葉血をも吐けるが如なりし、彼方此方見歩き足も疲れたればとて、人少なき茶店を撰びて憇ひぬ、渠け携へし畫板に景色寫さむとて、緣側近く座を占めて畫筆走らしつ、

遙かに茶店に人の入來る氣色なりしが、頓てドン〳〵と緣側を走り來りし海軍服着たる十歲余りの兒の、畫に心奪はれし渠に、ハタと衝當りしが、畫筆滑りて皙きかけし紅葉畫に汚れぬ、驚きし海軍服は顏赧めて、「わらお兄樣」と叫びぬ、黑きフロックコート着たる兄なる人は續きしが、貴き身分は後に隨へたる從者なくとも、胸に燦然たる金鏈なくとも、威ある風彩にそれと知られぬ、事の次第弟君に聞きてさも氣の毒げに厚く渠に詫び、尙「武麿御詫申せ」と弟君に命じぬ、渠は顏赧めて「否」と答へて俯向きしのみなりき、

かの君達は妾等の隣りに座を占めしが、弟君と樂しげに語り玉ふかの君の、白き顏は川一つ距てたる紅葉に映じて、いと美くしく淸らかなりき、

妾は種々の事語りて時を移しぬ、常には活潑なる渠の只詞短かに答ふるのみなりしが、さりとて此處を立去らんともせざりし、

夕暮の鐘に促されて妾等は歸りぬ、

* * * * * * *

幼なくして母に別れし渠は、今より三年前父をさへ失

ひて、松に離れし姫葛の、頼りなき身となりぬ、かくて渠は共にせんと契りし書の事をさへ抛ちて、此田舍に引籠りて身を敎育事業に委ねぬ、其後嫁に迎へん婿に行かんと申し入るゝもの多かりしが、堅く辭して動かざりき、

小說としては甚陳腐なれど、筆の健かなるをもて採る

秀逸　薄命

神田區淡路町二丁目一番地　山岸たね子

（上）はかなき身

都内の瀟灑二枚重ねて同じ縞のかいまき輕くかけて小し寢衣の肩を出して熱心に聖書に瞳子をさらして居るのは年頃十七八位顏の艶も無く昼の色褪めて頰骨高く顯はれ可惜美しい花盛りも凄く見られるがかたく結んだ其唇は如何な苦痛にも堪え得べきを示した、神々しい美人の想は漏く具はつた娘である。

深い思ひは病ならで絕えず心を惱やますと見え時々長い息をホツと洩らすのである、はては堪え兼れた樣に目をぬぐつた。

途端に入口の障子サツと開いて涼しい風が吹き込む後から召使らしい女今着換た單物臀の邊を一寸なぜてわざとらしい足どり靜かに病人の枕頭に座りながら素早く聖書に目をつけて

『まあ御孃樣又耶蘇の御本をごらん遊ばしますか切斯丹の魔法はそれは〳〵怖ろしいもので露子の病氣もあんな事を信心するからだつて奥樣が始終おつしやつてゞございますこんな嫌な魔法が西洋から渡りません前は肺病なんぞと云ふ病はなかつたそうで御座いますよお孃樣がそれをたやめ遊ばさないから今に家中魔法に取りつかれるに違ひないつて奥樣は大變氣を揉んでいらつしやいますの』

肺患の怖る可き傳染病なるを聞いてからは流石の繼母もうつるが怖さに烟管片手の嫌味も云はずはては傍へもよらず成つたが毎日の聞こえよがしのあてつけに一々胸を冷やさしてもあき足らずはした無い婢共にまで馬鹿にさせるかと今更の樣に情なく無き母さへ在さばとつき上る咳と共に暫しは迸しる淚を止め得なかつた

『ほんとに私の爲には皆が迷惑しているんだから早く少しも快くなつて東京へ行きたいけれど……あゝどうして斯う死れないのだらう』

痩細つた右手に波うつ胸をおさへて露子は斯く云つた一言目には死ぬ〳〵といふこんな人の傍に長居して死神に取つかれてはと思つてか之も傳染が怖ろしさにか持つてきた藥を置いて

『オヤ奥樣が お風呂に召していらつしやるのを忘れていたよ私もうつかりもんだよホヽヽ、

と人に聞かせる樣な半獨言の樣な曖あいまいな言葉を殘して置いて逝る樣に退いて行つた、足音さへも荒々しく、それも遠くは聞えずなつた

露子は死を唯一の願とする身何の藥の必要があろうか一口だにも飲んだ事はないそれが又今日は急に命の惜しくなつてか滴も余さず飲んでしまつた

自分の勝手のみを考へて死といふ事を實行した曉同し腹の弟はどうするであろう、誰一人かばいてない弟は此世を渡る便もなく早く我あと追ふ

様な事になりはせぬかと温かい母の味知らぬ身は我れなのみ杖柱と頼る可憐じさぬな思へば仲々今死ぬどころではない然はいへ病も病、とても長くとも今年の終りまで保つ見込のないのは、多少教育を受けた誰にでも分る事[illegible]ふよわい乙女の身に合はぬ事ではあるが何とかして父上の愛な弟に涙して死に度きもの、さらずば死んでも母様にあわす顔もなく行きたき所にも行かれまじ。生きた屍にひどしい露子が此頃の胸に畳まつて居るのは之許り薬を飲んだも此の譯である。

つい先頃までは唯家名の汚れを思ふて自殺を思ひ止まり、ひたすらに命ち召しませと神に祈つた賜であろうかにわかに起つた此病婦と思ふ頃も無く、今暫し死んではならぬ果敢ない身、人の世に有りとあらゆる苦痛の極はひとしく露子の身に纒ふていると、断言してもよい。

露子は歯を咬み占めて哭き臥した、殆んど涙の在る限りを盡したと思ふ頃咳に苦しみながら思ふた、この様に苦といふ苦を集めて生れて居るのも皆天に在ます我神の愛のむちは我れ一人に下づているのである、と、暫の上に起き直つて宛然と微笑んだ心の清さ、海棠の雨に雖める風情とは之等をしも云ふのであろう、扨ても慘憺たる人の世や。

奥座敷には又も御酒宴始まりけるよと露子淋しく孤燈のもとに蚊を拂ふて居ると、甲走た聲が耳を劈ざいた。幾度云つても此度榮雄にかまうと其まゝぢや置かないから……姉弟よく似ているつてもこんなゝあめづらしい、何一つ可愛氣のないほんとに小憎らしい餓鬼だよ

聞護さつた繼母の冷罵殊に終りの一句は耳澄していた露子の身を震はさした、已が無念は云はずもがな弟の暗涙を吞んでうらめし氣に父の顔を見上げているのも目に見える様だ雨につけ風につけ思ひ出さぬ時もないこひしいなつかしい母様のお命縮めたも皆本はと云へば彼の女のしたわざ、眞の斷腸の思ひとは此の樣な折の外にはあるまい、咳は絶入る許りの露子を用捨無くせめて居る斯う云ふ時にも只賴む木偶の父上さへ榮雄と云ふもの出來てから我等姉弟へは日増にお憎み伽はる樣子、誰一人賴にする人もない浮世にどうして此上を長らへられやう、とは云つても死ぬときさへ心まかせにできぬ身は、あゝ何たる薄命な事であろう、我命數つきて此の苦しみを逃れる迄にどうして弟を安全に母の毒舌の話かぬ樣に出來やう、心は千々に亂れても纒まつた思按はなく、徒に身をもだえて枯れたと思つた涙は止度なく流る。かなたは三筋の絲にお里を讃こた母の浮いた調子、胸に五寸釘さゝれるより辛い情ない、人の幸福不幸福程其間のへだたつた物は無い、之が千葉町一の資産家の一人娘の境遇か、思はじとすれどつい愚痴な女の心から。

（中）　こゝろのこり

涼しい夕風そよ〳〵と庭の木々にさゝやいで此家の奥様人無き一室に何やら密談の躰である。

流ひ髪サラリと意氣な丸まげ根下りに結はせて利休鼠の紋御召名も知れぬ錢織物の一重帶シャンと結んだ粹さ加減顔も美しと云ぶ程でもないが顏貌の、何所とさして批難す可き點もない意氣姿、身のまわりの装飾何れも流行に後れぬ粋を極めた仇ッぽさ去年の新年會の時小作の三平爺がどこの藝者かと思つたら今度の奥様でございさらつしたかと云つて露子を困らしたも道理先天的に藝者といふものにこしらへられた躰を金で飽した装ひ新橋に腕を鳴らした前身の析も思ひやられる、ときわかきわに榮えよとかお松と名さへ呼ばれている。

數刻に渡つた密談も漸くすんだ樣子ニツコリ凄く笑つて一段聲を潜めて『ちやあ首尾だれ明日だよ間違つちや困るよ先刻云つたやうにしてれ私の方はあんな莊然爺だ者大丈夫だよだか隨分恐は事も何とも思はずしてきたけれど人を殺す氣になつたのは始てだよ何だかあたしや怖い樣だ』

夜光石の輝やく指を一寸額にあてゝ床の間の古銅の一輪挿に目を移した

相手の姿は見えぬが至つて傳法な男の調子で

そんなこたあ手慣れた己だ仕損なふ様な心配はいられー……手前急にぢいさんがこひしく成つたなは……

薄氣味惡い高笑ひする途端に軒の風鈴有るか無きかの風に動かされてチリンと音して、慄いた樣に絲を小足に騷ぜ去る足音かした。

ハツト慄いて走り出たお松忽ち肩の蟲晴れて

チヨツ馬鹿／＼しい猫だあれ。

露子、今朝は起き出て手づから居間を淸めて、さて神に告げた。

『あゝ我神よ、神は我切なる心を汲み給ひて死するに此上なき機を賜はりたり我惜しからぬ命を父上の御身換りに捨てた爲外二人三人の身も救ふ事が出來ると思へばやがては消える玉の緒を待たで空しくなつた躰も家名を汚した申譯も浮世の人こそ知らぬだろうが神のひろい裕ひ御心にしろしめさせ給へ』と。

夏の日永の遊び様に困つて釣床を涼しい木蔭に釣つて芳雄は友人と揺つたりゆられたり嬉々としてたはむれて居る、年は露子に五ツ違つて鈴をはづた様なパツチリと涼しい目結んだ口付なら、瓜二ツ皆母の遺した形見であるといふ

暫らく靜かで居だが何をしていたのか急に姉の部屋に驅つた。そして今余り好心持に成つたので少しおだやかな夢でも見様と思つて釣床の上に身を横たへると姉様に死別れたといふ悲惨な夢を見た、若し之が眞の事であつたらどうだつたろう。と。見つめだ眼の中には滴くが宿つて居た

露子はハツと吐胸をついて、世にいふ虫の知らせではあるまいかと思つた

さりげなく姉の笑ひ消したのに力を得て、友人と思ひ出してうら庭に去つた。之が此世の別ともしらずに。

露子は張りつめた心も身もくだ／＼になつて急がしく障子を明けて弟の後姿を涙の迸しる目で默送しだ

かく悟はしても可憐の弟を思へば胸も張り裂ける許り彼が爲には一度は命長らへ樣とした事もあつた、只心殘りは之ればかりそれも父上の御身には換へられぬゆるしてよどうしても今夜を過す事は出來ぬ、思ひ切つてはたと閉した、障子の外に子殘した熱涙の跡五ツ六ツ。内は齒を喰る嗚咽の聲咳と共に。

下　六日のあやめ十日の菊

只ならぬ呻き聲は孃樣のお部屋らしいと流石捨てゝも置けぬので見に行た小間使足も空に飛んでかへつて。「夕大變でムいます御孃樣は氣を失つていらつしやい外」又手數をかける面倒なと云はぬ許りの奥樣の御樣子皆みけしきのみを伺ひ奉つて立兼ねていると父は流石に實の子誰も見に行かないのかと自分がさきに立つたので纔ういて二三人の婢共は從つていつた。夜は寂然として後は靜である。

驅付けたは露子の居間机の上に臥れて居るのを引起して見た時には、早や顏も紫色に變じていた。

露子／＼つゆ／＼

同じ聲に二三度呼んでもしるしはない、奥女中の久は水は水をふいて、寶丹口に含ませて

お孃様／＼御氣を確かに御持ちあそばせお孃様々々

此上は醫者の手よと呼びにやつた

つゆ子の父桂三は氣も狂亂情無い樣な氣がしてならぬ。旦那の變つた樣子に後の祟りを恐れて居た連中もソロ／＼入つて來たお松も見えた、夫は慄いて介抱に手をつくして居るのに自分は傍へもよらずあざ笑つてい

た。

何様變な事である只例の病とは違ふ様だと口には出さぬが皆思つたらしい

ともかくもといふ桂三の指圖で床を取らせてさて其上へかき入れさせたのである

院長さんがお出遊ばしました

前ぶれを押のける様にして北島ドクトルは肉付豊い身躰を此室に運び入れた

卒倒なすつたそうですね他へ來る途中御使に御目にかゝつたので早くこられて好都合でした

急しく云ひながら一目令嬢を見て太く愕いた様子だ夜中の御出を謝す主婦も見向ず應急の手當をほどこして一方ならぬ驚愕の躰。で目瞬きしずにまもつていた桂三に向つて他間を憚かると云つて夫婦の外の者を出した。桂三は胸がさわいでならぬ

イヽヽ一体どういふわけに

ドクトル聲を潜めて氣の毒に堪へぬ風で

氣を静めて御聞き下さい、御變死です、青酸を多料に用ゐられたのです最早致し方がありません……御婦人の小さい氣から精神がさくらんなすつたのでせう

エヽッ

夫婦各異なつた愕きに魂消せぬばかりに絶倒した。

松子は實に露子の死後全く前非を後悔した自分の罪を擯くのは易いのに其れをしないで命を捨てゝ自分を眞人間に立歸らせてくれたやさしさ有難さ。血なる仇を恩で返したつゆ子の心の清さ。例へ様の無い雲泥の差を心に恥ぢぬいていくら悔たとて露子の魂に通じる害が無いと思つて一思ひに後追はふかとした時もあつたがせめては芳雄に満身の愛を捧げて今迄の盡きぬうらみを少しは忘れて貰はうと決心してひたすら罪障消滅を祈つてやむ時はない身となつた。つゆ子の死因は松子一人は知つているけれど固くつゝんで人に語らなかつた。

父の桂三は露子が自殺の遺書に何うして一時でもあんなに情なくしたであろうとつくづく自分が腹立しい。……今更自分の愚をなげいたが六月のあやめ十月の何とやらで只身もだえして泣いた男なきに親甲斐のない奴と。もと薄かつた反動で此が片身と思つてくれぐれも言ひのこした芳雄を愛するより外の念はなくなつた。

之ばかりに心を殘した露子が此れをきく事が出來たらどんなに婚しく思ふてあろう、さわれ浮世はまゝならぬもの露子といふ天使は今は長久に神の御そはに去つた桂三は二日に十度と物云はぬ極めて沈んだ人となつてしまつた。娘を精神病で死なしたのは皆自分の罪だと。

あゝ實に薄命は美人の想である。神は露子と云ふ天使を朝露よりも、果敢なく此の世を消えさせてしまつた。

（評）　筆法の雄健なるはよし、されど今少しく抑ゆれば奥床しと、おもふ。

秀逸

さとがへり

山口縣吉敷郡山口町
後河原水之上福島方　安富直子

文して申し上發らせ候。殘暑殊のほか、きびしく候ところ母上さまにじめお兄いさまお姉えさま、たの外御一同御揃ひ御變りもあらせられず、御

暮しあそばされ、何より／＼うれしく御よろこび申し上參らせ候。次にわたくし方にても皆々無事に相くらし申居候、御安心被下候やうれんじあげ參らせ候。さてとや、この間は東京より文男兄さまお歸りあそばされ候よし、ついてはわたくしにも都合よくば宿りにこよとの御ふみ、まことに／＼嬉しくぞんじ參らせ候。從一こと、先き頃より近郡へ御用にて出張いたし居り候ふて、昨日歸宅いたし候ゆゑ、早速このこと相願ひ申し候ところ、當分自分も休暇賜はりたれば、まゐれよとまうし許しくれ候あひだ、明日にも參りたき念は山々に候へども、御ぞんじの通り只今蠶の盛中にて、わたくしよりほかに手助けなき姑御さまの佛様に供物なされ候手つだひに忙がしく、尤も蠶さへ濟み候はゞよろしくと申され候。ついては明後日の次ぎの十七日、二番汽車にて參上いたすことにとりきめ申し候。さやうおぼしめしくださるべく候。さ候へば、十七日の晩には戀しき母上さまのお顔も拜しまゐらせ皆々さまにも御目もじ出來候ことゝ今よりたのしみ相まち申しをり候。先は右ちよつと申上たく、よろづは、おん目もじの節つもる御話申上べく候。當方母、從一よりもよろしくと申され候。あら／＼かしく

七月十四日　　たまよ

おん母上さまへまゐる

＊　＊　＊　＊　＊　＊

古きいひ草なれど、鳥が鳴く東の京より北での都といはゞ、黄金の花咲くてふ陸奥にある仙臺といふに、異議挿む人もあるまじく、三景の中にても取わきて秀でたる松島へは、チト俗なれど汽車一ト飛び。今もむかしの名殘りを萩の花にとゞむる宮城野も、ツイ市街の東はづれが其所にて、東海道より西、中國邊の人々は奥州といはゞてんから蝦夷／＼と云ひげなせど、住めばこよなき立派の都、花のお江戸へも朝たてば日暮には上野の森の夕鴉の、ふ聞かるゝ汽車の發着絶間なく、この頃新築のこゝ仙臺停車場の賑ひ。鹽竈までの白衣の行者、鎬銖を爭ふ商家の番頭さては休暇なさいはひに島渡松島までと洒落る高帽子鼻眼鏡が、いきな單衫にヲザと唐縮子の帯を引つかけ結びの婀娜ものと手を引きあうてゆくを、嗚、馬鹿めと眉肱怒らす書生の中に、これは歸省の麥藁帽子阿彌陀にかぶり、白地の浴衣に黑の兵兒帶を捲きつけて手にもつ洋杖もふとからず、日和下駄音させつゝ木橋に身を投げかけたる文男の後には、嫂のお信と妹のお靜、身嗜み目立たぬ程にして、珠子が今日しも福島より絶えて久しき里歸りを迎へにこゝまできたりしなり。

「おそいねえ、なぜ來ないのでせう汽車は、姉さんおそいぢやありませんか、どうしたんでせう」とお靜の待かねていふに、

お信も「少し晩れたやうですねえ。ほんとに早くつくといゝのに」といふ。

「あらもうあんなに過ぎたよ、七時を十五分過ぎましたよ、どうしたんだらう自烈體ねえ、兄さんひよつと汽車がどうかしたんではないでせうか」と眉に皺よせて眞面目にいふに、

文男はワザと仔細らしく、「お前、さうおもうかい、おいらも何だかそんな氣がするよ、これあ、屹度汽車が覆轉かへつて、すつかり即死して仕まつたのだらう。ことに珠子なんか女だから逃げ晩れて手足がちぎれて腦味噌を出して赤い血を出して……」

「いやだよ兄さん人を馬鹿にして、汽車がひつくりかへるなんて、そんなことがあるものですか、ねえ姉さんそんなことはありませんねえ」

「オホヽヽありませんとも／＼、靜ちやんがあんまり心配をなさるから兄さんにからかはれるのですよ」といふとき、轟々と音して汽車はつき、驛夫の仙臺々々とよぶ聲も、いちどに下るゝ客の脚音に打ちけされぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「あゝけふは格別あつい日だのに、朝起きるとからろく／＼煙草も吸はずに臺所まはりをしたものだから……それでも久ぶりであれが歸るのにいくら内輪だとつて少しは待ち受けの支度もしなければならず、若い者は大勢居てもさう／＼人まかせにもされないし、氣ばかりヤギモキするものだから、もうシト／＼汗か出て氣持が惡るかつたが、お湯にはいつたらやつと生き返つたやうでせい／＼した」と、今、湯よりあがりて團扇遣ひしてありし所に、下女の梅は武雄をつれて戻り、

「御隱居樣おあがりなさいましたか」

「アゝあがつたよ、今日はさぞ草臥れたらう早く這入つてせい／＼とおなり、そして お前も着がへをするがいゝ」

「ではお湯を頂きますから坊ッちやんを」

「あゝいゝよ、坊やこゝへお出で、おや鐵瓶が沸湯」と火を埋めて水さし添ふる間もなく、車の音の表まできて止まるに母はそれよと、イソ／＼出でむかへ、「みんなお歸りか御苦勞さま、おゝ珠さんよくまあ、アレあぶない足がひよろ／＼するが汽車で頭痛でも仕はしなかつたかい、何だい車屋にやるおあしならこッちで一緒にやるからいゝよ、さう、信さん少かいのがあるかい、まあ坊は母ちやんの顔さへ見れば直ぐ乳だよ、おとなしくおしよ、文男はその柳行李をあつちへ運んでおくれ、何は湯から出たかい梅は、さうかい、それではおたまが行水をつかふ湯をとつてくれな、アゝ湯殿にサ、珠さんやお風呂もあるがね、みんなお這入ッて汚れたからお湯をわかしておいたよ、行水をおつかい、さぞあつかッたらう、サ湯手拭をと」と、女の十八而かも人の妻なるものを、三ッ子のやうに甘しと笑ふは他人のよそ目、かうあつてこそ親身の情なれ。

やがてお珠もあがりきたれば、廣庭にむかへる涼しき座敷に、皆うちそろひて膳に向ひ、主人の翁が杯をとればお酌はさしづめお靜なり。武雄はいつも人より早く打伏すが常なるに今宵は流石に寢んともせず、珠子のもてきたる太鼓喇叭などの玩具に、新らしきを好む子供のさがとて、樂隊なり、戰なりとて打ちさわぐに、興わきて夏の短か夜更くるを忘れ、話に枝さき、葉の繁りたる木の間の月も高う上りて、夜風の身に染むに心づき、後片づけは明日のことゝ、母は皆のものをそれ／＼にやすませ下女と二人で火の用心見廻りて三人の寢態に氣をくばり、枕につけばスヤ／＼と睡る夢路も安らかに、早や白みゆく戸の隙間のまだあけきらぬほどに主人は例の起きいでゝ、「お靜さん、若い者をお起しなさい、さぞおつかれなさいましたらう」こたはるを靜かに抑しとめて、

「お前こそ疲れたらうに今朝も亦お早いこと、イヽエおのぶはお起しでない、坊が目をさますといけぬから」と音せぬやうに竈の下に焚きつけて、昨宵のまゝの亂れし膳椀片づくる音に、あわてゝ起る婢を制し、

「靜かにしておくれ、みんなが寢てゐるからね、まだ晩かないからあわを喰はないで門をあけてきたら、水を一桶汲んでおくれ、アゝお釜の下は燃えてをるよ」。

久しぶりで生みの母親や兄妹と枕並べ、夢もむすばずうまいして不圖目をさませば妹のおしづが今帶を締めてゐるに珠子も起きかへりて、「お靜のまあ早いこと、私はちつとも知らなくつて」。

「姉さんまだ早うござんす、もつと休んでおいでなさい」と姉をいたはりて夜のものをたゝまんとするとき、お信は奥より出できたりて、

「もうみんなお起きなさるの、お母さんは疾ゅくにから御臺所をしていらッしやるやうですれえ、靜やん夜具はさうして置きなさい、兄さんのお目がさめるまで。」

「兄さんが獨りで目をさますまではつておいたら大變ですよ、九時でも十時でも起さなけりや起きないんだもの。」

ーオイ〳〵おいらがいつ九時十時まで寝た」
「まあ、兄さんは聞いてゐたの、それでも目をつむつてゐらつしやるか睡つていらしたかと思つたんだわ」
「目はつむつてゐても耳が二つあいてゐるよ、お前のやうに兄さんが何か用をいゝつけるとき聞えないふりなんかおいらには出來ないさ」
「まあ、ひと、いつあたしが聞えないふりをしました、さあ、いつしました」
「なんだよおしづ、兄さんと口爭ひをして、お前がわるいよ」「だつてお母さん兄さんが」
「いゝよ〳〵、早く床をあげておしまひ」「それでは、わたしがこゝを掃き出しますから……お靜、采配はどこにあるの。さう」「そしたらあたしが玄關の格子を拭きます」「僕は門をはかう」。
かく同胞が親しみあひて、それ相應の用をたのしむ、家庭の和樂はこれにつきたり

（評）田園の平和なる家庭を描く筆に情あり、

秀逸

紅淚點々

仙臺 はる子

（上）

夕陽西の窓を射て本校の第一教室は橙黃色空氣で滿されて居る、當番の人が不熱心な證據には机が斜に弓形に列んで居て其上には紫などの唐縮緬の包が五つ六つ行儀惡く置かれてあるが二つ程は先生の机の上から今や落掛つて横になつて居る。
今しも二階の講堂では今日の校友會も閉會に近づいて名手が演壇に登つたと見えて拍手の音が暫時は鳴止まなかつた。
丁度今此室に這入つて來たのは、夜會結の女學生で、華美な米澤紬の衣服に海老茶色の袴を着けた工合は衆人目にも美しさが一人で、此人の家庭の有様が畧推せらるゝのである。物思はしげに一寸窓の方へ覗いて見ては人が來ないかと後の方を顧みて、氣遣はしげに小さい胸を轟かせて居る様子であつたが、暫時して懐中から取出したのは一通の玉章で其表面には初子様と書いてある許り、外には裏表とも何一つ書いてなかつた。之を見た彼は喜ぶかと思の外少し悲しむが如く悄然として直ぐ封を切らうとした。其時彼の心は一種引止めらるゝ様な感がして持つて居つた手は震ひて一人思に沈んた様子であつた。
「あゝ私が秋雄さんと交際したのは何も二人の間に戀の何のと云ふ様な事があつて交際したのでは無かつた。第一如何せ私の様な者があの人の氣に合ふ理はないし、何も斯も私には打開けて話して下され斯様し、初ちやんに遣る手紙さい賴んで下さる程だもの、夫程私を信じて賴んで下された此の大切な、秋雄さんの身に取つては命にも換られない程の手紙を私が封を切つては如何しても濟まない、私は届けて是非上げればならぬのであつた、あゝ私は惡るかつた、何故私は人様の御手面なとを、假令女の淺薄な妬み心とは云ひ、開いて見やうなどゝ鄙劣い心になつたんだろう、秋雄さんが私に一生の願だから何ぞ初ちやんに届けて下さいとあれ程に賴まれたのに……。併し私は直接には如何しても渡されぬ、第一秋雄さんと交際してる事を初ちやんに知らすのが否たし。之を秋雄さんが貴孃に、とは私の口から何云ひないし、あゝ如何したらよからう」。と四隣を見廻はしたが、

「おゝそれ〳〵初ちやんは未た學校に居なさるわ」。

と咳きつつ、遂に意を決して風呂敷の端に吉川初子と繡のある包を開けた、内には教科書や女學雜誌の二三册、其中に彼の乙女は手早く先の玉章を雜誌の中に挿んで元の如く包み直して此の室を出て行ッた。

日は西山近く沈んで窓を射て居た夕照は唯西空の雲を彩り、四隣は寂然として室内は薄暗くなッた。折柄二階の會か閉ッたと見えて、どや〳〵と打覆ける樣な人氣色がして學生共の階段を降りゐ音がした、

（中）

今しも松が枝を離れた十六夜の月は高く冴え渡つて池の上は黄金を流した樣だ、庭の芝生の露も各々小さい月の光を宿して居るに引換ひ、西の方に造られた母屋の内は寂として人の氣色さいしない。唯西端の二階の上に燈の附いて居るのは此家の令孃吉川初子の部屋である。

初子は十七歳の今年、高等女學校の四年を終つで僞か眞か能くは知らないけれど七年此方戀慕ふた婿君を近日中に迎ふるとは、近頃學生社會大評判の風說である。今日と今日とて初子は休暇後、暫くで學校に行たのに、校友會が終ると直ぐ戲弄はれたとかにて、嬉しいやら悲しいやらで家に歸ッてから泣いて居たそうな。

初子は今唯一人机に凭掛ッて玉章らしいものを讀んで居る。部屋には月の光が差込んで何一つ見えないものは無い位だ、殊に築山の松の影が疊の上に映ッて其動く度に影を障子に換える工合などは、實に何んとも云ひない佳致がある。

机に凭掛ッて居る娘の衣服は半分机に隱れて襟元の邊は薄暗く流石に月の光でも見えないのではあるが、顏面は充分月光を浴びて居るので眼の附邊の黑子まい見らるゝのである、其の圓い顏には何處となく愛嬌かあッて眼の涼しい鼻筋の通ッた、口は少じ大きい方ではあるが全体から云ふたなら何處と云ッて取立てゝ非難する點は無かろう。

今しも讀みあけた玉章は。

「我は幼年の頃より君と交際し君の家庭に養はれ起居食事も共にし幼なき折より同じ遊戲・日の暮るゝも忘れて君が廣き庭に菫摘みしも今は過にし昔、一昨年の春より君の家に居らずなりしより此方夏の短かき一夜も君と遊ぶ夢を見ざる事なく君の身を考さりし事もなかりき、君の美しき顏を見ずして土曜日の夜を暮すは實に堪へられずして何時も家を飛び出し御宅に參じては夜の深くるも知らずに君の愛らしき口元より漏るゝ一言半句心に嬉しく感じて土曜日の夜の來るを千秋の思しつゝ待ち佗しも一時、今日此頃の君の素振は恰も別人の如く顏を見せ給はざりし事さい度々、果ては月に一度會ふても口さい開き給はざるなり。あゝ振分髮の幼かりし時より盛んに君が宅に行ばれし歌留多遊に我は既に戀を知り染めて、君さ共に組になり味方となりしにあらずや、今日迄此永き十數年間、諍一つ爲したる事もあらざりしに。あゝ賴み難きは人心、變れば變られしものよと、半夜夢覺めて一人床上に沈吟する時、涙に心ゆく迄夜衣の袖を絞りし事も今は徒なれ。君には近き中に伊庭君と結婚せちるゝ由、あゝ我胸は此一言を聞きし時、我身は顚倒せん計り、魂も消え入る計なりし。夢かあらぬか、夢ならば早く覺よ、覺めざるを見れば夢にもあらぬらし。あゝ我は、我身より總べての望を取り去られ生ながら地に埋めらるゝ心地せしなり。」

此處迄讀み來たつた時、初子は如何と感じたものか、身を震はせ、絹の手巾を取出し俯いて私と涙を拭ふた。

（下）

一度雲に隱れた月は、再び出でゝ障子は、はつと明くなり墨繪の樣な松影が、ちら〳〵と映つた。

「我が生れ此の天地間に受けて人間の感情と云ふものを知り初めたるは實に君と共に遊べる時代なりき、其未稚き胸には既に、既に、戀てふ一種の感に打たれたるなりき、思ひば我戀程清きものは世にあらぬべし、我戀は神の授け給ひし處なりと我は思ひたりき。然れば我が天地間に受けたる愛は君に捧げんが爲めに作られたるものと我は信じ得たり。あゝ然るに、君は君は我を捨てゝ伊庭君と結婚せらるゝとは。

神よ戀に上下は無きものを、と云ふ勿れ。初ちやんの戀には上下ありき伊庭君は金満家の令息なりき、我は飢に泣く貧書生なりき。君は奏任官の令嬢、我は前の年迄君の家に食客せし身分なり。あゝ及ばぬ戀の瀧上り不相應なるは不緣の基、其上君も我も各一家の一粒種。如何せ能はぬ事ならば。と我は思ひたりしも、何に家系上の事は如何にも繰合せのなるもの、我は如何しても此戀、此清淨無垢な高潔な戀を。己が情を撓めて捨てよ、といはるゝは、我身に取りては、切盞の上に我身を寸断さるゝよりも辛らきなり。

あゝ今に至りて思返せば君は始より我に向ッて無情なりき、君は我が賴みし一つも聞かれたる事はあらざりしを自惚強き我は手巾に繍をして給べと賴みしなり。然れど君は唯託いたるのみなりき、我は其後此事に就きて催促は爲さゞりし、夫は君の心次第一つにありと信じければなり。其他君に賴めし事は何一つ果て給ばざりき、約束せし事は一として履行せられざりき。果ては忘れもせぬ二月二十三日の夜、伊庭君と共に耻しめられたる事さいありき。

今なればこそ何も彼も我は皆、君に告げん哉、實は自分は二世かけて君を戀したりき。然れどあゝ我は他の淺薄なる人の如く己が戀しき思を話す事を爲さゞりし、然るにしても君よ、我が平常の素振にても知られたりしならんに。我も男一疋斯く程無情なく辛らくさるゝ君に斯如き事は謂はで止まんと思ひし事も幾度、叉は心を沈めて如何しても君と一生を暮し得られぬなものらば結婚前の君に斯如き手面を差上げまじ、徒らに可愛き人の胸を苦しましむるのみなれば、とも思ひしかど、あゝ然れど／＼此の辛らき戀しき思を永久に心の底深く葬られればならざるかと思ひば實に／＼堪え得られざるなり。あゝ我が心は暴風吹き荒む暗夜に一葉を便にして進む船の如く唯一つ君が改心せられん事を望て漂ひつゝあるなり

我は今筆を斷つに當つて今唯一言君に謂ふべき事の殘れるなり。今月今夜君の愛らしき顏を照しつゝある此の月か我身は今後何所にて照むやら知られねど君が結婚の日は我魂が我身を離るゝの時なり、我魂が永く我骸をはなれて此の月の世界に行く爲めに雲が呼ぶの時にして雲叉散りて雨となるならば我は初ちやんの無情を恨んで君の麗はしき寫眞の面を紅き涙を以て染めし時なるを、

九月十五日　　　　秋雄より

戀しき戀しき

初ちやん御手許へ。

筆の蹟は震ひて其戀人の無情を怨む文には紅き涙の跡の二つ三つ、入染めるのが見える。

月は雲に隱れた、折柄吹き入れる風は遂に洋燈の光を奪ひ去ッた、初子はわッとばかりに泣き崩れた!!!

四隣は眞の暗となッた、唯寝臺の側に置かれた小さい婦人用の時計が幽かに分秒を刻む音ばかり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其當時初子の涙か秋雄の紅涙を汲んだのも一時、恐らく空涙であッたの

だろう、初子は遂に伊庭保とやら云ふ高等學校の生徒と華燭の典を學げたのであつた。

あゝ然れと然れど今後五年十年十五年初子が結婚後、秋雄の骸を抜け出でた魂は初子に如何な夢を結ばしむるであらう？

秀逸
舊戀

山口　山名よし

草ふかき片山家に生いたちしいしづの梅野がつたなき水茎のあとあさましく進せ候思へば教の庭にて君様の雕影にみちびかれ親しき指示の恩顧を受けしも今は早や六とせの夢のむかしとなり候事とて君様にはもはや賤しき妾が名さへ御記憶の外にあらんかうらめしく候あはれ君様よ名さへ忘れ果てたまいつらんに今更何事のありてか文しに送るかなしき妾が心のゆはれ酌み知りてたまはらばまゝならぬ浮世に思ひ諦く事もなくいで世を空蝉のそれと歎じて深山がくれに浮世を外の一人住して暮すとも何のうかることかはと思へども酌み知らすべきよすがなき現在の姿が身のつらさ八重雲は遠くへだてゝ夢にのみ見し幾春秋今日はからずもふでとりて君様の御許へ文送ることのうれしさよ

數ふれば六とせむかしの夢の跡として樂き思出の片身となりつゝある村の小學校君様の教の師にして校にむちをとられ候は忘れもせぬ妾が高等科第三年にてお轉婆盛りの十三四頃なりきあはれそのときはやさしき御教に背きし事も幾度か其度ごとに御叱りもしたまはでいつもやさしきお言葉もて御戒みなれ候のみ又隣席の竹村その様とか云ひし同士の姿が習字本に墨黒々とぬりつけしいたずらの瞭たゝしく泣ひて困らせしときも格別のお言葉もいたゞかですみにし昔思へばうら恥かしき至りに候亦ある夏の日修身の講話をきゝつゝありしとき天のにはかに曇りて大雨となり二時間餘り降りつゞきてもとの如く晴れ渡りし夕つ方學校より歸るに小供等の無分別より何の考へもなく常に行きかふ小川に差掛り候ひしが常にさへ飛石づたひの思はぬ岩水にて十三四歳を頭の小供のことゝて渡ることできず引き返して橋ある方に行けば小一里の迂回途うらめしく思案に暮れつ岸にたちてがや〳〵と言ひ居りしとき君様には同じく學校の用を果して歸りたまふ途すがらこの所に來られ男女五六の生徒が出水にて得渡らざるを御覧じて一人〳〵御肩に負ひたまふてたやすく渡され勿體なくも十三歳の妾迄か御肩によりしが其時は只うら恥かしくやさしき先生よと覺へ候それよりは慕はしくなつかしと忍ばれ同士が君様のかくれ事言へばはらたゝしくよき先生よとほむればうれしく感じ候

君様にはそれの校御卒業後一ヶ年間の御休學中教員のたらぬ妾等が校に御出勤くださゝれ候事とて一歳過ぎなば離別の情つらや

一歳の春秋は夢の間に過ぎて目出度大試驗もすみ足らぬ勝ちなる妾は御影にて優等の地位をさへ得數多く賞品を戴きてあすよりは數まりて第四年級の學科か習ふ心の嬉しかりし五月の初めつかた慕はしき先生には某地は御遊學の爲め校を辭せらるゝとの事を聞きしときのかなしさに女心の一夜泣きあかせし事さへも有之候惜別の印として教を受けし生徒よりは各自思ひ〳〵に筆蹟文章なぞ差上しが女生徒よりは毛糸細工の編物多く妾はうろ覺への松と言ふ古歌一首こましやくれにも筆蹟つたなく短冊に染めし進らせしが君様よりは生徒一同へ御手習の圖一葉づゝたまはり妾へは別に操と題せる御返し歌一首御認めくださゝれ候ひしがひたすらにうれしく今に妾が[illegible]に秘して保存しつゝ有之候いよ〳〵別れの當日授所に生徒一同揃ふてなにがしが師の發音につれて「我が師の恩」と言ふ唱

歌なとなへしとき何となく心の打しめりてかなしく思はず涙の雨もらし候あのときは未だ何をも知らぬ未通女の十三四にてありしかど嬉しく慕はしく懸ぜし思ひは積み重なりて身丈と共にのび一とせを過ごせど二とせを過ごせど二とせ四とせは物かは六とせの今に至るも偸らぬ思ひは只なつかしく片身にたまはりし操と哲ふ御歌は妾が心を戒むるよすがこはならで次第に迷いの深みへ墜し入るゝつなとなり嫁に行けむことらんと言はるゝ父母様さへ勿體なくも心にくゝあはれ君様に何の御約束をせしにもあらねど何處ともなく染みたる思ひはこの身ある限り忘れ難く候御別れ申てより君様には早速の御上京それに次で不幸は君様の御家に墜ちて御兩親様とも御亡くなりの跡は世にもかなしき亂離の有樣それよりは君様の御在所妾が村に知る人もなくて御樣子聞き度も闇の夜のつぶてにひもしく知れず候まゝ昨日と暮し今日と過きて六とせを經候ひしが過る十日の日なりき計らずも妾の父が官報とやらを見しときにこの程の文官高等試驗及第者の首席に君様の御名前記されしとの語をきゝ及び候まゝつて求めつ御在所探し求め漸く知れ申候六とせの永き間夢寐にも忘れさりし御方様の御高名を聞き且つは御在所を知り得し妾が心の如何に嬉しかりしは御推察にまかせ申候嬉しさに心ときめき後前の考へもなく筆とりてつたなき文認め申候よしや何人の見んも恥かしからぬ手紙にてあれど女の手より男へ進らせん事の何となく後ろめたく幾度か認めては破り破りては認めつ漸く書きをへ申候あはれ君様には高根の何とやら妾如き田舍育ちの御見かへりも[illegible]さく候はんと今は及ばぬ事とあきらめこれ迄の心を觀じまゝならぬ浮世をば捨物に一人住せん覺悟よしや枯葉は嵐に誘ふて柴の扉を叩き野鹿は妻戀ふて憐れに後庭に鳴くとてもいかで淋みしからんやはそれよりは深山がくれに人知れず散る花の心の一分だに君様の知り賜はらば心置きなく候最早多恨らしふ何事をも申間敷候間只舊戀の賤の女が草ふかき片山家に人知らぬ涙の雨にぬれつゝあゐを御胸に記るし置かれて行末いやます高き名だに聞けたまはらば影ながら心悅ばしくそれのみ祈り[illegible]

往年の舊夢……………

三十日　　　　　　賤しき梅野より

萩原様御許へ

＊　＊　＊　＊　＊　＊

なにがしの顯官に居つて時めく石田基治が引立により、父母死して學資の給途に窮せし昔しも忘れ、目出度昨年の文官高等試驗に及第せし萩原一郎、この春恩顧の主人が一人娘と目出度婚儀せしことを、文書きては破り、破りては書きつゝ、送らんか、送らざらんかと迷ひつゝある六とせむかしの舊戀の梅野が操あるやさしき心にしらせたや。

（評）其の心にいつはりなし、されど其の筆は採らず

秀逸

雨行の跡

大村鈴田　吉田みね子

月微白う森黑く何處となくかすかに琴の音ぞする。誰が爪音ならんと月の光に誘はれて聲する方に迷ひ行けばこは如何に思ひがけなかりし都よ時久しくしめり勝なりし桃非家よりならんとは。されど彼の夫人を慰めんとて右枝子のかなづるにやあらんと猶はよりそひて窺へば奧の間には月さへさし入りていとのどかに夫人春子の君は端然たる姿にて夫のむかひ琴の前にぞ坐せられける。あな不思議やこれまで打委れたる姿のみに

ておはせし夫人の今夜は何となく常よりは着飾りてかみも揺髮とやらんのいきに結ひなし化粧さへしたまひたれば燈の光の照らしたるが後の壁にうつりて限なく艶なり。満津雄の君も莞爾みて巻煙草をくゆらしながらきゝ給へば室の中には自と和氣満々たり。我はいと不思議がり琴きくことも忘れて佇めば今しも松の影のゆかしく椽側にさしうつれるに曲はいよ〳〵進みて夫人の得意の境にや入りけん玉の如き兩手を弦線にかけ給ふいともたへなる手ぶりなり

我は夢の如き心地して思ふとはなしによどみに浮ぶうたかたのかつ消えかつ結ぶが如くかれや思ひこれや思ひつ夫人の姿の眼に入るかと思へば琴の音は玉のころがるが如く耳にひゞきて姿はおぼろげに見え姿に眼を注げばことの音はかすかにひゞきて松吹く風かと思はる我は其の美しき妙なる音にあこがれ居たれば琴の音ははたとやみぬ。

中

我は歸りて疲れたれど彼の不思議さ胸にむすぼれて眠られず。此の一年があまりの間空房の琴一張床の間にたてかけて颯然風吹き來て弦鑑鳴たるの外はたへてきくことなかりし彼のことの音今夜如何なればかくもたのしげにひゞけるよ。思へば春子の君の未だ高等女學校にありし頃満津雄の君は高等學校にありてふとしたることゆかりとなりて互に思ひ思はるゝ身となり淸く樂しきラブにて學びの道にいそしまれ給ひしがかりさりかり來りて満津雄の君此の夏は大學に移り給ふといふ年の春の暮其の父君は無情の風に誘はれてはかなくなり給ひたれば満津雄の君は伯父君のすゝめによりて是非なく中途に退學して家の事どもをみつゝひたすら春子の君の卒業のあかつきをぞまたれける。

抑この春子の君といふは故吉見判事の忘れ片見にて容貌の美しきを母にうけ物事に敏捷にして才あることは亡父に似させ給ひつる上明治の教育さへうけたれば何事も規則正しく物に臆することなどは露ほどもなく學校にありし頃は行を正しくし學びの道にもいそしまれければ同窓に敬はれ教師よりも望を囑せられて組長などに任ぜられける程なりき。

三十二年の春には業を卒へて目出度桃井家に嫁ぎ其緣相結びて伉儷の間睦だ親しむこと茲に一年人世恨事多しとかや満津雄の君一夜或會のかへるさ惡友に誘はれて夜遊を始めの始めつ程はさほどしげくもあらざりしが何時の頃よりかたげくなりしを春子の君のいたく諫めしより愈つのりて家に寢ることは殆ど稀なる程になりぬ。春子の君今はたしなみもならで久しぶりに歸り給へる満津雄の君を捕へていさむるともなく家政上の事より何くれとなく煩はしく口説きければうるさしとて又出で行くことも度々なりけり。

満津雄の君は幼少の頃より桃井の一人兒として嬰に育でられ給ひて才子といふには非ざるも性質正直にて優しき男なれど春子の君は幼き時より母の嚴しき家庭に育ち萬の事につけて不如意の事もありしかば優しき中にも何處となくいぢらしき處ありされはパラプの時代はいざ知らず桃井に嫁ぎて家を持つ樣になりては次第に遠慮も少なく互に意見の圓滿ならざることもありけるを時には春子の君の才あるにまかせて夫の悠縱を本意なく思はれしこともありてならん故になせる業にもあられど夫を輕しむる風ありけるを満津雄の君も快くはあらざりしか或時友達の人に彼は家に居ても何も樂しいことがないから君方の家庭を見るとうらやましいと語らしとかや。されば満津雄の君の夜遊びは一つは自身の罪なれど一つには春子の君の責なりなど評するもののもありけり。

下

五日をへて右枝子は我が許に來れり我は此頃のこと氣になりて居たればよき折りとて四方八方の事より色々と尋れ試みしに二月あまり前親類の

耳だちたる人々密に寄合ひ滿津雄の君を呼び寄せてひたすら意見を加へられしより滿津雄の君は竹の節にあたつて流るゝ金彈の如くに心をあらぬ方へと走らせ給ひて夜遊は燃ゆる火に薪を加へたるが如くいやましに甚しくなりけり。

このまゝに打すてなかば桃井の家も如何になり行くものか此の上親は族協議して如何樣のはからひにも出づべしなど折々評議ありし頃滿津雄の君家に歸りて見給へば家の中は固より庭のすみ〴〵まで掃除行きとゞき床の間の掛物より花に至るまで心づくしのあと見えていと丁寧に手入してありしが夫人の挨拶もしとやかに常にかはりて愛嬌こぼるゝ斗りなり滿津雄の君は如何に思ひけん又家をいで給へり。かくすること度々になりぬ。滿津雄の君も後には少しく動き給へりしが未だ夜遊びは止まざりき。

春子の君も今夜は何となくものかなしくおぼへて亡き父母の事より我身の行く末のことなど思ひつゞけつ五月雨ほど思はれて今は秋田の落水とは實に我身の上の事よとかこち給ひやがて机に向ひ幾度か涙を抑へて筆とり給ふ。何事を書かれしか知る由なけれども一筆そめては又涙を押拭ひ又押拭ひて果ては伏し沈み給へり。折りしも車の音轟きて我が門に停りぬ。若しやと聞きつけしに夫の足音なりければ春子の君は驚き涙を拭ふて迎へんとせしが潸然としてはふり落つる涙はさらにせきあへず。とかくする中夫は入り來れり春子の君はうるみ聲にて今頃よし御歸りになりましたといへば常には無言の夫の今夜は一寸とかへりたくなつたからとのいらへ一言のいらへ春子の君にとりては千金の値なりかし。

滿津雄の君の胸の騷ぎはやみたれど我が罪業の程を思ひつゝけて眠られずふと妻の顏を見れば女學校にありし時の俤もなく色青ざめ肉落ち髮さへつやなくなりいとやつれて靜かに眠れるおもざしさへ哀れなるに兩の頬には涙行の跡あり〳〵と印せられ居たり。滿津雄の君は見るに堪へずいきなり抱き起して漸く春子の前に一々前非を悔ひ自分が不見識であつたゆるしてくれ改心したとの言葉に春子の君は唯だ夢とばかりに思ひ惑ひて何ともいらへせず茫然として夫の顏をみつめ居たるに滿津雄の君の焦らつてゆるさんのかとなじるに始て我にかへり實にすみませんでした私が第一惡いのでございます私に至らんところがあるからでございますどうぞゆるしてと夫の手をとり情にたへざらん樣に握りしめつ兩心相照らし雙情相結ぶの仲となりて近頃は琴の音などすること度々なりとかや

秀逸

水車

信濃　小岩井愛子

『ギーパタン、ギーパタン』

あゝ、私は此の水車の音を一生忘られない。此の音を聞いては、一種の親しいやうな、懷かしいやうな、又悲しいやうな感じがせらるゝ。普通の人が聞いては左程でもあるまいが、私は甚麼しても忘れることが出來ない。何故だのかしら？

私の生れた所は信濃の國でも田舍な、桐原と云ふ村で此村は梅の名所で、北には一帶の山脈を負ひ、南には見晴しの好い田圃を控へて居る。家は百足らずで、藁屋が此所に五つ、彼處に三つと云ふ風で、河に臨めるもの、田に面せるもの、皆思ひ〳〵に建てられてある。田舍のことゝて、馬車だの人力車だのは、朝から晩まで通つた例はなく、たゞ時偶、重そ

うに荷を積んだ百姓の堆車ばかりが、石高い村路を凄まじい音をして通るばかり、實に物靜かなるは田舍の常である。

此の石高い村路を東へ行くと、人家も漸々疎らで、路は次第に松原の中へ入り、暫時で此の松原も通りぬけると、岡が數多もあつて、此の岡からだら／＼道を下り盡すと道の左手に、さゝやかなる河に架して、一軒の平伏の藁屋の水車小屋があつて、軒には『ギーバタン』の音をたてゝ水車が絶えず廻つて居る。

私が一生忘れることが出來ない、して親しい懷かしい又悲しい感を起させるのは此の水車である。

田舍の秋の夕暮などは又格別で、日も山の端に沈んで花やかなりし夕照も消え、四邊が次第にうす暗くなつて行くと、田圃にも人影が消えて、村人は皆家路に歸つてしまつた。哀はしい馬子の唄も、鈴の音と共に森の方に消え、節可笑しい村唄も家の中へ入り、此所彼所から昇る夕煙も見えなくなつて行くと、向ふの山の中腹にある山寺の鐘が『ゴーン』と重そうな、又穩やかな空氣を破つて響くなど、人の心に滲み入つて、實に秋らしく思はれる。

かく天地の靜まつて來た夕暮にも、人里遠い小河の水車は『ギーバタン』と細い而も透るやうな音をたてゝ、四邊の寂寞を破つて絶えず廻つて居る。

雨の朝も風の夕も、一日もを止みなく、或は高く强く或は低く細く、殊に人かげ絶えし頃を、物淋しい音をたてゝ廻る夕暮や、又は流れには圓かなる月かげを碎き、水車より噴き出す水は、月に輝いて水晶のやうな月夜やなどは、中々趣味があつて、人々の心によつて此の無心な水車の音も色々に響くであらう。

私の家は代々水車屋なので、私も幼少い時から、能く阿母さんに伴いて、此の水車小屋へ折々行つた。松原を通りぬけ岡のだら／＼道を下りかけると、はや水車小屋は目の下に見え、遠く『ギーバタン』の音も聞える。此れを見ると私の小さな胸には、電光のやうに一種の考へが閃めくが常である。

それは甚んな考へかと聞かれても、私は瞭然とした答案をする事が出來ない。たゞ云ふに言はれない一種の感じだと云ふ外には。

此の水車小屋には今年六十何歳と云ふ、極く質樸な又親切な甚作爺が番をして居る。婆さんは去年亡くなられて、今日では新吾と呼ぶ一人の孫と二人暮しである。新さんは私より二歳年上で、私と同じ學校に通つて居るが、極く温和くつて其上學問も出來て、級では常に首席を占めて居る。

私とは極の仲好しのお友達で、私が阿母さんと此の水車場へ來た時は、何時も二人で睦まじく遊ぶのが常で、又私も、それを樂しみに阿母さんに伴いて來るのである。彼の岡のだら／＼道から水車小屋を望んだ時、異樣の感じがせらるゝのも、畢竟たゞ此の爲めなので……。

水車の架つて居る小河の土手は、一面たゞ芝ばかりで、南の日あたりの好い處には、春ならば菫だの蒲公英だのが美くしく咲き、秋ならば桔梗だの尾花などが、淋しげに秋風に吹かれて咲き亂れて居る。

私が水車場へ來た時、新さんと遊ぶのは常に此の土手である。ある日悠んな事もあつた。平日の通り菫だの蒲公英だのを澤山摘んで來て、飯事を仕たり、又は人の見ない處では、そつとお盃の眞似などして樂しく遊んで居ると、急に後の方で『ヤア此れはお雛樣の御夫婦！』と云はれたので私は、はツと思つて振り向くと、其處には口惡い平太といま一人の若者とが立つて居て私の顏を見て笑つた。私は顏を見られるのが恥かしいから、フイと横を向いたが、そつと偸むやうにして新さんを

見ると、新さんもきまりが惡そうな顔をして居た。

『新さん、厭だぜ、そんな事を言つちア……』モヂ／＼して居る。

『厭だつて、實際にそうだから仕樣が無えわ、早く婿殿に澄ました姿を見てえよ、でも能く似介つて居るなア』

『然うさなア』と若者は合槌を打つた。

『コレ嫁御、甚麼だ、そんな方ばかり向いて居なんで、ちつたア此方にも美しい顔を見せな』

『厭な爺さんだ。私は猶きまりが惡い』

『厭だつてば、知ないッ』

『そんなに怒らなんでも宜いぜ、餘まり嬉しいもんだから、へ、、、』

『へ、、、』と笑つて行つて了つた。

『厭な爺さんだれえ、あんな事ばかり言つて……』

新さんは、やつと氣の附いたやう、輕く首肯いた。折から水車場の方から

『露ちあん、もう歸りますよ』と阿母さんに呼ばれて、急いで立ち上り

『阿母さん待つて!』と馳せ出し、又思ひ出して二三歩早戻りして

『新ちやん、さようなら』

『露ちあん又お出で、待つてるよ』

『ア、又來るよ、這度は人形な持つて』又すた／＼と馳せ出して、やう／＼阿母さんに追ひ附いて振り返つて見ると、猶此方な眺めて立つて居た。

其の年の蘺も萎んで桔梗も散つて、翌年の蘺が咲き初めた頃、私は高等科の一年生となつた。土手の蘺は今年も新さんと二人で、來て遊ぶのを待つて居るのであらう、けれども私は其の年から水車場へも行かないやうになつた。若し行つたとしても用事さへ濟めば急いで歸つてしまつて新さんと遊ばうとも仕ない。又新さんも私を見ても一寸禮をするばかり碌に言葉も交さない。新さんと私との間は日々に疎くなるばかり、何故かと人に訊ねられても、私は何とも答へる事が出來ない。今年から高等科になつた所爲か。そうでも有るまい。そんなら喧嘩でも仕たかと言ふにそんなことはさら／＼ない。何故だか私にも了解らない。私も心の中では昔通りに遊びたいは山々だけれど、たゞ顔を見ると何だか極りが惡くつて――。

きまりが惡いと思つて居る中に其の年も、世はうき秋の下葉色づき虫の音たえ／＼に、霜葉黄に落つる頃となつた。その秋の暮、正直翁の舊作は惡に散り來る木の葉と共に、たゞ一人の孫を殘して此の世を見捨てた。杖とも柱とも依頼むべき祖父さんを失つた新さんの心は、まア甚麼であつたらう。まして此よりして世は凩の吹き荒び、人目枯れ行く冬に向ふに、思ひやらるゝは哀な人の身の上であつた。

村人の情によりて野邊送りも濟ました孤兒は、たゞ詮すべも泣くばかりなりしが、幸に情ある村長の手に救はれて、やう／＼路頭に徘徊するを免れた。

新さんは村長の宅へ引きとられて、涙の中に學校に通ひつゝあつた。村長には只一人の芳さんと云ふ愛娘があつて、色は白くつて愛らしい、私と同級生であつた。朝などは新さんと二人で仲好く一所に學校に通ふのも屢々見受けた。

懸賞小説の選みをゑて

二十三階堂

懸募小説接手總數百二十三種中、今回選に上りしもの十種、餘の過半は概ね見るに足るなきすさびがきの類にして、いたづらに撰者をして忙殺せしめたるに過ぎざりし、おもふに、諸子はひたすら其の名のあらはれん事にのみ熱中して文の修練に、おもきを置かれざりし結果ならんか、方今世に印行の雜誌は多し、されど才媛の爲めに殊に年四回の増刊を設けて江湖諸嬢の懷抱を世に紹介するの機關は我が女學世界を措いて他にあるべきや、本誌四季の増刊は天下才媛唯一の機關なり、閨秀文學の競技會なり、我が愛敬する諸嬢よ、今後更らに大に奮つて我が詞壇に貢獻する所あるべし。例によつて佳作の分を登録すれば左の如し

、、、、運命	まつかぜ
、、、未來の契	照田錦子
、、、はかなき一夜	田中雪子
、、難波船	柴田繁子
、、乾かぬ袖	龜山音羽
、、昔の秋	白河雪子
、、秋夜の夢	大橋しづ子
、、子爵夫人	露野たま
、女心	夕ぞら
、、恩人	翠雨
、、、こゝろのはたけ	下條ますみ
、、うきね	みれのや
、、、行くれし旅	瀧川きん子
、奥様	實相寺のぶ
、新婚旅行	こしは
、二人の小女	秋原瀧子
、、夏の夜	森露枝
、、宿運	こてふ
、、あはれ小女	梅崎米子
、、ほそ流れ	渡邊あき子
、、女波男波	岡本しづ子
、、繼母	野百合
、、片われ月	中村德子
、、、秋のおもひ	山岸たれ子
、、戀のわかれ	市村さい子
、、しのぶぐさ	尾花いと子
、、あはれ小女	秋元うら
、、水の流	春子女史
、、、こゝろの衣	みづほ女史
、徒なさけ	伊藤うた

國文

第一等（賞品圖書切符金三圓）

友のおくつき

わかやま いさを女史

日影うすれ行く秋の夕暮、力もなげになけるせみのこゑ、羽もよわれる蝶のあはれなるすがたなど、きくにつけ見るにつけ、何となうこゝろぼそく、かなしうて涙のこぼるゝに、亡き友のことおもひ出でゝ、むかしをしのぶ思ひたえがたければ、御墓になりとも詣でゝこゝろやらむものと、まがきのかたへにさきみだれたるしらぎくのはな、一えだ二えだ手折りてたづさへながら、露しげきみちをたどりゆく、おくつきは我がいへよりほどゝほき小山のうへにあり。

みはかのしるしなる高き木をめあてに、心はいそげどおくれがちなるそでの、何にひかるゝものならむ。まねぐ尾花やすがる露、いづれおもしろき秋の野べにはあれど、心ある我れには、その尾花、つゆのこゝろのうちをとひみれば、さびしき秋をともにかたれといふにはあらざるか、いまきえてゆくはかなき身に、しばしのかぐはしき宿をかせといふにはあらざるか、など思はれて、何をかしかるべき。

我れいま、あだしびとのおくつきに詣でむとして、いそぎゆくこの道の、やがてはわがみが、彼の世にたびだつとき、はじめての旅路となるらむとおもへば、げにはかなき人の命や。

みちしばのつゆに、ひくもすそもぬれはてたるころ、やうやうおくつきのまへにたどりつきぬ。すゝき、かるかやの生ひしげれる間に、たてる一もとの年ふりたるさくらの木の根かたこそ、なつかしき友のやすけくねむりたまへるところなれ。いざとてたちよれば、おちはほろほろと風なきにちりて、塚のうへ、我がころものうへにふりそゝぎつ。おほひぬべきものとてあらぬ石の面、幾多のとしつきのあひだ、雨にかぜにさらされて、はや苔さへおほし。たづさへきたりし花は、筒にさしてそなへぬ。ありしむかしのことゞもそゞろ思ひ出だされ、はふりおつるしげき涙は、秋かぜにおちて、こゑあるをさへおぼえずになむ。

あはれは同じきいしぶみの、あたらしきもふるきも、をちこちにたちならび、たえてはつゞく香けむり、すゑは雲ときえてゆく、夕日いつしかおちたれど、なごりのくれなゐはまだ、西の空にかすかにのこりて、卒都婆のあやしき文字、なほあきらかによまれつ。明日はまた誰がさとに、あらしの雨となりゆくらむ、夕ぐれの空をいそぐ足はやきむら〳〵としたるくものなみ、ゆくへもしれずよせかへるなり。おどろがもとに餌をあさるらむ狐のこゑ、身にしむひやかぜにかよひきたる。みるもの聞くもの一としてかなしみのたねならざるはなく、ものすごくもまたいたましくも、そゞろ人をして無常のはかりがたき大なる力にむせばしむるぞあはれなる。

思へば花子のきみは、をさなきより我がこよなくしたしき友なりけり。村のまなびやへかよひしときも、袖をつらねてゆき、手をひきてかへりぬ。片山さとのさびしきすまひも、すめばみやこのたとへにもれず、あらしふきまく秋の夕も、こがらしすさぶ冬の夜半も君とゝもにかたれば、よろこびのこゑは、つねにたえざりき。文に歌にこゝろをきほふそのたのしさ、げに云ひしれずになむありける。我れのものまなひせむとて都の空にまらうどとなりしのちも、君のやさしき文のかよひはたえざりき。されど、このよろこび、たのしさは、君をおくりしときの野べのけむりとゝもにきえうせて、思ふもあだよ。文どもさへも今は、わが手箱のそこふかくのこり、亡き人のおもかげしのびてとうで見るごとに、我れをして、くりひろげてはまき、まきてはかへすしづのをだまき、つくるはしなき思ひにふけしむるぞ、口をしきゝはみにはあなる。

うら〳〵かすむ花の野に、すみれ花つみ、つばなぬき、つくしひくとて、かたみにおひまはりつゝ、胡蝶のゆめのそのかげを、したひめぐりしは、あはれかしこの野ばらなりし、されど今は、たゞつゆのみしげくて、ふくかぜひやゝかに、うき世に秋ふけぬ。

さはれ、我れひそかに思ふ、天にゐませるひめ神は、神のむた、きよくうつくしき心を持ちたまひたりし君が御みを、このけがれ〳〵しつみのよに、降しおくにしのびずして、御玉床のうへにめしたまひしにはあらざるかと、君がはかなくなりたまひし夜は、月なく、星なく、夜嵐あれて村雪すごくそゝぎしとかきく。きみはまなびやの窓よりみおろしたまひて、世海なみ

たかしとのたまひぬ。實に我れは、未だ母の御かたへにある身なれば、なみうちぎはのまつのこかげにやすらひつゝ、行くてはるけき海原を、ながめつゝあるがごとき身なり、さるに、さるに、あゝさるに、世のなべてのひとのこゝろに、まことすくなくして、いつはりのみ多きにきもつぶれ、人々のひごとなせるすべてのわざはみな、わが身をくるしめむがためなるがごときにこゝろあきれ、ひと日としてこゝろやすらかなる日とてなし。あはれ、このうへこそ出でなば、あゝ如何にからきしほなわの我が身めがけてせめくらむ。



ちりのうきよをうちすてしきみが御身の、さてもさちあることよ。我れの落花を抱きてなくときは、君は、うつくしき白百合の花をさゝげて、よろこびたまへるにはあらざるか、あな、うらやましやな。

君よ、いざこの上は、墓畔に春は花ちるも、なつはほたるびみだるとも、秋はしぐれのそゝぐとも、冬はしらゆきつゝむとも、しづかにねむりて、あゝきみよ、とこしへにさめなたまひそ。我れも今、きみの御か友へにまゐりたきは、心一つの願ひなれど、あゝ如何にせむ、人のよのほだしいまだまたくたえざるを。

あゝ、我れは遂に、もだえざるを得ざるか。

御つかの上にそゝぎたる、朝の露にもまさりてしげき涙は、もゝちのたうときひぢりが供養にもまさるらむとぞおぼえし。

思ひ出でゝは思ひ入り、胸はりさけむばかりなる折しも、友のやさしきみこゑもて、我が名をよびたまふやうにきこゆるに、おどろきて見上ぐれば、ふくかぜ山の上の松のこずゑをはらひて、聲さへも、かすかにかすかにとほざかりゆく。

如何に長くとゞまるとも、人の世のうらみはいよゝますのみにて、思ひのつくることのなければ、いざとて立ちあがり、かへさにつきぬ。

あはれ、さくらよ、我れの再び詣てくるまで、こゝを守れ、來む春ごとに、花のしらくもたなびかせつゝ、友のみたまをとむらへや。

さらば、さらば、我が友よ、花子のきみよ、これよりぞわれうき世に旅路をとらむ。

いつしか日ぐれにけむ、とぎすましたる鎌の月は、こむるさぎりのはれたれど、今や西なるやまのはに落ちなむとして、あたりをぐらく、露にぬれたるくさむらにかこつ虫のねは、さながら世をはかなむこゝろにも似たり。再びみはやとふりかへりし折しもあれ、みはかのうへの空にかゞやき居し星ならむ、一しほ淸く、うつくしき光のをひきて、西のかたさして飛びぬ。あはれ、花子のきみにはあらずやも。

また、さつとふきくる秋風一陣、虫のこゑ〳〵一きはたかく、いづくよりさまよひきたりけむ、わがそでのあたりに、散るやおちばの二三片。

評、篇は、女學世界寄稿家の中にて、最も傑出せるものゝ一人也。この文の前中、余が舊作「墓畔の秋夕」に學ぶ所多きは、嫌らぬ心地すれど、詞藻と云ひ、才情といひ、自らこれ群を抜くこと數等。（桂月）

第二等（賞品圖書切符金二圓）

磯草

神田淡路町一、一、山岸種子

（一）

ばら色のくも、東の空に匂ひて、はなれ小島の一もと松、影もかすかにうちけむりつ。水色のおほぞらに、明星のかげ一つ、かすかなる光をのこせり。

朝がすみ、うすれゆくわたつみの上、つり舟は白帆かけて二ッ三ッ、波にたゞよひて、なつかしき舟うたのこゑ、はてなき海にかよひつ。

あゝ朝の海のしづけさよ。

みだれがちなるわが心の、何ものゝむねに入りけるにか、あとかたもなく、消えうせて、いそにさゞめく朝しほのひゞきに、樂しき歌の調を、わがちいさき胸にうめくめり。げに朝てふものは人の心を淸むるために、つくられたるものと思ひぬ。

やがて、みそらのあなたに、棚びけるよこ雲、紫の色ふかくにほへり。日出でんとするにやあらむ。

（二）

磯山のかげ案なるところ、岩をかすめて、白鷗のむれとぶさま、よせかへす白波の亂れては花さくさま、磯のながめの、げに床しくも、なつかしきかな。

そもいづこのたがすさびにやあらむ。まさご路に捨てられつる、白薔薇一輪、葩清う波のしぶきを浴びて、海原とほく登れる旭の光をうかべ、なほこまやかなる一脉の薫を殘せり。

われは、そのうるはしき蘂を眺め、富も、かなしびも、憂も、魔神が射る白羽の征矢の一筋に、胸深く貫かれたらむやうに、思ひたゞはるけく、またゝきもせて、波打際にこそ、立ちつくしたりしか。

あゝ、海邊の白ばら、われはとこしへに忘れ得じ。朝な夕なによせかへす白波は、今、いづこの海に、その花びらを漂はすらむか。

(三)

波に洗はるゝ玉藻の薫をなつかしみ、只ひとりとぼとぼと、一里の磯松原を、辿り行くなりけり。

みちくる潮に、まさご路つきむとするあたり、波を追ひ波に追はれて、打興ずる海人の子の聲、さゝやくにも似てかすかなり。行き／＼てたゝずまひ危き磯岩に、しばし休らひぬ。あゝおもひ出づるこその夏の夕、親しき友のひとりと、美しき理想の夢にほゝ笑みて、かたみに未來を語りしは、げにこの岩なりしよ。さるを、運命の岸をうつ波は、うたてや、友の身をも、洩らさずて、潮暗逆まく千々灘上、友はとはに歸らぬ、とほき旅路に赴きけり。

あはれ、海の底ふかく沈み行きし友の身よ。至愛なる母神の乳房にすがりて、今、いかなる夢をか結ぶらむ。

(四)

松原をたどり出づれば、夕、汐靑き野坂の浦は、花やかなりし入日の名殘をとゞめて、見渡すかぎり、夕暮の沈默を守はり、磯山のあなたには、新月の薫かすかに、ほのめきて、夕づゝの影ひとつ、涼しき笑をもらしつ。さびしき夕暮の波は、白き砂地に、海のひめごとをさゝやめり。

あゝ、なつかしきは、波のひゞきなるかな。

しめやかなる汐風に吹かれつゝ、ゆくて急ぎて、辿りゆく旅人の姿、夕のきりに包まれて、やがては、遠く、見えずなりぬ。

(五)

潮音かすかに、星すめる夕、語らふ友もなく、まさごぢの白きを踏みて、磯邊に出づ。

水や空、空や水なるあたり、うつくしき燈黄色に染みて、今月は出でむとす。磯馴松にひゞく風の音、なつかしき琴曲をかなで、波にむせびて鳴く海とりの聲いづこともなく聞ゆ。

(六)

夜更けて歸る松の木の下道、露ひやけく置き渡して、よかぜいと涼しく。月の桂の雫、袖にしたゝらむとす。一もと笑める百合の花、松の葉ごしに漏るゝ、水の如き月光をおびて、吹く風のまに〳〵に、露の白玉ほろ〳〵とふりこぼせり。われ、そゞろ心に、その一莖を手折りて旅やかたの花瓶にはさみしが。それもやがて萎れぬ。あゝ恐ろしき罪を犯しけるよ。

評、雅致ある文章、捉へ所も亦頗る詩的、賞ぶべし。(桂月)

第二等 (無賞)

夜半の月

下谷谷中初音町四丁目三十七小島方　瀧川きん子

宵のほどより圓に美しかりし月影、人靜まり、萬籟も聲ををさめし十二時過ぎとなりては、いよゝ清らに高く、天心にすみ、濁れる人の世も、今のみはとおもはるゝ計りなり。

早う床につきぬれど、打ち出でならぬおもひに、悶ゆる身の、目は月影のそれよりも冴え、頭さへいたく熱しぬれば、ふしどの内におらん樣もなくて、そと庭におりたちぬ。

きのふけふ、咲き揃ひたる萩も、ほに出でしすゝきも、皆全身に月光をおびて霜の如く白く、ほろ〳〵とこぼるゝ露は雅人ならば玉かとも見るべし。地上には、それらがおとせる陰影、さま〴〵の形をなし、風に從うて動く、我丈よりもはるかに高き櫻は、憎き迄梢をのばして月光をさへぎりたれど、さすがに、葉末を洩れて我眉の上に投げたるかげは、白衣にかたを置き優にして捨てがたし。

心付けば、髪さへ衣容さへ、いたう亂れて、しどけなき我樣に、人目なき折柄とはいひながら、かく月もおかきにと、今更身をはぢて、そゞろに小暗き木の下にたゝづめば、袂を拂ふ風肌寒き迄冷し、あはれ、同じくばもゆるおもひの此のむねの中にこそとおもひつ。

くまなくてらす月影は、山海のへだてなし。今我れをてらす月は、やがて我おもふ君の上をもてらすらむか、あゝ、君は今、何處の洋上にか航したまふ、波音はげし

き甲板の上にはよもあらじ、窓とざしたる室に、吊床の上に、如何なるゆめをか結びたまふ、せめて我おもふこゝろの、そのゆめにも通ひなんには、などおもひつゝ仰げば、わら恥かし、ゑめるが如き姿して、何時のほどにかかたむきたる月影、正面におのがおもてを照し、かゝるおもひになやむ身を嘲るらん様なり。

評、情景躍動す、一種の才筆といふべし。（桂　月）

第三等

（賞品圖書切符金壹圓）

月のいろ〳〵

横濱市加奈川町二九一佐藤方　實相寺のふ子

春はあけぼの、花の梢に霞める月の艶なるに、越路へ急ぐかりがねも、見捨てかねてやなくらむ、夏はゆふぐれ、清水に砕くる月の涼しさは、そゝろに霜をやあざむくらむ、あるは、千鳥友よぶ寒き江の氷のうへに照りわたる冬の月、いづれ、あはれならぬにはあらねど、猶、秋の月こそ、一きはあはれはまされ。



桐の一葉の散りそめて、木の間もりくる月かげに心づくしの秋も通ひ來ぬれば、いつしかと垣根のま萩咲き匂ひて、露ながらうち亂れるに、はや蟲の音さへもよほして、月の影さへしどろになりぬ。

秋風さむき田舍道、馬賣れる賤の男のかへるさを見送りたる夕日の、影ふみながらゆくは誰ぞ、まだうら若き賤の男と女、妹背の中にやいとむつましう何事をかかたりゆく、是も鄙なればこそ、榮ゆるみ代の恵なればこそ。

うちひさす都はいかに、瓦の浪よりいでゝ、瓦の浪にかくるゝ月の、汚れたる世とも知らで照らすらむ。されど、月にはかはりなきものを、見む人の心々によりてや、ある時は月もくもりても見ゆらむ、書のどよみは夜更くるまゝに靜まりて、百々千の都の人も、皆夢にや入るらむ、空には月のみひとりすみわたりて、恰も夜を守るか

とおぼゆ。

秋深うなりゆくまゝに、野邊には千草の花咲き亂れて、錦おり出すはたおりの鳴音もやさしき花野の夕まぐれ、尾花の波より出てし月の、すみゆくまゝに、千草の花の色も一つ桂の花とやなりけむと思ふまで、月かげ葉末の露毎にてりそひてうつくしう、ゆく水の捨てどころなき蟲も、そゝろに月の美にうたれてやなくらむ。

夕きり立こめておぼつかなきも、いつしか晴れそめて、鎮守の杜の杉の梢に、さやかに匂ひ出てたる月の、よまるゝはかりなるか、恰が鏡かけたちむやうにて美し、黑髮山の頂きならましかは、さしくしと見む人ありやなしや。

遊子の身こそ、秋は殊さらに物おもはるれ、おばしまちかう、夕くれの空眺めつゝあるに、一群のかり鳴き渡りぬ、わりなくも童心に立かへりて、なつかしくも思はるゝは、故鄉の空なり、かしこならむ、そこならむと思ふほど、東の山より月のさし出てくる、今宵此月をいかに見るらむ、と故鄉の空なつかし。

十五夜の月見こそ田舎はをかしきものなれ、月見團子、枝豆なとうつだかう、三寶の上にかざりて、緣近う供へて月を待つ、老いたるも若きも男も女も、皆今宵のみは業を休みて、夜を更かしてぞ遊ぶ、鄙歌うたふものも、三味線ひくものも、躍るもの もありて、更たくるまで物さわがしき、されど、心すぐなる人々の、清き心のまとゐなれば、表面のみかざる都の人の、夢にも知らぬぞかし、稻葉を渡る夕風に、空の浮雲またく晴れて、匂ひ出でたる月かげに、とし頃のうさをぞ忘るなる、都の人の高樓に見渡す社の夜の月、それもさやけからむ、されど鄙のごとき平和の月見はいかでうべき。

今もなほ、嵯峨野に笛の音するは、草狩の童の吹荒ぶにやあらむ、はた、尋ぬる人やあるとて露わくる人にやあらむ、蟲の音と共にすみゆく月のさやけさに、そゝろうかれ出てし風流男にか、はた物ずきにも、今やうの小督を求むる人か、招く尾花に問へど、何とも答へもなし。

錦をば織りしく如く宮城野の、小萩が露に宿れる月かげ、昔は美しきもの なりしか、今は大方開け、田は家と變り、今はくろ金の路さへ通へり、變らぬものは月の影よ。

夜寒の風を身にしめて、只ひとり衣うつ賤の少女よ、をり〳〵音のたゆるは、またうら若き妻にやあらむ、かへるへき越の旅人や待つらむ、やさしき少女よ、汝がはし

き夫はいつくに見るらむ、なが衣うつ音とゝもに、空にすみゆく今宵の月を。

三越路の月は、英雄の心をなぐさめ、心つくしの月は、賢相の涙をさそふ、月にむかへは音信たえし友のつゝがなからむをいのり、来し方を忍び、なほゆくすゑを思ふ、月われをして千々に思をくだかしむるにやあらむ。

尾花が袖も霜枯れて、招く甲斐なき秋の別れ路、ほろ〲と時雨るゝ雨の絶間に、くれゆく秋をおくりがほに照る月かげ、命の岸をうつなみの、夕の光かとも思はれて、悲しとも悲し。

春の月、匂ひふかしとも、夏の月、涼しとも、冬の月、こほれるも、秋の月の、千々に物思はするには、あはれまさらざらむ、まことや、悲しく、さびしく、はた、あはれに、千草にものおもはする、秋の月こそ、一しほあはれ深きものにはあめれ。

評、くだ〲しきわりに面白味なけれど、多少の風趣あり。

（桂月）



第三等（無賞）

秋の植物

伊勢山田久世戸町川上總一方　西井善子

朝顔

賤が家の破れたる垣根などに、赤、紫、白、藍、さては、染分などいり交りて、緑したゝらんばかりなる葉の間より咲きいでたる、いと麗はしく、水晶の如き露載けるまたなく清し。菓子賣る家、あるは、旅館などの店先に棚などおきて、鉢植の朝顔のいと大なる花さけるを並べたてたる、何とはなくなまめかしく覺ゆ。朝まだき咲くが常なるを、既に大陽の高く昇れるに、少し開きかけたるばかりの朝顔いとをかしく、手もてそを開かしめたる、しをれゐて哀れなり。されど、晝にいたりても猶、しぼまでほこり顔にさける朝顔、其名にたがふ心地して、うれしからず。

楓

梅はあれど、櫻はあれど、風雅の趣あるは楓にこそ、その多くむらがり繁れるは、火の燃ゆるがごとくにて、いと麗はしきに、まいて、紅葉せぬ葉のところどころに交

れる、げにほむる言の葉もなし、四面緑ばかりなる木立の中に、唯一本紅にそみなせるいとあやしく、白髪の翁の住むてふ草庵の、かたへに繁れる楓、夕霧の晴間より見ゆる、と山の楓、またなく麗し。

萩

萩はいと〳〵鮮やかなるものなり、さゝやかなる池にかけわたしたる橋のかたへに繁りて花さきたる、池の水をうす桃色にそめなして、いと麗はしく、あれはてたる古寺などの庭に、一株、二株枯れし木葉のかゝりたるまゝ咲きいでたる、何とはなく面白きに、さとふきくる風のそをふくに、花はら〳〵と散りて、枝のみ右に左にゆらめくさま、たとふるに物なく哀れなり。

薄

すゝきはさまで麗はしからねど、中々に哀れなる草なり、はてしもなき野原一面に生ひ繁れるが、ふきくる風のまに〳〵靡きつゝ青海原の如く波うつさまげに哀れ深く、そが根元に蟲の悲しげになけるを、知りてか、知らずでか、ほそき手動しつゝ人をまねく樣なるいと無情にて哀れなり、されど、庭などのねじけたる疊石のもとに、二かぶ三かぶ、そだてるいとゆかしき風情あり。

女郎花

女郎花はいと〳〵ゆかしく、たをやかなる花なり、松の根元、清き流れの岸などに咲きいでたるは更なり、式場などの美しき花瓶に松竹などゝ共に、さもうやうやしくいけあるいと心地よく、茸狩のかへるさ、亡せし母上の御靈に手向んとて、四五本手折りつゝ、持ちかへりけるに、家につきける頃には、早やしをれゐたるいとにくし。

評、簡勁にして、清楚、妙處はなけれど、また棄て難し　（桂　月）

第三等（無賞）
おもひでの記

北信の山家にて　すみれ

みすゞかる信濃のはてにきたりてよりこの方、春となく秋となくゆかしう想ひいづるは東の京に非ずして、げにとほき洛陽の面影なり、さても夏の夕よ、ことにも鴨の夕涼、優なる東山月を吐くのながめにます舊懐は、一とせ年上なる従姉に伴はれて、半月あまり、比叡山上テントの中に起臥しゝたのしき思ひ出にこそ。

其頃齢はまだ幼うして、もとより歴史を觀るの眼なく、往時を追想して涙を高室中堂あたりにそゝぐの優なし、まして天台宗の始祖傳教大師が、比叡の雲深きところにのぼりて、天とかたらひ、道心を練りすましたるをも知らざりき、口惜しうも愚なりしよ、おのれ其白雲足の下を走り、谷水頭の上より落ちきたるの風景に接しながら、聖が結びたる草の廬、聖が天とかたらひしわたりのいづこなるらんなどの念なく、まして意の如くならぬもの三つの中に加へ給ひし院がみこゝろを推しはかり奉るの心なく、げに我が胸はくらく我が學はあさかりき。

さても京大阪神戸より外國人男女をとはず家族を皆伴ひて、塵世の外超然としてこの山へ暑を避けぬ、されば黃色の髪ながら垂れて水縁なる流れにたゝずむ處女もあれば、雪にもまがふ衣まとひて靜かに樹間書をよむもあり、喃々かたりゆくは誰が家の子ぞ、下界苦熱と戰ひて食もとめつゝあるが中、涼風飄々としてテントゆらぐばかり、松風瑟々として秋おぼゆる彼等が生活、うらむらくは尊き歴史をもてる山空しく異國人の快樂に歸して、我が同胞徒らに夏とたゝかふことと、幼などゝろにもしみ〴〵と身にしみて涙さへこぼれいでぬ、富貴なるはオルガンピヤノさへ携へのぼりて朝な夕なの獨奏合奏、峯よりおつる溪曲と相かなひて、これをばなほも忘れ難し、歐米人の特有か、豐頰べにをさしたらんが如き薔薇色、顔形みにくからぬ少女等が、互にゆら〳〵と黃金の幾條風にみだして、リボンうつくしう、眞白なる手と手を取り交はし、歩みゆく活潑さ、わけてデビス博士が乙娘ヘレン、ラチット博士がひとり女メレー又獨逸人アーブレット氏が長女などは、紫式部が筆にならひて、翠源氏にかゝまほしき容姿、日の本の孃樣ちごわに遊して、袖ながきすきやめしたるよりも淸くたかく、我男ならねど「はつ草の若葉のうへを見つるより旅ねの袖ぞつゆもかはかぬ」などいはゞ、いやしき身のさまにて、やむごとなき光君がうたくりかへし、罪をとふ人もあるべし、止みなん〳〵、さてもうつくしかりし若草の行方よ、あれより十歳と幾春秋送りむかへし事なれば、かの少女等ねびまさりて、優しき人の妻になりたるもあるべく、又は愛らしきもの二人三人設けて、賢こきマドンナとなりたるもあるべし。

月の夜星の夜、美くしき唱歌の聲、山おろしにつきて聞えきたり、まして讃美のものゝねは、いと尊く瀧の音に響きあひて、清涼滴る如し。

かのテントには日本人もあまたありて、文學會音樂會などありといふ、又西洋人のみにて舞踏會するもあれば、狂言をしくみて若き男女に行はしむるもありときく、かくて彼等は漸う秋風たつ比ひ、すべての器具を取揃へ、おのが住居に歸るなり。

此の如く恣に自然に接し、全く變りたるテントライフに於ける快樂より、再び世上のつとめをなす、精神上の變化は大なる功を奏して勇ましう世の事に進むべくや。山上の風景絶美なるは、しめが搭にのぼりて、右手に京の町を見下ろし、左に青き琵琶湖を望む折なり、思なれや將門、かの佳絶なる處に坐して、などかおのが燃えたつ功名心を捨てざりけむ、嗚呼將門の眼には權力榮華のみ映りて、この自然の大觀はうつらざりしにや。

評、こゝぞといふ妙處もなけれど、筆は達者也。（桂月）

秀逸

秋の一日

米澤市明神堂町　馬場春子

一日は野邊にとおもふ折から、心あへる友にそゝのかされたる、いひしらずうれしくて、つとめて立ちいでぬ。吹く風ひやゝかに、水車の音朝霧の中よりさびしうひゞきいづるもいとをかしう、道芝の露そぼちつゝ、いつしか心あての野べにいたりぬ。千々の花、朝霧にぬれつゝいき〳〵しうさきあへる、えもいはずなん。

萩の花のねざめ顔おぼつかなげに露をこぼして凪きいつれば、細き葉末なやかなる糸すゝき花すゝきの、蘇芳にうす紫に穗にいで招くさま、さばかりのものやあるとめつるほど、一本のをみなへしうらめしげに足もとに立てり。うらむもむべ、おちける人もありけるをとことに過ぎがてに覺えぬ。白き胡蝶のほてらしげに花のあたりとびまはるもいとをかし。やがて朝霧またく消えてはるかなる木立のかたへより、白きわらやにや、けむめ見ゆるに、心にくき住居かなと、それとはなしに近けば、清き小川を隔て、あやしうをかしけなる小柴垣より桔梗苅萱女郎花などの亂れこぼれさき殘りたる、朝顔のしぼれたるが、三つ二つ交れることのことにゆかしく、梅こそなけれとさゝめくほど、まことに一人の翁の早くも見とめて、とめてかしとほゝえみたる、物よりことにうれしくて、やれたるそり橋打ちわたりて、心おきなく簀子によりぬ。前は艶なる野らにつゞき、後は

畳けき田の面につゞくにや、をかしきひな歌遠く聞ゆ。あたりのけはひゆゑづきてよしありけなる住居よと、打ちまもるに、新むしろに干したりける蕎麥の實の、そゞろに農家なりと數へたる、いとをかし。さるほどに、彼の翁むくつけき此所よりはいざ給へと、西なる丘に案内しぬ。木立物ふりたる樫柏さては梯などの廣ごれる、自らなる様、いとゆかし。そが下には池の心ゆたかに小さきいをの遊べることのすが／＼しく、黄ばみたる汀の草に打ちよりて、うれしくも飯たうべなどするほど、若き男子の簑笠着たるにつゞきて、手拭をかしうかぶりたる女の、刈穂少し肩にせしが、共に此住居に入りぬ。彼の翁何をかうれしげに語るめりしが、やがて出で行きぬ。さるほどにかの翁せちに吾らをよび、茶入れなどして、ほこらしげに、此稲見給へ、けふ若き者わさ田かりに行きけるが、此翁に見せばやとてやさしき婦の持ち來しものに侍るは、去年よりは二三寸も長う侍るよ。あゝたふときは田の業よ。此翁も若う侍りし頃は、なか／＼に此業にはつとめしを、よる年浪に堪へ難く、かくはひたやごもりにこもりつゝ、此やれ小屋の番人して侍ると、ゑまひつゝ、暮るればまた手造の酒若きものとたうぶることそこよなき樂に侍れど、大きやかなる樽なんさしてからく＼と打ち笑ふを見るだにうれしく覺えて、打ちすさめば、いよゝふりはへかたりいでぬ。さるほどに、虫の聲に遠き野べより聞えそめて、早くもくれかゝりぬ。さらばとて、ねもごろに別を告けて去りけるも、いとゞ名殘をしう、ふり返れば、彼の翁亦名殘をしげに簀子に立てり。やがて元の野べに至れば、虫の音いとゞあはれ深く、夕霧の早やおもげなる花の色一入わかず覺えつ。をしき一枝手折りてうれしかりしけふの事くり返しつゝ、いつしか家ぢをたとれば、うるはしきふしまちの月、彼の野べの方よりすみいでぬあはれ、彼の翁、手造の酒にいかに此月をすさむらむか。

評、擬古文として、先可成りよく擬れり。結末面白し（桂月）

秀逸

捨子

筑前國　時枝いわみ

しろかねもこがねの玉も何せんにとゝへるも、さることにて、世の中に親の子を思ふ、おもひにまさるものあらんや。しかはあれとも不幸にして世に宿るに家なく、着るに衣なく、食ふに食物なききはゝ、共に飢えく

るしむるに忍びずとて、やむことなく捨つる事あり。之をふと見たらん程は、愛も情もなき恐しの鬼の心かとあやしまるれど、よく其人の心になりて、考ふれば、いかばかりかなしかりけん。よしや我は飢えてたふれなん、にも、せめていとかはゆき此の子を貢き家の軒端にすて情ある人のすくひを得て世にながらへさせんと、おもへばなるべし。さればかく捨つるまでの、其心はいかにありけん、捨てゝのちも幾度かいだきなげきけん、かへりゆく道すがらも幾度かかへりみたりけん、いかに名殘やつきざりけん、いかに子ゆゑの闇路にまよふらんなど、思へばいよ〳〵あはれなるに、さりともしらで捨てられし子はおのが手を乳房にかへて口にふくみつゝ見る人たれかれのわかちなく母とたのみて打ゑめる樣かなしさいとほしさも一しほにて朝夕乳母よ、もりよ、とかしづかるゝ我子の上を思ふにも、立ちまさりて、あはれまるゝはおのづから人の情なりや。

評、言ふ所、平凡なれども、自から眞情の筆端に動くものあるを取るべし。（桂月）

秀逸

可憐の少女

うらぶれ少女

姫垣めぐらしたるうちに、ゆかしき琴の音の洩れ聞ゆるに、思はずも足をとゞめてうかゞふとしもなう打ちのぞきぬ。つぼの程もさまで廣からねど、いと清げに水などうてり。かなたのやり水のわたり萩きゝやうなど咲きみだれたるを、もちの月のくまなくてりわたりたる、かげに見るからゆかし。軒には風りんのすゞしげなるなど、ちり深き都のうちとも思はれず。折柄またもかなづるつま音につれて、いともえんに、をじかなく此山里をうたひそめしは、そゞろにさが野の奥の忍ばれて、想夫戀の樂の月のいよすみ渡るまで調べ妙に聞えけり。

芝生に竹えん出してすゞめる人やありけん、折々蚊やる煙さとうちわの音に、琴の音はやみぬ。「母上よ、今宵の月を如何に見たまふ。今日こそもちの月にはべれ。月のみは去年にかはらねど、かはり果てしは妾等が身に侍る。去年の今宵隈なき月の下に琴取り出しも無き父上の御心なぐさめんと侍り。今はたより少なき身

ともなり侍りけるよ。世は只黄金にのみ眼くらみ、情知らぬ者のみとなり侍りぬ。父上の失せたまひし後、二三月が程はみうちにもあらぬものゝ、なにくれと心をやりもし給ひしものゝ、今は蓬生の露わけて問ふ人もはべらぬを、月のみはかはらでかくさし入るを、こよなう嬉しと思ひはべり。げにたのみがたきは、人心にこそ」と云ひも終らぬに、よゝと泣きふしぬ。「やよ、さななげきそ。なげけばとて、狂へばとて、決してもとにかへることなし。此濁惡の世に交らんより自然を友とめで、身を神のなしのまに〱にまかせんには、いつかはあはれと見たまひて、うかぶせもありなまし。あなはかなの世やと云ひつゝも、空高くすめる月を見あげし目には、いつしか露の玉ぞやどりける。

評、想も、文も、稚氣あれど、一種の情景、見るべし　（桂月）

秀逸

里の秋

山口縣吉敷郡上宇野令村十八番地三舎内　小松芳子

秋は早や深くなり行きて、庭の燈籠に紅蔦這ひまとひ茂りに繁りし白萩は、谷より來る小さき流をかくしぬ。裏の山路は、花薄に道をせばめられ、垣根の烏瓜も色づきぬ。遠近に響く鳴子の音、虫の聲、あはれは日にまし増りゆく。

朝まだき獨り山の麓をさまよふ。秋草いたく茂りて、千草の花咲き亂れぬ。心なき草も物を思ふか、葉末における白露の玉、いと重げなり。野邊の草木だに優しき情はありけりな。新しき朝日の光、後の山の上より落ちかゝれば、見渡すかぎり、燦めき渡りて、いと美しきに、憎くや秋風吹きすさみて、はら〱とはかなくも、貫きとめぬ玉とこぼれ散りぬ。

碧空晴れて拭ふが如き小春の朝、樓上より見渡せば、黄金色なす稻の穂、雪の如き蕎麥の花、あるは熟したる柿などの紅き珠を綴りたるに、百舌、繞眼兒など鳴き渡りて、好景いふべからず。農家は繁忙の極にて、朝まだきより夜更くる迄も、をちこちに稻扱歌ぞ聞ゆる。見渡せば、田の畔の烏桕の、夜來の露に染められて紅葉したるが、花の盛にもまして美しく、燦然夕日に照り添ひぬ。

道のべに咲き殘りたる野菊の花を慕ひて、力なげに飛びめぐる小さき蝶一つ、いと哀なり。孫を連れて徐かに社寺めぐりする老人も數多し。

賤の伏屋の脊戸の外に、黄菊白菊なほ紅の色も打雜りて、麗はしく咲きたるに、幼な子の歩み寄り、何の頑是なく、兩の手にむしりとりて、打捨つるなり、無心の小兒も美しとや思ひけむ、花の心やいかに。

柴苅りて山より歸りきし賤の女の、夫や子を慰めんとてか、燃ゆるばかりの紅葉二枝三枝折り添へてけり。優しき心のこれも錦か。

白露既に降りて月あかき夜、出でゝ欄に倚れば、秋氣天に滿ちて、爽快限りなく、孤雁山の邊を過ぎる折から、軍營に吹きならす鐵笛一聲、凜然滿城に響き渡りて清し。

評、一寸氣の利きたる處、見るべし。　(桂月)

秀逸

友に別れて

越後國長岡　前崎照

なべて別れとしいへば、日頃親しからぬ人だに惜まるゝを、まして月にも花にもへだてざりし君に。遠く別るゝ事の悲さよ。つゝゐ筒の幼きよりの友といふにはあらねど、幾歳か親う交はりかはして、春は朝まだきよりかすみがくれににほふ花のちりにそまぬ姿のけたかう床しなどいひて共にめではやし、夏は河風に袂ふかせて行く水にたへかたかりしひるの暑さを流しやり、はたの人の物がなしといふめる秋の夕べも、共になくさむ妻琴の調べさへゆく月かけをながめては樂み、冬の日は香爐峯の古事など思ひ出でられ、日頃なれし庭の雪けしきもなんとなうなつかしなどいひあへりし、或は歌に、文に、はた活花なと、そがよしあし共にあげつらひし無二の友君と、今は雲井はるかに立別れたる事のうたてさよ。あはれ此すむ月かけを君は今いづ地にながめ給ふならん。越路の里に君をしたへる友のあるを思ひいでゝ、君にも同じ思ひに沈ませ給ふならん。共にながめし花も、月も、雪も、はた涼しと喜ひし河風も、又こん年にも床しく匂ひ淸くかゞやき玉と降りしきはた涼しく吹き通ふ如く、互に此世にあらん限は、又いつかなつかしき君に逢ふ折りもあらんと、そを樂みに、今の心のやるかたなさをあきらめんとはすれど、あきらめかたきは凡人の常にやあらん。

あゝなつかし君の姿は、ふたゝひ見るよしもなし。せめてはうつしゑなりとも、我書齋の床にかけて共に住まばやと思ひ、兼て取りかはせ置きしを、手箱の内より

とりいで床にかけんとする折しも、降りいでぬ、一村雨。さらぬだにたびは物憂きが常なるを、よしや村雨は降りしきるとも、我が思ふ君の袖はぬらさてよと、心に念じつゝかけ終り、君のやさしく氣高きうつしゑを見つゝ、あれは又むら／＼と胸にうかぶは、ありし日の君が事ども、夕月のかけを横ぎりてゆく雁にも、我がせつなる心や通ひけん、あはれ同情をよする一聲のこして、君のあとをしたひて遠く東のかたへとぞびさりぬ。

評、たゞひと通り、友を懷ぶの情をのべたるまで也。（桂月）

賞外佳作

秋の夜

みどり

秋の上風そよ／＼と身にしみ渡る秋の夜はさらでもものの哀れなるに千草をゆする虫のこゑあるは賤の女が夜を長かれといのりつゝうつ砧の音などいづれか思ひの種ならぬはなし今宵は友のとひくべき心あてもあられぱせんなしいれて秋の夜長をかこたんよりはと柴戸あくれば月のかげいと明かきにぞおりたちて小道たどれはいつしか木だちしげれる林のうちに來りぬふと仰げば木の間よりかつ／＼もれくる月の光のうるはしさ例へん方なし葉ごしの月も中々風情ありなど思ひつゝなほもあゆめば何處よりともなく水音のきこゆるにかゝる處に川ありもと知らざりしよあないぶかしと耳かたむくればまさしく水の音ようれしくて生ひ繁げれる草をかきわけてそなたざまにしたひゆけば身は清き小川の前に來りぬ月は此水の上にもありて流るゝにつれゆら／＼とゆらめきつゝしろがねの玉をこきちらすかと思ふまでにこぼれかゝるさまいとうつくしせん／＼たる流れの音はむせぶが如くはたうらむがごとくさながら深山のおくの心地せられてなんあはれつま戀ふ鹿の一と聲もがなと求むれども山里ならればせんすべもなし折しも笛の音のかすかにきこえたる又なくあはれなりかゝる處にいほり結びて住まゝしかばなど思ひてはさすがさりがたくつゐ居たるに門田にや落ちけんまぢかくきこえし雁の音におどろきてふり仰げば夜やふけにけん月かげいたくかたむきて小笹をわたる風もたえたり嫋々たる笛の音は細く長く愁ふるがごとく夜のさみしさをやぶりてひゞき來ぬあはれいかなるみやびの人のすさびにかいともゆかしきふらべにこそ

（評）すら／＼としてさゝはるところなしさながら春の海に帆掛船のゆくがごとし

蟻

久留米　有馬かつら

今日一日だけ守りせよとのことに、いと閉じ果てゝあそび居たりしに、いはけなき弟のはし近うゐざり出でて、身うごきもせずひたすらに物見つめたるは何ならん。怪しと近よりて見ぬれば、敷居の上に捨てられたる菓子のはしくれを、あまたの蟻の忙しげに運び行くにてありき。あはれかなしきは此虫にこそ。藤棚びく春の頃ほひ、日の暮るゝも知らで、胡蝶などの花の香追ひ歩く程、あるは暑さ烈しき夏の日、蟬は高木の頂きに歌謡し暮す程。たゞ一日だに怠る事もなう運びもて行くは、即

彼等が覆なりけり。そは己れのみ飽くまで腹を肥さん爲ならで、同胞と共に冬ごもり春さり來るまで、飢ゑを凌がんとて、人ならば汗もあゆ許りの營みぞかし。それのみならで、此虫は錙銖をもよく知れるとかや、あなけなげなる虫の振舞や。己が力にて貯ふる事はせで、身にはおごりて、富まばやな、貧しくならぬ山もがななど願ふ人の多かるを、此虫の聞きなば人の世を山師の國とや云ふらむなど、はかなき事思へる程に、菓子屑ははや穴のほとりまで、運ばれてありき。

あな弟は何所にいさり行きけん。

（評）文のすがたうるはしく比喩またおもしろし

萩の詞

岡山　加藤經子

若むらさきに、さきいでたる野邊の萩が枝も、たわゝにおきわたしたる白つゆの玉かとばかり、みたれあひたるえもいはれずなん、いかでまかせんものなりせば、秋はなしかに身をかへて、この花のもとにおきふしせまほしうなん。

紅葉見

まとか

秋もいよ〳〵深くなり行きて、庭の面の桐の葉も、いつしか落ち散りて、戀うつ風も身にしむ折柄、ひとり文机のもとによりて文よみ居たるに門の戸おわたゞしげに打ちたゝくは、同じ文の林をわけ入る友垣なりけり。相みるより、今日は、紅葉狩にと云ふに取る物も取りあへず、いそぎ出で行きぬ。道すがら枯れがちなる千草の中を分け行けば、朝ぎりのはれ行くまゝに、野ぎくにやあらん、ところ〳〵に咲き亂れたるえもいはれ眺めなり、わきて尾花の人待ち顏に打ちまねくもなつかしく、歸へりには一枝手折りて家づとにせんなど語ふほどに、いつしかほどとほからぬ山なればたどりつきぬ。　いとうれしくて奥ふかくたどり入るに、靜けさは物にたとへんやうもなく、遠山に時雨やしつらんふく北風はいと身にしみて、あはれにおのづから暮れ行く秋のけしき著し。かゝるところに一生を送りたらんにはいかになど語ふもたのし、尙たどり行くほどにいつしか山のいたゞきにいたりぬ。足のつかれを休めんとかたへの石に腰うちかけあたり見渡せば山姫の手ずさびに織りなせる紅葉は峰にもふもとにも照り匂ひてまば行く春の花もえ及ばぬさまいとめでたし水にうつりしものは趣深くあれど常盤木に交りたるはまたなくうるはしうこそあかぬながめにあたりさまよふほとに遠山にありし雲いつしか來りてあたりに暗くなりぬと思ふ間にあはれにも雨はふり出でぬいと口惜しくて名殘はつきせれどかへり路にといそぎぬ家につきし時は雨いよ〳〵はげしく風さへいたく吹き添はりぬ。あはれ。道の邊の千草も手折らで歸へりぬることの口惜しさよ

わかれ

名古屋　龜山音羽子

あきも飽かれもせぬ其が中を、無理にも分つは生木を裂くとやら、げにもさる言の葉なりける。

己れ學びの林にわけ入りてより、そこは彼となく迦りつる道すがら、ゆくも一人の友どちを得たりき。名は顯子の君となん申して、いと聡敏なる優しき御方にて居ましき。甫めのほどは互に探る望みの奥なんと語ら

ひつゝ、雨の朝、風の夕一と日とて欠くる事もなく、樂しき日を迎へては送り、送りては迎ふる事のいと繁うなりぬ。

されば妾の照子の君を慕ひまゐらするにも、彼の君が妾を愛で給はるも日一日に增し來り、胸の思ひの結ぼれ堅たふして解けなむこそ、いよゝ契りの深くなりて姉妹のごと打ち感じらるゝも、うれしき極みなれ。されど此の世、同じ年ばへのはらから多くあらむかなれど、照子の君と妾とのごとくいと睦まじき思ひは、ほとむど他に望むべうもあらざりき。かゝるほどに互の心は二つにして二つにあらず、一つの心を彼の君と半はづゝ抱ける心持のして、學びの園の語らひは言はずもあれ、越し方行末など示し合せて夜を更かしゝことの數、多かりき。

さはあれ花には嵐、月に雲、一寸先は闇の世の儚なきは人の身の上ぞかし。そは初めて照子の君を思ひまゐらせてよりは、嬉はしさのいやましにつのり來て果ては眞の同胞も及はぬ思ひに日を送りつゝありては仇よ彼の君は、生者必滅、會者常離のならはしに包まれてはるか西の國なる故郷へ、急かに旅立ち給ふとて。電報を手に持ちたるまゝ、別れの言葉交はさんとて妾が宿なる祖母の宅へ尋れ來ませるなりき。妾はあまり突然なるまゝに更々合天行かず、親しき仲とて其電文を開き見れば、未た一語の答もせざる内に、已れの眼には早や熱く雫をか宿して物も言はず、苦しき胸にもゆる熱き涙を袖に受けつゝ彼の君を見まゐらすれば、既にすでに悲しき涙は洋燈の光に輝きて一入怨めしくも思はれて、滿つれば欠くる言の葉の森々と身にこたゆるもわりなしや。

言はざる二つの口、聞かざる四つの耳、今は用もなさずして、早や眼と眼に無限の思ひをば交はしたりき。噫！只片假名十五文字の短文が、如何にして二人の胸に悲しき種を蒔きたりしぞ。思ひを操返せば返すほど苦しき、切なき、胸の燃ふは炎々としていつ消ゆべきとも思はれず。今更のごと儚なきは人の身の上の常ぞかし。

彼の君は僅かの手荷物の他は、通運に托して、其夜直ちに旅立ち給へり。氣の抜けたらむごとき力なき體を汽車の二等室に乘せ給ひぬ。「それでは御氣嫌やう」の言葉も低ふして跡はハンカチーフを以て顔を掩ふのみ、ほとんど他の人の前とも知らず悲しみぬ。

情なき汽車は名残の笛一と聲を跡に、戀しき彼の君を西の國へ運ばむとすなる、哀れ明日よりは誰を友として日を送らんか、身自らにして前日の心あらずなりぬ。

評　あまりに陳套なる句を用ひたるは宜しからす

無情の春

新潟　小柳榮子

露は中天にたなびいて名も知れぬ澤山の花迄も日影うらゝかに咲き匂ひ、あたりは蝶々の色香に迷ひ百千鳥の花間に、よろこびうたう聲四方に聞えて、たゞ何にとなうのどけき時となりぬ人の心も浮きたつものから、けふは某所の櫻あすは某所の桃と三々五々隊をなしてのどけき春をさぐらんと、いで行く人々引きもきらす

同じ、のどかなる春とはいへ見る人の心によりて物變はり行くこそ悲しけれ、うるはしき花の盛りも荒き雨にやつれては風に散り月は雲に、なげきては西山に隱れし心地に一入學舍の窓に傾く月に身をよせて人知れず物思ひに沈みつゝあるはわらはの敬愛すべき父君の病の床にあればなるべし

新しき春迎ふとも何にかせん
　世をうしといふ年と思へば

かれてはかりそめならぬ御病ときくものから御齢は左程の老年にも、あらせ玉はねば、やがての内にはと一とすぢに思ひ入りてありき、さはいへ病としいへばいつ御かはりのなきことやはあるいと〳〵心もとなく學びの道も、はかどらず日々の學びの、おこたり勝ちなるぞ愚かなる

いにし、むつき十日あまり五日の頃新津町附近の秋葉とよべる山へ行軍がてらに兎狩りせんとて二百有餘名のわらわがふりしきる雪をけたてゝ旅立ちしまたの日山より降りし折柄古里の知り人ふたりにあひぬ、さらでだに氣にかゝるは父君の病今頃は御容體の如何になり給ひしか、さりとも少しは輕くなり給ひしかいや〳〵いと〳〵重き御病なれば俄かに療ふ給ふべき御病ならず昨日今日神の御祈りの、しるしにか僅かに治ぶ心地よき夢も忽ち破られて、いやに増す憂の數々其上古里人のてい旅仕度にて餘程いそぎの要用あるらしき容子なれば胸とゞろき身をのゝきならは古里人の、よそごとなれかしと祈るも甲斐なし、こは如何に父君の、つれなき嵐に誘はれてあしたの露と消え給ひしとの便なりけり、夢か、うつゝかと疑はれしばしが程はあまりの不意のたよりに、おどろかされて涙も出でず唯父君の、いまはの御きはの、ことゞも思ひ續けて、あとさき失ひもがきなせしが竹馬の友に促されて汽車にて沼垂に着きしは日は早や西に傾きぬ車夫を雇ひて其夜の十二時過ぎに家に驅け着けしが無情の風に送る線香のかほり鼻をつきて此の世を隔てる逆屏風に便なき樒の一本立て死骸を保護れる衆皆目を泣きはらして居たりわきて母君は涙にむせびて物をもえいひ給はず母君なぐさめんとて、もろともに、なき袖をさへしぼりぬ、かくても果てしのなければとて某日の夕方野邊の送りもすましぬ

すこやかに生れし身をもたのまれじ

今とも知れぬ命と思へば

思へば悲しや、あめつちに、ふたりともなき父君の如何に浮世の習ひとて朝夕孜々と、いそしみて、わざ、なし果たして其あかつきには君のため將た父君のため、盡さんものをと堅く誓ひてありつるものを如何なればとて父君の、よみぢへと心強くも、おもむかれしものぞ、あゝいと〳〵ふかき御惠みの、ひとはしだにも報いまつらぬ其さきに、あはれ一片の煙と消え果てゝ唯おとなうものは松吹く風のみとはなりぬ實にや浮世は塞翁が馬測み難きは浮世ぞかし禍は薄紙一重隔てゝ福の裏に住ひ若は、きびすをつぎて樂の後に隨ふ世の巷にある人は此のことを解くべきにあられど秋に遭へる人は自ら悟りぬべし

鳴呼父君に別れてより文讀むことも書くこともいとゞうき身に、とざされて折り〳〵出る父君の文讀むたびに血の涙にかきくれてなき面影も、あり〳〵、と、うかびて物いひ給ふべき心地ぞするなり、あゝ孝盡さんと思へどもちゝはゝ在さずと古人のいひし言の葉も今は吾が身にせまり來て、いましゝ時の不孝をば思ひ出してはわぶるのみ唯つゝしみて常の誡を守らんと思ひ出しては嘆きの種あゝかくと知りなば身をここにしても報ゆべきを今は甲斐なき血の涙嘆き煩ふぞうたてなれ

玉の緒の歸らぬ旅と知りながら
なほます時の、こゝちこそすれ

鳴呼のどかなる南風の常に變はりて、すさまじく窓へ吹き込む風の音四方に聞ゆる百鳥の、のゝしる聲々うらめしく目に影するもの耳に聞ゆるもの何にひとつ憂の種と、ならざるはなしあゝ飽迄深き無情なる中の春ぞかしさらでだに憂ひに沈む母君の亡き父君の形見とて、めで養ひし幼子もまたもや同じ此風に誘はれてなき父君のあとを、慕ひゆきぬ、あゝ測み難きは浮世なりけりあゝ果かなきものは此の浮世あはひでは天を怨

み伏しては地をかこち春は来れども花咲かず世の黒雲に、とざゝれていよく／＼深き血の涙嘆き頃ふぞあはれなり

さらでだに悲しきものを折り／＼反古より出るたらちねの文

師の君にわかれまつることば

芝　服部まつよ

まらでだに秋のくれの木の葉ちるさびしきころを師の君にわかれなむとするおのれらが心ぼそさよおしはからせたまへや思へばおのれらのまだいわけなくて學びのそのに分け入りてより折にふれ事につけてみたころをなやませまゐらせしこともいかばかりなりけむあはれつゆのみなさけにむくいまつらぬをはやくも師の君にはみそらに雁がれをのこしていや遠き越路へとものし給はむとす花のころを待たせたまはぬ雁のなげきもおもへどおのれらがかなしさくちをしさはかの雲井にむせぶこゑによそへていとどしう堪へがたきここちしてなむそもひと日だにまみえまつらぬ折もなかりしにこれよりはふつになるがみまゐらする事もかなはずなりなむかせめてはおはしまさむかなたの空をながめてあさゆふの心やりとせばやおもふるしてここにいたりいかにおのれが胸のくるしきかをおぼしやらせたまえかしあはれとほくわかれまゐらせてはいつかまたまみえらるべき都はいまだ霜のおきそめたるほどにすぎじを越の國のはや露いたう深かるべきをしのびて一きは御身をいたはらせ給へとれぎまつるにこそあはれあはれざとどめまゐらせがたき今日の御わかれのかなしさや

暑中休暇（田舍の家庭）

越後　さかえ子

われ／＼二百有餘名の青年が寄宿舍生活の有樣の趣味あり且樂みの、ある事はまたとあるまいと思ふ起床の喇叭が鳴り響くと、みながあたゝかく結べる夢を破りて寢臺の上の毛布の中から拔け出でゝ服を着けるのである第二の喇叭がなると人員檢査をするのであるが、中に知らずに睡眠してゐて番號はれ起きて服を着ける容子が、どの位忙はしいものか知れない暫く經つと食事の喇叭が鳴る百間もある長き廊下を過きて食堂に入るのであるが能くも揃ふたものだ、其れから六時間の課業を終はりて三時間の外出を許されて各の好む所へ行きて其日のうつを、はらすのである外出せないものはろんてんすをやるもあれば機械体操をやるもある又擊劍もやるもある午後六時五分になると夕食である、それから二時間の自習時間がありて其日に、をそはつた、さらいや明日の調べなどをして九時になると床に就きて眠るのである斯樣に勉强する時間と遊ぶ時間と休む時間が、ちやんと定つてゐて嚴重なる規律の下に働きて居るものだから、どの位寄宿舍生徒の樂しいか知れない、けれとも、あすから暑中休假になると云ふ今日の、よろこびはまた、たとへて見樣がない一年の長き間父母の、ひざしたを離れて苦學して居るもの故に歸鄕してふた親よりの、やさしい言葉をかけられるのが、どの位よろこばしいか知れない其日の夕方より吾れかしこげに荷物を取り片附け、さすが四十日餘別れの名殘とて其夜は眠らずに互に世間話などをして別れるのであるが早や歸鄕してから半月餘となつた、いでや徒然の餘り筆すさみに田舍の家庭を描き出して見樣と思ふ、わらはの古里は蒲原の平野の內で越後の國の平野といつたら蒲原を指してよき位だ斯樣に廣き平野であるから勿論

大概は農業である、わらはの家は其内の農業で其田舍作りの閑靜の住居は日本海へは一里半東南は周圍三里の福島潟がある、それで穀類魚類は云ふ迄もなく蓮根〔ジヨンサイヒシ〕等四季折〳〵のもの澤山取れて何にひとつ不足のものはない先つ自分の考へではよき所と思ふ、けれども教育は割合に進んで居らないが家富みて禮節を知るとかにて家が豐なれば自然と家內も親睦して樂しく一生を暮すとが出來るから家庭は教育不進歩の割合に善良になりて居る故に只今の處では身代のよき處が家庭もよくなつて居る、それで大抵家庭のよしあしを三販に別つ事が出來る地價の二三百圓位より一千圓位迄は中とし以下は下とし以上は上である其家庭の內で何處も同じ事であるが家庭中の重なるものは女即ち人の母たるものであるから其れに就て少しく述べ樣と思ふ先つ只今の子女なれば夜半の寢覺に乳をと手まさぐりに寄りそふ女童も六七歲より雨の日は傘雪の日は深踏と家人に世話燒かせての學校通も高等小學に入りてより編物ある は裁縫とやう〳〵と、おとなびて髮の飾りから帶の結び樣に至る迄誰教ゆるとなく覺えて他家へ、かしずくものたから先つ手紙のやり取りや編物裁縫位は出來るものだから、よろしいが今の人の母となりて居る人は下等の家庭は申す迄もなく中上の家庭も大概は文字などは知らない偶々知つて居る人がありても其頃の學校は今の樣ではなく尋常小學などは昔の寺小屋の樣で其れも女子は學校へ、やらない位に、きめて居る偶々やるものがあつても高等小學などはあつた處が都會ばかりてあるから田舍には思ひもよらない、だから讀めるものはいろは位のものだ故に今の人の母たるものは人は教育によりて如何樣にもなるもので學校教育は家庭教育と連絡をしなければならぬと云ふ樣の事は夢にも知らない何して家庭が圓滿に行く筈はない學校は時間に限があるし家庭の時間は限りはないから如何なる良教師の教育も良結果を得る事が出來ぬ、だから廣き蒲原には自らよき人物が不足である日本の國といはず遠く唐國といはず西洋といはず何處の歷史に照して見ても聖人賢人の母は大抵は賢母である故に只今では女子教育の必要は喜々して、やまない吾か新潟縣では高等女學校とか女子工藝學校とか裁縫學校とか女子に關する學校が澤山出來て來たのは吾曹の尤も、よろこぶ所である今後は段々よき人物の出來て來るとは疑を入れない事であるだうしても家の豐の爲めの親睦とかの自然の教育は賴むにたらない、從て學校教育が良結果を得ない故に吾が輩の熱望する事は女子教育の必要は云ふ迄もなき事だから女子諸君の双肩は實に重大の責任あるもの故に此の暑中休暇に際し身體を強壯にし氣力か養成し休暇後は一層の奮發を以て朝夕孜々とはげゝみて邦家の爲め後來社會にたちて良賢母たらん事を願ふのでおります

夕べの思ひ

うらぶれ少女

きのふまで、てツて〳〵人の油汗をもしぼり出すやうなあつさも今日の雨に降り流したかのやうにすゞしくなつた、庭つくりのかげも見えぬ松の葉末にあやふくとまる水玉のえたえで落ちたるなど雨の夕雨の朝にあらでは。

青葉がくれにちら〳〵とゆかたの袖かろげに、ふみしめたる庭下駄のあと木影をぬうて畑に出た、降りかゝつた雨はふいと空を見上げた、少女のおもてに惜しげもなくおちた、アゝと云ひてやはり以前のまゝに立つて居る畑の方から年老ひしものゝ急ぎ足に來りて「あなたそこに？」とくかへり玉へ雨も降り、出しには待らすや母上もまちたまふなるに」と云へど知るや知らすや。

云ひのこして立ちさりしかのこのあとをつくづく見送りて「あはれ年老ひしものよなどで汚れし世にながうへし何を樂しみにあくる日もあくる日も、すき取り、くわにぎりて親を養ふか子が育つるにかあはれいつの世に此にごりはすみ渡るらん我こそかゝる世に生れ來りしことの口惜しさよ今はのぞみも絶え只尊き神の下に樂しき日を送るを願ふのみ、にごりえによひごと宵く神々しき光はなてる明星をつなでにつなぎとめし身の今宵は雨に奇しき光も雲のあなたにのみ」とひとりごちて雨にぬるゝもいとはで何をか見つめし目には涙がみちてかゞやいていた。

秋草

牛込　林喜代子

あはれ秋の草はかりあはれにやさしきものはあらし、まかきのもとに、白菊の一もと二もとさけるなと、いと／＼うあはれふかし。あるは、垣根のあだりに、朝顔の露ふくみて、やかてしほまん露の命とも志らでゝ時えかほにさけろ、かばかりはかなき花はあちしかね、さはれ、栄の帝は「朝顔は朝な／＼にさきかへてさかり久しき花にそありける」と、詠されたるそ、なか／＼に御心ふかくなむ尊き。野邊などそゝろありきするに、こなたまれくあるものそ何かと見やれば、たけ高きすゝきなりけり、いとをかしければ、近うよりて見るに、そこには美しき女郎花萩など、さきみたれたり、思へば此すゝきの、この美しき花をも、野邊ゆく人に見さむとてや、かくまれくらむと思へば、いとをかしうも又あはれにゆかしくて、手折りゆかまほしうも手折られすなむ。

首夏

大分　藤崎しづ子

いまははや暮れにし春の惜しさも忘られておかしきものは夏のはじめの景色になん遠近の木々の梢は青やかに茂りあひ垣の卯の花はさなから雪かとあやままれ何となう心すかすかしく見る目涼しきなかめなと數へあくればおさ／＼春にも劣るまあくまあて夕つかたゆみはり月のほのめきいでたるなどとりどりにえもいはれず思ふは實にうつろひやすき心ならんかし

行き暮れし旅

下谷　瀧川きん子

同じ室に、同じ机に、同じ書を讀み、志さへ同じかりし友の、卒業以來堺をへだて、、逢はざること茲に一年、書信は月に一二回、たゆることなく往復すれど、まのあたり逢ひぬば如何に樂しからん、暇あらば來たまへと、互に、いひやるのみ、共に定まりたる業ある身の、何時はたすべくもあられば、おのれ、來る土曜日に訪はんとて、同じ週の木曜日に端書出したり。

土曜となりぬ内、空は晴れたり、先うれし、業をへてより行かんあらましなれば、朝のほどより衣など更めて、學校に出でぬ。何處にか物したまふ、御髮の美しく出來たることよ、帶の色の優なることよ、など、口々に持囃さるゝも、さすがにあしからず。けふは、親しき友がり行かんと思ひて、と、答ふれば、あな、彼の君にか、常に美しき文送たりまふ、さは如何許りたのしかるべき、羨し、積る御物語したまへ、歸りたま

ひて後に、其の時の樣きかんと、まつべしなどいふ。

友の家は曾根といふ處なれど、學事の爲に門司に出で居れば、おのれは、午後三時發、門司行の列車に乘らんと、少しく校を早く辭して、急ぐ道すがら、日頃親しき郵便配達にあひぬ、彼はほゝゑみて「孃樣あなたの」といひつゝ、待設せぬ端書を渡しぬ、見れば木曜に出したる端書なり。我行くべしといひやりたるかの文なり。如何にしてとあらたむれば、理なりけり。宛名の番地を取違へ居たり。如何にせん、我が行くことを友は知らじ、萬一、曾根なる家に歸りはせざるか。止みなんか。斯迄に思ひ立ちたる事、且は、人々にも竊かに語りたる事の、特、やう／＼に父母の許をも得て來つゝ、今更に引き返さんは如何にしても口惜しく、さりとて知らぬ門司に、友もあらぬ時は何とせん、曾根の家とてもたゞ曾根とばかり、處はいとひろしといふに、など、思ひ亂るゝ折柄、ドッ／＼と音して進み來るより列車の音、響くと共に、油然として一種の僥倖心は湧きぬ、今日、友の必ず歸るべしとも定まりたるにあらず、殘りてあらんも知れじ、よし行かんと思ひ定めては足もかろく、恰も來りたる列車にのらんとひしめく人の中を分けて、やう／＼門司行の列車にのりぬ。

見ゆる外面には、農夫のしきりに田の面に働けるあり、秋未だ淺ければ、万頃の青波風に從つて搖めく中に、草採るにやあらん。右左の車窓より見ゆる山々は、黃葉して早三分通は紅に染めかへたるもあり。何時見てもあくことなきは此の眺めなり。行橋を過ぎ苅田に着き、曾根にと進みし時よ、あな口惜し、列車は全力を以て進む反對の方向に、彼の友は、我が訪ひ行かんとせる友は、徐々として縣道を行きつゝありき。彼は前の列車にて歸りたるなり。今、おのれが此の車中にあるを知らぬはさる事ながら、あはれ、聲のとゞかばかくと告げてんを、あはれ、人なくばよびてんものをと、思へどせんなし。彼はたゞ、車の音するより、何心もなげに此方を見る、おのれは心も心ならず、せめて、友の我面をだに見よかしと、念ずるひまに、車は速力を減じて曾根驛に着きぬ。何とせん、友はすでに門司にあらず、さりさて曾根なりといふのみにて、たしかに、かれの家を尋ねんよしもなし、あゝ、惡しきことしてけり、今日は思ひ止まるべかりしにと、悔ゆるもいかで及ばん。よし、如何にもなれと車を降りぬ仰ぎ。見れば短かき秋の日影、はや、傾きたり。何處をさして行くべきか、途方にくれしとは蓋しかゝる時をやいふならんと、思ひつ、かれての物語りに、停車場を去ること、約一里計りと聞き居たれば、如何に狹き田舍とて、こゝらの人の其の家知らん樣もなし、何とせんと惑ひしも、窮すれば又さすがに智慧も出づるなりけり。驛舍の傍に居りし子守娘とらへて、此の前の列車を降りたる、われ程の女あらずやといへば、さすがに田舍なりけり、降客の少なきと、少しにても都會めきたる風せる女は、かれらの記憶に強く印象すると見えて、かれは、おのれの頭より足の先迄を仔細に觀察しつゝ「アア其ノ人ナ此ノ鐵道路ナ眞直ニイキヨリマシタ」と答ふ、これ丈にて先も力を得て、禮もそこそこに行かんとするに、我れの慌てたる樣は、幾分か彼れの同情を惹きしと見え「急ギナサツタラ追ヒツクセ」といふ。愈々力を得て、いはれし方にとひたすら急ぐ、行き／＼て小さき村に出でぬ、されど友の影は見えず。行きて小さき森に入りぬ、されど友のかげはあらず。森も出でぬ、河もこえぬ、村も過ぎぬ、今はたのみし綱もきれたり、如何にせん、仰げば西に傾むきし日影、すでに山に落ちて、滿目の田畑たゞ纔かに暮に向ふ。農夫牛を追ひて家路に急ぐ影も、遠は薄きもやに包まるゝ迄となりたり。路傍に茶店のありたるを幸ひに、友の容貌を語り、且つ、其の父の名をつひて家の所在をとふ。媼曰く、眞直に此の國道を行き、川に

我らば右折して、後又左折せよと、教へられしまゝに、平坦なる道を行く、兩側には、若稲の香りいと清く、行く先には、黒き山幾つとなくならび立ち、層々相重なりて木の茂りたる中に、一本超然として意味ありげに、聳え立てる松あり。我はたゞ一時も早く川を出でんと、まことゝ心も空に急ぐ、今は友にあひて物語りせんと思ふよりも、中々に、かゝる道さまよふ事の恐ろしく、かの媼のいひし川迄に、かの黒き山あるには非らずや、林あるにはあらずや、後より怪しき人の來らずやと、心はあせりつゝもなほ前後左右に氣を配ばりつゝ行く、たま／＼遥かなる右の徑より洋服着たるらしき人影の、此方をさして來るあり、大方此のあたりの小學教員にもやあらん、志ばしの道連れにはいとたよりよし、早も來れよかしと念じつゝ、あゆむ歩を緩めて待つ、やう／＼近づきて隔たること二十間計りとなりぬ、嬉しとよろこびしはおろかなりけり。彼れはふと其のあたりにありし、木立の中に入りぬ、其所にはやがて彼れの家ありしならむ。心付けば燈火の洩れて耀やくを見ぬ、失望したれど前途はなほ遠しと、心を取り直して進む左の方に、十日計りの月黒き山の上に出でたり、白皎々としてこれよりの世界に臨まんとせるが如し、されど、おのれにはそを靜觀すべき心中の餘裕はあらず。ふと川に出でぬ、潺々たる細波くだけて月光をやどし、堤邊の柳枝長く水中に浮べり。こも今は、賞すべき興あらず、右折左折してとある門邊に立ちて問ひぬ、家の翁は出でゝ我姿を眺め、友の名をいひて、其の朋輩ならんといふ。然りといへば、ほゝ笑みて、よくぞ來ませし、何處よりか、此の夕暮れに、此の淋しき道を、いざ、これよりはわれ案内せむとて、甲斐／＼しくおりたちて、わら草履はき、我前にたちてあゆみぬ、おのれはたゞ從ふて歩む。

翁はいひぬ、曾根より此處迄里餘の道をよくも來ませし、纖弱の足に

て、志かも年わかき君のと、然り、おのれは今日迄、かゝる田舍道たどりたる事なし、ましてや唯一人、將、かゝる夕暮、いかで家人の許さんや、心からとはいひながら、いかで初めよりかゝらんとやはおもひ知るべき。

多くの藁屋の中に一軒、いかめしき瓦葺、土藏さへ二軒三軒目にも著るく、ならび立てる家の前にいたりし時、翁は逸早く聲を立てゝ、珍客あるぞと叫びぬ、家よりは男の聲して誰ぞやといふ、娘子の友なりといふ時、内よりなつかしき／＼友のやさしき聲にて、さはきん子の君かと呼びつゝ急ぎ出で來れり、忙然として立てる我手をとりて座に招じぬ、あゝ、此の時の心何とかいはん、恙なき我友戀しかりし我友、許したまへ、おのれは君にあはんとて來りぬ、今は逢ひまつりぬ、いともうれし、されど、なほうれしかりしは、今かの心許なかりし道中を終へて、此の目ざしたる君の家に着きたりし一事なり。友が疲れつらむ、空腹にやあらむと、いたはりくるゝ言葉も如何で耳には入らむ、おのれは殆んど自失して、暫しは物をも得いはでありしが、漸くにして今日の始末を悉く語りぬ。優しき我友は、充分の同情を以てきゝ、又充分の感謝を以て我に答へたり、それより後は人なきはなれに移りて、火鉢を中にとひつとはれつ、種々の物語盡くる期もなく、午前二時といふ燈を退けて、窓にむかへば、先の月影中天にかゝりて一本松は遥か此の家の後にそびえ居たりき。

評、叙事精細

梅一輪

たまその

ばさ／＼と風につれて騒ぐ若竹の丸窓に机とり出し二三冊の本を前にあちらなあけこちちを見などしてゴム小刀をねさて何やらん書けるは今し作文をものせんとてなるべし空を色どる煙突の煙末長うボーッと雲の中に入る其下を蝙蝠の東へ西へと行きつ戻りつ飛び廻るを眺め太き息をつく折しも御孃樣御飯召し上りませと云ふに書物片附くるも物うそうに座敷に行けば早祖母樣のお箸取らせ給ふひるの事氣にさわるとにはあられど常の如く面白き話もいでず何ぞ話す事もやと考へ居るうちに茶碗を置き給ふいつもは何や彼やと可笑しき話云ふて聞かせるに我言取りあげて下さらぬとてかさて／＼氣儘な子やと思ひ給はんさいと口惜し

治子がまだ四歳の春かほどの風引きたりとて何程の事かはとほんの氣休めの爲毎晩寢る前に煎じ藥一二杯飲みて其のまゝ勤に怠りなかりし父上の俄に熱のいで來て床につきてより十一日目といふにあえなくなりぬ花に風といふ恨はあるにまだ其の花も散りそめぬものをと花川家の悲歎限りもなしかくて四十九日も過ぎたるほど母は灸すえにと小供をだまして家出せしより歸り來らず頑是なき治子の母樣／＼と泣きわめくに我子を亡ひ又嫁に見はなされし祖母の我まづ泣き出したき風情好物の飴とりて得させんか大なる饅頭はいかになどだましつすかしつされるほどに叱られる事もなく却て母の居りし時よりも勝手よきものからおとなしく一人で遊ぶやうになりそれより祖母の丹精にて幼稚園より小學校と進みて今は女學校に通學し螢雪の功空しからでいつも試驗には一番と云ふに祖母の喜びは一方ならず治子／＼と治子の事とし云へば何でもかでもたゞよし／＼と諾くをこの祖母樣元來女に學問させる事は大の／＼の嫌ひにてこれにはいかな治子も手こずつて持あましぬ

幼き時の事は何も知らず後にてきけば腹立たしきごと悲しき事などいと多かり取り殘されしは年葉もゆかぬ小兒と浮世離れし老人とのみなればやれ相續よやれ後見よと親類のたれかれやかましく云ふをほつて置き給はれ美事治子を育てゝ見せまするほどにときつぱり斷られければ目論見し計算からりはづれ爲を思ふて云ふものをと恨みもせぬに よけいの事に差口を入れ親切顏する面にくさそれより後は互にゆきゝもせずとかあはれ治子よいか計り心細きくあらん

父にも母にも別れ頼むべき親類は他人も同じ事さればこの花川家を立派に興すべき重き責任は我が少さき双の肩にかゝれりと知りそめしより將來の目的は早胸に描かれつ同級のたれ樣かれ樣皆親しき方々の同じく高等師範學校に行かんとの給ふに胸の思ひのいとゞ抑へがたくて今日しも話の序に云へば以の外との御立腹生かぢりの學問はたゞ／＼高慢になる道具のみぞ高く昇れば昇るだけ深く落ちるといふ世の言ひならはせもあるものを且は我が老の心細さのやるせのなきをたつて思ひ止まれとの御叱り御諭し幼き時よりの御心づくしのまだ其の上にとはあまり我が儘すぎて云はれた義理にあらず押し返して云ふべき勇氣も出ぬまゝにやみにしが思へば／＼田中樣北川樣などの羨やましくもあるかな同じ寄宿舍の居室に起臥して共に花に戯れ蝶を追ひしなつかしき故郷の野べ裾からげしていさゝ小川にびしよ／＼と入りし昔など語り合ひ給はんは今幾月の先にや あるらんなど打水の名殘涼しき月影を眺めつゝ過去の事未來の事それからそれへと思ひ廻らすほどに夏の夜の過ぎ易くてはや十二時近くなりぬ祖母樣や寢ね給ひし下女の跡仕舞する音のきこゆるに心せかれて休中はあれもせよこれもせよと先生のゝたまひしを今日は思はずもなほざりになりぬいで明日こそとつぶやきて其のまゝ夜のもの引かつ

ぎぬ何事も思ふにまかせぬ浮世になど年浪のみは心のまゝに急ぐならん其年も早くれぬれば門には追羽子にうかるゝ乙女凧上げに餘念なき童さては年禮にかけめぐる人など賑はしけれどあまり廣く交際もせねば二三の人の朝暮に來りしのみ忙しくもあらぬに下女は大よろこび お孃様そのやうに家に計りおいでるならばちとの間貸し給はれと返事もきかぬうちに羽子板取り上げ門さして行く松のうちは何事も手につかず十五日の小豆のお粥も目出度てみし翌日より祖母の氣分わろしとてふせるに年寄りの事なれば油斷はならずと早速横町の先生にきてもらへば こはお疲れがいでしなり大した事にもあらず後より藥とりによこし給へと言ひ捨てゝ其のまゝ車走らして行くまづはと計りそれより十日十五日と立てども病はすこしも怠らず二三の大先生方に診察願へはいづれも首を傾くるに治子は氣も心も添はぬ思ひ 御恩を返すはこの時と日夜看病に餘念なしかゝりし程に其の甲斐のやう／＼あらはれてお粥も二膳めし上るやうになりぬ喜び勇む治子に向ひ病人は一日徐ろに口を開きて治子やもう試驗も間近に迫りたるに私の爲にに休みて名譽なる卒業試驗に不覺をとるやうな事あらば却て私への心つくしもむだになりますぞ病氣もこのやうに輕くなりたれば遠慮なしに行つて おいでといつに變らぬ慈愛の言葉戻るは返て惡しと素より好む學校なれば看護の傍通學に暇なし冴えかへる如月の十八日といふに病一時に革りぬ人々の醫師よ藥よと立騷ぐに病人はものうそうに目を見開きて遺言ましけるやうは私も汝の身の片づく迄はと思ひしがこれも天命致方がない我が亡き後にあれこそ孤兒よ世話やくものもなきまゝにあれあのさまは何事ぞと人々に笑はれぬやうよく用心して就てはこれから一人で過すこともむづかしからんに兼ての望通り師範學校へ入り天晴れの者になりて人ひとり前のものになりくれなば遠い〳〵冥土の草葉のかげからどのやうに嬉しく思ふであらうぞ云ふ迄もなけれども親類の厄介にならぬやうに 生意氣者にならぬやうにとくれ〴〵も云ひのこして午後の五時頃遂に此の世を見はなしぬ枕元に集ひし人々の顔を眺め又最後に治子の面をながめる時

静かに沈みがちなる治子が家にもさすがに春は音づれきぬ今頃は常々敷き居給ひし更紗の坐蒲團の代りに蓮の花の上にすわりてにこやかに隣の人と話しやなし給ふらんか久し振りにて親しき友に逢ひ給ひていかなる物語かなし給へる我事をも噂し給ふらんかなどよしなき思ひは胸の底より止度なく湧きいでてつれ〴〵なるまゝに引きあくる南の窓の梅一輪暁の霜夕の露にもめげずひとりまだき春にさきがけして咲き匂ひたる前途幾多の辛苦をや受けぬらん治子の我が身の行末にも思ひくらべられいと頼もしうて

我か家

大和　こがらし女史

夫は田舎そだちなれば都會の紅塵にうづもるゝがうるさしとてこゝに移りしは今より八ヶ月以前妾のこゝに嫁ぎ來りし二十日ばかり後のことなり花よめの身にてかゝる片田舎になど母も姉もお針友達も同情をよせられし頃はたゞ閑靜てふ一語もてまけす口たゝき居たりしも雨のふる日虫のすむ夕などにはさすがにわびしさにたへかれて夫の公けごとに出づるにさへ愚痴をこぼしたることありき

なるればなるゝものかな此頃に至りては却て眞の閑靜の味を覺ゆるに至りぬ隣の交りも人の指さきもなければ禮義を亂さぬまでを範圍とし思ふがまゝの事してくらすに夫婿の愛情殊にこまかになりゆく心地してうれ

しきたのしき音はんかたなし

家は牧野村の二十一番地日あたりもよければ風のかよひも充分なる小高き丘のふもとにあり前に帶ぶる吉野の流れ後を畝ふ金剛の峯はそゞろに昔しのばする料ともなりぬべく雲をぬく山上釋迦の諸峯と舟を引き布をさらす昔風流の景とは所謂浩然の氣をやしなふに足る二時間毎に前を橫ぎる南和の汽車と青空に立ちのぼる製絲場の黑烟とはやゝ俗を帶ぶる心地はすれど花のあした月の夕などにはえも言はれぬ趣あり其他白銀の峯待乳の峠野原の大鉄山王山 の絕壁などいづれも詩的のものならざるはなしされば花のはる、月の秋はいふに及ばず夏のみどり冬の白妙げに浮世の外の心地ぞせらる家はたゞしき南向にてさびたる板塀をめぐらし中をきりて 形ばかりのかぶき門をつくれり 板塀のそとには五坪ばかりの平地ありてくさぐさの草木をうう老幹枝をたよりに傾けるまゝ花をつくる梅枝生ひしげりてあとへあとへとつぼみ出す薔薇手入れたらぬ菊の黃白をみだして匂へる美人の立てるが如き芍藥の淸くうるはしきなど四季の花に乏しからず 此小花園に沿ひて 四尺巾の道あり 農夫のみのかよひ路にはあらず西して寄足の地藏東して五條停車場に出づべければ孫の土產にとてやき餅買ふてかへる老婆出る汽車にみちをいそぐ商人日に二三十人はたしかに通へば道一面に草はげたり道を少し西に下れば謠命川てふさゝやかなる流れあり 水淸ければ引きて 飲料水とすかけひもるゝ水の音時に枕はひゞきて秋の夜のわびしさ一しほまさることありさて板塀の內には三坪に足らぬせまき庭あり石ありて苔むせり南天まんりやうもくせん躑躅などの植木を植ふかきのそとにひきかへていとさびしきうつりす

玄關をかれたる二間の雨椽より明り障子をあけて入れば八疊の間あり東には一間のまど西には 各一間の床とちがひ棚とあり 床にはこの家のつきものとして狩野のにせものばかゝりあれど世事にいそがしき夫はとりかへんともせず襖には中村敬宇翁のものしたまへるを張りたればくる人每に眼をそゝぐめり上にかゝげたる神童明瑞のかきたる額は常に賞讃の種となりつ床に置きたる有田燒の花瓶は常にわがもちまへとなりてつたなき腕をふるふものなるがちがひ棚のかざりは夫のものなりこの八疊のとなりは押入つきの六疊 われの常に 裁縫するところなり 化粧室などの贅澤めきたる室なければ鏡臺も簞笥もこゝに置けり西に一間のまどありて明を引く倘外に四疊六疊の二間あれど臺所物置の資格なればむさくるしくて人々には見すべからず二階の六疊は手の行き屆かぬまゝに鼠いたちの橫行をゆるし置きたればすゝ落ち塵つもりて足を入るゝべからず物數寄なる我夫は白足袋無用のはり紙をなせり

月夜のいそ

和歌山　うすらひ

夕陽は、西山にかくれ、早や暮合つぐる 鐘の音、蚊遣火は 我庵をもれて、靄のそらに、消えゆきぬ、妾あまりに、物うとければ、心はらさんとて海邊に出でにけり、黑き松原の背にほのかに、明るきは月いでむとするなるべし、時々想起したる如く松の梢を搖する風の音、渡場で人よぶ聲の幽かにきこへ、四方の山寂然としてねむり、そよふく風に傍の松の葉一つ二つ 袖の上に 散りかゝるにつけ、 いにし昔を おもわれ、心いよ〱亂れそめ、 かなしみの思はいとゞ高まりぬ、 あゝ我身ほど不幸なるものは世にあらじ未だ東西しらぬ其時より兩親にわかれまいらせて姉上と共に遠く故郷をはなれ、こゝ海べの伯父の家にそだてらる身となりしより年波の流れはやく早や六とせの春秋をすぎぬ

あわれ飛鳥川淵瀨さだめぬ浮世のたとへ又もや賴みにたのみし姉上は去
年はるの末つかた日影にきゆる朝つゆと共にあわれはかなく黄泉の客と
なりたまひきあゝ如何なれば斯く狂れる世ぞ如何なれば世は容數なく親
姉妹のあいだを裂きけるぞ元より肥えざる此身のいやが上に瘦せをとろ
へ神經のみ過敏にして夜もすがら無情を天地に訴へ、いねで明しゝこと
幾度、かゝるうきこと多き世の中にわが身ひとりは、なればとて、など
面白きことあるべき、せめては、この海原に身をしずめつればいと幸福
ならんと思ふことのいくたびかあゝ思えば思の夢なりけり今只一人うち
よする波をみては兩親のことのみ思ひうかばれ、空をながむれば姉上の事
をおもわれ岸うつ波のしずく我、をもを、うるをし袖は涙に打らしほれ
無情のあらし、ふきては我心をにごらし只わが愁き思ひ増さしむばかり
折しも深山にきこゆる杜鵑一聲
沖には世の靜寂を破り海上をころびくる舟唄、餘韻ながく語尾を曳く波
の騒き唄のこえそよぐ涼風をもむろに美妙の樂をつたへてわが悲しき感
を誘ひてのこりなく消えさりぬ
渚を洗ふ潮の先に十三夜の月、鏡の如く閃き磯は一帶の沙原つゞき、汐
氣ふくみし夜のかぜ波の搖めく、あいだより吹ききて、ふところに入り
髮を梳りて後の松檜を訪なへば波のをと松の韻、玆に和して天女のかな
ずる琴の音の如く月は靜心なくいそぐ寢み波の上を流れ、まだ宵ながら世
はしずまり 縹渺として際涯なき海上に 一點の火の光りあるは 漁舟やあ
らんあゝ自然のけしきの美さに心も身も醉ひ居し我は始めてさめぬ、わ
れ未たこゝにありしか、あわれこの風景を眺めつくさんには浮世のにご
りも忘れ仙境に入りたらん心地せらるべきに
あなわはれ世にうれしき身なりせば此の月夜の景を愛でんに
かなしやせきくる涙とめかねて又も袖ぬらす波のしずく
今は月こそ物おもわする種なれや

偶感

それがし女

夜半のともしびかすかにて犬の聲遠く聞え窓の戸おとづるゝ風もの淋しく寢ねられぬ儘考ふるともなしに我腦は過去現在未來の事共こもごも行きゝしつ。思へは我身世に生を得て十二年あまり學びの窓に日を送り父母の膝下に夜を暮し或時は友達が下駄の緒きらして途上になやむを我はんけちさきわたへて先生に賞せられ。或る時は美しく蝶おひつゝ野邊に出で日の暮るゝも忘れ果て此蝶を害めてに父母戒められ又或時は美しき雪駄をどぶの中に落して泣きかなしみ。又或時は運動會にて賞與を得てよろこびし事等浮び出でぬ幼き頃はげに罪もなかりしが早や小學校を終へて 高等女學校へ入りてより 四ヶ月あまりいつまでか 幼心にて暮すべき。我身不肖にして朝に校堂に登りて師の教を受け夕べに家に入りて父母が戒めを聞きつれど未た一つの善行もなく兩親に心使かくるはかり事を到す事かなはず嗚呼我身はなどてか今まで浮々として暮ふたる幼くて親に孝を盡すもの古よりかず多きに 如何なれば 我身。女子にして 君に忠をつくすもの亦多きに如何なれば我身。父母が心つくして學びの道に通はしめ給ふになどてかくまで怠れるこれ皆我身の足らざるが故にはあれど今より後勉めてたゆまず學びの道をたどりなば遂には心のまゝに親も安んじ養育の恩をおくる事を得ん。學びの道。學びの道。今より我は學びの道を眞直に進みて横に入らず。師の教親のいましめを守りて行々は父母に孝に君に忠に夫に貞に兄弟に友に朋友に信にして又よく子を教え育つるの良妻賢母とならん。今迄の行爲は後の行爲もて補ふに足るべきの人たらん。

消息文



第一等 (削指無賞)

廢學せし友に

下谷區谷中初音町四丁目三十七小島方 瀧川きん子

近年にまれなるあつさの、餘波さへきびしく候を、御地にも如何に凌ぎがたく暮したまふらむ。學校もいよいよ先日より始業となり候へば苦しといひつゝも、出席致し居り候。さて過ぎにし七月十日、新橋にて、互にさきくてとたのみて、惜しき(おん)別れをなし(せ)まゐらせし時は、また近きほどに、やがて嬉れしき御目もじとばかり期しつるに、おもひきや(御)家事の御都合にて、君には此の夏を限りにて、都の學びの庭を退かせたまはんとは。誠に朝に夕に手をとりて親しくむつびつる友を失ひたる私のかなしみは申さずもあれ(おろか)成業に間もなき際に至りて、やみがたきよしのあらせられて(御事情故)とは申しながら、かねての篤き御志を枉げて、断然廢學と決したまひたる御心の中をおもひやり奉れば、いかに(中々に)慰めまつ(奉)らん言葉もおぼえず(なき計り)なかく〳〵に、此の身先づ涙ぐまれ申し候。幾夜かの熱涙に枕を濕したまひ、幾度かの深き吐息の末に認めたまひたりけんとおぼゆる此の願書、字毎に御口惜しさの籠るかと見えてそゞろ涙にぬらし(えたえず)候ひぬ(き)されど、よく〳〵去りがたき(の)御事情なるべし。父母の心を苦しめんことの苦しきあまりにとは、何よりも(私にとりて)悲しく(き)身にしみて泣かるゝ御言葉に御座候。

かゝるあつぱれなる御志を持たせたまふ上は、すでに世に處するすべての理を御會得あそばされたる御しるしなり。强ひて御通學も要なき事ならんと、且つは、よそながらうれしくも思ひなぐさめられ申し(存じられ)候。もはや、何事も申すまじ。仰せこしの件々、委細かしこまり、取り計らひ申候ひぬれば、御安心あそばされ度候。

こゝ、暫し、これまでの如きおんめもじはかなはぬ(得)ぬ事とは成り侍れど、(ながら)なほおたがひに行末とほき身、いかで袂つらねし先の日のたのしを繰りかへさん折り(すこと)の候はざるべき。時々のたよりはかな

ちずきかせたまへ。御不自由なりときく折柄の新刊書などは、おのれのつとめとして御送り申さんほどに、たゆまず(おんたわみなく)御自修あそばされよ。たのしき御家庭に、美しき自然にしたしみて、清き御心を一入みがかせたまはんことを、申すまでもなけれど、終りにのぞみて願ひわけ奉り候。あなかしこ。

（注、活版は原文▲▲▲▲は撰者の修正せしもの也）

（評）行文よくすなほに、筆よく着實に、たゞ思ふ心のまゝを、それと書き下して、誠にまめやかなる情を盡し得たり。書簡文の骨髓を得たりといふべし。徒らに飾らず粧らず、言々、皆、眞實の情より出でて、あはれなる朋友の心事を思ひやりたる情愛、限りなく字句の間に動きたり。情深くして着實なる作者の人となり見えてゆかし。撰者も此の文を讀みて、そゞろに涙の胸にこみあがるを禁ぜざりき。これ、決して撰者が涙もろき故にはあらざるべし（雨江）

第二等 （賞品圖書切符金二圓）

七夕祭の夜人の許に

北信の山家にて　菫女

秋の初風など古文にならひては申すまじく、唯々星合の空を詠めつゝ、あまの門戸渡る梶の葉に、思ふ事筆にいはせ參らせ候。そもや、乞巧奠とて星をまつり、女のしわざの勝れん事をいのる風習は、いつの頃より始まりけむ、萬づに博學なる旦那樣の御敎示うけたまはりたきものにて候。當里は、[illegible]、今は[illegible]て、上手を願はぬ心には非ねど、竹たつる家うたかく人、まして琴たてる軒も候はず。たらひに清水を入れて星の影をうつし見るの風流もなければ、淋しき〳〵里の夕ぐれ、其の上御前樣と織女の袖もにほふらんなど〻申て、たきもの〻眞似いたし候ひしを、さだめし御記憶遊ばすらん。其の頃はうやむやの幼氣に、人となりとの後など思ひもかけ申さゞりしが、今かく、他人の姓を犯すやうになりて、東西にひきわかれたるつらさ、日頃は内外のいそがしさに、友おもふこゝろも自ら薄う、曉方小路のはるかあなたゆく人のやう、朦朧と胸にうつるばかりに候を、折にふれ時に從ひては思ひ出で〻たへがたきおんゆかしさ、おもひださずに忘れずにを情の極といはゞ我が心あながち淺間しとなおぼし給はるまじくや、わけても今宵の感想は、深く御前がわたりに及びて、更に〳〵二つの星に祈願こむるは、何不足なき御家に、呱々の聲早くきかせ參せたき一事にて

候。

おもへば、君、妹脊の御かたらひありしより、十年の春秋いつしか御過し遊し候て、御中よその見る目も羨み參らするばかりに候へ共、何とて御子のなき事や清水堂に奉り給ひし御木像様、幾度空しき祈願となりて、いひ甲斐なき私を、御里の母様の長者のやう仰せられしも、御無理ならずと、おぼえ候。神かけていのりし事なけれど、わが身は幼きものも御座候て、泣きつ笑ひつ、いたす物音、梢の蟬よりも喧しう候を、さりとて又この塵々の中に歡樂あり愛情あり、希望さへこもりをり候へば、あながち空蟬のもぬけのからに早う憂秋をとは祈り申さず、てくらし居り候。過ぐる日の御文に、舊弊らしけれど名ある卜者に御見せ遊しゝところ云々の御言葉ありて、私も聊か落膽いたし候へ共、當るも當らぬもかの道と申す事なれば、深くみこゝろに御とめ遊ばさず、夏は海水浴、春はいでゆに精々御養生なさるやう御すゝめ申上候。折々、旦那様御貰ひ子の事仰せらるゝよし、それはまだ／＼早し。當國に山田温泉といへるは効驗著しきやう、この里人申し候まゝ、御地よりは路程近からねど、車に滊車に通ふ世の中、やがての御よろこびを樂しみに、御二方御こし遊ばしてはいかゞにや、さらば、私も暫し旅路の御慰めに參上いたして、萬づ聞え上げたく、内家叢裏獨分明たりし三千第一の呉姫が、芙蓉殿上中元の日、水銀盤を拍つて化生を弄したる故事にならひ給はぬ御うれしみ、必ず／＼御受け合ひ申上候。その折りよ、かの卜者が術の拙なきを笑ひ給へ。かけても御養子の件は、御反對なさるべく、わがから保證いたしたるさしでがましさをも、旦那様高慢とや思しめさんが、唯それのみは御反對遊せや。金の御指環君が御手に渡りてより、はじめての御いかのひと推し候へ共、味方に我れつき參らせをり候へば、心強うおぼしめせ。こよひ七夕に滿腔の心さゝげて御宿の榮えをいのり、且つは、我が預言をむなしうなさぬやうにと願ひをり候。御わたりにては、例の妙なる御琴のね、雲居に迄ひゞき渡りて、御傍らに旦那様お上手なる俳句どもおこしらへ最中ならん。銀燭秋光畫屏にひやゝかなるところ輕き扇もて流螢をうちつゝ、明光殿玉堦のほとり、夜色涼しう、臥して牽牛織女の星をながめしといふ王健が詩の心、御味ひかね遊ばすを、唯目出度き御宿世といはひ上げ參らせ候。この上の願ひには、一際愛着の御きづな、早う／＼設けさせ給はん事を。あなかしこ。

評、達者なる筆づかひ、躍動せる才氣、共に女流の作としては、嶄

くべきものあり。且つ、やゝ洒落なる筆のあとは、其の言ひやる事がらに適當して、面白し。されど、何んとなう。輕薄なるすがたの見ゆるは、よろこばしからず。大に惜むべし。とにかくに、その文才により、達筆によりて、これを第二に擇びたり。(雨江)

第三等 (賞品圖書切符金一圓)

友に蜜柑をおくる文

野州宇都宮　河邊あき子

そのゝちは、いかにわたらせ給ふらむ。さても君のいますなつかしき都をはなれて、此山里の人となりてよりは、かたらはむ友もなきに、さらでだにさびしきこの秋のくれよ、一しほさびしくゝらしし居り侍れば、君の上のみいやましなつかしく忍ばれてなむ。誠に山の姿、水の色ならでは、見るかげもなきわたりには侍れど、蜜柑のみは、さびれたる里に似もやらで、いたう名だかくて、都わたりのとは、げにその味も、ことにおぼえ侍れば此一籠、こゝろみにまゐらすになむ。思へば、去にし年、君と共に秋の長夜の書窓、讀みあくまゝに、はては、いつしか取り出でて、かつ語り、かつたうべつゝ、机にもたれしまゝにて、寢入りしこともいく夜なりけむ。あはれはかなきものにつけても、そゞろに思ひいでられて、たゞ〳〵君こひしさのやるかたなくぞ侍るを、せめては、君もこの品にそのかみの事をもひうかべ給ひて、我が身の上をあはれともおぼしやらせ給ふときば、いかばかり嬉しからむ。あはれ、この山里のしのぶの宿、あらしの音にのみはまかせなたまひそ。



(評)詞みやびかにして、筆やさし〳〵、蜜柑を取り出でて、いよ〳〵朋友のなつかしき心が言へるなど、誠に可憐の情、愛すべし。結末の一句、限りなく妙なり。(雨江)

秀逸　恩田かね子の君に返へせし文

東京神田區三崎町三ノ一宮崎ほん方　木村貞子

うるはしき御玉章、うれしう拜しまゐらせ候。さても、御許樣と、涙にぬれし袂を、小川校卒業式場にわかちまゐらせしは、去年の春、すみれ蒲公英の咲きみだれてしいと心地よき時節にて候ひしが、げに過ぎ行く月日には關守なく、今は夏去り秋去り冬去り春去りて、時下三伏候とやらんいへるといかめしき二度目の夏の最中とはなり候ひぬ。思へば、御許樣と、小川校なる同じ學びの窓に、然かも同級にて、親しく共に睦びあひ候ひしは、今より一とせあまりの昔語りとはなり候。まこと、隙行く駒の足早きは、今更におどろかれ申し候。其の後、御許樣には、家事の御都合により、都へは物學びに出でさせ給はで、靜けき田舍にとゞまりて、御兩親樣のみ心をやすめさせ給へるよし。御孝養のほど、ひたすら感じ入りまゐらせ候。あゝ、君よ、鄙なればとて、歎き給ひそ。文明の光り隈なきおほ御代には、鄙なればとて、學ぶにかたき事やは候べき。山青く水清き所の御住まひは、御心を養ふに適ひてこそ候はめ。師なく友なしとてな浪み給ひそ。古今大家の卓説は、載せて講義錄にあり。心高く行清き幾多の友は、擧げて史傳にありて、獨習の便りも乏しからず候。文才豐けき君よ、勉め給へ勵み給へかし必ず〳〵御落膽などは無用に御座候。

妾事、着京後、間もなく入校いたし候事故、日課におはれ、存じながら、今日まで御不音に打過ぎ候事、さる方にゆるさせ給ひてよ。まことや、みづから望みて出京いたし候事故、もとより撓む心はなく候へども、折にふれ時につけては、故郷の事の思ひうかべられ申し候。なほ聞え上げまほしきことは、濱の眞砂の數つきず候へども、餘り長く相成り候へば、餘は又々も後れん雁に言傳てんとて、書き殘し申し候。かしこ。

なほ〳〵、御序もあらば、横川賓子の君へも、よろしく御申し傳へ下されたく願ひ上げ候。

秀逸　洋行地より弟に送る文

姫路　みつ子

殘暑なほきびしく候へども、開校の日も追ひ〳〵近き候へば、定めし机の座も拂ひそろ〳〵勉强にとりかゝ

られ候事と存候。

さて、妾御地出發の際は、わざ〳〵停車場迄御送り下され有りがたく存じ候。かづ子、もと子の二君は、神戸迄御出での上、本船迄御送り下され、御厚情の程感泣仕り候。此の事、伯母樣に御話しの上、伯母樣よりも御禮御述べ下さるゝやう願ひ上げ候。餞別として皆樣より賜はりし數々の品は、當地にて餘り見受けず、誠に故鄕の方々の紀念と存じ、日夕拜し居り候。

神戸港を拔錨致し候は、午後七時頃にて、當夜は恰も十五夜に候ひしかば、明月は凉しげに大空に輝き居り、常ならず如何に面白かるべき內海の景色、目に變るは島々の狀、波間に碎くる月影も、今宵が名殘なる妾の身には、こが懷かしき故鄕の見納めなるか、明日よりは阿部の仲麿ならねど、異國に月を仰ぎて、三笠の山はと故鄕しのぶ身なるかと思ひ候へば、唯何となく胸もはり裂くる計りにて候ひき。殊に十五夜の事とてあゝ去年の月見にはとありし事ども、さては、御身の上忍ばれ候て、そゞろに悲しく候ひき、翌夜月落つる頃全く故山を離れ申し候ひぬ。海上は至つて平穩にて、只印度洋にて暴風に遭ひ、少しく苦しみ候、連日渺々たる絕海を行きし事も候ひしが、乘客の隱し藝、又は運動會、宴會等にて、少しも無聊を感じ候はざりき。途中の見聞、誠に面白き事も候ひしが、いづれ後便に申し上ぐべく候。

去る十二日、航海無事マルセーユに到着仕り候。直に同行の同胞六氏と上陸、領事館に到り、領事の周旋にて投宿仕り候。此處に三日滯在の上、鐵車にて當リヲンに參り候。當地は、御承知の如く、ソーン河に跨り、人口五十萬にて、絹布製造にては世界第一にて、其の產額二億萬圓の由に候。これにても市の繁盛の程御推知成され度候。當市にて、猶一週間滯在の上は、巴里に向ふ心算にて候。其の上は、當國の人情、風俗、其の他、逐一御報知申すべく候。別封寫眞、ラインの月景、印度風俗、チーブルの建築等取りまぜ、十葉、御慰みにもと御贈り申し候間、裏面の說明によりて、御了解下され度候。巴里着の上は、宿所御報知申すべく候間、それ迄は御音信御見合せ下され度候。其の上は、時々御地の模樣御報知下され度、又、先日仙臺へ御轉任なされし若林先生の御宿所、御聞き合はせの上、御報知下され度候。

出發前御話しに相成りし東京遊學の事は、暫く御見合せ成されたし。矢張り中學時代は、田舍にて御研究の程、望ましく候。燈火親むべき時も追々近づき候へば、御自愛專一の上御勉强の程祈上げ候。

御面會の節には、御地の友へ宜しなに御傳へ下され度候。匆々。

秀逸

菊の花に添へて友の許に送る文

横濱市加奈川町二九一佐藤方　實相寺のふ子

使してきこえあげ候。去年の秋培ひ置き候ひし心つくしの甲斐はありて、籬の黄菊白菊、やう〳〵咲きそめ、朝露もこちたきこの朝、或は雪かとはかり疑ひ、或は黄金の色にまかふよき眺めを、獨りうち見むもあたらしくて、露なから一枝手折りて差し上げ候。文机の小瓶にさしかざし給ひて、御賞めにあつからば、本懷の到りに候。さて、例の巧なる御歌などもらし給はゝ、花も嘸かし嬉しう侍らむ、妾もこよなく嬉しく存ぜられ候、明日は御存知の重陽の節句にて、何の風情も候はねど、いさゝか菊見の宴を開きたくと存じ候。御物まなびもさる事ながら、少しは御保養もいかゞと、差出にかましうは侍れど、是非共〳〵御出の程御待ち申し候。去年は折りあしく御出でなく、口惜しう存ぜられ候をひしを、此度はまげても御駕を向け玉へや。聖壽の長久ならむを祈り、ことほぎまつり、かたみに菊のさかづき重ねて、としへし頃の物語も致し、まゝ御話も承らば、いかばかり樂しく候はむ。たれこめ給はむも、をりにこそよれ。かへす〳〵も、かならずし訪はせたまへ。あなかしこ。

秀逸

故郷なる弟のもとに

むら子

怠り勝ちの身たになほ燈火の影またしまるゝ此の頃、ます〳〵、御すこやかに御勉强の御事と喜ばしく存じ候。戸外の運動にもはた此の上なき好時節、相變はらず壯に御勵み遊はされ候ならん。小萩花さく練兵場の毎日曜は、今も君達の占め玉ふ所ならん。身弱くては、學びても甲斐なからん。亡き兄君のためしもあり、折角體育に心掛け玉へよ。妹は女子大學に入りたき望みのよし、無理ならぬ願なれど、父君も餘りに進み玉はぬよし。且つ、母上は兄、君を亡ひ玉ひ、我れさへ御あたり遠く離れまゐらせ、君はたやがて西か東かの都に物學びし玉はん折り、誰れか御傍にありて日々の樂助けまゐらせ、御徒然慰め奉るべき。男子ならばともあれ、早高等女學校をも卒へし上は、婦人として社會に立つに、さまで不都合もあるまじ。御二方に仕へまつり、女子の本職たる家事裁縫の實習の傍、英語等修めたらん方、宜しかるべしと思ひ候が、いかに思す。

我れよりもいひつかはさんほどに、よく説きさとし玉へ。こゝは見渡しきのみにして、取り立て申し聞えん事もあらず。なつかしき古里の空よ新聞雜誌の上にても、熊本といふ文字ぞ、いち早くも目に止り侍る。百般の事物日に月に進み行くときく毎に、嬉しう懐かしう思ひあくがれ侍る。九州大學等も出來なば、一層の繁榮を増し候ならむ。珍らかに面白き事もあらで、例のまめやかなる筆にのせ玉ひて、こゝなる山里人を驚ろかし玉へ。此の同妹より送り來りし寫眞を見て、打ちかはり大人びたるに、君もさこそ太きくたくましくなり玉ひつらめと、御なつかしさ得たへず候へば、御近寫の御姿もあらば、送り玉へ。運動服のならば、なほ珍らしかるべし。

立田山若木の松のとこいはにいやのひく〳〵し影をしぞ思ふ

さるにても、身はいつか白川の水は汲むやうにやなり侍らんと、心細う侍る。返すかへすも、他縣人の柔弱なる風に染まず、黑かりし色のいや黑くなりまさり玉はん程こそ願はしけれ。餘は次の便に殘しおきて、先はこゝに筆さしおき候。かしこ。

秀逸

母を失ひし友の許に送る文

茨城縣新治郡土浦町　山口澄子

實に夢の世とは申しながら、さきの日までも何の御變はりもなく過させ給ひし御母上様の、あまり俄の御眠りに、誠としもおぼえ得ず、なほ此の世におはしまさん心地もし侍るを、あはれ失せ果て給ひしと思へば、目もくれ心もまどひて、涙のみこぼれ候を、まいて御許様には如何おはさむ、御歎きのかず〳〵實にもとおしはかりまゐらするになん、御はうむりの折り　御見送りかた〳〵、せめて御心慰め奉らむとまゐり侍りしかど、御父君はいかに夢心地にておはしましけむ、御顏色さへもあしら見受けられ、又御許様の御歎きの樣かいま見侍りては、口籠りて物もえいはず、過ぎにし年、我が姉を失ひし時の事ども胸に浮びいで、それよりそれと思ひつゞけて、却りて悲しうなりまさるに、御慰め申すべき私の、かへりて深き歎きにかきくれ申し候ひし事に御坐候。其後承り候へば、とかく浮き立ち給はで、一間にのみたれこめゐ給ふよし、聞く身もいとゞ堪へ難くて袂のみうるほし申し候。私も、姉死去の際は、前後も知らず歎き悲しみ、まれには訪ひ慰むる人の言葉に、其の折のみ思ひあきらめむとつとむれど、思ひはいつしか前にもどりて、ひたすらに戀しき葉はしと泣きに泣きあかし事ども、今更思ひかへしては、御許様のお心の中、さこそと推しはかられ申し候。されど、生者必滅の理は、誰れとてのがるべき事にあらねば、何卒さやう御あきらめなされて、御歎きのあまり、御躰をそこなひ給ふ事なきよう祈り申し候。ましてこれよりは、御母君になり代りて、内助のつとめを遊ばさるゝ御許様故、一しほ御心づよからでは と存じ候まゝ、拙き筆をもかへり見ず、かくは文して申し上げ候。かしこ。

秀逸

師の君の御病をたづねまゐらする文

下野河内中郷　黒川つね子

ひと日だにまみえ奉らぬをりもなかりし師の君を、さいつかたよりふつにをろがみまゐらする事もかなはで、いたう心をいたみつるに、今朝し

も岡田先生の御ものがたりによれば、日にそへてはげしきこのごろのあつさにえたへ給はで、御病ひの床にうちふさせ給へりとか。事なき身にもたへがたきを、まいて御いたつきの御身には、いかばかりかなやませ給ふらん。おのが身にひきあてゝ御くるしみの程おしはかりまいらするになむ。おもへば、去にし年手習ふ業をさづけ給ひしおり、さゝやかなる事にも御心わづらはせ參らせけるが、こたびの御いたつきのきざしともなり給はざりしかと、そのかみのこと何となくしのびいでられて、たへがたきばかりに侍り。あはれ海山よりもいや深くもまた高き御めぐみにむくいまつらんよすがなければ、せめては朝な夕な神かけて一日も早う御病ひのをこたり給ひて、學びの園にいでさせ給はん折をのみ祈り侍る。

かへす〲もいたはらせ給へつ。かしこ。

賞外佳作

山住しける友の許に

熊本市西勸身崎四〇羽田方　秋野つゆ子

去年の秋、君と遊びたる阿蘇の溫泉のかへるさ、野路より根こぎしてきつる女郎花の、いとあてやかに咲きそめ侍りぬ。なれど、今年はともにめづべき人もなくて、そよ吹く風の身にしみじみと秋の哀をぞおぼえ侍る、君は露しげき萩山の奥に、いかに此の秋をながめたまふらむ。この頃は、雁のおとづれ絶えはてゝ、御消息承るよすがもなく、夜々さえまさる月のかげにも、過ぎ来しかたのみ忍ばれて、いと御なつかしくなむ。

人しげき市だにさびし秋の夕いかにあるらん峯の一家

海水浴より歸りて親しき友の許に

たまその

私事、昨日無事に歸り申し候。直ちに參上致さばやと思ひ候へ共、旅の疲れにてとこと〲しく申す迄にも候はれど、たゞ何とやら氣重くて、物うく覺え候まゝ、なめげなれど、手紙にて御知らせ申し上げ候。

さて、彼所に居たりし折りは、海につかりて波をかぶる里の少女たちの、いと心易げに水かき分けて游ぎ、或は、目の前迄きてついとあなたへ行く小魚などのつらにくきまで羨ましければ、己れもと淺き所なよりて、ぼしや〱やり候へ共、心得なきものには、眞似する事も覺束なく、龜のやうなりなど弟の笑ふに腹立たしく、いかで〱と思へ共、思ふやうに手足の從はず、歸る迄には是非とも覺えて、かの君にも此の名にも鼻あかせ參らせんなどゝ張りつめし氣は、いつしか拔け去り、只おだやかなる所に入りて、水風呂もかくやなど獨り笑みつゝ、浪打ちぎはにうち上げられし貝がらなど拾ひ取りて遊び居り候ひき。又、後は重なり〱たる山とて、木々などのいたう生ひ繁りたるに、なつかしき時鳥さへ音づるゝよし、よべも鳴きたりなど母上のいはるゝに、惜しき事してけりと思ひし事も、一度や二度に候はず。折り〱夜中に目さむれば、怪しげなる聲して鳴くものゝ有るに、あれかと思へど、いまだ聞かぬ身には、しかと分らず。よべのにては候はずやと母上に尋ねても、あやにくに眠り居りたまひたりとて、それと聞き知るを得ず。今宵はいれ

ずに居り〻と思ひし夜も幾度か候ひしが、いぎたなき身のはづかしや、時鳥の聲も定かには聞きおぼえずしてかへり申し候。いづれ、近々のうちに參上致さんに、かゝる事は、その折りおん物語り申さん。さても、海を命よと汐風に吹かれながら一日ひなたにのみ遊びくらし居りし身とて、印度人よろしくと云ふ程、黒々と相成り、これも海水浴に行きしれうちかと存じ候へども、誠に耻かしく候へば、母上樣はじめお女中衆へも、前かたより御話しおき下され度候。決して〳〵お笑ひなきやう願ひ上げ候。

月見に友を招く文

下谷區南稻荷町二十八番地　白井はま子

こよひは月見る月はと歌はれたる秋の望の夜に侍るに、朝よりみそらのけしきかぐみなぬぐひあげたらんごとくすみ渡りぬれば、さだめてさやけかるべくとおしはかり、年ごとのためしにまかせて、こたびはかの芝浦のなりどころにて、歌の友どち打ちつどひ、月見のまとゐなびらかまほしう思ひ侍れば、中垣のへだてなき方々をもそゝのかし給ひてのぞませ給へや。もてなしとては侍られど、たゞ浪にきらめく月の影と、虫の音やどる前栽の小萩とをめではやしつゝ、おのがじゞ歌よみ琴などかいならすが興ふかゝるべくとてなむ。かしこ。



四

都の友の許に

それがし女

ことしの御暑さは、十九年此方なぞと、老人のはなしにも承り候が、げに例年よりもたへがたうおぼえ候處、如何渡らせられ候や。喧しき蟬の聲さくに附けても、都大路の御通學さぞかしと推し參らせ候。さても、すぎし秋よりやがてこん夏にはと誓ひて、はかなき御別れ致し參らせしより、一日千秋のおもひも啻ならずまちくらし居り候甲斐もなく、當年は御歸國御見合せ遊ばされ候よし、何とも殘念にたへず候。妾事は語らふ友とてもなければ、保養かた〴〵、日々海につかり、波間を浮きつ沈みつし、さやう〳〵つかるれば、濱邊に小貝あさりなどまて、日を送り申し居り候。あゝ今若し君と共に在らば如何に興ふかき事ならんにと、過ぎしむかしをおもひ起して、そゞろ御懷しさにたへず候。何卒、よろず御いとひあそばし、一日も早く業成り、目出度御歸國遊ばされ候やう念んじ入り參らせ候。其の折こそ、共に濱邊に打ちつれて、すぎこし方をかたりつゝ、小海老小貝などあさり候はんと、今より樂しみまち居り候。かしこ。

濱邊にて拾ひ集め候貝がら三十五種、御なぐさみの一助共相成り候はんかと、今日小包にてお送り申し上げ候。御納めたまはらば、うれしくぞんじ候。

奢侈を戒むる文

栃木縣宇都宮市　山里ゆき子

文して申し上げ候。此の頃はとほ〱しくうち過し居り申候へども、定めて御變はりもなく御勉學なされ候事と御察し申し候上げ候。此の程うす〱承はり候へば、御前様、これ迄の御志にも似ず、殊の外人目に立つ程きらをつくされ、着物、はき物、頭の物迄、皆々あたりきればゆき迄に御取り飾りなされ候など、とり〱の人のうはさ唯々世の嫉み心にて許する事よと聞き流しに致し候處、いよ〱惡評うるさき迄にとりはやし申し候につき、さはあれどとおたづね申し候に、思ひの外なる事にて、誠に驚き入り申候。そも〱、着物の目あては寒さを防ぎ肌をかくすに外なければ、垢付かざる限りにて足り申すべきは、人々忘るまじき事に御座候。まして、此の宇都宮は、舊藩侯の時、日々の御膳は一汁、一菜、めし物は綿服を用ひられ、萬事專らつゞまやかを旨とし、職業を勵まし給ひしより、今に至る迄、皆質素を守り、人々豐かに、家榮え安らかに生を過し居る事に候。このありがたき地に生れし人々は、誰れにても御教訓を守り、ゆめ忘るまじき事と、つれ〱妾等と語らひ給ひしを、しばしの程に忘れ給ふとは、何事ぞ。行末遠き御出世の首途に、かゝる御振舞は、誠に嘆はしき至りに御座候。兼れてよりさとき御生れつきなれば、わか氣に任せたる一時の御心違ひとは存じ候へども、斯くては世の風評もます〱惡しく、随つてこれ迄の御苦學も水の泡に相成り候て、後悔いたされ候ても、取り返しの附かざる事となるべければ、篤と御心中に御思慮成され候て、御改めの程ねんじ上げ候。人誰れか過ちなからんとか、又、過ちては改むるに憚る勿れとやらも聞き侍れば、よく〱御反省の上、早速御改心下されたく、兼れて親しき御間柄、寸時

ももだしがたく、取り敢へず、書中を以て御忠告申上げ候。なほ御面會のをりも候はば、種々御物語り申し上ぐべく候。先づはあら〱かしこ。

都に在す姉君の許に

下野日光小倉山　永井きち子

久しく御無沙汰に打ち過ぎ候所、御近況は如何におはしますらん。日に〱心にのみは御案じ申し候へど、日々のいとなみ事にのみ追はれ、殊に初子持の中々に思ふに任せ侍らず、けふひさ日はこれ〱してと胸に定め置きし事は、半ばをも果されず、皆人の長き日よとの言の葉の疑はれ候やうの次第にて、おん文をも怠りがちと相成り申し候。これも已が心の足らはぬ故と、いとも耻しうおぼえ候。さて、此方御兩親様には別段御變りもあらせられず、きのふけふは前の畑の里芋さつま黄瓜などの下の草取などゝ、日も猶足らずいそしみ給ふ御すこやかさ。殊に、母上様は姉様もしろしめす通り、御若きよりいとゞ暇をなしませ給ひて、片時の間も只あらせ玉ひし事なき御性質なれば、御年召させられ候ても、中々に御氣の方勝ち玉ひて、自然御身體に御無理も多く、爲めに突然にはげしき病に冒され玉ふ事もあらせられ候。

父上様には、四月頃より御風邪の爲め御持病の腦を惱ませ玉ひしが、當節にては、やう〱御二方様共御すこやかにならせられ候へば、御案じ遊ばれまじく候。姉上様には、御企望の産婆學も、中々おぼしめし通りにも運ばせ給はぬ由なれど、院長様初め御家内様方の御氣受もよろしく自然御志し遊はす御研究の外に、重症患者の御みとりや、此の程は又御嫂様御輿入れに就ての裁縫迄も御頼まれ遊ばされ候よし、いつぞやの御

文にて承り、かゝる事もよろこばしき事と存じ居り候。父御成業なもどかしうおぼし召され候も御もつともと存じ候へども、全然別業と申す譯には候はず、看護法又は産婆に就ひての實地研究も、他の方よりも多く出來候御事と承り居り候事とて、餘り事なせかせ給ひては、却て後の御爲めにも宜しかるまじく存ぜられ候に付き、此方御兩親樣の事は御心配遊ばされず、御修業のほど祈り居り候。申し上げ候迄もなく候へども、殘暑もはげしき折柄、折角御いとひ遊ばされるべく。先は當地の近況御しらせ旁拙なき筆に心のほど申し上げまゐらせ候、かしこ。

友の許に送る文

越後　前崎照子

久しく御かんばせも拜しまつらず、いと／＼御なつかしく、日々御うはさのみいたし居り候へども、しろしめす如く、母の留守中にて、御伺ひもいたさず、打ち過ぎ候處、御許樣には、先つ頃より御心地例ならず在しますよし、いと／＼おどろき申し候ひぬ。わきて、秋さしいへば、こと無き身だに打ち沈まるゝならひなるを、まいて、御いたつきの床にうちふし給ふ君には、さこそ淋しうもわびしうも思させ給はめと、おんいたはしく存じ候。心つようもたせ給ひて、一日も早くいえさせ給はんことをこそ祈り奉候。なほ日頃好ませ給ふ庭の白萩、み心をなくさめ給はんすべにもと、一枝をりて參らせ候。妾たゞちに御枕べ近うまうのぼりて、及ばずながら御なぐさめ言をもきこえ上ぐべきを、今日はやみがたき事いで來て、まゐりかね候を、ゆるさせたまへかし。近々内にはかならず伺ひまつるべく。かしこ。

暮秋の夕

雅子

ものかなしき秋も今は早や末つ方となりけり。一條の河水に都のちりを隔てたる里に秋の名殘を惜しまばやと哀れは一入まさる夕に清けき里のほとりさまよひぬ。

かりつくされたる稻田にさびしく立てる案山子のおもやせて弓もつ手も力なく、道ばたには枯草たをれ伏したる中に菊のみひとり霜におごれるはいとゆかし。

むさくるしき賤が伏屋もたつた姫の織り給ひつるいともうるはしき錦もてかざられしと見しはすでに昨日なりけり。今日は情もしらぬ木枯に道もせに散りしきて露のやどれるは恰も錦に玉を置きしが如く土に汚れし下駄にふみくだかむ事の心なさに足のはこびもたど／＼しき折から深山に聞ゆる鹿の聲も弱りはてけるぞかなしき。

野邊にわけ入れば衰へはてし草むらにすだく蟲の音いとほそく枯れはてゝ力なき女郎花色も香も失せて見處もなき萩が花などは病によわりしたをやめの今や息もたえなむ樣にも似かよひつべくや。衰へはてし薄はいと苦しげに細りに細りて手もてうち招くにさそはれゆくかぎり／＼すの風のまに／＼吹かれゆくぞいたましき。あはれ悲しき秋の暮よ。あはれ心ぼそき秋の末よ。あゝ我は一夜をこゝにあかすとも名殘はいかでつくべきかは。寒けき夕風の木の葉を伴ひて吹きくると共にいとも妙なる琴の音はかよひきぬ。

主やいづことあたりを見渡すに大方は賤が伏屋のみにて琴などしらぶるみやびわざする人あるべうも思はれず。

さるにても 其ゆかしき 音はいづこよりぞときけば 我右手の方のやうな

り。いざたづれてましと右の方に向ひゆけばうれしや音はやう／＼近くなりまさるなりけり。

紅ふかき紅葉は夕日に一入てりそひ、其もとなるまがきのあたり、黄菊白菊ひとり霜にほこれども枯れくちし桔梗は今や倒れなむとばかり吹く風いと心ぼそし。

琴の音は此まがきのうちよりぞ聞ゆる。

今しらぶるは桐壺とおぼしく、其妙なる音は峯の嵐にかよひ、松風にむつび、其うぐひすの初音かとうたがはるゝ聲は弱き蟲の音に和し、雲井はるかに雁がれにかよふ。

『桐壺の更衣の比翼連理のちぎりもさだめなき世のならひとて夢の間ぞかなしき。

おもかげは夏蟲の身よりあまる思ひをばいかで人にかたらむ。

秋の夜は更けゆき、月は西にかたむく、松風や波の音、鹿のこゑぞさびしき。

うるはしき聲は次第にふるへり。はてはかすかになりて しばしとだえぬ、如何なる思ひに苦しむか。

やがて心やとり直しぬらむ、又つゞけぬ、されど其こゑの何となく曇りしと聞しは心がらにや。

迷しるべせし小君のなかだちにひかれて、ゆくえ迷ふか空蟬のきぬのかなりぞゆかしき。

たそや今宵、小夜ふけて、柴のとぼそをたゝくは、尾上おろしのおとづれか、水雞のつゞるこゑ／＼か。

青柳なかた糸によりて鳴けや鶯、うぐひすのぬふてふ笠は梅がえだの花笠……。』

田家のけぶりの末ほそく次第に消えゆくがごと、しらべは漸々にやみぬ。

一曲のしらべ終るまで一種の感にうたれて、夢ぢをたどる心地せし我は初めて心づきぬ。されど我耳には其いかに心なき身といへども悄然とたゝずむらむとぞおぼゆる音は未だひゞき渡れり。

さるにても我心をよはしめし主やいかなる人ぞ。興多き事と知りつゝも垣のすきまよりのぞきぬ。

こなたに向ひたる様がはの軒にしのぶをつるせるが黄ばみて無情の風にさそはれんとす。其下には立派なる琴をおき、座せるは即ち此音の主なり。年の頃は二十才ばかりにやあらむ。色青ざめ衰見ぼらしうやせほそりほゝの肉こけてさながら先の野邊にて見し女郎花にも似たり。されど其えがけるが如き眉、愛をふくめる口元などにありし色香のなごりを止めていとゆかしげなり。かみは流石にうつろはで黒くつや／＼しきを島田に結ひ、一すぢ二すぢこぼれかゝれるもあはれなり。

吁、かゝるしづけき里にちりの世をはなれ琴をしらぶるさはさてもやさしきかな。さぞや樂しからむなど思ひしにあらいたましや涼しき兩の眼はしひて物のあやめも見えわかぬなりけり。

あはれいかばかりいたはしからむ。見えぬ目のほとりに露のやどれるははかなき不具の身をかこちてにやあらむ。さては先のほど聲のふるひしも音のとだえしも理なる事どもや。姿のやせほそれるはあまたの心配の重なりてにやあらむ。誰が目にもあはれと見るにまして其親なる人はいかばかりぞと哀なか／＼に深し。

ゆかりもなき我さへ袖に時雨のふりかゝるなりしも、出できしは母親か。四十路ばかりの上品なる女手に大きなる梨をもちてきぬ、美枝子よ、今しがたくすしの許より、ききめいちじろき目藥をうけて來たれば試み給へ。又この梨は隣にて求めけるが形いと大きく味殊に美し、一つ味ひて

はいかゞやとやさしく云へば目しひの乙女はいと嬉しげに、さほどまで種々心つくし給ふ事のかたじけなさよ。御心づくしの目藥ありかたく、試み申さむ。みめぐみのこもれる梨、うれしくたふべ申さむ。たゞ恨めしきは其高恩にむくひまつる事をえぬ身を如何にせむ。と。あはれいかに優しき言葉ぞや。老女は見るかげもなき乙女の姿をつく〳〵とながめやりて、はふり落る涙をおさへ、又してもさる心づかひ。和女が斯るはかなき身となりけむも皆此叔母の爲ぞ。そなたの憂き目見るをとく知りなばなどて不具の身となすべき。思へば亡き母上のいまはの時くれ〳〵も御身の上をたのまれしは承知したれど後添の女殊の外心よく、父上もたび〳〵ほめられ、近所の評判にも誰一人にくむ者なき程なりしかば我も心ゆるして和女をまかせ置きしがこれぞ我一生のあやまりなりしとほつとばかり吐息つきぬ。やがて又言葉をつゞけて、其まゝ母、うわべはよく飾れども、心に針もつあざみの花の如きを誰かは知るべき。ほどなく一女子を設けしより如何にもして己が産みし子をして此家をつがさばやとの念はますく切なるにつれていよ〳〵和女をにくみしも露ばかり色にあらはさゞりしぞいかに惡かしこかりけむ。かくして人の信用を厚くせし後、やがて地金をあらはし、罪も汚もなきおん身に汚名をきせしめしのみかは遂には不具の身となしぬ。さるに和女のやさしさよ。少しも母を恨まず、離縁せんとせし時など「母上も元より我子を愛する情の切なるよりいでたる事なれば愛さへ去らば何の亂かあるべき。人の信ぜし母上を離縁せば世のきこえも如何あらむ。殊に父上のめでたまへば何とぞ止まり給へかし。」さ云ふに離縁もせで和女はわが方にひき取りぬ。あゝ無垢の愛娘をきずつけられし母上のみ心やいかに、さだめて草葉のかげより我を恨みてや いまさむ、あれほどまでに頼まれつゝ和女を不具者にせし我罪いみじとも いみじ。亡き母上に何の申わけかあるべき。

よろづ此をばの惡しき故ぞ。和女もさぞ無念ならむ。あゝゆるしてよとむせびつゝかたりぬ。泣きつゝわびぬ。今しも夕日は山の端にしづみてふくろふの聲ものすごし。乙女はいとゞたえかれて泣きぬ。やうやう涙をはらひてくもりごゑにあな勿體なや。をばの君に何の罪かあらむ。我身こそ叔母君のみ心なやめしむる罪ふかさよ。ゆるし給へと言ひしのみあとはたゞ泣きき。叔母も涙をぬぐひ、こは又思ひもよらぬ事をきくものかな。などて和女に罪のあるべき。然ることに心いたむるものから此頃のいたくやつれしよ。心丈夫にもち給へ。今にも元の身になさむを。藥石は用ひつくし、くすしは名師をきわめ、朝夕神佛はいのりたえせぬまでの我まごゝろ、よも功なき事はあらじ。それにてもなほ功見えざれば人生五十には間もなき我身をすてゝも行末のぞみ多き和女を元の身に復せしめでやは、ゆめ心弱くな思ひそ。日々體こえて健かにならば我はいかにうれしからむ、なき母上は殊によろこび給ふらむ。これぞ我第一のねがひ、決して心をなやまし給ふなと世にありがたき情の言葉に乙女はいかばかりうれしかりけむ。感涙たむせびつゝ、さほどまでの御情いかでか仇になすべき。近きうち必ず元の身にならむやう心がけて亡き母上やをば君のあつき情にむくひ奉らむ。み心安くもち給はれとまごゝろこめし言の葉に伯母はいたくよろこびて、おゝよくぞ言はれたる、あなうれしや。いざ、ひもじからむに、とく夕げを終られよと乙女の手をとりて立ちさりぬ。あなあはれ、談のやうすにては此乙女元は人なみの體なるのみかは、其美はるかに秀てたらむを、浮世かな、花をちらす春の風、月をかくす秋の雲、非道なるまゝ母にかゝり遂には一點の汚だになき身に泥をぬられ、あまつさへ、きずつけられし其心のうち、如何ばかりぞや。墓地にねぶる母の無念〻いかに、さだめて安くねむられず。たましひ宇宙に迷ふらむ。

さはれ、叔母なる人のあつきまごゝろ、よも功なき事はあらじ。今にも元の體に復しなむ。心安くもち給へ。あゝされどされど、如何せむ、眼は再び開くとも元の淨々無垢の體にはかへる能はざるなり。あはれ可憐の乙女よと袖をぬらすひまもなく〳〵たゝずみき。

日は少しの餘光ものこさず、くれはてゝあたりはほの暗くたゞ雲間いでたる片破月はいとかすかにてらせり。

早や出家に火とぼせり。夜更けては恐しと名殘はつきせぬ家のうちを眺めやれば汝も昔やしのぶ草風のまにまにちりゆくめり、つま琴は主をまちがほなり。いざさらばなつかしき琴よ。あはれの乙女よ。たのもしの叔母よ。さらばよと涙の玉かたみに止めて再來をかひ立ち去りがたき足をしひて運ばせかへり見れば今は火やとぼしけむまがきのあたり光さすなり。

仰げば影あはき月心ぼそく、伏せばたえ〴〵の虫の音いと哀なり。一しきり身にしむ風の楓林をさわがして、もゆるが如き紅葉の、三ひら四ひら、わがびんのほとりなかすめ去れば無常をやつぐる遠寺の晩鐘。

うつしゑを惠まれしに

下總香取郡
多古町島　郡司文子

なさけあるみ玉梓はかすく〳〵穫れども柳が枝に櫻の花をいだきたる候處こたびはなづかしきおうつしゑ拜しまつることをえて日頃のいたづきも薄らぎしやうの心地し侍りぬ繪やかく八重の潮路をへだてぬれば只々これのみが心やりのすべとも相成候ものゆゑこれよりは日がな〳〵御物語り仕るべく候尙此の上にはいかに百里の潮風つよくとも相互ひた結びしつなのたわまぬやうにとこそ祈り上げ申し候へ　あなかしこや

尙々厄介ものも最早おいとまに間もある間敷候へども早きが上にも早かれとそを捨てむためこゝ少しの間かれての處へものするつもりに候まゝ御寫影は肌身につけて御同行相願ひ共に好風景を樂しまむ心ぐみにて候さ候へば妾のはかしこにて寫し候て御許にまゐらせんはどに何も委しきことや其のをりの摸樣などは一々そが切なき口もとより聞え上げまをすべく候又々かしこ

梅雨の頃遠地にある友の許に

大分　藤崎しづ子

梅雨の頃とて木々を梢を吹き渡る風のいと心地よく覺へ候折柄御許には如何入らせられ候や定めし御機嫌よく御勉學の御事と存上候次に私にも幸に變りなく過し居候まゝ憚りながら御安心下され度扨は其後御樣子伺ひ度存し居候ひしも何くれとなく忙しく實に心外の御無音致し候段何卒御情ふかき御心もて御見のかしの程幾重にも願ひ上候思ひ廻せは御別れ申てより早や三年にも相成候へ共猶此間の如き心地致され共にむつびかたりし折の事ども思ひ出されていとゞおなつかしく存し候御許樣にはたゆまず奥深き學びの道をきはめさせ給ふ御事と殊に御羨ましくこたび女子大學も開校に相成候故兼々通り進ませられこん春は御入學なさるべき御心組みならんと御羨ましく存候心のみはやり候とも身體虛弱にては致し方御座なく候まゝ今より其御積りにて御勉學なさるべく願上候昨年より當地にも高等女學校設立に相成候まゝ是非入學致し度存居候ひしも一年生のみ募集され口惜くも思ひ止まりて裁縫の道へ志し候へども不束なる身の進みし事も思ひ侍らす年のみ積りゆきて實に殘念に存じ候何とぞ御いとまの折々は學びの舍の御樣子御洩し下され度候

普通文

第一等 秋夜の感想

（賞品圖書切符金三圓）

壽美禮

萬籟やみて明月ひとり仲天に高し、蟲の音露の色こと〳〵しういはずもがな、こゝは都よりほど遠き北信の山家、うしろには越の山高う聳えて、月またかしこの峯に落ち、日も光をかなたへ沈め給ふ、優なれや京の鴨河の秋ふるき夜、なまめかしき三絃のねに憂世の涙わするゝ事あらんも、松の音ならでは傳へきゝがたき山住の淡の流を自然の樂にくらぶるかなしさ、嗚呼寂肅また寂莫、この時都こひしう父母こひしう、友のたれかれなつかしうして、疊六の天地將におもひに狂はんとす、ふと傍にねむれる幼な子の、母が悶えを知りたるか乳を求めて泣く音たかし、汝もまた仲秋北信のあはれに感じたるや 見よ燈火油つきて汝が面影幽かなり、我がいとしの子よ、汝よりは先きの〳〵世いかにさびしき夢をくりかへし、いかに悲しき秋をうたひたる人ありしをおもへ、母がいまよむ平家の歴史、これが滅亡のそもや種子なりし福原遷都のありし年、幾春秋王城の月花にしたしみたる公卿雲客の、いづれも〳〵舊懷の念にたえずして須磨より明石の浦傳ひ淡路繪島が磯に秋のあはれを恣にしたるが中、さても德大寺の左大將實定朝臣のやさしかりけるよ、君は名所の月に猶おもひを滿たす能はずして、新都より京に上り、あさましき變遷の哀れに泣き給ふ、まことや門前草深くして庭上露しげく、黄菊紫蘭の野邊となりて、玉のうてなの面かげだになし やがて近衛が原の大宮御所へましまして「ふるき都を來て見れば」と今樣三たびくりかへし給ひつる御聲、幾よ幾とせ後の世かけて、おなじあはれになく人盡きじ。

我はうらやまじ花のみやこの、よしや消息絶ゆるとも、こゝ山莊の荒れたる軒、なほきわまりなき秋のなさけはあり、千草の露を玉と見て、蟲の聲々琴とやきかむ、それよ汝が枕べになく蛬の啾々たる聲、唧々たる音、何ぞわが愁思をまさしむる事の多き、幼子母の物語をきゝつゝ乳にあきてまたすや〳〵とねむりぬ。さても春

ならぬこの夏夜、鵑聲、雲のあなたにきこえて、わが幽かなる詩情いふなくあはれを覺ゆ、そもやこの鳥、花の爛發を見すてゝ、再び秋の悲劇に自ら泣かんとす、きるまゝほしきは、これがものがたりなり、いかなれば雁金よ、うきよは花に狂ひ、紅紫のにほひに戯はむるころ、去つて他邦の冷めたき天には鳴ける、二十四絃夜月に彈じてさしまねく佳人なきや、水絲に砂あきらかなる岸べまた乏しといへるか、やさしき哉 汝もまた喜ひの笑みにほゝゑまんより、世人と共に悲しみの涙を味はんとす、歡樂きはまつて哀情多し、人世一たび春のなさけに狂へり、こよひうき秋の寂しさを知らでやは。さりながら怪しきは西の國のうた人なり、彼は月の明らかなるをいへども、これが悲觀の風景をとかず、彼はローズの紅ふるきをいへども、ちりゆく花の風情をいはず、ゴールデンオートムとよろこびて、黄色の野邊をたのしみ、木々の實果をよろこびて、むなしう冬にのみ泣かんとす、詩趣何ぞかくも異なれるや、さらば、明月の影をいだきておもひになやむ處女もなく、過雁窓をすぐるゆふべあはれに泣く官女もなけむ。

こよひ、江上に舟をうかべる人、玉樓に月見の宴まうくる人、とほき異國にものまなぶ人、さては墓所に斷腸を訴ふる人、翠帳紅閨にむつまじくかたらふ人、こひになく人、餓になく人、世態萬々なるべしや、さてもわれ大宮が琵琶の御調を追想して、左大將殿がやさしの詩情になきぬ、天上の月あざけりて曰く、愚なる下界の女よ、汝北信の山家に筆とりて、都乙女が才ときそはんとす、淺間しき作者たらんより、すぐれる讀者となれ、我答へて曰く、故一葉が「やみ夜」「たけくらべ」もみつくせり、再び此の如き女性をくだして、餓えたる詩界をにぎはし給へ、さらずは我、筆のいのちも絶ゆる迄あやしの文字したゝめてんと、折しも明月村雲にかくれて地上やみにうつらんとすれば、山おろしさとふき來りて、われ知らぬ間に夢のうつゝにぞ入りにける。

評、作者の文は、才思湧き、筆致巧みなり、此の一文は、閑筆に過ぎざるべけれど、其文章に老熟せるを見るに足る、才筆、々々、（日東）

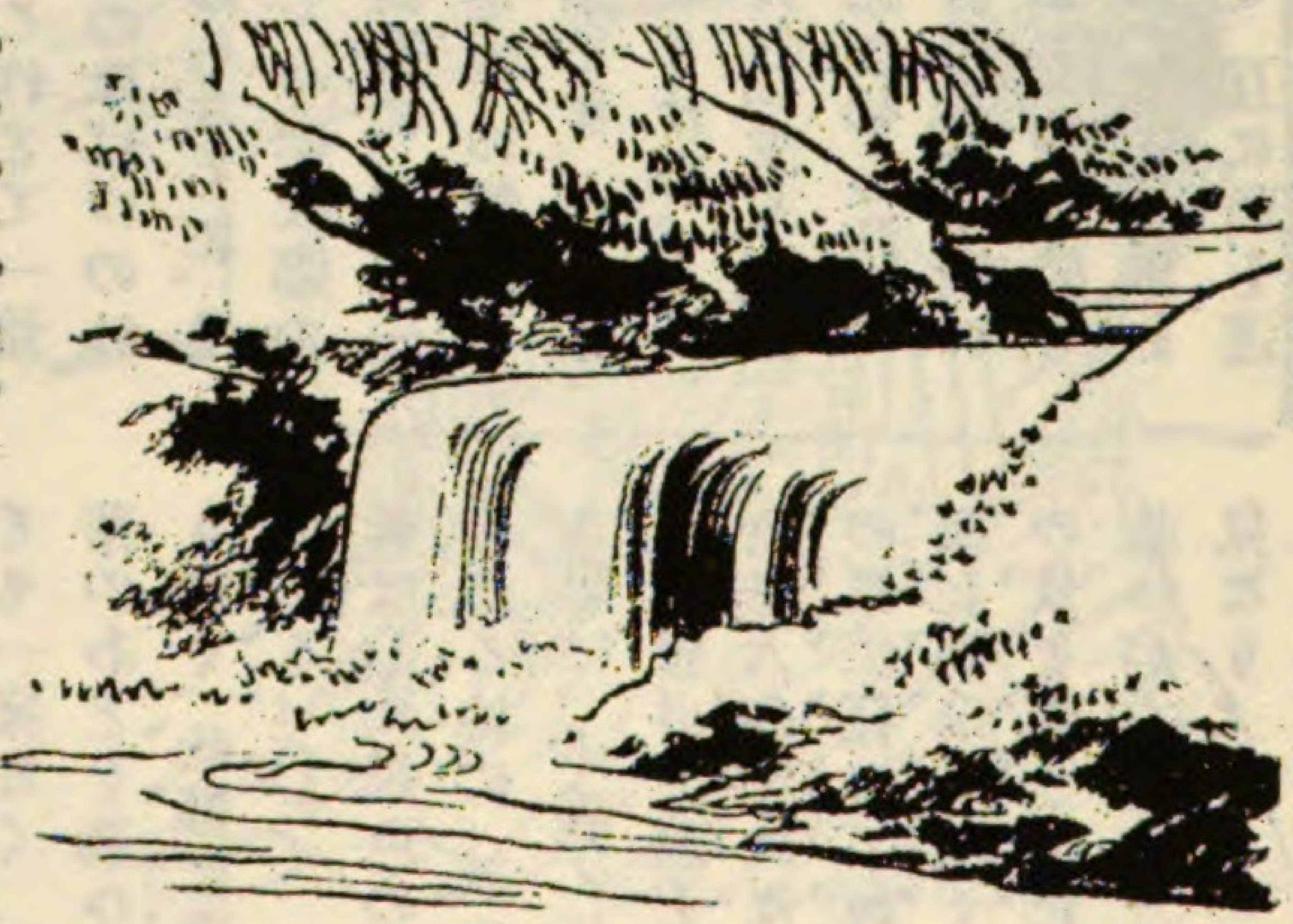
第二等（賞品圖書切符金二圓）

竹を植うる詞

神田區東紺屋町三番地　青木とく

鬱々と聳ゆる樹木を見ては、嚴なる心を起し、咲き匂ひ

たる櫻花を見ては、勇しき心を起し、香ぐはしき梅の花を見ては、清き潔き心を起し、露に濕ふ千草を見ては、やさしき心を起さゞる人なからむ。げに、草木は、人の心を動かすものなりけり。かゝれば、その、莊嚴、華美艶麗、淸潔、優美なる所を愛するあまり、家に名づけ、號となし、名となして、その草木を玩ぶもの尠からず。みなこれ人々の目を樂ませ、心を慰むるによりてならむ。われ早くより竹を愛すれば、庭の内は、種々なる竹にて埋まむばかりとなり、倦めるときは、これを見て樂み、暇あるときは、これを培ふを樂みとせり。そも、竹は、芽は食となり、幹はさまざまの用をなし、姿は直くして曲れる所なく、强風これを吹けどもさからはず、積雪これを埋めども折れず。また、月影に窓うつ姿、雨中に立てるさまなど思ひ續くるに、かくばかりをかしきものはなし。これを譬へば、實用をなすは、智あるが如く、姿の直きは僞なきが如く、靡きて爭はざるは、大度あるが如く、撓みて折れざるは、忍堪に富み、その幹の剛ならず柔ならざるは、道の中庸を得たるが如し。げに、君子、烈婦の德を備ふといふべし。わが、竹を愛するは、全くこれがためなり。折にふれ、憤怒、悲哀、怠慢の氣、生ずるときは、庭中に坐してそのさきに接すれば、誠ある朋友の諫むるが如く、慰むるが如き心地して、いつしか、その氣も失せて、幹のすがすがしきが如く、心の中も朗かになりて、一物の心を煩すものなきに至る。あはれ、昔、賢き人の竹の林に遊び、貴き人の竹の園を造りたる心は、いかにありけむ。



評　文簡古にして、條理井然、綽々たる餘裕を含蓄す、また老熟の筆といふべし。（日東）

第三等　（賞品圖書切符金一圓）

都住居

麹町區飯田町四ノ一山下方　山内すゞ

何に迷ひしわが身なりけむ、天の成せる平和の安樂鄕をふりすてゝ、ことさらに都の空に彷徨し、汗に浸され

塵に塗れて、醉へるがうちに早や二とせ三とせを過しけり、榮華の樣の見たきためなりしか、さにあらず、富貴の人を羨みし故か、さにもあらずして、たゞ一點心を磨くことの叶いもせばと望みしなれど、これとて一場過眼の夢に似て、徒らに破れし窓に行末の思はつのれども、何時如何になりゆかむ心のほども知らなくに、ます〳〵未來の闇を探る身の、暑さを避けて今年故鄕の地に歸り來れば、滿庭の綠蔭昨日の如く新たに、鷄の一家族は悠然として叢の露に凉めり、淸き泉水の鏡にうつるわが面の、いたくも變りてけりと思ふとき、つらき他鄕の雲に惱みしは、何に迷いしわが身なりけむ。

悲しきにや樂しかるにや都の住居、古の人の「主人と住家と無常を爭ふ」と云はれし事も今更に思ひ知られて、昨日は貸家の札なりしに、今日は美麗の店張られ、明日また如何なる人とかはるらむ、遠き親戚より近き隣と云はるれど、隣の人も朝夕にかはるならひ、壁の一重をへだてゝは、千里異境の人とのみ思はれて、互に軒を連ね一井の水を酌み分つとも、更に親しむなく情義と云ふこともなし、恒產なく恒心とてもあらざれば、幾萬の警官、夜の眼を合さず街頭に立ちたりとて、新聞に强盜殺傷の記事の載らざる日なく、新聞に亂行を書き立てられしとて、知るべき隣の人もなく、まして遠きものゝ知る由なしとにや、耻も不德も心にかけぬべし、いと淺間しき事の多くして、夫婦相傷け親子相訴へ、一人ありとも一家なく、一家あれども隣人なし、人はたゞ一睡豪華のあとを慕ひて、成敗榮枯の影も、またゝくひまに移りゆく、此都に暮らす一日は、田舍百年を縮めたるにも似たるべし。

美はしき景色のうちに、温かき人の心も誘かれて、永く住まる地に、誠の苔も生ふるなれ、徒に騷がしく、忙はしき里は、不義に汚れはて、憐れの者はありとて心ある人も强いて淚を隱すなり、人はたゞ虛僞の化身にて、景色は人の手になれる造り花にも似たるべし、漂ふ浮萍の風に任せて趣くをは、情もなく淚なく、恰も冷たき鐵板を挾みし如くにて、情ある者は顏を掩ふて過ぎ、自然の景も塵と烟に埋もれたり、一家相寄りがたく、隣人相救ひがたし　己は己より外賴むかげなき世界のみなし見なり。

實にや田舍の生活は、長汀曲浦の旅に似て、都は萬里沙漠の隊商よりも哀れなり、湖處子は云はれき「逆旅に生れ、下宿屋に育ち、酒肆に祝言し、假住居に迷ひ、病院に死して他鄕の土に埋まる」都住居の人のおきふし、寔に

一期の命運を此うちに繋げるなり。

然ればなり、生れし土地を迷ひ出で、知らぬ他人の間にわが身を寄することの、一きは胸に悲くて、たゞ異國に身を置く心地せられぬ、嬉しき折も哀れの時も、語るに人なき寂しさの、わが身にあまりては、夜半の夢にも入りて、ひたすら故里のみ戀しく、春花秋葉さては朝の雲夕の雨にも、思ひに惱む時の多かるに、好んで此地に來りし事を思へば、知らずまた捨てがたき節の多くてにや。

思ふに、都は智識の人にして、田舍は感情の人なり、人喚き車軋り、蒸汽機關の煙は市街を掩へども、鳥鳴き水流れ、緑の山は村落を繞りて立てり、都の人はよく爭ひ、田舍の人は長へに和げり、あゝされども智識は都にあり、汚れたる都にあるなれば、如何に心寂しとてものうしとても、この世に智識を磨かむ思ひのせらるゝ者は、まづ此淺ましき地に入らざるべからさる事のうたてさよ、とはいへつらき涙の流るゝ時は、はかなき心をふりすてゝ、疾く故里に歸らむなり



われ郷をはなれて此悲慘を眼の前に見るに及び、初めて同胞の頼むべきを知り故郷の人の愛すべきをも知りぬ、嘗て家庭にありし幼時、見る影もなく窶れし一人の盲父が、十歳ばかりなる女兒に手をひかれてわが家の門に佇み、一椀の餐を求めし時、はじめて此世に涙含まれしが、塵ふかき都の巷に跪き、人の子を借り來りて、行人の哀みを俟つ老婆のあるを聞けば、いたく僞り多き世をも悟りぬ、都はつらくとも、われには變らぬ自然のふる里あり、山緩く水舒びて、鳴く鳥咲く花の笑ふに任せあり、さはいへこの澆季の都に生れし人の、世は皆かくあるものと見做しつゝ、頼まれぬ世の人を頼み、東西にかけちがひ、艱難の波に漂ひて、心の安きひまもなく、生涯を迷ひ暮さむ都の人のうたてさよ。

評、田舍住に慣れし人の、一度紅塵萬丈の都合に出でば、誰れかは、一種の感想に打たれざらむ、この文は、這般の感情を描出せろもの、文章艶麗にして、情味津々、讀者をして同感同情をば

しむ　（日東）

第三等　（賞品圖書切符金一圓）

名なき草

和歌山　吉田わか葉

朝來小やみもなうそぼふる雨に、隔てられてや友垣の一人も今宵は訪ひ來らで、いとゞ無聊に絶えがたきまゝ古き雜誌など取り去して見つ。中に怪來師とか云ふ人の文壇風聞記のくだりに『なき一葉に心寄せし人は數多くありしかど、一葉は依然眉山を慕ひ眉山も亦一葉を愛して互に想ひ想はれてしが、眉山があまりに詩人的なりし爲、遂に二人が燃ゆる許の戀も得とげで一葉は遠焉他界の人となり、眉山は其の後怏々苦悶やるせなく酒量頓に増しゝよし聞きて、思はず吾身に抓されてにはあらねど拳骨に涙たちひき』の一節あり。讀終りて吾胸のあやしくも躁くを覺えき。

あゝ指かゞなふれば早五ッ年の昔となりぬ。わが從兄に春雄の君とて、われよりは三ッ許年上なるが、いと幼きときより二親に分れて、わが家に養はれて居たまひけるが、こよなくわれを愛みたまひて、小川に小魚追ひ、森に蟬とるときさへも吾を伴ひたまひ、學の窓に入りてよりは常に机を列べて、あるは算術あるは書取などいと懇に敎へたまひぬ。

されば、われも亦君を兄とも敬ひて事へまつりければ、二人が仲はいと〳〵睦じかりき。

あゝされど〳〵滿ればかくる世のならひ、君も老少不定の數にもれで、峯の櫻も早散り失せて、人々春のはかなさをかこつ頃、黑雲空に覆ひ廣どりて、飛雨蕭々窓の戸をたゝく夕暮、血に啼く杜鵑のしのびね先だてゝ、歸らぬ旅にいで立ちたまひぬ、あゝ花の蕾の十五歳を一期として……。

其時の姿が心……年頃兄ともたのみ、妹とも愛でられたまひし君の……あゝその時の姿が悲哀……。今にいたるまで、五年のとし月つかの間も忘られて、雪、月、花、いづれも淚の種ならざるはなく、鎭守の守、背戸の小川、水吉の山など見るにつけても昔の樂しき夢くりかへし、そよ吹く風に四ッの袖袂へしながら、松靑く砂白き北濱の渚に、貝殼拾ひてかたみに美しきをきそひうらくと暖けく照る春の日、與田山に遊びて互に摘とりし茅花の數多きを誇り合ひし事など、思ひ出でゝは

袖ぬらしぬ。」

あゝ張る熱血を抑へつゝ、燃ゆるばかりのおもひを得とげで、遠き冥路に旅立ちし一葉が、心の中は云はずもあれ、かたみに思ひ思はれてし彼の君は、早此の世の人ならで、天外萬里呼べど答へず、叫べどいらへなし、あゝ破れにし淸き戀に泣く若き文士の心……。

あはれ、そも如何に！

年端も行かぬ吾等二人、もとよりもの丶哀れも知らねば、戀などのあるべきやうもなけれど、尙かくばもの悲しきものを。

夜三更、月黑く風死して草眠る頃、獨り彼の君を思ふて夢なりがてに、うら悲しくも人知れず、涙に枕をぬらしやしぬらん。

中宵燈を挑げて、机には向ひぬれど、心の憂鬱やるせなく、文遂にならで、何處ともなくさまよひ出で丶、思はず彼の君の墓所にいたり、綠蔭苔なめらかなる處、冷けき君が一介の墓石いだいて泣きぬらん文士の心……あはれ。



再びくりかへし讀みて、われはかゝる想像にふけりぬ。

一滴二滴又三滴、熱き涙は溢れてわが頬を傳ひつ。嗚呼拳骨に涙拭ふはひとり怪來師のみかは。

堪え得でわれは、窓の戸押し開きて外面を眺めぬ。雨は尙やまで、夜の衣は一しほ黑く、築山泉水など皆この中に葬られ、あたりいと靜けくて、聞ゆるものは、唯蕭々木の葉をうつ雨の音のみ。

折しも螢一尾、いづくより飛び來りけん、燄々の靑き光、すつと雨中を飛び行きぬ。

あゝ是れわが春雄の君の魂か、はた亡き一葉のひとだまか—淸き戀に燃ゆる—。

怪しのとゞろきは尙もわが胸に高くひゞきぬ。

評、文壇風聞記に載する所の事實は、いかほどのものかは知られど、作者が純な戀の物語は、一入愛らしく見ゆ、文また詩趣を帶びて、讀者を厭かしめぬものあり　（日東）

秀逸

樂しきこの夏

埼玉縣南埼玉郡岩槻町　大亦たか子

なき母君が讃愛の朝顔、つゆふかき笑顔うるはしく、涼根ゆたかに咲きいでつるに、朝ぎよめとくなし終えて、竹縁の下にながむれば、青葉をわたるすゞ風に、遠り香さへにきこゆなり、あはれ、こぞとはかはらうへ、に樂しきたのしきこの夏のあしたよ。

東の山の端あから、霞をわけてさしのぼる朝日のもとに、にほひ出たるさくら花の、えんにうるはしきは、いはずもあれ、けふみずばあすは雪とぞちりぬべしと、みやびたるおたりはさらなり、老もわかきも、瓢のちりなど打はらへば、手飼の猫もそゞろに心うかれてや、花にむつるゝ蝶の夢、おどろかすなど、生あるものゝほどは、いづれも樂しみの色、さゞめきたてるなかに、あはれ、霞にわらぬ吾眼のくもりをいかにせむ、いつくしきすだの櫻も、牛島の藤も、たゞ墨染色の心地して、戀しき母君の、いまぞかりし昔の春のみ、おもひいでられて、ものかなしう、あかしくらせしこぞの春、おもへばきのふの夢の心地せられてなん。月にも雪にも母いまさばと、おもひなげかれしきのふを、一よのゆめと、わすれはてしとにはあらねども、うきを常なるよのことわり、いさゝかもおもひさとりては、いたずらにはた何かなげかん、樂しむべきをたのしみて、心平らかにあらば、草葉の下なる母のみたまも、み心やすうおぼしたまわん。

わらはが、かなしき母君とながうわかれまゐらせしは、こぞ如月のなかばなりき、ことしきさらぎ末の四日といふは、新に吾母を仰ぎまつらん君の、はじめて吾家に入りませし、うれしき紀念の日なるよ、なき君よりは、また大御齢もいとうわかく、おはして、さらによろづまめやかに、かう年たけにしおろかのわらはをも、まことの子としも、いつくしみ給ふぞありがたき、あはれ冬枯のけしきさびしかりつる吾家の庭は、ふたゝびのどけき春の、み光あまねくて、梅も櫻も一時に、匂ひ出たる心地せられにき、梅のかほりもえならねど、櫻の色もいつくしや、一家團欒のたのしみに、かゞやける眼をあげて、外の方見いだせば、あな千代松が枝に、かゝれる藤波の、ゆかりの色もめでたけれ、かしこけれどもやでとなきわたりには、萬世の礎いよゝゆるぎなき、おのこみ

とさへ、おれませしてふられしさ、よろこばしさ、何にかたとえまつらむ、軒端にたかく旭のみ旗かゝげて、赤の飯など炊かしぎて、うからやから打よりことほぎたる、いづれかたのしからざらむ。

親しき吾友どちの、其はらからの君の上、ものがたり給ふ毎に、あはれ弟妹のひとりをと、わらはに授けたまふ、やさしの神もと、日頃祈りしゑるしにや、母君の、此頃ふくよかにおはして、さきつ日には、つゝがなう帶の祝も、とりしたゝめつるうれしさよ、樂しきことしの終りには、わらはも姉とよばるゝ身となりてむ、楓の手ふさ、花の含の口元、いかにゆたかなる頬の、薔薇色して、星のやうなる眼の、いかに愛らしかるべき、をなごならんか、否男なれかしなど、理想をかたれば父君の、樂しげに、男ならでいかにせむ、あはれの男兒あげて、み國の爲、さるべき程のものとなしてむ、軍人にやすべき、實業やよけむ、などからからと笑ひ給ふ、文にもあれ、武にもあれ、指折るに、一とかぞまへらるゝほどの人となさばや、あはれ愛らしの吾弟、武一とや名つけむ、文一とやよばむ、いざ母上はやううみ給へなど、母君をのみ困じさせまつるもおかしや。

おのがしゝ、一日のわざなし終えつる夕まぐれ、父君がものせし夕顔棚の下、蚊遣の煙はつかにもれて、味酒の香もたかくきこえぬ、母上の手料理、品少なくとも、まことの味は、都にもいかで求めえむ、いざ父上盃あげたまへ、わらは御酌まゐらせむ、月もよゑ、風いと清し、いづこなるらん笛の音のきこゆる。

評、虚飾に過ぎるの嫌あれど、樂しき夏の日と、平和なる家庭を描くに巧麗の文詞を以てせるは、讀者の意を惹くに足る

（日東）

秀逸

後午

周防國山口町竪小路福島樣方　井上靜枝

今日は舊八月十五日、八幡の祭禮であるから、村の少年少女が、皆美しい衣裳を、一年に一度か二度しかださない樣に、仕舞ふてある簞笥の底から出して、今日を晴と飾り立て、皆見物にゆく。我は、元來そんなことが嫌であるから、家の中にたれこめて、文計り讀んで居ると、どうも、頭痛がして堪られない。少し氣を散らさうと庭に出た。こゝには近頃家を建てるとかで、材木を集めて、大工が頻にかん〳〵やつて居る。それに腰かけ

て四方を見まはした。こゝは數年前までは、牛馬の通はぬやうなところで、草計り茫々と繁つてゐつたのも、文明の恩澤がこゝ迄及んで、鐵道の停車場が出來てからは、俄に家が建つて菓子果物など賣る家も出來たが、誠に落寞として物靜かなものだ。折々醉漢の罵がきこゆるの外は、何の音もない。一鳥鳴いて山更に幽なりである。見渡せばどの田も皆稻は穰々と實つて、折々ふきくる風に首重げに動くは、近年稀なる豐年たるをあらはして目出たさの極である。鎌携へた農夫の顔迄、何となく喜が充ちてある樣に見える。四五羽の鷄がそこらに餌をあさつて、互に睦く無心の有樣で、折々高くうたうは、誠に羨ましい樣である。されどこれらとて浮世の苦艱は得免れまい、煮らるゝ器ものは現に眼前に横はつてある。しかし彼等はこれを知らないのである、向ふの丘の松の木が或は密に、或はまばらに、低いのもあれば屹然として高いのもある。其うしろの方から、雲がむら〳〵と起るなど得も言はれぬ。秋の蝶の一ッ二ッいと痩たるが、枯れのこつた草の間をとびまはるのも、殊更あはれがふかくある。人生の末路も亦かうであらう。夕榮のある垣根に蜻蛉が二ッ三ッとまつて、折々物に驚いたかの樣に飛び立つ。其下には黍稗がまばらに苅のこしてあつて、むつきが一二三枚ほしてあるなどが、凡て俳句でゞも見るやうな景色である。何か一つうならうと思ふて考へたが出なかつた。ずつと遠くの村の、こんもりと茂つた森の陰に、二軒三軒のわらやの棟が微かに見えて、折々犬の吠聲がきこゆる。このとき滊車が來た、この物靜な天地を破つたやうに滊笛をならして去つた。其滊車の烟がきゆる頃、八甲田山の方を眺めたら、小川に傍ふてある四五本の半ば枯れた柳が、ふはり〳〵と動いて、てふと山も動かすかの樣に見えた。雲が緩く麓の方を立罩めて、上の方の岫からは簇々として色々の雲が吐き出る。眞黒なのもあれば、淡いのもある、佛のやうなのもあれば、鬼の樣なのもある。大きな漢子が鐵槌を持つて立つたやうなのもあつたが、だん〳〵長く〳〵とう〳〵蛇の樣な形になつて消てしまつた。油畵にでもして見たいと思ふて見とれて居ると、熊谷さんが學校からきて、井上さんといはれたからびつくりして、やうやく我に歸つた。山の方から、四五人の村孃が籠を提げたり、叺を負ふたりしてこられるのは、栗拾の歸りであらう。前の方の藪かげで、追分をうたつたのは誰であらう。其聲が誠に悠揚綢繆たるも

のであつた。或は高く、或は低く、餘韻嫋々として、遠くひいて雲の中に入つて仕舞つた。恐らくは稲荷の乙女がうたうたのではあるまいか。

風が漸く寒くなつて、日の光もだん〳〵薄くなつたやうだ。そこらには最前まで居た鷄が一羽も見えぬ、巣へ戻つたのであらう

時に一疋の蜂が來て、我の髮にさはつた、驚いて拂ふたのをしほに、やをら身を起して、この自然の界を去つた。

評、言文一致體は、緻密な事柄を描き易いからでもあらうが、此の文の如きは、正しく精練の作、人をして愛讀せしむるものがある（日東）

〰〰〰〰〰〰〰〰

秀逸

函山の夕景

神奈川縣相模國小田原町字幸町一丁目　杉浦貞子

暑さに咽ぶ夏はきぬ、四方の山々綠深くして、うちょより起る涼風に、飾らぬ袖を吹きはらひ、柴の戸をおとずるにまかせて、おのれ一人宿を立ち出て、そこ、ここと二つ三つ立ちならぶ、茅屋を後に行くままに、閑靜にして、しかも幽邃なる、眺めも淸き蘆の湖は、パノラマの如く我眼前に開けぬ。



あゝ此絶景。

右も左も前も後も山に山を重ね、山にして樹ならざるはなく、樹にして綠ならざるはなし。吹くともなく香を送る風に、自然の酩酊を味ひつつ、淸淨の道を辿りたれど、溺れに溺れはてし我詩腸の、如何でか此活畫に及ばざらむ。折柄の夕陽、此優美しき湖面を照らし、汪洋渟泗、深碧なる水面に、一すじにあざやかなる紅の影を涵して、幾百尋の龍宮界に、さながら仙女の裳を洗ふ如く、加ふるに細漣の夕照の光りに映りて、一波ごとに皆金色の色彩を帶び、點々たる白帆の影は、皆閃々と輝き渡り、群なす水鳥を驚かして歸る、この一瞬。不圖見れば、かなたの山巓の簇々と生ひしげれる松林に光線に彩られたる、一片の浮雲の錦のみ

旗の如く、飄々として其梢になびきわたり。またこなたには、遙々たる一帶の松影の猶絶えず連りわたりて、或は絶崖の一角を縫ひ、或は砂頭の半面に伏し、或は翠華の搖々たるが如く、或は青雲の靉靆たるが如く、遠く岬頭の絶端に及べり、絶端には墨繪の如き壯麗なる箱根離宮の、あだかも水に浮ぶてふ嚴島明神の如く、尨大なる長き影を水面に浮べたる、さながらあやうげにかけわたしたる浮橋のやうに。　四顧の翠緑眉宇の間に迫りて、のどけさ謂はむ方なく、時に暮靄うすく山脚を掠めて、わたり小暗なるほどに、ほのぼのと山の端よりさし出でし、新月の影おぼろにて、年若き女﨟の、心おりけにけはひしたらむ眉にも似てゆかしく、まことに、一幅の山水畫の如く、我も畫中の人となりし心地せられて、心神暖々たるを覺ゆ、箱根宿の方には、堪え間なく、めぐる水車の音の耳朶にかよひざまに、あたりの谷川を流るる水音の琴々として冴えて聞ゆ、實にや、利を爭ふ俗人も、一たび仙境とや謂にむ、此風景に接しなば、榮辱を浮世の外に、忘れぬべしなど思ひやられて、ゆひしらずうれしかりける。　一隊の男女長袖綬帶たがひに尺八琴を打鳴らし、編笠の裡に紅顏をほのめかし、千鳥足を漸くふみとめふみとめ、談語大笑、浮れつつ來るあり、美人老紳士と伍し來り、破笠短袴、一節を手に肩を怒らし、大道を濶歩する書生もあり、籠荷の雲助、犬を呵するあれば、腕白盛りの小兒手をくみ交し、此湖邊を逍遙する外國人の後に、笑ひどよめく、戸ごとの翁媼、弓張腰に手桶を持ち水を撒くなど、まことに其心の同じからざるは、面の異なれるが如く、行き、歸り、騎し、走り、驅り、歩するの人々、ここしばしは現出する浮出の走馬燈、十人十色てふ事の思ひやられて、我知らず微笑まれき。あまりのおかしさに、しらずしらず時をうつしたれば、いでや、これより此なづかしき夜景色をわとに、大空の月影ひとり霽間に淡く冴え渡る頃、いともいとも、おしき名殘をとどめて、歸路につかむ。再遊、再々遊を、この模糊たる風景に誓ひて。

評、函山の風光を描くの文としては、文も想も至らぬものなれど、文詞の間に、多少の詩味を包み、一讀、爽快の感を起さしむ。（白東）

秀逸

漫言數則

名古屋市南鍛冶屋町三丁目拾六番地　龜山音羽子

（一）「人の振見て我が振直せ」實に嬉しくも面白き言葉

なりけり、然れ共つら〳〵今の世の若き人に心を寄せて見やれば、男子にあれ女子にあれ、二三の人々打ち集ふ前を、同じ年頃の人通り過ぎ行を見れば、甲先づ其容貌を評せば、乙次いで姿性を笑ひ、果ては枝葉の笑語など語り出でゝ手にする業の運び遲きをも知らず顔なるを往々見るあり、是等人々の念頭には、人の振見て我振直せの言葉なきものゝ如し、噫、鑑みざるの甚しきかな、世の青年淑女諸氏よ希くは、少しく猛省する所あれよ。

(二)義理と何やら、かゝずに居られむとやら、こも面白き諺なり。されど世は益々澆季に赴き、人は彌々倫常に悖る、歎かはしきの現世なるかな、然るに或人の言葉に依れば、今の世到底律義をもて行くべきにあらず先きの人を押し倒しても己れの利を計るにありと、そは單に山なす黃金の蓄へあれば、名譽、罪障、何を彼も己が自由に成し遂ぐるを得るが故なりと、思へば悲しき今世なるかな、金に眼の眩る人は、人情を知らず義理の有無を辨へず、只々眼中黃金の光りあるのみ、歎くべき事にこそ。一食を與へたる捨て猫も、呼べば優しく答へ、魚骨を與へたる野良犬も、途上相逢ふの折は、尾を振り頭を垂れて、先日の惠みを謝するに似たり、狗猫に於てすら斯くあるものを、萬物の靈ともあらふ人の身の、扨ても〳〵。

(三)、第十號の女學世界は、見るもいぶせき一文をば抱きぬ、そは「投書家に注意す」と云ふなる一頁なり、己れ此文を讀みて、いたく其不德義の爲に泣けり、將た神聖無垢なる女學世界のために、されど寛大なる記者足下は、今茲に詳細記載せずして後日之を發表せんと云へり、吁不德義者の胸中、何等の感かある、沈思默考良心に恥づ、社會に謝し、以て女學世界の他の投書家汚名を拭ひ去れよ、若しも不正なる行爲、以て後日現はるゝとせんか、聖靈神の如き淑女諸氏は、彼等一二の爲めに汚名の餘波を蒙むるに至らん、記者よ幸ひに彼等を誅するに吝なるなからん事を。

評、此文は、奇ならず、巧ならねど、言ふ所は、眞て雖し、（日東）

秀逸

前々號「投書家に注意す」といふを讀みて

たまその

嚴重にめぐらしたる垣をさへ乘越え、かゝる時の用心

にもと、隙間なくたてきりたる雨戸をさへ、こち開け、夜更けたりとも目覺めて居る人もあらんに、そをしも忍びて入りて、何にまれ取り去り我物にする人もある、かしこげな世なれば、さる恐ろしき事もこわき事もせで、いろ／＼に記しありしものを、其儘にそと書きぬすむは、いと安き事にあらんずらん、されど己れ一人のみと思ふとも、天知る地知るの例はあるものを、ましてや、世の人の博く見て博く知り居らんに、など隠し通さるべき、漸くにあらはれ來るを、若しも友などのそを見聞きせば、いかに驚かん、驚きて其心を疑はざるべき、疑ひてなどかさげすまざるべき、衆人には盗に等しきものよ、詐欺に似たるものよとて落しめられ、友には見放さるに至る、我からにかゝる境遇を招く、淺間しきは人の心なり。

或は曰はん、さる事もあらんかとて匿名になしたりと、匿名よし匿名よし、然もこの匿名何の役にもたゝざるに至るべし、春の色もたゞならず、秋の野も猶口惜しかるべき、言の葉の花の中へさし出でんもをこがましう、且は知れる人の見んも恥かしとての匿名ならば、これ謙遜を旨とする女の手本ともなすべきものなれど、眞の住所氏名は記者の手にあり、不正手段の爲匿名なしたりとも、何時かは是れを顯はして世人に訴へでやはあるべき、と記者も云はれたり、我はたゞ記者の早くそを示し給ひて、この女學世界の爲に浮きたる邪雲を拂ひ給ひなんことをのぞむ、

或る一部の投書家諸嬢に一言まゐらせん、いかに今の世は末に降りて、汚流いつゝくるべしとも覺えず、人心皆これにうるほはされて汚れゆくとも、心の奥深くひそめる正しき道は、いかで奪ひ去らることと有るべき、不正手段をかりてなしたる行は、必や心の鏡に映ぜしならん、其のうつりし影を正義より見ば、果して如何なる感をや生ぜし、己れ不幸にもさる影のうつりし事なければ、いかなる感じのおこるものとも知らず、知らざる身をもて斯くぞある斯くこそあるなれ、など言ひ出づべき言葉もあらねど、大方はそを快と思さゞるらん、快と思さゞる限りは、はゞかる勿れと云はれしを、其まゝに行ひて清き名句玉章を惜しまれずに洩らし給ひてよ。

何號の卷にてやありけん、これをぞ秀逸の中にもと思ひ居たりし新體詩の、題こそ異なれ、一字一句もたがはぬが出できたりたれば、遺憾ながら沒書になしたりとて、其字句をも示されたりしやう覺ゆ、誠にあはれに美

くしく言ひまわされたるが、何とてさばかり同じきものてあるやらんといぶかしく作られし人々のいかに物惜しうおぼすと思ひ居たりしが、今にて考ふれば、こも又二人ともかきとりやしたまひしと、いと心劣りのせられ、つよき文章よ、たくみに言ひなしたるものよと思へば、深く〳〵腦にきざまれて忘れがたきまゝに、走らす筆のさきに知らず〳〵出づるにてわらんなれど。こはこれ、女學世界のみが然るといふにはわらず、他の雜誌も往々行はるゝ事なれば、さまで責むべきにもあらねど、我等の愛し住めるこの世界の、優にやさしき心を世の人にほこりたく。

何も〳〵本誌愛讀のあまりに書き記したるを、幸にゆるさせ給へ。

評、是れ記者が、先きに掲げたる「投書家に注意す」といふ文を讀みて、其所感を述べたるもの、實に女德を具ふる者の言といふべしいかに道義頽廢の世とはいへ、女學生に不正投書あるを見ては、吾人は世教の爲めに之れを慨せざるを得ず、希くば、此の如き惡行爲の女學界に其跡を絶たんことを、（日東）

賞外佳作

悲しき身

愛知　内田とめ子

思へは悲慘なる果敢なきゆめは實に我身の過去よ、一年の夏忘るゝ間とて、荒波のよせては返す須磨の浦回に、父君兄君と共に、相携へて一月餘りも止まりて、涼しき朝、月明き夕空より歸る海士の釣船を見ては、妙なる無聲の詩を叫び、月光萬里岩に碎けて飛び散る浪の花見ては、心を紅塵の外に遊ひ、まこと仙境にある心地せられて、樂しく夏を銷しつゝありしが、いつしか秋風の青葉の影に立ら初めて秋露けくなりければ、止むなく馴れにし須磨の松影に別れ、見えなん限り顧みつゝ愛を割き、漸く車中の客となりて、汽笛一聲、白露朝の原に響き渡る頃、家に歸りけり、其の夜は旅の語りのつきずして、長々し夜はいつしかに、月影深く傾きければ、共々にうらみつゝ臥戸に入りぬ、恐は何處をさまよふらん、

實に人の身の上こそ葉末に結ぶ露の命なれ、今朝は父君心地すぐれずとて垂れこめ給ひ、遂に起たせ給はず、あゝ夢か、昨日迄恙なかりし父君の、今日の御景色は、そも枯れたる聲を絞りては、鳴き叫ぶ鳥の心有りげに聞えて、何となく哀れなり、母君を初め兄君姿の心つくせし甲斐もなく、僅に須磨より歸りてより十日目の夕なりき、ちり來る桐の一葉ともろともに果敢なくなり給ひぬ、

悲しき野邊の營みも昨日と今日と過ぎ行きて、殘るはつきぬ涙のはふり落つるのみ、母君は父君のみまかり給ひしより、こよなく力を落とし給ひ、

重き枕につき給ひしが、掛けて祈りし甲斐ありて、日ならず床を拂ひ給ひぬ、夏の休みも過ぎて、兄君は都に歸り給ひ、事あらば如何ともする能はざる妾、獨りなりしかば漸く蘇生したる心地せり、其後は又病み給ふ事もなくて、父君の吊ひに朝夕心をこめ給ひ、明暮に杖と賴む兄君の、錦着て歸り給はん日を指折り數へ待ち給ひ、或時は妾を招き給ひて、父君の最終の際の御言葉等仰せ給ひ、行末の事共戒め給ひて、共に共に安らけき兄君の航海を祈りつゝ、再びとては歸り來たらぬ矢よりも早き月日を、唯に早かれとのみ暮しけり、思へばうたてき限りと云ふべし、

かくて其年も暮れぬ、朔風吹き荒む二月の空、狂瀾怒濤、天を磨して白鷗騷ぎ、巖に當る波の音は、啾々鳴り響きて物凄き事云ふばかりなかりき闇の夜恨みは深き駿河灣、あはれ月島丸は逆卷く大浪の中に消え去りぬ、我思ふ人も共々に、今に死骸さへ行衞知れずして、無情の波は遠く天空に連るのみ、如何に悲しき運命とは云へ、父君の塋域未た全く冷ならざるに、あゝうらめしき限り哉、腸千々に斷たるよりもつらき思あり、せめてもの晴れぬ恨みに戀しき死骸抱きて、妾は熱き涙のつくる迄泣きわかさんものを、天はたより少き老の母君を憐み給はざるか、年ごろ日ごろ願ひてし心つくしも、水の泡とぞ消えぬるか、あゝ今よりは如何にせん、如何で淋しき望みなき浮世を過されん、悔しと嘆かんも言葉足らず、痛ましと咽ばんも情尙殘れり、あゝ死してこそ我身はつくらめ、

さは云へ恩愛深き母君を殘して、大空も啻ならざる御惠の僅かにもこたへまつらず、如何でさるよしなき事のなされんや、まこと不幸の極みとこそ云ふべけれ、さても谷まりたる我身かな、折しも春の事なれば、都も鄙も花咲き鳥歌ひて、老も若きも憂さ忘れ、樂しき春を歌へとも思に沈む身にはなど樂しからまし、花見るも鳥聞くも、中々に心にくゝ思はれて悲しき心地そせらるゝ、

世に薄命なる女子はあれども、我身にますものあるべしや、涙のうちに春も暮れ、夏もすぎて秋は央となりぬ、雲井の雁は歸れとも、思になやむ其人は歸り給はず、空しく枯尾花は秋風に戰きて、人なき空に打ち招けり、鈴虫松虫の鳴きすだく悲しき夕、さても哀れなる月島丸は、影冷なる幾十の白骨を載せて何處をさまよへるにや、痛ましき限なり、

あゝ父君はとくに逝き給ひぬ、妾が未だ此の世知らざる前に他より來給ひし兄君も、妾を殘していづれへか消え給ひぬ、今は唯先つ日より二豎に侵され給ひて、淋しきねやのうちに、冷かなる夢結び給ふ母君あるのみ、あわれ我身の行末や如何に、

評、筆路の暢達喜ふべし、(日東)

感情と理想

まとか

凡そ、人たるもの感情なきものはあらざるなり。此感情こそ、最大切なるものにして、彼の慈善事業の如き全く感情より出でたる事なり。花を見ては樂しみ、音樂を聞きては喜ぶが如き、皆感情にして、此情なき時は、人と云ふに足らざるなり。されど事物の利害、安危、先後を決するは感情の力にあらずして、判斷力にあり。感情は往々人心を亂すことあり、是れ男子なほ免れず、然れども女子は殊に甚だしく感情を先にして、事物の性質を辨別するの能力を養はざるものの如し。この弊は今一朝一夕にして、如何とも爲すこと能はずとは云へ、苟も家庭を整理し、子女を教育すべきげに重き責任を有する以上は、之れを等閑にすること能はざなり。故に今後の女子は切に理想の力を養はんことをつとめざるべから

ず。

日本人はすべて感情に富む、然れども理想を以て之れを利導せざれば、時に或は激越して本質を沒することあり、且つ事物の理否得失を熟考するは、この力なるを以て文明日進の今日に於て最も其必要なる事を知るべし。故に人は理想を以て感情を役せざるべからず。決して感情の奴隷となるべからず。此の力を養はんには先づ普通教育を充分に受けざるべからず。賢妻賢母は啻に温良柔和なるのみならず。實に此の理想の力を備へし婦人にあらざれば望むべからざるなり。

評、簡潔にして、能く其思ふ所を述べ盡せり(日東)

秋夜の感

相模湯本　瀬戸富美枝

霧かと思へば霧にもあらず、雨かと思へば雨にもあらず、戀に惱める手弱女の、涙とも見つべき時雨の、しと〳〵と庭の芭蕉にのみ音たてゝ降り出しぬ、夜や更ぬらんあたりは物靜に、寂として鼠のあさる聲だになく、そよとの風も音づれねば、窓拂ふ竹の音さへも聞えず、折からちゝと鳴き出す虫の音は、悲しむが如く、又歎つが如く、いとも哀れに聞ゆ、憂き秋なれば、淋しさはさる事ながら、わけて今年の淋しさ言はん方なし、哀れ彼の蟲の聲さびて、庭の紅葉々散りしく頃、吾が身は如何に、人の妻?思へばうたてき世にもある哉、平和の家庭に生れ、慈愛いと深き父母に育られし身の、未だ十九の春さへ迎へなくに、人の妻とは……この身一つの始末さへなし兼る身にしていと重き妻の責任、母の義務てふ事の如何で勤まるべき、いなまんか去れど如何にせん、已に内約も整ひしとか、子を思ふ親の 心のさても 哀れなれ。男子ならぬ女子に生れし身のとてもかくても一度は人の妻たり母たることは知りつれど、今日明日とは思はざりしを、逃れ難き浮世の義理にひかされて哀れ行末の望は絶えぬ、今年はかくせん、來年はかく成さんなど樂しき理想に暮られ、一向學びし身が、神無月時雨るゝ袖を絞りつゝも、この古里を後に見て、親しき親はらから、心隔てぬ友垣と袖別ち、見も知らぬ他郷の空に、只一人月を見んとは、思ひつゞくれば果てしなく、悲しき事のみ募り來て、今は涙さへも溢れ出でぬ、思ふまじ考へまじと思へども、尙ほ思はるゝ心弱さ、先の御二方は如何なる人にか、眞夫と賴む人の心は如何に、元より愚の性なれば、直に厭き果てゝ追ひ歸へし給はざるか、若しもさる事のありもせば如何にせん、祖父母小姑さへもありと かきく、水さへもらぬ 親子暮の 中より、かゝる家に嫁ぐ事のなか〳〵に憂煩く、片時とても心の安まる時やなからん、さはれ一樹の影に休らふも、一河の 流れを汲むも 亦多少の 緣とか、之れと云ひ、彼れと云ひ、皆宿世の 因緣、よしや天性愚にもせよ、眞心もて仕へ、眞心の愛もて愛したらんには、やがては此の身も愛され、又慕はるゝ事もやあらん、さなり眞心の愛こそ、此の身が嫁ぐ唯一の寶ならめなど、獨りごちつゝふと傍を見れば、鏡に寫るこの身の姿、哀れ命短きはこの島田髷、解かるる時は近かけれど、解く由もなき此の思、實に計り難きは水の流れと人の行衞かな

夜やいたく更ぬらし、あたりは一入靜になりしと思へば、何時の間にや時雨も晴れて、戸の隙間いと明ろうなりぬ、早や夜の明つるかと驚き立ちて、窓押し開けば、さはなくて隈なき秋の夜の、月いと冴え〳〵たり、哀れ變り易きが男心と秋の空とか、變らず迷はず千代八千迄ら優しかれなど行先の事のみ祈りつゝ、窓しめて伏戸に入りぬ、

評、文といへ、想といへ、平凡なれども、あまりに瑕もなし(日東)

うれしき一日

相模　瀬戸富美枝

さらぬだに波風たゝぬ吾が家の睦しさも、姉君の玉の樣なる男子產ませ給ひてよりは、一入喜びの聲いや滿ちて、常盤の松も動くはかりに、與も座敷も福の神の立ち舞ふ如き心地せらるゝもいと嬉し、生孫の事とてたらちねの君は言はずもかな、召し使はるゝ下部まで皆とりどりに笑顏つくるも可笑又嬉し、今日しも七日になりぬれば、心ばかりの祝の筵ひらかんとて、朝まだきより忙し、仕度もやうやう調ひつる頃、近きあたりの誰れ彼れみこし給ひ奥の座敷の賑しさ、喜び遊ぶる聲々の此庭にも彼處にも聞ゆれど、耳うるさくもなし、

花色衣さては、いろいろの祝ひ物堆高く積まれし傍に、赤子はすやすやと眠り居しが、罷りさゞめく聲に夢や覺めけん、涼やかなる瞳を見ひらきぬ、紅葉の如き手を動かして乳を求むる樣なるに、姉君の抱き給ひふさふさとせし乳房を含ましむれば、音たてゝ吸ふその可愛らしさ父嬉し、あはれ此の世の風に吹かるゝもまだ十日とはたゝなくに饑ゆれば求め飽けば離るゝ事を知れる賢しさ、飲みや飽きけん、乳房放すよと見るまに赤子は母の手に渡りぬ、之れは汝が伯母之れは汝が叔父よと、まだものゝやめも分かぬ子に指し示すも喜びの餘りなるべし、母より伯母に、伯母より叔父にと、持て離やされつゝ次々に送らるゝ赤子こそ、いた迷惑ならめ、最後に吾が手に渡ればかろく抱きしめ、その柔き海棠の如き頰に接吻すれば、如何なる感じや起りけん、手足藻掻きて吾はひぎたなくも落しかゝりぬ、いと拙き事かなと姉君の奪ひとり給ふに、姉君のほゝと笑ませつゝ、そは無理にもあらぬ事よ、この母さへもまだ乳房與ふるすべだに知らぬものをと、皆々笑ひどよめく、

如何にしけん、赤子は急に泣き出しぬ、ひもじき爲めか腹にても痛みやせん、藥にても與へんかなど變ふる傍から、父君の否とよ、赤子とても神經はあるものを泣かすでやはあるべき、いざ吾賺しなだめんなど云ひついざり出で給ひ、團扇手にとりフタフタと煽ぶき給へば、不思議に赤子は泣き止みぬ、それ見よ暑さが爲なり、早や早や一枚ぬがすべしとの給へば、姉君甲斐甲斐しくも帶とき上衣脫せ給へば、下には燃えんばかりの衣いと美し、

何はなくとも一禮差し上んと、客人導き奥座敷に至れば、已に仕度も調ひて三ツ組の盃客まち顏なり、今日のみは汝酌せよと、母君の仰せ默しがたく座にすべり進みぬ、

耳き名を付け給はばやと、母君のの給はせたまへばよしわれ耳き名を與へん、否吾耳き名を擇み置きつれば吾與へんなど仰せらるゝ方の多ければ、とやせんかくせんと頓には定め難く思ひ煩ひしに、出れば拔名にせんと皆思ひ思ひにかいつけ、ひねりて神の御前に捧げぬ、深く盃の數も重なりつる頃、誰か來てひらき見よ、吾のや當らんなどいきまくもあれば、否吾ならんなど他愛もなくいさかふ、折りしも下婢の來りしかば、命して一本拔かしむ、開き見れば、こは如何に吾がかきつけし名の當りたるとは、一男[カツチ]萬歲と叔父母の聲高々と呼はせ給へば、そは耳き名なりと伯母君の相槌打ち給ふに、皆々目出度と喜び騷はぐはいといと嬉し、耳き名を付けし御褒美に惜しけれど一醑與へん、とく來れと呼ばせ給ふ方を打ち見れば、いと好き機嫌の父上の盃手にしていざいざと促がせ給ふにヘタと驚き、それのみはと如何にいなめとも、なかなかうべなはすみ氣色も見えねば、詮方なくも盃いたゞきぬ、意地惡ろくも姉君の淚々と注がせ給ふに胸先づつぶれ、一と思ひにと眼を閉ぢ口付くれば、その囊やなかしかりけん、どつと笑ひ興じぬ、いと面惡くよ、さらぬだに今

のみし酒の効は逆り來て、胸は早鐘打つ如く顏さへいとゞ赤くなりぬるを、伯母君のいろ〳〵の事の給ひてなぶらせ給ふに、耻しさのやる方なく、今はなか〳〵に忍え難ければ、後はよしなにと、姉君に賴み赤子抱きてすべり過きぬ、

濱の細道たどりつゝ蘆の湖畔に臻れば、夕風そよ〳〵と後れ毛拂ふ心地よさ言はん方なし、見渡せばいや高き富士の峯には、白妙の雪も消えはてゝたゞ萬年雪のしるしのみぞ殘れる、夕日いつしか山の端近く落ちかゝり、黄金をわかす蘆の湖面さわ〳〵と、男波女波の打ち寄する白濱あたりに、二ツ三ツ眞帆片帆かつける舟は、時ならぬ木の葉とも見え、富士をのせたる雲の往來も面白く、仰ふげば高し駒ヶ嶽二子山、緑滴たる麗しさ、實に何時見ても眺め盡せぬは天地の景色になん、哀れ山紫水明の處よく偉人傑士を出すとか、山高く水清き明媚の地に生れし一男よ、汝が心はぬの湖の如く清く廣く、彼の山の如く高く美しかれ、

秋夜に友を思ふ

京都　綾子

宵闇にまどかの月を見るによしなく、文机に打向ひ、朝顏のふくらみし蕾に似せる筆とりて、短冊なんど取出つれど、小暗き燈火黒みし部屋に朦朧と光を放ちつゝ云ふべくも非ず、靜けさに、昔の事、今のことゞも思ひ亂れて、なか〳〵に歌なんど思ひ出べくも非ず　なして心鎮めば、身に浸む、悲しき秋風、吹きすさびて、打そよぐ、木々の梢の葉音志げく、叢にすだく、虫の音も、あわれに、又ひと夜〳〵に、感想ふかみ行く秋の夜こそ、せんなし、

今宵はまして、風の音、虫聲さへ心ありげに淋しく妾の友垣おはしまさば、打語ひて興も深りなんに、今はいづれの雲井の空に地を踏み給ふや、文學ひし庭の教も同じくて、其睦びこそ人も羨む程なりし、さわれ、世に麗はしき物少なからねど人の心の清けき、こよなふ、めでたきやは、梅の清けさ、櫻のはでやかにも増して、君が心根の麗せさに、麻につるゝ蓬どやらむ、染み行身も嬉しきに、痛ましきは君の身の上にこそ、幼き折とかや、實の母君は、彼の幼き君を殘し、何のとがはしもなく、涙に家を立いでゝ後今の母君きませしとなん、去からに常々打沈みて、なはすも痛ましく時も秋の頃なりし、妾が門のべに立つみ給ふ友垣は、二重瞼に露を宿しつおはするに、慰めつゝも問ひつれば、あな戀しくもいかにせむと、手を取あひて涙にくれし夕べさへ、過る間もなく、友垣は遠州の方へ一家ともゞ旅だゝれ涙に袖を別ちしよりたへて行へも、ちらすがに、今はた、いかに渡らせ給ふと安き思ひも、春と暮、秋と過にし、橘の軒にゆかしく薫る頃、うれしき御玉章寄せ給ひ、あなやと、開き打見れば、水莖のあと麗はしく讀みもて行かは、言の葉に、別れし後の悲しさより、常々なつかしさ堪へ雜れし實の母君、なしげくも、無常をはかなみ鳥羽玉の髮を落して墨染と、昔に替る御姿心すゞしく、おはすを知り、露深き里の道芝ふみ分て草の庵を訪ひつれば、今は後世願ふ身の、緣に引れで、心うつるの事もや、つらし墨染の身の、今は母とばし思ひ給ひそ、後の母君をこそ、こよなふ、痛はり給へと、雄々しき言の葉名殘にて、行べ定めず旅の空、それより事のなこりきても、いつくしみ深かりし後の母君、事にふれつゞ咽みのとしり正なき事も胸に堪へ、心づよくも過る日の。いかにやすらむ今は早露にも消えん、いたづきの父逆ふよしもはかなしと、讀ては、いとゞ目もくれつゝ、涙の時雨留めかね、其夜はいねもせざりしにさわれ、せんすべなく拙き筆に玉章を贈

りて待つゝ明し暮せど音づれとだへて早今いくとせ、今は訪とも、あだゝのし。まみえん事も、かくづきや、昔に替る涙の露を、そゝぐも手向となりなんか、あわれ、不幸の君が身よ愁なき日は、いく日もや、憂は安けき時もなく、夜の夢さへ痛はしや、いましが、園の松の幹、緑の色の替らばこそ、一際しみ〴〵見ゆるさへ昔覺へて、悲しけれ、世の移り替りや、やるせなく、君が身の上思ひてはわき出る涙とゞめ、あへず小夜ふけて、いつしか高れに照る月は小簾にかゝりてあやある影、燈火かひやり、待にし月を眺むれど今はたゞ、心の悲しみに、ひとしをいやます、あわれさよ、常さへ秋の夜の月は、もの悲しきに、今宵もや、千々の思に打沈み、時雨の露にぬるゝ身の、月や宿らむ、わが袖に、虫のなく音も、何を忍ぶのたねならん、しげき。こゑ〴〵、涙をそへて、今は何をか思はざらむ眺むる事も、聞く事も、いづれか深むる悲しさに今はかくても思はじな、云へども、返らぬ事にしなん。

秋思

栃木　山里ゆき子

書匣の中に中に葬られて、蠹魚のすみかとなり果てし文五六冊取り出でて、日あたりよき椽側に曝しつゝ、何とはなしに讀みゆくに、ふと紅を落らしたる如き柿の木葉の、二つ三つひら〳〵と風に散りたるが、胡蝶の舞ふに似て、やがて我が書の上に落ちきぬ。取りあげてよく〳〵見るえ、いと美しく飽かぬ色に染みたれば、歌かきて都の友におくらむと、獨りごちてあれば、後の山より夕鴉の黒紫色の羽の光を、傾く日影にかゞやかせて、前なる高嶺の雲の旗手を指して鳴き渡る影を見送るも、いと物淋し。暮れはてゝより、小窗に火を點じ、つく〴〵と往にし事ども思ひ出だせば、我が幼かりし頃、我が母は我と弟等とを伴ひて、庭のあたりを散歩しつゝ、澄み渡る秋のみ空を眺め、あか星のほのめく光を仰ぎけむ袖ふき返す風の身にしめば、衣のいとなみに心を勞し、啼くはたおり虫の聲しげくなれば、夜半の寒さを思ひ、何くれとなく慈み育て給ひぬ。よろづまゝならぬ日毎しなも露色に出だし給はず、秋の初穗の美しきを、祖廟に薦めては、豊けき年をいはひ、栗柿の實など器に盛り立てゝ、月前に手向けては、一家團欒の樂をつくり、何くれとみ心厚くおはしき。さるを一たび病に犯され給ひしより、遂に癒ゆる月日もなく、空しくなし奉りしは、早十とせの昔になりにけりなどと、涙にむせびて、しばし机にもたれてまどろむに、母君のうせたまひぬと思ひしは夢にて、納戸の奥座敷に心靜かに坐りて、傍に苧桶ひき添へ、絲を紡ぎ給ひけり。我は打喜びて、覺えず聲を揚げて走り寄り、あな懐しや、亡くならせつるに、如何で斯く逢ひ、奉ることを得るぞ、變らせ給ひつる御姿も見えざるは、そも如何なる世には在しましゝぞと、ひたすらに慕ひまつれば、母君は笑み綻べる面をもたげて、我が顔を見やり給ひ、口もとやさしう物言ひ給はむ氣色の、俄に おぼろげになりて、目は醒め果てつ。燈の光はほのほ燃え細りて弱く、四壁たゞ沈々として、虫の聲床の下にきこゆ、さては夢なりしか、現身の母君にてはましまさざりしか、母君は遠に亡くならせたるなりと、やう〳〵思ひたどりて、涙の雨の如く雙の眼よりこぼれぬ。せめてもの心やりにとて、書の間にひるがへりゐし柿の葉に、母をしのぶ歌など書きつけてあかしぬ。

評、縷々たる秋思を述べ、人の感情を搖かすものあれど、想も足らず、筆も練れざるの憾あり（日東）

和歌

文學士 大町桂月先生 選評

（天賞）

初秋山宅

今志ばし秋の初風心せよ　草木を友のみやますまひに

豐多摩郡千駄ヶ谷村五五四 大島雪子

（地賞）

虫

病みませる母をみとりて夜もすから　もの思ふまどにこほろぎのなく

佐渡國相川町山神 重松綾子

（仝賞）

初秋山家

山かつに清水をはるゝわつらひも　絶えて閑けき谷の下庵

横濱市高町三ノ九〇佐竹方 長谷川さく子

（人賞）

初秋山家

きのふまでなれし軒端の山の井も　掬ぶに堪へずなれる頃哉

芝三田小山町二五 津田琴子

（仝賞）

虫

月高く兵舎のあたり音もせず　宮城野三里只虫の聲

磐城角田町二九三 鎌田常子

（仝賞）

仝

五十年たゞ夢と見てこの夕べ　あはれ身にしむ虫の聲かな

埼玉縣北足立郡得谷村 岡本志づ子

總評、「草木を友」の歌、「言葉は、まだ工夫あるべけれど、山家の初秋の感慨、切にして憐れ也。「母をみとりて」は、他の奇なけれど、文學以外に情景の掬すべきものあり。「清水乞はるゝ」は、纖巧に失す。されど、才力見るべし。「軒端の山の井」は、水の冷きに、初秋をきかせたる面白し。『清水乞はるゝ』、ほど纖巧のいやみなく、且つ調子もよけれど、山家の意少なきに似たり。「宮城野の虫聲」は、歌の風新しく、光景略るが如し。「五十年夢と見て」は、一夕の蟲聲に四十九年の非をさとる感慨一寸面白し。以上の六首は、さまでの優劣あるにあらず、かりに我好む所を以て天地人にわかちしのみ。秀逸の部の數首もさまで優劣なし。「露の玉のひゞき」は、むしろ音はと言ひ出しるが面白からねど、歌にも玉のひゞきあり。『藁屋の屋根の雞』は、初秋の意に遠けれど、山家の光景躍動す。「黍の實の小鳥」も光景見るが如し。屋根の雞と同工異曲也。『病の床の虫の音』心の切なるを見るべし。「千草の中の虫の音」畫にしたき光景也。この二首甲たり難く、乙たり難し。『夜半の寂し』は、蓮月尼の『風ふかぬ日は寂しかりけり』の脱化にて、蓮月の音坂なきぞ口惜しき。『山かごのいそぐ』は、憐れなる光景を捉へ得たれど淋しく渡るの語今一工夫あるべし。『聲のあや、花のにしき』、『賤の女が糸くる』、「糸萩花ほころびし柚垣』など、言葉の上の苦心、骨折り損の草臥まうけなるべし。「おくれがちなる山里」は、かびの生へる老人の口吻、くちをし。(桂月妄評)

秀逸 (賞外)

〇〇〇同　仙臺市東二　吉田まつ子

黍の實の赤らみ初めし山畑に小鳥むれ居て秋風の吹く

〇〇〇同　埼玉縣秩父郡神村字野登　林つね子

夕日さす彼方の尾の上紅葉して藁屋の屋根にはとりの鳴く

〇〇初秋山家　周防國吉敷郡山口上竪小路　井上靜衣

吹渡る松の下風音さびて柚のかりやに秋は來にけり

〇〇同　石狩國札幌區北五條東一丁目　川島とく子

澄みそめし山下清水むすぶ手に月もほのめくこの夕かな

○○同　近江國大津市水揚町　手塚洲子

何となくきはだちてこそきこえけれ　秋たつけさの荻の上風

○○同　攝津尼ヶ崎　中馬德文

山かげの麓にいそぐかげくれて　淋しくわたる秋の初風

○○同　赤間關市三百目町　梶間まさ子

茂りあふかきの藤豆二つ三つ　實になりそめて秋は來にけり

○○同　大阪　逵　女

昨日けふ吹き初めにける秋風に　遠くきこゆるさを鹿の聲

○○○虫　美濃大垣郭町一九高梨方　藤波むら子

馴れめればなれぬるまゝにむしのねの　きこえぬ夜半は淋しかりけり

○○○同　靜岡市水落町二丁目二十　永山千枝子

秋の野の千草か中の虫の音を　わが身一つにわつめてぞきく

○○○同　信濃小縣郡東内村　竹内たか子

千々の思心ひとつにかきわつめ　病の床に虫の音をきく

○○○同　廣島市八丁堀　井手睦世子

むしの音は千草の花におく露の　玉のひゞきの心地こそすれ

○○同　山梨縣東山梨郡日下部　神奈なみ子

朝夕に花たてまつる新らしき　おくつきところむしなきしきる

○○同　下谷區南稻荷町二八　白井はま子

のこりたる虫の音かなし虫賣の　暗夜をかへるわざみちにして

佳調

○虫　信濃　小岩井愛子

露ふみてまよふもうれし月の夜に　野路一里はたゞ虫のこゑ

、、○同　愛知　安福鈴子

蟋蟀の鳴く聲しげし明方の
月落ちかたの野邊の萩原　仝　青柳とめ子

〇同

われと同じ病に失せしその人の
おくつきどころ虫なきしきる　伊勢　中村三重子

〇同

黄昏かれて空に現る星影の
一つ〳〵に虫なき出でぬ　石川　河崎あや子

〇同

こゑのあやを花のにしきにおりそへて
萩さくのべにはた織のなく　伊豫　青襟女史

〇同

賤の女が糸くる音も聞ゆなり
籬にしげき機織の聲　山口　井上しづゑ

〇同

糸はぎの花はころびし袖垣に
つゞれさせてふ虫ぞなくなる　栃木　しのはら

同

山田もる人のねざめやいかならん
夜毎によわるこをろぎのこゑ　京都　羽乗ゆき子

同

夕ぐれのあきのあはれをつげがほに
まどにちかづくきり〳〵す哉　近江　梁瀬浪枝

同

聲々になきし虫の音はたとやみて
親しき友の音づれにけり　三重　龜井いと子

同

庭になく虫の聲々あはれなり
月すむ野べは如何にかわるらん　下谷　松原すま子

同

丸窓にともしひの影うすくして
枕にちかきむしの聲哉　横濱　伊東薫子

同

淺ちはらそこともしらずさまよへば
すぎにしかたに虫のなくなり　近江　藪田糸子

同

戸たてゝなく虫の音もおもしろし
月すむ野べの友と思へば　高知　小西雅子

同

夜をさむなくや鈴虫長き夜の
ねざめの床に聞ぞわびしき　岩手　しづ女

〇初秋山家

やれがきのすゝきに秋のいろ見えて
　ゆふべさびしくなれる山里
、、〇同　廣島　井手睦世子

ひぐらしの聲もかすかにきえ殘る
　夕日淋しき山さとの庭
〇同　備後　岡崎操子

ものごとにおくれがちなるやまざとも
　わきとしいへばにまづたちさむる
、、同　山口　松田茂枝子

山路行けば尾花葛花女郎花
　其まゝ園としたる家あり
、、同　信濃　久保田翠子

今日よりは鹿もなくらん大方の
　あはれをさそふ秋は來にけり
、、同　三重　岸田ちゑ子

萩原に風たち騒ぎ山里も
　浮世の秋となりにけるかな
、、同　靜岡　三浦貞子

さわがしき人聲たえて瀧の音の
　いとゞすみゆく秋の山庵
、同　芝　大柳錦子

世を秋にたが音づれもまたぬ身を
　きりの一葉やをどろかすらむ
、同　石川　小川初枝子

山里は桐の一葉を先立てゝ
　いとわびしく夜は來にけり
、同　仝　橋本とよ子

秋きぬを目にさへ見えて山里は
　おく露深し門のよもぎふ
、同　山梨　依田德子

つゆしげきよもぎか庵のくさむらに
　秋をしらする虫のこゑ哉
、同　横濱　柴谷たき子

さらぬだにさひしきものを山里の
　おぎの葉風に秋は來にけり



竹柏園漫吟

佐々木信綱

夜はあけぬはるの光はひろごりぬ
　あたらしき色あたらしきこゑ

佐保姫が春の御衣に織がきたる
　百千の蝶のうるはしきかな

たかさごのをのへに立てる老松は
　あらしの風をよそに聞くかな

吾子らよ恐るゝなかれまことあらば
　天にいます神まもりたまはむ

篠の音とほくしづみて闇のうちに
　ひゞもれはてし大川のみづ

たれ折りて塵のうき世に捨てにけむ
　おく山かげのひめゆりのはな

名にきゝてきゝおぢしつる大山も
　のぼればさのみけはしともなし

君に送る最後の書をかきをへて
　泣かれむかぎりひとり泣く哉

豆の如き百万の家見おろして
　花の木かげに世を笑ふかな

びくさげて歸る翁がつり棹に
　夕日かゝれる川そひのみち

世の中をさとりいませる大佛の
　御ぐしに御手にちるさくら哉

山道はいつしかつきて立のぼる
　煙さびしき村につきにけり

吉野山千もとの花は知られども
　庭の一木にたるこゝろかな

山づとのゆりの花たば病あつき
　いで湯の友にまづおくるかな

われならで見る人もなし我山の
　紅葉もいかにさびしかるらむ

忘られしわれは我身を恨みなむ
　君のいつはり神はいるさじ

二かたにわかるゝ水のゆく〳〵て
　又いづこにかあはむとすらむ

小さなるはこをつくりて小さなる
　蟲出入るよかなたこなたに

天賞（賞品圖書切符金貳圓）

露草

名古屋橋詰町一番戸中平方　淺野梅子

野に咲く花が戀ならば
咲き散る花をかひいだき
とく咲き散るを惜しまねど
猶ほしわえぬ涙かな。

罪のしもとをのがれ出て
やさしき床を失ひて
しばしやすらふ野の花の
ゆうへに迷ふ蝶のごと。

天つ日遠き深山べに
かよわき胸よしかすがに
世のはかなさはわぶるとも
春やむかしの忍ばるし。

百草かほる久方の
慕ふにあまる後追て
天にとゆきし君なれば
天の眞名井も結ばんに。

浪立騷ぐヨルダムの
しぶく水泡も何かあらむ
戀は野にはふ野火のごと
熱く燃ゆるときくものを。

今野に花は匂ふとも
晨の雨のつらからむ
天にしわれれば穢れなき
花は千歳ぞたもつべき。

あふれて盡ぬ淸水こそ
我等ふたりの胸ならめ
岩か根いかにつめたくも
あつき情のなくてやは。

君がみ墓の撫子は
濃き紅に匂ひたり
葉かげは露の朝夕に
たむけのうたか鈴虫の聲。

評、野にはふ火よりもなほ熱きは、君が胸の中にもゆる戀ぞ、溢れてつきぬ情の泉は、涌きてのぼりて天つ空にも通ふべし　（蝶二）

地賞（賞品圖書切符金壹圓）

少女

橫濱市加奈川町二九、佐藤方　實相寺のぶ子

汀に咲ける白百合の、

優しきゑみをうつしては、
　わや織る花の姿より、
　露のかをりも流れつゝ、
　　すめはすまるゝ谷川の、
　　流れゆくへはいづくぞや。

浮世の人の手にふれて、
　清き姿もけがれては、
　情もあらき海はらに、
　　けがれしおのが身を寄せて、
　　運命悲しきゆふ暮の、
　　失意の星もやとるなり。

少女こゝろは谷川の、
　流れに似たり、まなさしに、
　希望の星のやとりては、
　　たかねと長き髮の毛を、
　　いたくぬ吹かぬ春風に、
　　うきてふ事も知らざりし。

うすきは人のなさけにて、
　露のひぬまの袖のうへに、
　加はる歎いつ晴れむ、
　谷の小川も少女子も、
　　末は悲しきしらべあり、
　　うれひの雨を如何にせむ。

さはれ、嘆くな少女子よ、
　うき世の波は荒ふとも、
　心の花はいつの世も、
　　とはにかはらで咲くものを、
　　理想の天はいと高く、
　　汝には優しき星のうつれる。

評、谷間に咲ける白百合の、白き花びらの上に置ける露の玉よりも、清きはをとめの心なるを、姿のみかは、その心まで汚さむとする人鬼多き世の中なり、さそひの餌はいかに甘くとも、ゆめな迷ひそ世のひめたち　（蝶二）

入賞（賞品圖書切符金五十錢）

くれなひ

東京神田區南神保町五番地鈴木テツ方　古澤えふ子

桔梗花さく里の川

流るゝ水をよこぎりて
敢果なの影の雲一つ
行くはいづこのみ空ぞや。

夕波白くたつ秋を
招くか岸のいとすゝき
薄ふみ分けさまよへば
捨てし誰が世の小町下駄。

若紫の鼻の緒に
主の君こそ忍ばるれ
黒髪多きおもかげの
現ともなく見ゆるかな。

さては淋しき夕暮の
荒野に落つる星の影
匂ひゆかしき少女子の
花なる魂を誘ひけむ。

秘密は深し淵の色
水ものいはず下駄告げず



蜩なきて鐘なりて
月まだいでず山うすく。

それよ昨日の夕まぐれ
尾花が墓にさすらへる
少女ありきときゝてしか
行くへや如何にあゝ雲よ。

光凉しき新月の
霽れる君が眉の上に
かゝる愁のはたいく重
我世の雲はつらかりき

君くれなひの唇に
花のほゝ笑みたゝゆべく
餘りにさむき人心
我世の風はへらかりき

さはれ紫雲の上
神の使にかこまれて
塵の世遠くいぬる時

とはの光の望みあり。

見よ山の端に星二つ
綠の影とくれなひと
そのくれなひを吾子とよぶ
綠の星のさゝやきよ。

評、わが世の雲はいかにつらくとも、わが世の風はいかにつらくとも、御空にかゞやく星の光に、とはの望みをかけこには、心の曇りは白から晴れ、胸の騷ぎもいつとも靜まりぬべし　（蝶二）

秀逸

落日

信州松本町東の丁　小岩井愛子

誰か知るらん天つ日の、遠く落ち行く西の方、
しばしは映ゆる夕空に、こもる無言の秘事を。

ちぎれ〳〵て翔り行く、無心の雲を彩りて、
あゝ美しき西のそら、赫灼として燒ゆるなり。

げに沈む日をたとふれば、終りはかなき聖才の、
高きかをりを世に止めて、消行くさまに似たる哉。

おのゝく胸に手をあてゝ、思ひ追うては今更に、
こゝろの絲の一ふしに　奇しきひゞきを傳へけり。

あゝ西の方空はるか、悠々として道とほし、
たれ沈み行く天つ日の、その行末を思はざる。

天地をおほふ夕やみに、森も林もつゝまれて、
まなざし若き新星の、蒼穹たかくきらめけば

花やかなりし夕ぞらも　ほのめく光かすかにて、
今日の夕殘を惜しみつゝ、山の彼方にうすれ行く。

あゝ夕映のそのいろの、しばしはかなく消ゆる共、
やがてはえある光もて、東の海の日にかへれ。

秋のゆふべの悲しとて、暮れ行く空を望みつゝ、
さはな嘆きそ少女子よ、涙は頰をうろほして。

嘆けばつらき人の世に、望のひかりほのめかし

しばしは映ゆる夕空に、無言のさとしあるものを。

評、沈む夕日にうらみはありとも、またのあしたの望みの光をおもふときは、人の世の憂きことも、さまでに嘆くべきかはと、君が心にさとりの歌、さきの『花あやめ』の中に選びし磯邊にての歌の心によく似かよいて、まゝ其ことばを其まゝに用ひられたるところも見ゆれど、調べもふしもいたく劣れり　（蝶二）

秀逸

思ひのまゝ

埼玉縣秩父郡國神村大字野巻　林つね

その一

あはれ此世は映し繪に
寫りて消ゆるまぼろしよ。
愛も望もかゞやきも
墓よりつみしあだし花、
上下貴賤のわかちなく
終りは何れ諸共に　初めの土に返へるなり

その二

黄金の臺玉の床　寶の御山打ち疊ぬ
光りまばゆきうすものに、　如何に美裝を誇るとも
如何に榮えをほこるとも、　花にくるへるてふ／＼の
春の夢路をたどる如、　やがて吹きくる風に



命短かき秋の日の
消えゆく夕の色なれや

その三

九尺四面のあばらやに
破窓もる月を眺めつゝ
粗酒を求めてくみかはし、
自然の山と語りつゝ
鳥を友とし樂みて、
浮世の風の通はざる
長閑けき汝が住居には、
平和の風の通ひつゝ
謳ふ鄙歌おもしろし。

評、榮華は浮べる雲の如く、富貴はうたかたの泡に似たり。人の世のはかなき樂しみ、はたいつまでかつゞくべき。とこしへに、かはらぬものは、げに自然の樂にこそ　（蝶二）

秀逸

秋の曉

神戸市永澤町　秀女

銀河寒けき大空に。
　殘んの月のうすれつゝ。
山の端遠きはた雲の。
　あかねさすなりほの〴〵と。
み空はすでに明けながら。
　うすぎりこめし河の邊の。
岸にしげれる枯わしの。
　葉かげに夜ぞ殘りたる。
さぎりはれゆく朝ぼらけ。
　岸の白露きらめくは。
たそがれ時に消えゆきし。
　星もや落ちてかくなりし。

秋の夜

盤城　白河雪子

背にうらみしむらくもも
いさよふ程に消えはてゝ
月はいまこそ澄みのぼれ

ひかりみちたる淺芽生が
露のしらたまうちかづき
虫はうたへりきよき夜を

やみにくれたるませ垣の
千草のいろもあらはれつ
夜はまた夜のなうめあり

ゑがきいたせる高どのに
清きひかりをあみつゝも
小琴しらぶるひめふたり

いづれか小萩をみなへし
よそひし衣もとほすべく
掻ならす手のいみじさよ

あはす調べもいくふしの
うれひや籠るあなうやと

わかき小女はうつふしぬ

なほかおならす玉ごとの
糸をはづれししらたまか
なにぞは膝にちりみだる

四季をしめたる庭のおも
快樂づくせるたかどのに
あゝ小女等は泣くなるか

ともしの影もほそりつゝ
泣子すかしてつゝれさす
しづの女も猶のぞみあり

世のなみあらき磯に立ち
藻ひろふ蜑のをとめにも
なほなぐさめの有ぞかし

やさしの胸を狹ばめつゝ
人をやうらむ世やなげく
袖のみむねに有るものを



なせぬことなき大み手に
足らぬを君にをしゆるも
深きさとしのなくとやは

空行く月をなかめずや
雲間の影こそさえまされ
さらば歌へよかなでゝよ

のこるおもひ

岩代國安達郡杉田村　遠藤　雪子

ひとよをあだのちぎりだに
あさのわかれはつらきよに
すゑのまつやますゑかけて
ちよもといひしきみなれは
しのぶもつらきなみだかな

むすふゆめぢはちかくして
さむれはとほくまよひつゝ
こゝろにゑかくゑすかたの
そのなつかしきかけおひて

のころおもひの　むすれかねつゝ

糸すゝき

漁村秋夕

紀伊有田郡庄村　松原せい子

出島の浦にゆふづきの、影もさやかにかゝる時
浪にしらべを合しつゝ　背子待つ歌を唄ふなる、
磯たゞさへし乙女あり、歸り來まさむ背の君に、
沖にさばしる魚あさり、歌ひし顏のくれないに、
捧げむ酒とをとめ子の、
染みしぞ胸の血汐なる。

かへれ家路に乙女子よ、汝が眼ざしに笑ふくみ
迎へむ門のたのしさに、もはや歸らむ汝が夫は
静けき海原に棹さして。

あはれ優しの乙女子よ、やがて今宵も汝が夫と
二人たのしく酒くみて、とはに語らへ汝が戀を
妹背の松に浪越ゆるとも。

失題

岩代國安達郡杉田村　遠藤はる

甘きにあきて高殿の
欄干ちかくいざり出て
月のうた詠むみやび男が
とる筆おもき力もて
塵に汚れし人の子を
憂愁の淵に救ふとは
清怨にたえぬ理想なれ
夢より淡き人の世の
運命を自然とさとりなば
惡魔の影をたつねつゝ
獨りうれしき樂園に
流轉の聲をなやみをは
睡眠のうちに過さむを

蚊

紀伊國有田郡御靈村　松原よね

銳利に狂ふ醜の男の、むながる暗の世に立ちて

正義を叫ぶ蚊よ汝は、　ひとり清けきものと知れ
世に可憐なる乙女子の、　ちしほに飽きし人鬼を
刺むと猛る蚊よ汝は、　獨り雄々しきものと知れ
されば暗の世の中に、　常盤に正義を唱ぶ可く
天使の汝にたまひたる、　そこに自在のつゞみ有
さればやみの世の中に、　人食ふ鬼を斃すべく
天使の汝に賜ひたる、　そこに鋭きつるぎあり
叫べ正義を蚊よいまし、　世に醜の男のたゆる迄
ふるへ劒を蚊よいまし、　世に人鬼のつくるまで

渡守

長野縣上田町　久保田翠子

うきよのなみにゆられつゝ
夢のわたしをわたりきて、　われもむそぢの岸ちかく
うたのふしさへ衰ろへて、　重くなりたるみなれざほ。

みづの流れはゆる〳〵と
昔ながらに變らねど　月のなぎさにいと早く
かしらの霜は年ごとに　いづれかはやき此水と。

佳調

ながるゝみづとよるなみの
いづれかさきにゆくならん、　いくよをゆめのかち枕
ゆめよりあはきこのみづそ、　吾はいまでさほさすや。

浮世の海

和歌山　藤田進子

あはれ果敢なき我身かな
からき鹽なわ絶間なく
衣の袖をあらひつゝ
紅涙かはくひまもなし
父のかたみの弟よ
汝が父は過ぐる年
々ぐれさむき秋風に
木の葉と共に散りゆきぬ

母のかたみの弟よ
　汝が母は去年の春
花上にそゝぐ春雨に
　うたれて落ちぬ諸共に

後に殘りし汝と我と
　かぎりも見えぬ大海に
たゞよひ出でぬたゞ二人
　心細さを思ひやれ

波の底にはうれしくも
　眞珠の玉はかゞやけり
汝の行末たのしくも
　望みの光りかゞやけり

評　平快、誦すべし。

つきかけ

神田　山岸種子

ふくゆふかぜにかきならす、
　ことのねしげきあしのまを、
しほにひかれてこぎゆけば、
　きよくもすめるそとがうら。
るりのをほそらくもゝなく、
　なみのあなたにひはをちて、
かへりないそぐいざりぶね、
　みなとをさしてかけりゆく。
ゆめよりあはきやまやまの、
　すそはしづかにゆふぐれて、
そらにはさゆるつきのかげ、
　あをきなみまにくだけつゝ。
あゝあゝいはしあきのよは、
　さゝなみにほふつくしがた、
つきのひかりをそでにして、
　かたりしともはいまいづこ。
かぼるゑでんのはなそのに、
　かみのみひざにねむりつゝ、
たえてかなしみうれひなき、
　たのしきゆめをむすぶらむ。

よになきとものおもかげを、
　しのぶたもとにやどるかな、
むかしをうつすかゞみかと、
　おもふばかりのこよひのつき。

評　清淡、夏の夜の月の如し

花すゝき

駿州　柴田陸子

ある女の夫が罪なくして獄に入るを見送りてありし光景を哀しがりてゐる新紙の云ひつたへたれば妾も思はず茲にものしぬ、後夫はゆるされしとかやきく。

一、

腹につめたき一條の、　鐵鎖たつべきすべなくて、
エンゼロかくもいましめぬ、　あゝ人の身の人の世や。

二、

しづみ行く日なかへすべき、　我世のすべはあらされど、
光りは清き岩清水、　たとへ一度にごるとも。

三、

神のまなこは曇らずで、　世を公平にてらします、
露に霑ふ花草も、　蔭には高く匂ふなり。

四、

この編笠よ蹉みてよ、　夕立空のはるゝまで、
涙にそみしこの衣よ、　濁りし清水清るまで。

五、

風の行方を見送りて、　さびしげにたつ花すゝき、
夕の露にうるおひて、　わびしげになく乙女あり、

六、

君や獄屋に行きますと、　きくからに身は茲にまつ、
話しは得ずと思へども、　うしろすがたを今一度。

七、

共にひとしき編笠は、　いづれが君か六つの人、
うしろすがたの似たまへば、　あれや君ぞと見送れば。

八、

神の化身か六人の、　人は一人とみえ初めて、
わが戀人のかげはなく、　一すじ道の直くして。

夕暮

山口　小松よし子

秋すゞしき夕ぐれに
稲葉のそよぐ音清く
塒に歸る鳥の影
空をかすめておとやさき
たそがれ告ぐる遠寺の
鐘の音幽かに消え行きて
草園にすだく虫の聲
獨りあはれに聞ゆなり
薄くそへれるわが影に
あとふりむけば山の端の
松の老樹のかたはらに
かろく浮べり三日の月

行く水

岐阜　むら子

浮世の涙のいとあらく
身を浮草のかなたこなた

あらぬへにのみさすらひて
いさゝ小川のさゝらきは
ともにくみても老ひなんと
振分髪のをさなとち
あらふ流の底清く
むかしのこひは淸かりき。
水吹きわたる夕かぜに
薄月かゝる柳かけ
昔のこひは淸かりき。
あゝ淸かりし淸かりし
流るゝ水の来るも行くも
昇れてうたかたの
紀念とのころ奥都城に

匂ふ立かへる古さとの
むかしなからにかはられと
思ひし人は今いつこ。
つゝみの若菜つみきては
うつろ面わに笑みあひし
秋任さて思ふとち
夢わら笛をふきあひし
むかしの戀は夢なりき
やかては同し運命ぞ
あわときえにしうつそみの
さめてはくみてそゝかたや。

病める兒

伊豫　沛尾やすを子

膝より下に、おきもせで。
　玉とめでつゝ、はぐゝめる。
いとし我子よ、なれになど。
　病のかみは、やどりけむ。
魚鳥獣肉、鶏卵を。
　母の日に／＼、食ふさへ。
なれを育てん、この乳に。
　滋養のしるを、増さんため。
風に觸らさず、日にあてず。
　なれの身躰、すこやけく
日に／＼肥ゆる、嬉しさを。
　人にも告げて、誇りしを。
なれが病に、かゝりてし。
　其日よりして、この母は。
のみ食ふ事、も打わすれ。
　臥どに入れど、ねもやらず。
夜ともいはず寢となく。
　ひたふるなれの、介抱に。
我身もいたく、衰ろへぬ。
　年ごろこのむ、梅の實を。
一生はまじと、ちかひしも。
　なれの平癒を、祈ればぞ。
かくいひつゝも、涙ぐむ。
　母は慈愛の、神ならむ。」

評　稍々俗調に流るゝが如し

松瀨川の畔にて

大村久原　寺井ちく子

都のちりを逃れいで、
　かへりて見れば故郷の、
夕凉しき松瀨川、
　昔のままに流れけり。
いとけなき時をのこちと、

日毎日毎に連れ立ちて、
遊びし川を來て見れば、
昔のまゝに流れけり。

時をも忘れ身も忘れ、
心あこがれ佇めば、
一輪高く影遠く、
雲間を漏るる夏の月。

流はゆるし水清し、
光はわかし影うすし、
川もむかしにかはらねば、
月もかはらず照らせども。
我が行末をおもほへば、
夢と過行く人の世に、
いつまでゆるき流見ん、
いつまでわかき光見ん。

野調

下總　飯田さく女

あらぬ浮名

口にさがなき世の人の　なき名歎ふがつらしとて
かこつは君ようべなれど
あらぬ浮名のいつ迄も　あらぬ浮名にあらむこそ
つらしと我はかこつ也

里の灯火

蘆間流るゝさゝ川の　清き流れを前にして
つゞく一村たそがれて　ほの見えそむる灯火の
あゝかすかなる光にぞ　とはの平和を宿るなり

まなざし

世にも人にも捨られて　棚無小舟わだつみに
さ迷ふ己が身にはしも　北斗の星よなれ少女
げに若き子が命こそ　そよなれ戀や戀なれや
愛にみちたる眼ざしの　あゝなつかしき眼ひ哉

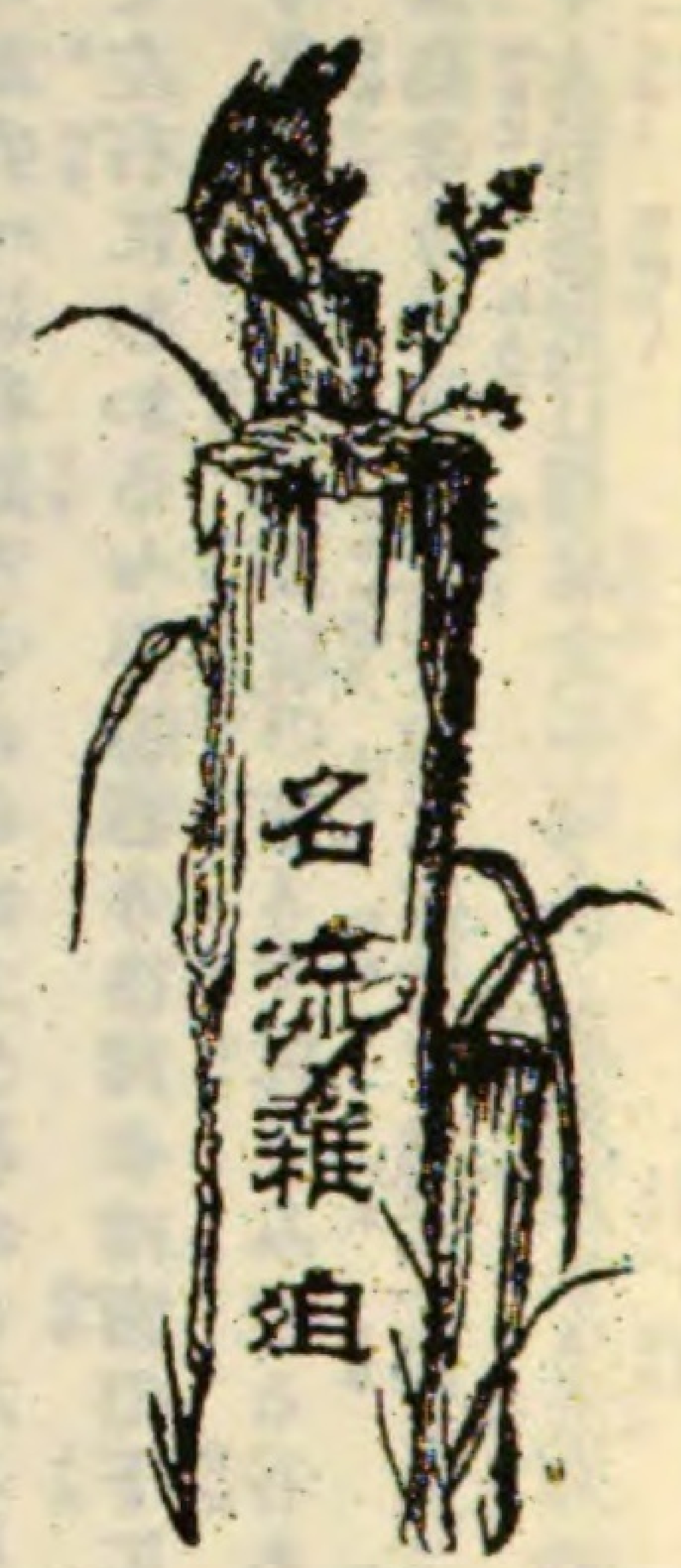
この文

紀伊　せい子女史

手枕いだきひとりねの、　結ぶに堅き夢路にも、
只戀しかるかのきみの、　みなさけ餘る玉章と、
早もこゝろを躍らせつ、　展き見ぬまの嬉しさも、
あけてくやしき玉手箱、　浦島の怨み今われの、
胸のをごとの破れしを、　我ならなくに誰か知る、
去るものうとき世の例、　優しと思ひし君にしも、
燃る血汐のなかりしか、　浮世情なし今さらに、
歎かじものと思へども、　花散る春の夕まぐれ、
戀しさ君とふたりして、　和歌の浦邊に遊びしに、
君その時のみことばを、　われは忘すれじ常盤に、
嗚呼怨めしのこの文や、　思あまりて堪えかてに、
哭きにし時の我こゝろ、　我ならなくに誰か知る、



糸すゝき



箱根紀行

中島眞子

女史は海南の儒者藤野正啓翁の女にして北京公使館書記官中島雄氏の令夫人なり、幼時學を家塾に受け、長ずるに及んで諸子百家を涉獵し、傍ら詩文を能くす曾て故湘煙女史と並んで女流社會の二詩人と稱さる、本篇はさいつ年、其良人に伴はれて箱根へものされし折のすさびなり、編者識

（九月十六日）つとめて夫に伴なはれて箱根にかしまだちす、六時二十分の汽車に打乘り八時十六分國府津に着きぬ、十分斗やすらふ程に、朝餉まだしかりしかば、わりごあつらへつけ湯本にかよふ電氣車にのりぬ、小田原までは見しところなり、町のさま、うゐらくの店など年を經て榮えまされるやうにぞ覺ゆる山路に入ゆくまゝに日頃好める所のさまなればにや心地すがくくしうなりぬ。

九時三十分湯本につき、しばしいこふ、塔の澤迄はたゞ三町斗なりときゝ、かちにて十時斗にたどりつきぬ、かりのやどりは環翠樓とて家は新らしう清らにて早河たゞ目の前に流れたり

寢さめては雨かとぞおもふまたなれぬ
旅のやどりの谷川のおと

西南の方には湯坂山、城山などいふ山々打つらなり、東と北のおほひに塔の峰そばたち西北は松尾山、明星が嶽にこすべて山もてつゝまれたる屛風たてめぐらしたる樣なれば遠きながめなんなかりける、されど、いにしえ明人朱舜水が水戸黄門公に具して來し時唐の帝の楊妃とあそび給ひし驪山よりまされりとほめて勝驪山と名づけしとぞ

たをやめの遊あみし宮のなかめにも
猶まさるらん山のおもかげ

いでゆには聊か鹽の氣ある樣に覺ゆ、きのふ土曜日なりしかば人多くつどひて所せくいとかしまし

(十七日)山廻りせんとて晝餉ものして僅かなる調度を携へ、山駕籠にて出たつ、行ての左の方に見ゆる早雲山のうしろを明日はめぐりなりとぞ、少し行けば常盤の瀧といふあり

行水はたえぬならひをことさらに
いかで常盤の名には立らむ

名にしおへば常盤かきはにくりためて
いくよへぬらん瀧のしら糸

太平臺にいこふ家のさまひなびたらず、姫の水とていと淸らなる水ある由なれど見ず、それより平坦なる道のかたへに稗粟などのいとようみのりたるを見つゝ過て左右にわかるゝみちありひだりは宮の下に通ふ道なりとぞ右の方六町斗下りて落こみたる谷あひなん堂が島なりける。早河三方に流るゝ故に島とは名付しとぞ大和屋近江屋とて二ツの旅籠屋あり昔のまゝなる家作り中にもおもしろきあり、調の瀧といふは平松家とかやの別莊に圍はれたり、其水の落る音琴瑟の和せるに似たりとてかく名づけしとぞ

都人かきはせぬにつま琴に
通へるたきのしらべゆかし

いさゝか垣の內に入て見るまた六丁上る道に五段といふ所あり湯屋一軒あり、宮の下御用邸の前を過て底倉にいづこよひはこゝにやどるべき定めなれば、今は急ぎ行過て木賀にとこゝろざし蛇骨河にかゝりたる萬年橋を渡る名はおとおゝしけれど事もなき橋の板は所々に朽たり六丁斗の程右は溪かはにて左の方は巖に湯の澤の瀧、白鷺の瀧かゝれりはた湯と水と打まじりて落るもあり、樋より出るが湯にて岩間をつたふが水きりとぞ、木賀さいつとし燒けしよりさるべきやどもきくなりぬるとぞ、さして見どころはなけれど物閑かにていとよし四丁斗奥なる宮城野といふ村に蕎麥きりをわきなふ家あり名物のよしいへば立よりけるに、其そば切は人のもとむるをまちてうちはじむるならひなれば一時間斗は待べき由きこゆ、折ふし空のけしき

心もとなく打曇りしかば暫時いこひてむなしく立出つ、清き流れに處女子がさゝやかなる舟に棹さし遊びあへり岸に萩のいとおほく咲たるを見て

山河に錦を洗ふ萩の花

うへ宮城野の名におひにけり

なつかしみ過ぞやられぬにしきおる

萩さへうつす宮城野の村

三時十五分底倉なる梅屋にとまるあたり打ひらけて眺望いとよし温泉は塔の澤のよりも鹽の氣つよし名產の鮎のすし取よせ竹の葉くみて打くつろぎ斯るものを都の人に送らまほしとおもへどいかゞはせん夕間暮宮の下わたりそゞろあるきして自然生の菓子くさ／＼購ふ

(十八日)七時卅分に立いづ底倉のうしろなる藪蔭の道を徑て小涌谷を過てそのかみ小地獄とよびける所なり、いでゆの噴出るさまことやうにおそろし氣なりとぞ高き所に三河屋といふ家あり、明星ヶ嶽明神が嶽に打むかひ廣やかに構へたり、山萩



薄の盛にていと好もしと見る程にまたいといふせき藪かげに入りし程久しうてやう〳〵山のなから斗にいつ上にも下にも薄そよぎてむかひに峯を見渡したるわたりは上野の澁川の宿より伊香保へ通ふなる柏木みち覺へたるながめなりけり、強羅といふ所にいこふ、うしろに早雲山發へ右の山あひに小田原の海ほのかなり道のかたへに大きやかなる湯ぶねすゑたるは旅人の入るにまかするなりとぞ近よるまゝに硫黄の香あり仙石ケ原駒ケ嶽を見わたすわたりははれやかにていとおかし風のおとない秋深き心地す

駒ケたけ仙石原の末かけて
をはな浪よる風の涼しさ

十時斗に大涌谷にさしかゝりぬ硫黄の香つよくそこらの石みな赤う草木はやけて枯たれば青き梢一木もなし打見あぐればこゝかしこに黒き白き或は赤き緑なす湯の熱きもぬるきも湧き出で雲井はるかに烟のたちのぼる氣はひいといたふ物すごし折により所定めずふきいづとかやこゝはかにも通はねば折りたちて竹の杖をたからにほとばしり流るゝいでゆのやうにかしらもたげし石より石と傳ふいとたへがたければあまた度ためらひつゝのぼりゆく程十二三町なるべしはじめはるかの上にあふぎしところもいつしか足もとに見おろすばかりになりぬ、土いとやはらかに滑らかなれば杖のたちども覺束なきに風さへはげしうてともすれば吹きたふさるべうあやふくて昔大地獄といひけんはことわりとぞ覺ゆる、いぬる年宮の下に行幸ましましける時こゝをば大涌谷となへかへ彼小涌谷も其折となへをかへさせ給ひしなりとかや斯るみ山の奥の地名迄もいかでおぼしよらせ給ひけんとあやしきまでいとかしこし寒さをねんじてたどりつくからうじて賽の河原といふにつき閻魔の坐とか名づくめる所にいこふ此わたりの土は黄にしてねまりあり石を重ねて塔めきたるもの建たるさま黄泉ともかくあらんとぞ覺ゆる

をさな子の石をつむてふ河原にも
露の惠をかくるみ佛

おはしませりと聞、及びしをさるは光も見へずたゞおそ

ろしげなる所なり、こゝより駕にものしつやがて下りざまになりて十一時四十五分姥子にやすらふ吹亂されつる髪など取つくらふとて湯殿におりたちて見ればこゝには塔の氣あり船にて箱根に渡らんとてそなたさまに急ぐ道すがら蘆の湖いと近く見へわたり、沼津の海もあなたに見へ富士の根雲間に心許なく頂斗をあらはしつ、麓に足柄山を始めとして山々の續きたる眺望似るものなくありし地獄の苦もとみに忘れにけり。姥子よりしたひ來し老たる舟人はるかに白き波の立を見て風あらければ御船はおやふしこゝよりいとま給らんとてかへりぬ、をこのわざや座敷の内にて海わたる船頭にこそとて綱のものどもあざみ笑ふ船よそひするを渚の小屋にて待程にもろこしといふくだものをすゝめたり、都のよりは味深き様覺えしは所がらにやあらんやう／＼潜出るまゝに水いみじう蒼くまばゆきまできらめきたるに遠近の山の翠のうすくこきはたこゝかしこの岩のたゝずまひ拙き言の葉およぶべきかは

　玉くしけ箱根の山にくもりなき
　　鏡と見ゆるあしのう水つら

　底清き蘆の海邊をこぎ遊けば
　　にごるおもひも浮はざり鳬

近き山々はをばなの靡くにや波のよるごと打そよめくもおかし、水中に有ときく杉の木けふは見へず佛の石、お壺石などいふ石あり、飛めすかくてあらばやとおもへども風に順ひて帆をあげたれば、いと疾くはしる箱根神社の方へ折る程は風にさからひておしかへされみだし進みかねたりしかば、さきの舟人のおぢたりしもいさゝかはことはりなきにもあらざりけりとをかし、二子山のもとに見ゆる橋本といふに案内せられしかどやがて三景樓といふ蘆の湯松坂樓の支店にうつる一時廿五分なりけり、家は湖水に臨み眞向に富士の山都にて見るよりはこよなう高う大きやかにて立てる姿いふばかりなし

　富士のねに打向ふほどはおのづから
　　心高くもなりにけるかな

　朝な夕なうちむかふともふしのねの

たかきなかめにいかでわくべき

權現の森神さびて見渡さる

いやたかきみいつをあふぐ心をば
箱根の神や空に知るらむ

宮のかたへに曽我の社といふがありとかやそのかみ勝名荒神と稱へ時致の靈をいつきしなりとは祐成をもなどてわはせまつらざりけん

はらからの其まだころはかわらじを
たまのありかをいかでわきけむ

參らまほしけれど、いたう疲れたれば打ふしぬ夜に入て木枯めきたる風吹すさびて物心細し今よりは斯る風のみ吹くところなりとぞ

滿干なきあしの海邊は風ふけど
しづかによする岸の白なみ

(十九日)曉がたより雨降出しが起いづる頃少し霽がたになりて雲の立居いとさわがし山の端毎に薄ぎぬかけたるかと見る程にいと深く包みこめてそことしもわかず、とかくするほどにやう〳〵ほのかになから斗あらはれ初る氣しきとも名あるゑしにも寫しがたげなるを見いだして

晴るかと見ればまたたつ山のはの
雲の往來の先きけさかな

ふしのねをうつす鏡のあしの海
打曇りつゝ浪ぞたつ

つかの間にうつりもてゆく俤を
筆のあとにもとゞめてしかな

けふはこゝに暮し晴るゝを待て殘る所〳〵見てかへらんとて心長閑にもて居たるに九時斗に塔の澤よりとみの使あり都より人の來てまつよし聞きしかば所もあえず出たつ御社に詣づるいとまもなく葦の湯、ゆの花澤も見ずなりぬるぞあかぬ心地せられけるこたびは暮の東海道を下る名にたつ難所なるに雨さへ強くなりしかば駕のものどものあへぎこうずるさまいみじう心苦しきにかたへの石を指してこは太閤の天下石と聞えはべるなり、小田原を攻めし時城の内の有樣を見るすべなくいたくこうじけたるを此石の上によぢのぼりはじめ

て見おろしたりしよりつき侍りし名なり、されば此わたりを城見ず道とよび侍るなど物語りいぶせきを慰めんとの心用ゐやさしう覺ゆ、七軒茶屋といひてふるく甘酒ひさぎし店七ツまでありしが維新の頃野火に燒きてあとなくなりきなど聞ゆ、椎の木小屋とかいふわたりは道ことさらなつかしきに雨いよ〻ふりそ〻ぎぬ

をちこちも見へ分かぬまで降しきる
　雨にぬれつ〻こゆる箱根路

さらぬだに行なやむてふ箱根路に
　つらくも雨そ〻くなるかな

そのかみ故郷よりのぼりし時も此道を過けんをまだいとをさなき程なりしかは知らず

わひしさもしらで行路を分け〳〵て
　都の空におもひ立せむ

頼朝の沓掛石、甕勝五郎の何とかせし石、曾我の五郎の鐙付石とかいひをしふれど見ずなりぬ、十時廿分畑といふ所にいこふ是よりは道すこしやすらかになりしかどをやみもなき雨にたよりあしうて玉簾の瀧も見へずなりたるぞ口をしき



久方の雲井よりこしか〻るらめ
　内そゆかしき玉だれの瀧

十一時四十五分塔の澤にかへりつきぬ
　風をいたみ雨に濡つゝあしからや
　　箱根の奥の山めぐりする

(廿日)こゝは倘人さわがしければとて湯本の小川といふに移る

(廿一日)朝をとつひの雨のうらみ聊はるけんとて玉だれの瀧見に遊く湯本の東南なる湯坂山に落るなりけり須雲河の釣橋を過ぎ河ぞひに二丁斗あゆめば彌榮館とよぶ家の園の内にあり雲井よりこそとおしはかりしには似ず幅の廣うてげにも簾をかけわたしたらん樣に岩をつたふなりけり、前なる床几により居たれば霧のやうなるしぶきの散きてそゞろ寒し
　道芝の露拂ひつゝ來て見れば
　　碎けてをちる玉たれの瀧
よそにして聞くゆかしき玉簾の
　瀧のさゞりを袖にかけつゝ
右の方にならびて木深き方となるを木蔭の瀧といふとぞ
　日影だにもらぬこかげの瀧つせの
　　ほとりは夏もかよはさるらん
いづれも瀧壺いと淺きを池の如くつくりなして飛石しきたりいみじう清らげにて底のいさごの數までもよむべく見ゆところ／＼に物好みして建たる茶室或は廣間作り樓つくりなるが八棟さへあるは人々のもとめのまに／＼貸す料なりとぞしばしあらばやとぞ思ふ
　玉簾の瀧のかたへにかゝろいて
　　塵にまじらず世をすくさまし

(廿二日)降みふらずみ定めなき空の氣しきなり

(廿三日)同じさまなり都はいかならん秋季皇靈祭なれば天氣よくはにぎはふらんかしと思ひやらる夕つかたしばしの晴間に湯本細工見にとたち出しにやがてふりいてしかばいそぎかへる

(廿五日)からうしてはれたり二丁計の山の上に早雲寺とてあるに名高き寶物ありと聞て尋ね行ぬ萱ふきにしてあら／＼しうことよなう物さびた左甚五郎の作りし物なる表門も軒かたふきつたかつらとちわちき風にはた

ふまじう見ゆ歷朝の綸旨を始め北條氏五代の水くきのあと兆殿司龍可翁雪舟啓書記公起探幽などるいみじき畫どもあまたあり床には早雲の手ならしたるてふからかねの鐵鉢を飾り芹椀といふ椀一組箱に納めてあり朱塗に金もてせりの葉を蒔繪したる下畫は元信の物せしと聞ゆ本堂の襖は同じ人の筆なる墨繪の龍虎なり雲をおこし風に嘯ふくいきほひのすさましさいとたくひなく覺ゆ

　露しけみ忍ぶにあまる山寺に
　　たへなる筆の光をそ見る

住職いふやうそのかみは十七寺計侍りていと大きやかなりしを上杉謙信の小田原に攻め入りし時兵火にかゝり氏政再興ありけるに其後太閤の本陣になりなどして寶もおほくうせ侍り彼芹椀も五十侍りしを其中三十は分捕られ侍りしなり北條家ほろびしよりかくおとろへ侍りしかども關東にてはたゞひとつの勅願寺にこそ侍れ應仁の頃かとよ世の中わりなく亂れしもなか後奈良のみかどの即位の式おこなはせ給ひけるに氏綱のこかねを献りしま心を深くかまけさせ給ひ位を昇すべくうち〳〵みけしき給はせしを辭し奉りてこゝを勅願寺にこひ申せしかばたやすく許し給ひぬるよしなと聞ゆ小高き丘に北條家のおゝつぎ五ッ並びたてり何れも高さ四尺巾壹尺計なるが寛文十二年の秋遠つ縣なる伊勢の守氏治の物せしとぞ年ふりにしあとしるく石も玉垣苔に埋もれとふらふものは峯の松風にやわらんと見へてそゝろあはれをもよふさる

　東路の國のあまたを靡けゝん
　　よに勇ましき君の太刀風
いさみたつ心の駒に鞭をあけて
　　うちなひけゝん八の國々
つひに行く道にはさしも猛かりし
　　いくさの君ものかれさりけん
なき人のしるしの石もこけむして
　　あはれ昔の忍はるゝかな

(廿六日)むかひの山にせうえうす人けなき所なりけり

（廿七日）午後三時頃より雨になりしを小夜更るまゝに
野分たちて物すごうあはれなり

いとしく戀しかりけり故郷に
　夜半の嵐の吹やかよへる

吹すさふわらしの音に草枕
　結ふ夢ちもとたえかちなる

（廿八日）けさも尙やまず軒端に近き杉山桐などのたふる計に打ゆるぐを見て我やどは萩のにしきわたり打おほひていとほこりかなりしも此風にはしをれやしぬらんとうしろめたうて

思ひやる心も苦し吹かせに
　亂れやすらん庭の萩原

風にふし雨になやまん故鄕の
　萩のけしきそ心もとなき

吹あるゝ嵐にけさはたへかねて
　何にくだけん萩の上露

十一時頃よりやう／＼晴たり
（廿九日）新聞を見れば都の方はことの外なる野分して所／＼の家たふれ人そこなはれたるもありとそさはとゝまりにけるはゝそはのいかに心細かりけんといとをしうて

草も木もしをる野わきを永き夜に
　ひとり聞つゝ明しかねけむ

（卅日）曇りかちなり又山廻りをもして今十日計はかへてこそとてありしが立出る時人々に月の末迄なんといひおきし詞に違ふもほいならすと思ひかへし明日降らずば歸りなほしなどいひつゝけしぬ十月一日晴にしかど尙いかにせんとためらう程に都よりくさ／＼の事あれば早くをと消息ありさらばとて俄にこうど引つくろひ九時十四分の電氣鐵道にて出たちぬこし時よりもいとゝくはしる心地して明暮ながめし石垣山の姿隱るゝまでかへり見らる

歸るさをいそくものから別れちは
　さすか名殘の惜まるゝかな

遠さかる程たにうきを友と見し
　石垣山を雲な隔てそ

十時廿二分國津府におりつまだ少し早ければどひるのもの物しこんとて打くつろぎつゝ濱邊のかたを見出せばいとようすみたる海のをちこちに木の葉にまがふ舟のうかべるさま興あり日頃の目うつしにはこよなうやうかはりて珍らかに覺ゆ

晴渡る青海原に白妙の　眞帆打わけて往かへる舟

のどかにも波打よするなぎさより　釣する船のこぎ出るかな

わたつみの底の心は知らねども　うかべる船のやすげなるかな

十二時五十分の汽車に物して三時卅分新橋につき車つらねて四時半計に家には着ぬしばしあらざりし程に庭の面かはりせる心地す

床夏の花さくにしもあらねども　尚なつかしきやどにぞありける

よもきふのやどにはあれど住なれて　露も心をおくかたぞなき

富士の山づと

田山花袋

（一）

げに紀念多きは八面玲瓏障るもの無き富士の高根の姿なるかな、我は母のわたゝかき懐に始めてその美しき八朶の姿を知りてより、いかに樣々なる形を仰ぎ、いかに異れる色彩を望み、朝に、夕に、春に、秋に、或は薄絹の霞の裡、或は金色の夕空の上、いかにその姿の端倪すべからざるを感じたりけむ。年長じて後、身親しく簑笠をまとひ、杖鞋を穿ち、富士の麓を横斷すること幾度、しかも登山の素願遂に果さず、逡巡以て今日に至り、常に以て恨と爲す。今玆八月、空は長霖の後を承けて炎暑の太甚しき事常に倍し、都會は將に一大火爐の趣を呈せんとす。これ當に富岳千古の雪を踏破すべきの好時節、この機會を外にして、何の日かそれわが願を遂ぐることを得べき。則ち萬事を抛擲して、匆々として

程に上る。時是れ明治三十四年八月七日曉風夢のことく征衣を吹き、路頭の街燈澹として恰も影の如し。飯田橋を過ぐる頃、雨蕭々として至る。顧みて空を望むに、暗雲低く地平を蔽ひ、處々の雲間また一點の明處をとゞめず。然りと雖も一度巳に程に上る、雨雪風雨はこれ皆征途の常習、何ぞこれが爲めに、雄心を消磨し、詩興を減殺し、以てその最初の計畫を廢するに忍びん。且雨中に雨中の興をもとめ、雪裏に雪裏の感を惹くは、われ等旅行家の常にひそかに誇りと爲すところ、雨ふらば降れ、風吹かば吹け、雲霧を犯して日本第一の富嶽に上る、また甚だ妙ならずや。我は這般の決心を以て、直ちに飯田町の停車場に赴き、甲州行第一の滊車に乘らんと欲す。

停車場は暗くして一燈の影なく、只長榻のところどころ二三の旅店の盡々たるを見るのみ。時計の針路を撿せんが爲め、柱に近きて、凝視してこれを見る。しかも黎明の光未だ到らずして、全くその正鵠を得べからず。ひそかに車吏の不親切を憤り、傍なる榻に踞して、以て賣札所の戸の開くを待つ。不意にわが傍に來りて頻りにわれを覗ふ者あり。その人輕裝して、脚に草鞋を穿ち、肩に一箇の包を荷ふ。

『天溪君ならずや』

と我は先言ひぬ。

『然り、』

我等は歡喜の聲を發せざる事能はざりき。思へ、この惡しき天候に、互にその來る事を危みしに、期するが如く同し停車場に解逅したる、以てわれ等の行の尋常紳士の遊にあらざるを卜すべし。暫くにして賣札場の戸開き、その奥より洩るゝ燈の光は斜に停車場の一面を照したり。午前五時、一聲の滊笛と共に、滊車は飯田町の停車場を發して、轟々として西に向ふ。

細雨愈霏々、雲影愈模糊たり。曉光巳に市街に遍くして、行傘の影漸く路傍に多からんとす。新宿を過ぎて荻窪に至る、雨滂沱として更に霽色の憑むべき無し。面を窓外に出せば、曉風雨絲を吹いて、涼思人の肌を寒からしめんとす。境に至りて雨やゝ止む。國分寺、立

川、日野を過ぎて八王子に至る、地上又些の雨痕を認めす、これ十里外晴雨を異にせるもの、以て滊車の早きを知るべし。八王子は四面皆山、翠微の影漸く來つて車窓に落ち、形勝の地、座ろにわれ等の心を惹かずんばあらず。

瞬間にして淺川驛に達す、小佛の天險已に目睫の間に迫り、溪流の奇、晴嵐の美一々應接に遑あらず。山往き、雲湧き、谷動き、森走りて、滊車は遂に小佛の翠微の中に入る。これより線路は斜に舊道の險を度り、人家歷落たる小佛の古驛を掠め、猶進みて、杉樹蓊鬱として晝猶暗き間を行く。我は先年この峠に困みたる身の山巓の一軒屋を樹間に仰ぎて、轉た曾遊を偲ぶの情に堪えざりしが、かのわれに山の清水を汲みて與へたる少女は今猶ほありやと思ふとせし時、前方俄かに轟々たる響聞えて、わが滊車は二哩廿八鎖の長さを有せりと稱せらるゝ長き一道の隧道へと走り入りぬ。

暗黑又暗黑、マッチの火青く燃えて、傍人の顏恰も幽靈のごときを認む。『長き隧道ならずや』『かゝる長き隧道を越えしはこれが始めてなり、碓氷の隧道など、長きものと雖も猶この半に踰ゆるもの無し』『それも道理なり、この隧道に大凡八分を費す由なれば……』などといへる話聲ところどころに聞ゆ。

軈て隧道を走り出でたる滊車の窓を明放てる音の喧しさよ。かくて小佛の嶮はこの長き一隧道に盡きて、左に桂川の清谿のさながら銀蛇の走るかごとくなるを見る。これ富士の山麓山中湖に源を發し、東流して相模國に至れるもの、馬入川は則ちこの下流なり。猶隧道を過ぐること二、ふと眼下に一大橋の弓のごとくかゝれるを見て、これを傍なる人に問へば、新猿橋と言へる由にて、この鐵道を敷かんが爲めに殊更に架設したるものなりと教ゆ。橋下には溪流憤越し、瀑泉飛躍して、その奇觀殆ど名狀すべからず。

(二)

與瀨より上野原に至れるの間、隧道を穿つことその數十五、長きは二哩に餘り、短きも亦一哩を減せず。一隧道ごとに沿道の風景その觀を改め、或は狹き事洞天の

如くなる中に遙かに殘流の白きを望み、或は欹てる事危崖のごとき間に近く溪橋の架せられたるを認め、或は桂川の溪谷遠く開けて冉々たる白雲の影美しく天日の光にかゞやき、或は歴落たる人家崖に架し谷に枕して、鷄犬の聲遠く雲中に聞ゆるなど、まことに山中の別乾坤、『われは甲洲の山の深き事を聞きたれど、かゝる風景あらんとはまことに思ひ設けざりき』と天溪子も言ひぬ。

上野原の停車場は前に桂川の溪谷を開き、後に蜿蜒たる小山脈を負ひたる一帶山腹のところにあり。新設の日淺くして、車なく、茶店なく、只一道の細徑の綫のごとく山間を縫へるを見るのみ。上野原の街は高原の上にありて、人家檐をつらね、旅店の招牌路を擁して、眞に山間の一小都會たるに耻ぢず。家に就きて馬車の猿橋に至れるもの無きやを問ふ。客少うして出てすと聞きて、則ち徒歩して發す。鶴川橋を渡らんと欲して、過つて深谷に陷り、遂に一小嶺を踰えざるべからざるに至りぬ。嶺を踰えて、村あり、四方津といふ。桂川の深谷に臨み、潺々流水の調を聞く。恰も天籟を聞くの感あり。これより路は絶えず溪流の岸を縫ひて、進む儘に、山はいよ／＼迫り、溪はいよ／＼激し、四山翠微の影爭つてわれ等が吟眸に落ち、その快言ふべからず。況んや朝來の細雨全く霽れ、赫々たる日光漸く炎署を逞うせんとするに至れるをや。

山隈をめぐる事幾重、めぐる毎に歴落たる人家を見、工事を施せる隧道を望む。われ曾て甲州鐵道工事の難を說くを聞く。一步に溪橋、十步に隧道、岩を斫り、山を穿ち、その工費の多額なる殆ど萬億に上らずんばあらずと。今日看來つて、始めてその言の誇大ならざるを知る。鳥澤に至りて、山嶺漸く開け、溪谷漸く舒び、前に岩殿の奇嶽の高く雲表に聳立せるを見る。この山は之れ武田の叛臣小山田の籠れるところ、城趾今猶その山上にありと傳ふ。當時の事を追想するに、感慨の情頻りに起り、正邪の辨また斷ずるに遑あらず、轉た人事の小なるを感し、併せて天然の偉なるを思ふ。鳥澤を去る、未だ里餘ならず、溪頭綠樹欝蒼として天日

を遮り、蟬聲、水聲座ろに行人の耳を娯ましむ。來路を蹈ふこと數町、路窮まつて一大奇橋を架す。これ所謂甲州の猿橋なるもの、橋欄に凭つてこれを瞰るに、兩岸の絶壁高きこと各數百仭、水はその間に狹められて、深潭をつくり、深さ知るべからず。崖上楓樹多し。以て秋錦の美を知るべし。佇立多時、則ち去つて、橋頭の旅亭に就き、以て半日の饑を醫す。溪魚長すること已に半尺、その味の鮮なる、最も珍とするに足る。餐後、偶ま谷村に赴くの馬車あるを聞きてこれに投



す。車小にして纔かに四名を入るゝに過ぎず。左列に座れる者は天溪氏と我。右列に座れるは六十歳に近かるべき切髪の肥りたる老婆と、近郷の機業仲買商らしき五十歳程の中老漢となり。御者長鞭を振つて馬を遣る、長坂に逢ふ毎に自から下りて轡を取り、以て纔かに通ずるを得、山路の險思ふべきなり。

これより大月に至る間、山舒ひ、水濶け、その風光の明媚なる、かの函嶺早川の勝と雖も遠くこれに及ばざるを信ず。老婆はわれ等が富士行者たるを聞きて、喋々

として富士籠坂峠附近に於るの景を說く。富士の晴雪を頭上に仰ぎ、動搖定らざる馬車に乘りて以てその燒石磊々たる裾野の高原を行くに、春は霞の薄絹美しく富峯の巓を粧ひ、秋は秋花爛熳宛然錦繡を敷くがごとく、その風景の絕佳なる決して他に多くを見るべからず、殊に、初めて山中湖の新月に似たるを左方に望むの景に至つては、天下の絕勝これに過ぐるものあるべからずと。われ等は恍惚としてこれを聽くに餘念なし。

大月に一大溪橋を架す。右すれば笹子の險に達し、左すれば、谷村、吉田を經て富士の北麓に至るを得べし。四面の山絕えず白雲を蒸し上して、日の光、溪流の光、隱見出沒、奇姿百出、殆ど應接に暇あらず。溪頭に一茶亭あり、室皆溪に臨み、廻らすに欄干を以てし、宛然畫幅中のものゝごとし。あゝ身紅塵をのがれ、俗境を去り、來てこの間に栖遲せば、その平和、その快樂、果して如何。されど身猶僧のごとく俗緣を離れず、心未だ野鶴のごとく、九天に冲らず、徒に炎暑に苦み、紅塵にまみる、慨くべき哉。

一路髮のごとく、その窮るところ、瓦甍白堊の日に閃くを認む。これ則都留郡中第一の都會として知られたる谷村町にあらずや。御城山の古城址は横さまに市街を掠めて、數道の清谿市中を横流し、まことに山中の名區たるに負かず。之に加ふるに、所謂甲斐絹の產地とて、家々皆機杼を備へ、美目皓齒の人、皆歌に和してこれを織る。あはれ詩思横逸の詩人にして、來りて此處に一月を過さば、詩材たるべきの好話は殆どその詩囊に滿つるならんを……。町にて馬車を下り、かの老婆、老漢と袂を分つ。一朝相逢ひて、一朝相別る、あゝ是れかなしむべき人世の姿ならずや。

富峰漸く近うして、雲愈深く、山中の驟雨また將に來らんとするに似たり。則ち天溪子と共に臥席一張を買ひて豫めこれに備ふ。十日市場に至らんとして、路傍の水聲俄かに尋常ならざるを覺ゆ。則ち走てこれに就けば、幅二十間もあらんと思はるゝ桂川の水、急崖絕壁に逢ひて、さながら急轉直下の趣を呈し、紛糾錯雜、奔飛粉韲、走るものは萬弩の齊しく發するが如く、下る

ものは百雷の地底を穿つがごとく、橋上に立つてこれを見るものをして、殆ど膽戰へ魂消するの情に堪へざらしむ。況んや飛沫の上騰するもの霧のごとく、溪樹濕ひ、岩石濕ひ、行人の衣また瞬間ならずして雨に逢ふが如くなれるをや。奇瀑と謂ふべし。

驟雨一たび來りて、頃刻にして止む。吉田驛に至るに及び、雲霧更に深く、驟雨再び地を捲いて來る。旅店に就きて、夜中富士登山の導者を得んことを求む、得ず。皆言ふ、この驟雨にして晴れずんば到底登山する能はざるべし。見給へ、御山の右に黒き雲の却走するものあるならん、これ神風の烈しき徴なりと。則ち宿す。

(三)

夜半の驟雨拭ふが如く霽れて、富士の晴色の曉窓を壓する事晝くが如し。驚喜して寢床を離れ、直ちに登山の準備を爲す。草鞋十數足、綿衣二領、行厨二箇、餅數十箇を導者に負はしめて發す。吉田驛の中央に一の華表あり。富峯の姿横さまにこれにかゝり、前に白衣の行者の陸續として動くを見る。まことに寫眞鏡中の一好景たるを失はず。驛盡きて、杉樹來り、その杉樹の盡る處、更に淺間神社の神さびて立てるを認む。一拜心を清うして去る。

祠後に至れば、其處に數輛の馬車と數頭の馬とありて、囂々登山行者の來るを待てり。我等は今日の中に富嶽の絶巓を極めて、更に大宮に下らんとせる身の、成べく脚をいたはるに如かずとて、一輛の馬車を雇ひて、これに乘りて馬返に至る事に決す。馬車は只荷馬車に木片を打付けて、上に覆蓋を張りたるもの、その簡單なる、殆ど驚くに堪へたり。御者は年若き一人の村童、馬の轡を取りて、叱々としてこれを逐ふ。かくてわれ等が乘れる風情あるこの一輛の馬車は、高低定りなき石ころ道をがた／＼と右に左に動きつゝ、漸く渺々茫々たる富士の裾野にかゝり行きぬ。

あはれ一歩々々顯はれ來れる富士の裾野の美くしさよ。始めは飄々乎たる松林の間に、朝の露のさなが

ら雨の如く當るを聞きしが、頃刻にしてその風情ある松原は盡きて、富士の長き裾野は右と左とに極めて濶ろく展け渡されたるに、我等は覺えず手を拍ちて快哉を呼びつ。見よやこの天然の景のいかに美しきかを、見よや朝日の影のいかに桔梗、萩、女郎花等の秋草の野に照り渡るかを。

富士の絶巓に一點の雲をとゞめず。

路は次第に高く高くなりて、過ぎ來りたる松原の群は漸く眼底に落ちんとし、今迄その絶巓より外に見るを得さりし甲州の諸山も益々その全身を顯はすに至れり。否それのみならず、わが左の山際に當りて、一ところ銀色にかゞやくものあるを、朝日の反映とのみ思ひしに、朝の霧の晴れ行くに從ひて、われ等は遂にそは富士八湖の隨一なる川口湖の曉光なるを認め得たり。

『山の何處あたりを登り行くにや』

と天溪子はゆくりなく問ひぬ。

『然なり。かの一ところ黒く森の重りたる處を見給ふならん』と導者は遙かに山の半腹あたりの處を指點しつゝ『かの森の少し右の處に……それ、今白きものゝ蠢くを見給はすや。三本ほど太き樹の立てる右に…………』

『何處に？』

と我も眼を瞠りたれど、見えず。

『それ……其處に……一かたまり白き衣の見ゆるものを』と導者はもどかし氣に再びその方を指しつ。

『見えたり、見えたり』

と天溪子は叫ぶ。

熟視すれは、果して！その森の黒く茂れる少し上を今しも白き塊簇々として動き行くなり。否、猶よく凝視すれば、その上遠く、赤兀に兀げ盡したる處を白き一隊の行者虫の這ふごとく靜かに〳〵動き行けるも明かに見ゆ。

『彼處は何合目あたりにや』

『かの上の白きところは七合目の少し下あたりにや當り候はむ』

『八合目は此處より見えぬにや』

「否、かの山の絶巓近く壘のごとく二ところ突出したる所あるを見給ふならん。かの上のところは八合目に侍り」

と導者は教ゆ。

かの高きを渉り行くかと思へば、男体、淺間の嶮に馴れたる身も少しく心の動くを禁ずる事能はざりき。然りと雖も、富士はわが多年登らんと欲せしところ、この美晴にその絶巓を極むる事を得るは幸福ならずや。

前に四五株の風情ある老松蟠りて、その陰に一軒の茅屋淋しげに立てり。これ所謂中の茶屋なるものにして。行者は皆此處に小憩せざるはなしといふ。われ等の馬車も亦暫く留れるに、我は馬車を下りて、饅頭三個を購めて食しつ

馬返は早此處より遠からず。馬車はいよ／＼嶮しき路を、右に左に縫うやうに登りて、午前九時と言へるに、遂に北口の第一合目とも稱すべき馬返に達す。

馬も馬車も皆此處より辭し去る。

二軒の茶屋は相對して、客を呼ぶ聲極めて喧し。昨

を放つて來路を望むに、此地既に平地を抜くこと數千尺、裾野の大景は渺々一望の中に盡きて、右には新月に似たる山中の湖、左には盤のごとき川口の湖、昨夜やとりたる吉田の驛はさながら五萬分一地圖にゑがかれたる都會のごとく極めて明かに顯はれ渡りて、その快殆ど狀すべからず。

かくてわれ等は一歩々々その富岳へと登り行きつ。

あゝこの感をいかにか狀せむ。前面よりおろし來れる冷なる晴嵐をまともに受けつゝ、猿追風のところ／＼に懸れる、熊笹の高く繁り合ひたる間を押分け登る心をわれは果して如何にか狀せむ。わが心には天をも衝かんはかりなる大勇猛心あり、わか胸には久しく燃えたる事なき靑年の血いと烈しく漲り渡れり。而してこの勇氣とこの感興とを振つて、我は日本第一の高峯を北より南へと横斷せんとしつゝあるにあらずや、雲を踏み、雪を踰えて、今宵を大宮の旅亭に眠らんとしつゝあるにあらずや。

一合目、二合目は時の間に登り盡しつ。直ちに二合半

の小屋に入りて、かの所謂八角の金剛杖をもとむ。三合目に至れば、眺望やゝ開豁、白雲冉々として脚下に起り、杳かに長旆のごとく富岳の半腹を掠め、搖曳して消えず、浮動して亂れず、遂に右の方山中湖の半面を蔽へる雲影と和合し、裾野の上に尨大驚くべきの影を印しつゝ、益々東へ／＼と動きて、果ては相模足柄の山腹へと靡き行けり。われ曾て富岳に於る雲烟浮動の奇觀を聞くこと久し。今や始めてその大觀の一端を見るを得、喜ばさらんと欲するも能はず。四合目以上には行厨を開くべきの茶屋なしといふに、未だ十時を過ぐること纔かに十分なるにも拘らず、行李を披きてこれを喫す。飯、粗硬にして殆ど食ふに堪へず、茶を用ゐて纔かに之を終るを得たり。

『森林帶は猶容易に盡きざるにや』

と導者に問へば、

『否、早程もなし、五合目をだに越ゆれば、森林はその影だになくなり侍らむ』

と導者は答ふ。

五合目を踰えて、猶未だ幾許ならざるに、果して其言の如く、今まで分けて來りたる森林は全く盡きて、灰色の岩、灰色の砂のみ、勾配急にわれ等の前に横りぬ。仰ぎ見れば天にも達せんと思はるゝあたりに、小さき赤旗、飄々としてひるがへれり。これ七合目なりと導者は言ふ。先森林帶を出でたる紀念として、少時こゝに休憩みて行ばやとて、傍なる薄とも萱とも異れる草を藉きて腰をやすめぬ。

眼界の濶き、殆ど譬ふるにものもなし。吉田の驛、河口の湖は早く既に眼下に落ちて、芋の如き小山の幾重ともなく重り合へる向ふに、冉々たる白雲の谷を隔てゝ、藍青恰も染むるがごとくなる大山派を見、更にその西方數步の間に、鋸の齒を引きたるごとき形したる一大巖を認む。

『かの山は？』

『甲州八ヶ嶽』

その下に一道の銀蛇の蜿蜒として南に向つて走れるを見る。

「その川は？」
「富士の上流」
導者はかく答へつゝ、更にわれ等の爲めに四方の景を說きていはく、『その富士川の右にこんもり黑く顯はれて見ゆるはかの有名なる鰍澤の驛、それより少し右に離れて、鏡の如く日に閃きたる二つの湖は、精進湖と、西の湖。それより少し奧に雲の中より半その姿を顯はしたるは同じく八湖の中なる本栖の湖にて侍り。猶天氣だによく雲だに無くば、かの尖りたる山と山との間に日光男躰山の姿を見る事を得るなれど……今日は雲多くて、その影だに見え侍らず。』
我等は只天地の大景に撲たるゝのみ、默して更に言葉無し。
『御中道といへるは、何處より何處に廻るにや』
と不意に天溪子は問ひぬ。
『御中道にて侍るか、御中道はこの經が峰より寶永山にかゝり、更に大澤といへるを經て、小御嶽に出で來れるを言へるにて侍り』
『一日にて廻る事を得べきか』
『いかで一日なとにて……三日かゝらではとても十分には拜し難く侍り』
割愛して再び登路に就く。經か峰は日蓮上人の苦行せしところにして、岩下に一つの行者小屋の立てるを認む。これより登路いよ／＼險、足指の仰ぐこと太甚しく、氣息の喘々たる、恰も月下の呉牛に似たり。まして火山の礫のざく／＼と踏み留め難きは、力ある双脚に一方ならざる勞を來して、この困難なること、かの森林帶の比にあらざるをや。
五合より六合の距離は殆と森林帶三合を合せたるに均しく六合より七合の距離は更にその長さを二倍にしたるに均し。之に加ふるに、無數の奇岩、怪石兀々としてわが前に當り、そを越ゆるの勞まことに尋常ならず。喉間漸く虹を吐くの苦境に陷るに至る。
果ては十歩に一憩、五歩に一息、流汗冷かに腋間を掠め、六合以上は皆石室、岩上石を集めて屋を築き、暴風暴雨猶よくこれを防ぐを得せしむ。而して室には皆寢具と

炊具とありて、以て行者の不時の難に備ふるを常とす。

六合を過ぎて、岩石の怪奇なるもの、磊々たるもの、顛々として頭上を壓し、少しく注意せずんば、石責の難に逢ふこと無きを保せず。しかもわれ等はこの間を右に渉り、左に越えて、漸く七合の石窟に達するを得ぬ。この地既に海面を拔くこと一萬尺、大空の色また下界にありて見たるとは異に、飽まで藍青の色を帯び、われ等の顔色亦やゝ黄色を帯ぶるかごとくなるを覺ゆ。

殊に山上の空氣の寒冷なるは、最もわれ等を驚かしぬ。石室の人皆綿衣を襲ぬること二、更に其上に羽織を着けて、纔かに寒を忘るといふに、われは只一葉の蟬の羽衣、寒氣の全身に泌するも亦宜ならずや。

八合に至れば、絶巓のさま早明かに見え渡れるに、少しく疲勞を休めたる後、更にのこれる勇氣を振ひて、金剛杖を力にしつゝ、一歩は一歩より絶巓に近きを思ひ、一間は一間より事業の成功に至れるを思ひながら、岩角に縋り砂礫に滑り恰も蟻の這ふがごとくにして、辛うして遂にその志したる絶巓に達しつ。

時計を撿すれば、三時を過ぐること已に四十餘分に及ふ。

夕日は既に少しく傾き始めて、濕氣を含みたる雲は、矢よりも早く、山腹六合目あたりを掠め行く。空氣の冷かに透徹せること、宛然嚴冬の曉の如く、人々の呼吸皆白からんと欲するに似たり。

宜なるかな、山は海拔一萬八千餘尺、淸容遠く三千里外に君臨し、千古の雪、萬古の氷、その淸絶、壯絶の姿は、また人間界のものにあらさるをや。

（四）

氣象觀測臺に至りて、岡田理學士を訪ふ。曩日既に下界にくだりて在らずと聞きて、則ち踵を絶巓の一石室に旋し、三國一の名物なりと稱する甘酒と、これのみは味變らずといへるぼた餅とを食ふ。

食ひ畢りて、先決せざる可らざるは、是より大宮へ下山すべきや否といへる問題なり。登路の險なりしが爲め、時を費やすことあまり多く、日沒の七時までは纔かに三時間を餘せるに過ぎず。然るに、われ等は猶大宮ま

で驀地に走り下らんとするか。降路の登路に比べて容易なるは元より論なし。然りと雖も三時間の中に七里の路を走らんとするは餘りに無謀なる事ならずや。且石室の主人は導者と共に頻りにわれ等の無謀なるをとゞめて曰く、『これより下山したまはゞ三合目或は一合目にて日の暮れ果てんこと、火を睹るよりも明なり。それよりは寧ろこゝにやどりて翌朝日出の大觀を見給ふの勝れるに若かず』と。

わが心甚だこれに傾く。

然りと雖も、明日の天氣料り知るべからずといへる氣象臺の報告を聽くに及んで、われ等は急に心を改め、假令日は暮れ果つるとも、くだり得んところまでは下り行んと一決し、匆卒に準備をとゝのへ、絶巓の東方、氤氳の地上に湧出する間を過ぎて、富士噴火口の絶大なる跡を覗ひつゝ遂に銀明水の湧出するところに至りて導者に別れ、それより大宮口に通せる路を只々驀地にくだり行きぬ。

* * * * * * * * *

七合目よりは路は砂走の間を下るに、急轉直下、恰も毬を深谷に墮すに均しく、一度走りたる歩は亦容易にとゞむべからず。これが爲めに草鞋の破るゝこと夥しく、十町ごとに必ず路傍に踞してこれを新たにせざるを得ず。夕日は今まで美しく寶永山の半面を照したるが、それさへ次第に薄く〳〵なりていつかその影をだに認むること能はずなりぬ。

否それのみならず、雲烟倏忽として脚下に生ずると見る間に、搖曳浮動、四山を掠め、天地を掩ひ、蓬々然、勃々然、われ等の眼前までも襲ひ來り、ひろがり來りて、遂に咫尺の人顏を辨せざるに至る。

この心細さをいかにか狀せむ。

されどこれ皆浮動定まらざるの雲、見るが中に、やがて西へ西へと走り行きて、眼前叉巖石を認め、山影を認め、大空を認め、夕日の影を認め、寶永山の姿を認め、果ては山麓をめぐれる森林帶の近きを認めぬ。

あゝこの倏忽たる雲霧の面白さよ。

森林帶を出ずして、日は全く虞淵に沈み、殆と深谷の中に陷るが如き苦境に遭ひしが、しかも山中の人のなさけによりて、一炬の竹燈、夜更けて纔かに馬返しに達するを得たり。かくて其夜は雲と共に臥し、霧と共に眠り、轉た昔の草枕の旅のさびしさを味ひたるが、わくる朝、水流と俱に大宮に下り、顧みて曉の富士の姿を仰けば、八面玲瓏、端然として天下に君臨し、雲の簪、雪の冠、あゝ何ぞその姿のわが心を惹くの太甚しきや。

（完）

湖畔の夕暮

神谷鶴伴

上

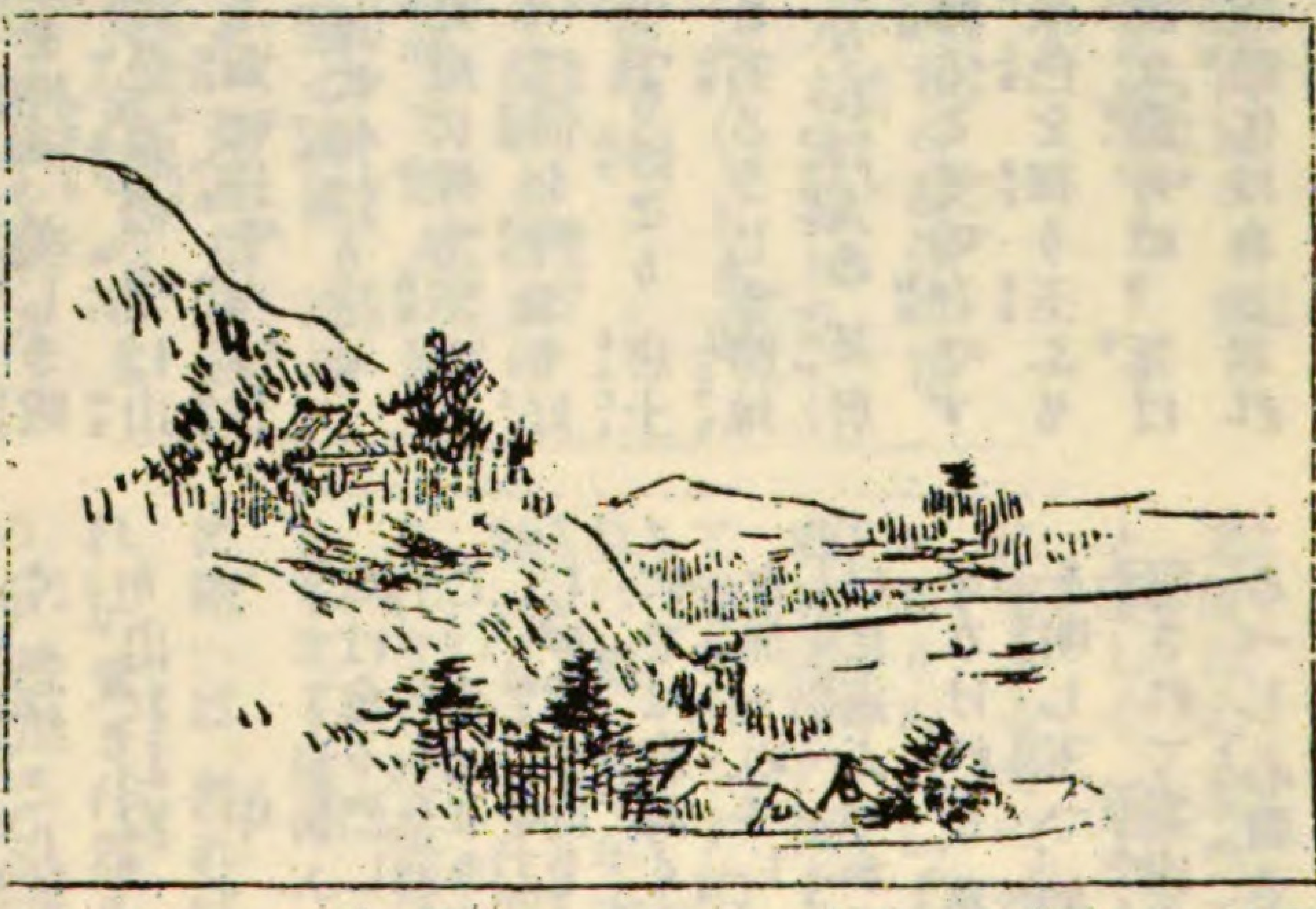
一年の夏、鳥が啼く吾妻路の歌枕探らんと、飄然一人家を出で、紫匂ふ武藏野原を後になし、野島が崎の濱風に送られ、香取の浦の浦傳ひ、鹿島の社に詣でつゝ、誰が云ひ染めけん聞くだにつらき陸奥の勿來關をゆくりなく越えゆきて、松島や雄島の海士と語り暮し、故郷の人の面影夢みつゝ、露分け明す眞野の萱原に草枕、旅の衣を濕して、日數重れば定なき身の行衛は何處とぞ知らぬ壺の碑讀みも了らず、無き名取川打渡り、信夫の里に昔し忍びつ漸くにして會津山の麓なる猪苗代湖の邊に巡り來りぬ。

地さへ溶けんばかりの、暑さは流石に烈しけれど塵さへ靜りたる麗はしき天氣の、蟬も翠滴る木陰に歌ひ、鳶も瑠璃色の空に輪を描きて春にも似たらん長閑なる日の光り、往先の賤が家根には輝々と陽炎の立上り、折〻稻葉の友摺のそよ〳〵と風に訪れて稻の香の鼻を穿ちぬ。

されど安達太郎の彼方より舞ひ出づる怪しき斷雲の振舞は空に只ならぬ狀を現し、颯と稻苗代湖の水面を拂ふ風の破紋作るも平常に異りて穩ならぬやう思はれける。

四邊の山々に秀れて一際高く、湖を覗くが如く聳えし山の中腹とも思しきに大なる梵宇ありて、麓の方より

遙に望めば山門鐘樓の嚴きも由緒ありげなり。彼處に登らんにはさこそ景色や美しからん、風流に遊べるもの、聊なりとも名ある眺望を他所に見過さんは本意ならずと、呼吸喘せ汗絞りながら登り盡して頭を回せば水は近く碧を湛えて鏡の如く、山は遠く眉を描きて雲に似たり。鹽竈の浦の朝凪に釣する蜑の兒と別れてより、幾干の山に谷にのみ親みし身の、今爰に波白き湖の洋々たる眺めに眼を放ちて珍らしくも快よく、霎時我と我が故郷遠く隔りし旅路の空に流離ふる身なるをも打忘れ居たりしが、折節腰衣を纏ひ竹箒を携へて山門の外へ出で來りしは此寺の住持なるらし、近寄るまゝに慇に一禮なしつ熟々見れば年比六十路餘りの老僧にて眼尻に打寄する二筋三筋の漣にも情深き面影あり。山の名、寺の名なぞ尋ぬれば湖北山天寧寺といふよし僧は



答へ更に言葉を繼ぎて、御身は何國の御方にて在すにや、御見受申せば旅行なれし御扮裝、御顏の日に焦け玉ひたる狀より推し參らするに近き邊りの方とも覺え候はず、と訝しげに我顏を熟々見入りて問ふに、さればなり、某は都に住めるもの、聊か志すことの侍りて國々の名所舊蹟を探らん爲巡るものにて候と答れば。其は最殊勝なることゞもかな、先づ〳〵此方へ御入りありて緩々休息ひ玉へ、何は無くとも景色はなかなかに飽かぬ眺めにしあれば、と先に立つて僧は本堂へと誘ひつ いざとて表の障子を開けば山門を隔てゝ遙に望む湖の景色又一しほ美しくぞ思はれける。

時に門外の松の梢に颯々の聲加はりて空に飛ぶ雲足も次第に勢を增し、湖面に騷ぐ男波女波の白く泡立つ狀さへ險しげになれり。本堂は壯大にして流石に名あ

る梵宇とは覺ゆれど壁には雨の漏りし痕あり、天井も所々朽ちて荒れたる狀なり。然る程に僧は雛僧をして煙草盆、茶などを出さしめつ扨いふやう。御覽すが如く當寺は後に高き山を負ひ、前に清き水を控へ、美しき眺望なれば春の朝の湖上に霞を紛ふ波の色、秋の夕は山の頂きに焰と燃ゆる紅葉の映を賞せん爲に筇を曳く仁も少なからず、殊に噂は廣く人の口の端に傳はりてや、折々は御身と同じき都の人達も遙々此處に見え玉ふことのあり。月赤き秋の夜は小舟を泛べて詩を吟ふも好く、雪白き冬の曙は瓢を携へて句を拾ふも妙なり。唐土の姑蘇城外の寒山寺に比べて勝るとも劣るまじき勝地なりとは、曾て彼地に遊びしことのありし詩人の某居士も只管に讃め稱へ玉ひぬ。御身に障ることの在さずば、三日五日は筇を停め玉ひて、緩々景色を探り玉ふもまた一入なるべし、と老僧は誇顏に說き勸めぬ。开は忝なき御厚志なり、別に前途を急ぐ旅路にはあらざれど、貴僧を煩はさんも心苦し、まだ日も高ければこれより會津の方へと志し申さん、さらばとばかり辭し去らんとするとき、先刻より枝を鳴らし、風は益々強く吹き來り、巽の方より獅子の如き黑雲のちぎれ〳〵に狂ひ立ちしと見る間に滿天に廣がりて空摸樣俄に惡しく、忽然として霰の如き雨さへ梧桐の葉に音たてゝ降り出だしぬ。

中

風は愈々烈しく、波は益々荒く、雨も痛く勢ひを增しぬ。こは心元なき空摸樣となりにけりと、天仰ぎつゝ嘆息しが僧も同じく雨降る空を眺めやりつ、此天氣の景色にては容易く雨の足の絕えざるのみか風も次第に勢ひを加へぬべし、固より斯かる山里の食物とて都の方の口に適ふべからず、夜の物さへ甚く汚しきは申すまでもなけれど、萬端の儘ならぬを忍び玉ふて此處に一夜を明し玉へ、如何に不自由なればとて、雨に打たれ風に曝されて案內なき山路に迷はんよりは幾等か勝れるなるべし、心置きなく泊り玉へ、と最親切に勸め呉るゝに。其は忝なく候、久しきが間旅より旅へとさすらひて幾多の辛酸をも早や身に覺えたり、萬端に便りならずと

て何程の事かあるべき、御言葉に甘へんは烏滸の沙汰ながら今は進退共に究りぬ、軒の下なり庫裡の片隅なり雨露をだに凌ぎ得させ玉はらんには如何ばかり嬉しからん、と幾度か額づきつ僧が情氣の蔭に雨宿りすることゝはなりぬ。

容易に風雨の歇む氣配も無く、寺男の入相の鐘撞き出す頃より雨風は益々暴に暴れて、木々の小枝を飛ばし、大地に水粒を躍らす勢ひ凄まじく、おどろ〳〵しき湖の波は高く狂ひて宛然鳴雷の如くに響きぬ。

扨て厨房の方に徃きて老僧が饗應す心も温かき夕食の膳を了へて後、寺男と先程の雛僧とを合せて四人一緒に圓座なして、松島の美はしき景色、平泉の古蹟、或は我が旅の空にて見聞せし可笑かりしこと、憂き目に遇ひし話、又は老僧が昔修業の爲め諸國巡錫中の奇しき談、怪しきことなど交身かはりの物語りに頤を解き、晷の移るを忘れ、暫時暴風雨の吹き荒むをも忘れたりしが、笑聲の絶ゆればまたもや轟々と耳に響く浪の音は暴れまさる風雨に凄まじき勢ひを加へて、屋宇も震ふばかりなり。

下

老僧は心至つて平穩に、しめ〳〵と物語る言の葉もいと優しく、折々人を見る目には微笑を浮べて、誠や御佛に事ふる身の、慈悲の色の溢るゝばかりなる顔は佛にも勝りぬべし。

我は老僧の面を染み〳〵と仰ぎ見つ、御物語りの趣にて推し參らすに當御寺は名高くも最尊く渉らせられ、且は夥しく年古りしやう存ずれば、今は世に得難き寶物、珍らしき什器なぞも定めし多く在すらん、御差支へこれなくば是非に一覧させ玉へ、後の我身の修業の助ともなり候はんにいかで、いかで許させ玉はずやと、懇に請へば。然ればなり、昔より由緒正しき當寺のことなれば、貴き什器も數々傳はりし由なりしが、先代の住持の正しからぬ仁にて、佛門に歸依せし身にあるまじき邪惡なる行爲、酒に狂ひ、色に迷ひ、財を費し果は重代寺に傳はりし什寶までも賣代なして非道の慾に代へし爲め、野衲が代となりては屋根の破れたるを繕ふだけ

の餘裕も無ければ、御覧の如く雨の漏るに任せ、床も朽ちたるまゝに餘儀なく打捨て置く始末にて候　されば御目を汚すに足るほどの品の殘りたるは何も無けれど、茲に唯一つ珍らしきもの丶有之候、これとて他に換へ得べきものなれば決して後に殘す間敷品ながら、持ち去ることのならぬこそ幸なれ、其は本堂の奥の室の壁に、何時頃如何なる畫師の筆の仕業かは知れざれど最年古りたる畫の描きあることにて候。指折り數ふれば一昨年の、丁度今頃にて候ひき、同じ丹青の道に遊べる人の、遊歷の節を暫時當寺に停め玉ひし砌、何と呼びしか名は忘れしが、と老僧は双手を正しく坐りし膝の上に拜み合せつ、傍に膝を崩してうつら〳〵と假睡居る雛僧を靜に顧みて呼び覺し、其方は奥にある屏風へ蓮花に蜻蛉を描きたる彼の畫師の名を覺えてか、何、忘れしとな、はて扨、物覺えの惡きことよ、そんなことなればこそ去年の秋より稽古して今以て心經一卷を諳んじ得ざるなれ。なんぢや方丈樣の方が能く物を御忘れなさると、な、ハヽヽヽ口先ばかり人並勝れ賢しうて仕方なし、どうも困りものではある、と云ひつゝ老僧は更に我方に眼を轉し、其名高き畫師の壁の畫につく〴〵と見入りて感に堪へ、此古畫は如何なる畫師の物されたるものかは知るよしなけれど、世の平生のものに異りたる出來にて最珍らしきもの丶やう覺ふとて一向に首を傾け居玉ひぬ。其他斯道に精しき人達の折々見え玉ふことのあれど、さりとて斯は何某の畫なりと、明かに名を示し得る方も無く、中には左あらぬもの丶やう輕く云ひ做して眼だにしみ〳〵と注がざる人さへあり。奥まりたる室の、日の光りよくも達らで晝さへ小暗きところなれば、見玉はんとならば明日になりて緩々見玉へかし、と今は老僧も睡魔に襲はれてか眼を閉ぢて伏目になり稍々五月蠅なる面色なり。奇しきことを好み、珍らかなるものを見んと思ふは人の情なれば、拙者とて畫の良否を見分け得るの眼識は無けれど、願ふは只今一覧なさしめ玉へ、明日は明日にて改めて又拜見仕らん、是非に許させ玉へと辭を低うすれば、开は最安きことなり、御覧さんとならば遠慮なく往きて見

玉ふべし、と快く諾ひて老僧は傍に鼾の聲高き雛僧を揺り起し蠟燭を點じて案内させぬ。雛僧は眼を擦りつゝ先に立ち厨房より廊下傳ひに本堂に往けば古き疊は打濕りて踏む足も心地惡しく、宏々たる堂の内冷なる風の吹き來りて燭を奪はんとす。木魚經机などの傍より本尊の横合を過ぎて其後とおぼしきところに回り出てぬ。時に雛僧は、此壁に不思議なる畫は書かれたり、いざ篤と見玉へ。と燭を近々と指寄せて示すに、示さるゝ方へ眼を移せしが壁は煤ひたるが上に蜘蛛の網の斑に掛りて、燭の光の弱ければにや、それぞと思ふものゝ描かれたりとも見えず。我が案内する雛僧は此處に在るを心地宜からずと思ひてか、急に用事にかこつけて燭を置きたるまゝ彼方に去りぬ。折も折とて鼠にやあらん、氣立たましき物音を暗き方にて立てぬ。己は陰森たる堂の中へ只一人取殘されて薄氣味惡く、肌に粟立つ思ひをなせり。

渦巻く波の音は麓の湖に轟々と鳴響き、どう／＼と吹き荒む狂風に折々屋鳴り棟震ふかと思はれ、蔀へ激しく打付くる雨の音物凄し。透間より吹き入る風の身に染みて思はずも首を縮めながら不圖後の方を振返れば、己が蔭の最大きく後の壁に映りて、今しも己を一呑みに呑まんとする惡魔の如き風情を示し、蠟燭の火のひら／＼と風に煽らるゝ毎に怪しく動くに怖ろしくも怖ろしく、後へ取つて返さんと思ひしが又思ひ返して踏み止り、再び近々と壁に身を寄せ右手に燭を高く挑げて凝乎と見詰めしが、前に同じく壁の薄黒く見ゆるのみにて他にこれはと思ふものなし。訝りながら更に左手に燭を持ちかへ眼を定めて瞬きもせず透し見れば、僅に霧に包まれしが如き山の姿のほの／＼と顯はれ出でぬ。すはこそ顯はれたり、顯はれたりと思ひつゝ瞳を凝して打視れば、思ひの外に畫の面の大きくてなか／＼に小暗き燭の光もて一目に望まんこと難し。扨蠟燭の心を切りて光を強め、一足二足次第／＼に眺めゆけば先は再び朦朧と霧の中に蔽はれ果てぬ。こは如何にと首を傾けつ立戻りて更につく／＼と麓の方を眺めやれば、一叢繁き篁ありて若草燃ゆるばかりの廣

き野原を控へ、名も得知れぬ草花のいろ〳〵の今を盛りと咲き亂れたり。こは美しき眺めかな、と呟きつ猶進みゆけば流れも淸き小川ありて優しき音を立つるかと怪まれ、上には危げなる丸木橋の掛りてその袂には一本の糸柳の慵げに打烟りて立ち、小川の中には風情ある石の横はりて水は二筋に分れ、流れの末は入江に注ぎぬ。江の岸には細き草の水に垂れて、靜に吹き渡る風に漣を寄せ、遙なる沖合には鴎か千鳥かと訝る白き鳥の襞なす波間に浮きつ沈みつ游べるありて、茫々たる湖を一眸に攢めし景色の美しさ得も云はれぬ眺めなり。再び眼を竹村の方に移せば、蔭に小やかなる家ありて其前には一人の男の江に臨んで超然として佇みつ瞬きもなさで遙に天の一涯を見詰むるが如きを認めぬ。美しき景色に魂の浮かれ出でゝ我を忘れて立てるにやあらん、或は他に心を奪はるまで眺め入るものゝあらんかと、彼男の眼の輝く先をたどりしがそれぞと眼に觸るゝものなく、唯江の上には幾重かさなる女浪男波の限なく襞を寄せて、僅に水天縹渺の間に雲か烟かと見紛ふものゝ微にたなびくを見るのみなりけり。

さるにても彼男の唯一筋に外目も振らず見つめ居るこそ不思議なれ、と訝りつゝも蠟燭の心を切り光りを強めて再び彼男の眼の及ぶ先をたどり、己が眼をきつと見張りて能く〳〵透し見れば、陸より遙に隔りし江の上に一艘の小舟の波に搖られてゆた〳〵と浮べるが、千重の波路を凌ぎつゝ彼方をさして次第〳〵に遠かりゆくを辛くも認めぬ。更に眸を凝して望めば隔りて確に其顏を知るよしなけれど、年まだ若き手弱女の艫の方に彳みたり。彼男は彼の手弱女に深くも別れを惜むにやあらん、顏には愁ひの雲の棚曳きて胸には堪へぬ思ひの蟠まれる如く、手弱女もまた片手を帶に挾みて物思はしげに頭を垂れたり、正にこれ秋まだ淺き斷腸花の露重げなる風情ありて、磨きし如き横顏の白く仄見ゆるも一際憐れを添へぬ。

己は彼の手弱女を知るべき筈なけれど、また何處ともなく其面影に見覺えあるかのやう思ひなされ、茫然として暫時見惚れてありけるが、軈て大浪小浪の寄する

まに〳〵隔てられて次第〳〵に小舟は遠りしが、また其中に大なる波のうねりの高らかに立つまゝに、舟は揺り上げ揺り下げられて危くも已に覆へらんとするまで傾きて波間に隠れ見えずなりぬ。あなやとばかり覺えず知らず聲立つれば其時恰も舟は再び浪の蔭より現はれて、艫に彳みし手弱女も足爪立てゝ此方を望みしに面差あり〳〵と認められしが、其眼元には懐かしげなる情を含みて援けを求むるにも似たりけり。

あはれ彼女こそは別れて以來玆に五年、暑さ寒さにつけ片時も忘るゝ間なき女にてありしなり。己は心燥急りて堪やらず、其舟を呼戻さんと、双手を擧げ聲を限りに叫ばんとせし時、如何にかなしけんふら〳〵と眼眩みて危くも水に陥らんとせし機會に我知らず前へよろめき、燭を壁へ打付けて忽ち元の闇とはなりぬ。

また一しきり吹き荒む風雨の音に我に返りて今までは壁に描かれたる畫を眺め居たりしなりと、心付くや否や流石に心地常ならず手足戰ぎて背に冷汗を濺らしつおそる〳〵闇路を搜りて足早に厨房の方へ戻り、直に枕に就きしが、眼を閉づれば彼の怪しき畫の闇の中にあらはれて彼の手弱女の我を呼べるが如くも思ひ做さるゝのみか、激しき嵐の音の耳にさわがしくて眠安からざりき。

夜のほの〳〵と明けわたる頃となり辛うじて僅に睡みしが、突然凄まじき音に夢破られて驚き起き出で見れば、雨戸を少しく繰りて老僧を初め皆々表の方を眺め居たるに己も同じく戸の隙より覗へば、暴風雨はいよ〳〵暴れに暴れて大雨の篠突く勢ひ物凄きが中に無殘や本堂は嵐に吹き倒されて、其上には大いなる松の朽木の横さまに打倒れたり。あはれ我が昨夜初めて見たりし名畫は、自己を最後の看者となして朝を待たず遂に現世に後を止めざるものとは成り了んぬ。

（をはり）



佛國婦人の眞相

菅原白峰

◉思想と信仰

世界の公園、巴黎の交際社會に出入する貴婦人にして其の生活程度尤も高く、一襲の衣裳に數萬ふらんくを費せし全世界の政治家を知り有數の軍人と交際し、大陸を漫遊し「ゾラ」「モーパッサン」の小說を讀み、日耳曼、英國の諸名家の作を翫味するほどの貴婦人は其の思想信仰も亦高遠にして往々有鬚男子を瞠若たらしむるものあり然れども佛蘭西國全躰を通して斯る婦人の模型を求しか恐らくは十指を屈するに過ぎざるべし、佛國に於ける婦人の大多數は(重に中等階級)今猶依然たる舊思想にして舊信仰を守り舊慣故格に支配されつゝあるなり、即ち佛國婦人の內部に就て仔細に觀察する時は其の大部分は今も猶撲然たる舊時の面影を存ずるものと云ふべしこの點に於て米國婦人、若しくは聯合王國英國の婦人とは遙かに其撰を殊にするものなり、

革命以來佛國到る處に衣服に言語に音調に又習慣に風俗に正しく前代と其風貌を一變し、之れに代りて巴黎の流行に至る處の山村僻邑にまで波及して、巴黎の流行巴黎の習慣、行く處ろとして之あらざるはなしと雖も、而もこは唯表面のみ其思想は猶依然として革命以前のものなり、佛蘭西中等社會婦人の宗教上の信仰と並に其行儀は依然として猶十八世紀時代のものなり、一千七百八十七年後に於て巴黎の市廳が敎育の事に干涉し從來舊敎徒の掌中に歸したる學校をは宗敎意外に獨立せしめ敎科用の書籍は器械となり苟くも宗敎の分子あるものは悉く之を退け神事に關する理想宗敎に關する儀式をは擧げて之を學校外に却けたるの結果は迷ひ易き婦人の信仰上に影響を蒙りたる事決して少からざりし、然れども之れ唯一部の都會即ち巴黎市中の一小部分に止るものにして全佛蘭西の各地方は更に其の影響を蒙らざりしなり、即ち之が爲めに不信仰となり、宗敎上の理想及び儀式に於て無頓着となりしもの

は堅實なる佛蘭西中等社會の婦人にあらずして唯極めて少數なる巴黎婦人の一小部分に過ぎざりしなりき、されば中等社會を中堅する佛蘭西婦人の重なる部分を概格して言へば其の思想は今猶舊き思想なり、其の信仰は今猶熱心なる舊教信者なり、其道徳は極めて嚴格、寧ろ偏狹といふべき程に小むずかしく嚴格なり、彼等は神の命に頷き、僧侶の言に傾聽するのみ、されども是れと同時に彼等は又よく世の利益を得るに熱心にして一家を治め一家を整理するに於ては善良なる支配人なり、彼等は習慣の奴隷にして又迷信の伴侶なり一も二もなく因習に依つて事をなし、故格に墨守するの外に能なきがごとし、されども一家の主婦として、且つ又人の母としては忠實職務を盡すものなり、彼等は一意其の家を整理するを以て天職となし、善良なる家庭の主婦、健全なる一家の母として其職務を執行するを以て生涯の任務となし、其外に希望する所なきなり。彼等は米國婦人の如く自營獨立するを欲せず、況んや社會の表面に立ちて各種の業務に從事し、或は天才を砥礪し若しくは藝術家となつて名譽の月桂冠を望まんなぞとは夢想だもせざる處ろなり、彼等は謹んで唯家を治むなり、而かも其の家を治むるや節儉の德を深く心に銘し、細心にしてよく家を整理するの本能を有す、世界中に於て何分尤も世帶の經濟を巧にするぞと問へば予等は直ちに佛蘭西婦人なるべしと答へんのみ、先年獨逸と戰爭し敗軍の結果として二十億ふらんくの償金を出し其上多年の軍役に勞れ、國民の負擔過重過大破產の運命に迫りつゝありし國運を數年ならずしてよく之を挽回せし所以のものは全く國民勤儉の致す處に外ならず而して其よく之を爲し遂げたるものは一に佛國婦人の家事經濟の賜なりと云はざるべからず此の如く舊思想舊信仰に固着せる佛國婦人はよく家庭の主權者として忠實なるだけ、それだけ政治門題に於ては全く無識なり、又冷淡なり、此の點に於ても彼等は米國婦人の自から政界に立ち口角沫を飛ばして政治を論議し又は英國婦人が男子の背後にあり政治運動に熱中するものとは大に其撰を異にするものなり

●家庭に於ける婦人

善良なる家庭の整理者としての佛蘭西婦人寧ろ主婦は戸外に於て其の實力才能を働かす事の機會なき代りに實權實力は極めて大なり、主婦は殆んど家内に於ける全智全能にして金錢出納子女の教育裁縫の事、料理の事器物購入、遊樂の事、儀式のと一切萬事の家務の實權をもちつゝ取りまかなつて行くなり、されば佛蘭西中等社會の家庭に入れば其の家には必ず主婦の有力なるを見るべし、而して家の主人も之を干渉せず子女も又よく母の爲す處に服從するのみ、是れ佛國中等社會に通ずる家庭の狀態なり、而して彼等中等の婦人は二六時中家に居て果して何事を爲しつゝあるかこれ吾人の知らんと欲する處なり、彼等婦人が家居の仕事は一言にして云へば家内の勞働なり、家庭の業務なり、從來有觸れたる佛蘭西の小說等には往々佛蘭西の婦人が自から遊蕩し自から逸樂に耽るが如くに書かれつゝあるも這は大なる相違なり彼等の實際の生活は決して逸樂ならず彼等は早朝から深夜に至るまで常に苦しき勞働をなしつゝあるなり、而かも其勞働は賃銀の伴ふ勞働にあらずして一家を齊ふるに就て趣味ある勞働なり此の勞働は彼等の眼中に極めて高尚にして且つ極めて神聖となる處ろの勞働なり、彼等は二六時中此の苦しき勞働をなすを以て貴女たるの眞の價値となすものなり、又面目となすものなり、生涯の誇りとなすものなり

而して斯の如く彼等が喜んで爲す處ろの勞働は畢竟下女の仕事なり若し他の米國婦人をして之を許さしめば佛國中等社會の婦人は生涯唯下婢の仕事をなしつゝあるものと評するの外なかるべし、彼等は實にあらゆる仕事に從事する下女なり彼女は家の番人なり料理人なり、裁縫師なり夙に床を出で、晩く床に入り機嫌のよしあしに拘らず常に一家の安穩繁榮の上に其心を苦しめあるなり、其の經濟向は節儉の餘り寧ろ吝嗇に、而かも自身の費用に吝嗇にして衣服を飾らず飲食に費さず小商人と瑣末の損得を爭ひ、一片の砂糖と雖も漫りに家内に於て消費するを許さず況んや其以下に於ては家の主婦たるものは唯重き苦しき家内の勞働なるのみ、

之れ實に中等社會の下級の即ち佛蘭西に於て大多數を占むる所ろの婦人の實狀なり、勿論中等社會の上級に位する小數の貴女は其衣服も華麗にし自から多少の逸樂あるべしと雖もこれとても他人の想像するが如く閑散にして氣樂なるものにあらざるなり

次に彼等の慰樂とする所は如何、宴會か、日曜の遊樂か、一週一度の戶外の遊樂は家內的勞働者たる彼等に至大の慰藉を與ふるが如く思はるゝも前實家を治むる婦人にはこの遊樂こそ却つて重荷なりと見做されたるが如し彼等は寧ろ子女の養育を以て唯一の樂事となすが如し然らざれば晩餐席上家族團欒の樂を取るに過ぎず佛國中等社會に於ける食卓は極めて質素なり、通例の家に於ては朝餐して牛乳麵包若しくは、少量、野菜とスープを供し中食には肉、野菜、麵包、少許の乾酪を加ふるに過ぎず、而して晩餐は彼等が一日中尤も盛饌とする所にして肉汁、砂糖、野菜、蒸肉、若しくは燒肉の一品を供し外に「マカロニー」(餛飩類)等を添ゆる事あり、且つ一瓶の葡萄酒は必ず卓上に置かる而して食事了れば庖厨はまた一掃せられてそこに半片の麵包の殘物、一皿の肉片のあざれたるものだもあるなし、是れ佛國婦人の家計に巧になる所なり

◉女教師の希望

佛國中等社會の婦人の弊は其虛飾なるにあり、彼等は其の家內的なるに拘らず、常に馬鹿らしき虛飾を好み且つ其虛飾を以て己れの愛する子女をも包括せんとする事なり、彼等の敎育に就ては理想の如き又其一例として見るべし彼等は固よりよく其の子を敎育せんと欲するものなり、然かれども、假令へば玆に二個の學校即ち一は極めて善良なる小學校と一は不良なる中學校とありとすれば、彼等は即ち其の子を中學校の方に入れんと欲するがごとし、何となれば是れ彼等の眼中には高級の學校として映ずればなり、彼等は唯其の子に得業生の稱號を得せしめんが爲めに莫大なる費用を惜まず、七年の間其子を中學校に繫がんと欲するなり、而してこの中學校卒業生の効力は唯其稱號のみにして實際は社會に對して何の重きをもなすにあらず寧ろ他の

實業學校手藝學校等に入りたるもの活世界に要用なるが如し、然れども佛國婦人が其子に對する恩惠は實際の効力よりも其虛名を尊んで與へんとするなり。

而して是れ豈唯男子のみならんや、女兒に對する恩惠又この如し、佛國婦人が其女子の教育して前途の幸福を得せしめんと欲するに二樣の意味あり一はこれをして女教師たらし、一は紳士に嫁せしめんと欲するにあり。

蓋し佛國中等社會の婦人は前記の如く家内に於ける勞働の繁雜たる爲め、居常其眼中に映ずる上等社會を以て、極めて氣樂にして極めて幸福なるものと過想し、上等社會が常に華麗にして閑適なるを羨望するの餘り、おのれの子女をして將來はこの如く貴族的幸福を得せしめんと熱望するの極、遂に其の母をして其娘を女教師となさんとするにあり、彼等謂へらく女教師は貴女なり榮譽の職なりとこれ大なる誤解たるを免れざるより、曷ぞ知らん天下の業にして女教師の如き苦しきものあらんとは。

中等社會の娘が女教師たらんとする又斯の如く唯貴女てふ名稱を失はざらんと欲するが爲めのみ、近者佛國に於ては女教師の供給溢れて每次其志願者の數の多きに過ぐるの有樣なり、巴里に於て女教師の數二千四百人にして每一年の欠員凡そ二百名の多きに上れり、佛國全躰に於て婦人の手に成る學校は二萬三千四百個なるに、女教師の試驗を志願したるもの五萬餘人に踰へたり、而して其過半は之に及第し内二千名は已に職に就きたるも殘れる二百五十名の小女は空しく教師の職を望みつゝ青春の歲月を空消するものゝ、蓋し虛飾に汲々たる佛國婦人の性情として一旦官府の及第證を得、公邊に於て數多の學藝に通したりと證明せられたるものが、下りて織女となりて工藝に從事するが如きは甚だしく其の體面を損ずるものとなすがごとし。これ即ち佛國婦人弱點にして而かも又其高尚寧ろ瘠我慢なる處なり。

次に農商を鄙んで官吏を尊ぶの風は佛國舊來の慣習にして如何なる下級官吏と雖も官吏は人の上に立つもの

なりとて多少の尊敬を置かれつゝあるなり、官吏の俸給は少し、其位置は低し、其の昇進の路は迂なり、然かれども中等社會の婦人が其子の就官を願ふ所以のものは他なし、只一の望、即ち其子を官吏となして綺麗なる官服を着せ、人の上に立たせて人を使ふ身ならしめ、社會上に於ても更に其位置を高からしめんと欲するなり、而して彼等は又其の娘をして同樣官吏の仲間に向つて其配偶者を求めんとしつゝあるなり

◉上流社會の少女

佛蘭西の少女は、他國の少女の如く、快活新鮮、水の流るゝ如く花の笑ふが如き幸福なるものにあらず、社會より殆んど度外に置かれたるあわれ果敢なき可憐のものなり、彼等已に世間の外にありて一通り敎育を受け終れば、即ち世間への紹介として數度の「少女の宴會」に出席す然る後父母は隨意に之を他に嫁せしむるを得るなり。

扨て其「少女の宴會」に出づるにも服裝は成る可く質素を旨とす、何となれば佛國の風習としてたとへ其評判は好評なりとも苟にも人の噂に上るやうなる少女を娶るを欲せざるを以て、少女は成る可く人の指目を受けざるを旨とし醜美に拘らず身を包むことを務めざる可からず、少女として男子に直接に求婚さるゝは、佛國に於て甚だ不法の事となせり、

上等社會に於ては夫ある婦人にして他の男子より言ひ寄らるゝ事さいあるに少女は何處の會にも招待せらるゝ事なく、凡て歡樂と云ふ歡樂は單に有夫婦人の上に限れたるものゝ如く、既婚婦人は少女を眼中に置かず又世間話を聞かする事もなく殆んど取のけものとして常に之を室外に逐ひ遣らんとする位なり

佛國に於て少女がさまぐの束縛を受け其自然の發達を妨げらるゝ事は實に驚くべきものなり、母の唯一の望は吾娘に世の中の危險を更に知らしめずして突然不意に之を生涯の心中に押出さんとするにあるかの如く少女の世間を知らされば知らざる程其敎育は愈以て完全なりと思惟せらるゝが如し母は其女の生るゝより日々注意警護し人にも見せずして育て上げ赤兒の如き其

愛女をば突然擧げて見も知らぬ男子に與ふるなり、而も其男子は往々にして巴里の風流社會に沈淪したる遊蕩子たるなり斯る花嫁が一朝人に嫁して劇しき失望を感ずると豈に驚くに足んや、其失望を慰めんが爲に往々不義の愛に逢ふこと豈又驚くに足らんや、而して其不義の愛や常に痛恨深覺に終り、從て愛と云ふ事は一切之を信ぜざるに至るべし

少女結婚前に至れば「少女の宴會」に出入すること數次此際に於て彼少女等は雪白の衣着て各其母の前に列をなして坐し美鬟纎腰黑眼の男子と懇かしげに舞踏するなり此の間大膽なる男子は少女に立食室に案内せんことを乞ふことあるなり、其男子若し身分ある者なれば、即ち許可を與へらる、然れども少女の母は必ず其後より從ひ行き、立食の饗果つれば即ち之を導て故の坐に返る、少女は同じ踊り相手と二度踊ることなく、昔しの遊び仲間の男子に握手することもなく打笑ふことなどは見苦しと云はれ、若し男子の顏などを見るやうの事ありては將來の結婚にさわるなり、少女の生涯に於て尤も多事なるは此頃なり其母が技倆をふるふて其少女を嫁す可き機會を覗ふも又此頃なり、此間少女は軈て其束縛の解く可きを知りつゝ其師に從ひ若くは其保姆に從ひて音樂繪畫等を學びて其日を送る、斯くて少女は已に第一舞踏に出でたり、母は已に之を嫁すべき時期なりと決し其一二親友に女の持參金の額を告ぐ既にして此報忽ち野火の如く廣まり求婚者續々現れ來るなり、尤も彼等は女の兩親に來らず、況して女其人に來るが如きとは決して無く即ち媒妁人の處々へ申込み來りて其手續を定むるなり、

双方の代言公證人等が先づ双方新婚者の財產を明白に調定したる後ならでは未だ結婚の事に深入をなさゞるなり、何となれば後に至りて双方の財產は以て新婚夫婦の適當の生涯を造るに足らざると發見せらるゝ時は青年男女の感情を傷むるの嫌ありと云へばなり、尤も右の如き事實後に到りて發見せらるゝ時は結婚の其場にて破約となるも少こしも差支あることなし

其際若し少女の持參財產に然る可き田地森林あるとき

若しくは歴史つきの家屋敷海岸高みの地ある時は、外交的の親戚は言葉を盡して之を吹聽して以て先方の氣を惹くなり、少女其人に關する吹聽は事新らしく云ふ迄もなく、少女は繪畫に長け少女は唱歌に長じ少女は敬虔にして少女は謹み深く殊に無邪氣にして猶世間を知らず云々とは何處も同じ媒妁口なり、尤も如何に世間より遠ざけ置きたる少女なりとも學校の生涯に於て、何時か如何なる社會的空氣に感じたる事なきを保證すべからざるものなれば其母の言も或は正鵠を外づゝる事を保せず、而かも概して佛國の少女は其母の言ひ且つ信ずる如く殆んと無邪氣には過ぐる程なれば其の結婚するや忽ちにして人世の暗き半面を窺ひ得て驚き、失戀となり迷亂となり、後悔となり、未た幸福の賜に與からずして其心の花は無殘にも散り去る事多しとなん

◉小賣商の妻女

其の位置未だ下女の業務をなす程に下らざるも而かも彼等自ら書記となり帳方となり、其身の働きに依りて一家の歳入に幾分の助けを與へざる可からざる境遇に立つの婦人も亦尠からず今試みに其の一例として小商人の世界に就て之を觀察せんか其の婦人は甚だ機敏利巧なる小賣商にして、又た店頭の監督に於て甚だ機敏なり其夫は時として日猶ほ早く店を閉じ商賣を止めんとすることあれども其の妻は其夫に勸め一品なりとも、其子供の嫁道具を增さんが爲に勸めて其業務に停らしめんとす、初曉より店を閉づるに至るまで暫くも彼女の身を外づす事なく一分時も無用に過す事なく、彼女自から店頭に座して商賣に從事わるなり彼女は其夫に對して一言の話をなす事なく、又一の和ぎたる態度もて其良人を遇迎する事なき其の代りに彼等は其の顧客に接して愛嬌を呈し、中々如才なき且つ盡き果てざる叮嚀の口振にて貨物を捌くなり、而して夜は毎夜十二時過ぎまで金子を受取り、又過錢を返し帳簿を座右に控へて日日の入費を記入し、買人に向つて十二分の注意をなし其暇ある毎に書信を認めるが如き實に店一切を彼女の腦中に收めて以て苦しき椅子に倚れる

なり、彼女の夫は時として保養の爲めに外出なし彼れは倶樂部に赴くことあり遊歩することありと雖も彼の女は何をもなさず三百六十五日店頭に齷齪せるなり、實に家の切れはし、即ち彼女自から擇みたる一の家の据へ着け物と異る所あらず、但し其女の夫が議員若くは町村の役員たるときには彼女も追々饗莚に招かるゝことも之れあるなり、併し此種の婦人は常に熱心なる信仰を有す、巴黎に於て猶然り、其他の地方に於て一般に然りとなす　(完)

米國 女學生の自活

江湖逸人

敎育園――大學生

獨立獨歩、自營自活は米國婦人の本色なり、否米國々民の本色なり、眞骨頂なり。人は米國人を指して一般に拜金宗信徒と輕蔑するもこは甚だ皮相の見にして未だ其の眞相を盡さゞるものなり、頂天立地、獨立獨歩は米國人の本領にして己れの額に汗して麵包を食へてふ諺は、この國の隅々端々に行渡りて、幼稚園に通ふ兒童の童話にも又其の主義を含め、自から儲けて自から生活せよとの觀念を吹こめるなり、されば大學の學生なども學習の餘暇常に自から學資を作りて修業し、やがて名譽ある學位を得て有數の人物となるもの多し、這は我が留學生などの親しく實見する處ろなり、而かも是れ單に男子のみにあらず女學生に於ても、又自からの勞働に依つて其の學資を作れるもの多し、獨立有爲の氣慨稱すべきにあらずや、

方今世界各國を概觀して女學生自活法の完備せるを求むれば恐らく米國に過ぐるものあらざるべし、同國の女學生にして專門の技藝を修め、深遠なる學術を究めんとの志望を抱きながらも不幸にして其家の貧窶なるか、若しくは何等かの事情の爲め思ふがまゝに學校に入りて勉學すると能はざるものは、皆それ〳〵自活の道を求めて、我が性質に適したる專門の學術(醫學、文學、理學)を研究するを常とす、言ふまでもなく米國の

於ては。一般に女子も亦男子と等しく高等教育を受くべきものと認識せられたり、人倘し米國にて「女子は男子よりも劣等なる教育を受くべきものなり」といはんには、聞く者皆驚いて耳を側つべし、さりながら家計貧しく、一定の收入を以ては到底女子に高等の教育を授けしむる事能はざるものの父兄多し、是等の子女の爲め適當なる方法を設けて教育せしむべしといふ問題の起るは又自然の勢なるべし、勿論大なる都府即ち大學校、高等學校(米國は男女混合教育にして大學、高等學校共に於ては男女席を陳ねて教を受く)等の設ありて男女共に居ながらにして高等教育を受くべき便宜の大都會に住める者は、女學生も左程の費用を要せず、唯僅かに教科書を購求する費用の外別に出費を要する事なし)と雖も、是等の學校に遠き地方にありて僅少なる土地を耕やし、これを以て漸く其の日の生計をなせる家々にては、我女兒を如何にして教育し如何にして獨立せしめ如何にして人並々に幸福なる生涯を得せしむべきやといふ事は其父たり、母たるもの丶日常不斷の念頭に存留する處の題目なり。

勿論斯る農家の主人、即ち女兒の父親は、概ね高等の教育を受けたる事なく、その少年の時代にありて僅かに初等の教育を以て滿足したるものなり、已に一家を持ちて農事に勵精するに當りては、已れの生涯を顧みつ丶只管子女の將來に向ッて種々なる希望を抱き、隨ッて女兒の教育に向ッて尤も重きを置くの有樣なり、是に於てか、學資金の問題となる地方小農家の父母が其の子女に學資金を得させん爲めに若干の地面を與へて五穀蔬菜を植へしめ、斯くして彼等が毎日小學校に出づる前に一度田園を見廻はり、或は耘り、或は耕やし、やがて學校より歸り來れば又植物の培養に心を盡くし斯くして、之より得たる收入は年々預け金、又は貸金となして、積み置きやがて大學校の第一年の學費の入用に至るまで貯蓄するなり。米國地方農家が子女の爲めにこの方法を設くる多し、この田園を稱してエヂユクーショナルガーデン(教育園)とはいふ、是れと同じく又斯の「教育園」に對してコレツヂカウ(大學牛)といふ

あり、大學牛とは少女の學資に充てん爲め金の代りに父親より貰ふ牝牛の名なり、かくて少女は自から乳牛を飼ひ乳汁を搾りてバタを製り、市場に運びて之を賣り、其代金を貯蓄して他日大學に入るの學資金となすなり、又或は鷄を養ふて其卵を採り之を賣りて學資を作るものあり、或は植物花卉を養成するあり、其他種々なる便法を考出して少女自から教育資金を作ること米國に於ては寧ろ通常の事なりとす。

家政部の補助――一年二十五弗――

成蹟良好――南部と北部

斯の如くするも、猶資金の不足する場合あり、譬へば凶作に遭ひ若しくは獸畜の傳染病にて斃るゝなどの場合なきにあらず斯る時こそ此の自營自活的少女の尤も苦心する時ならん、而かも性來活潑にして有爲の資に富む米國女子は、能くこの困難に打勝ち進んで自家の運命を拓かんとするは亦頼もしき氣象といふべし。扨てこの如き場合に於て少女は如何にするやといふに、まづ尤も普通にして最も少女に適當なる自活法は大學の家政部を助けて多少の學資を設くるにあり、大學の家政部を助くるとは如何なるものぞ、まづ新聞紙の廣告中にある左の文字を見るべし。

大學生にして家政部を助けて學資を得んとするものには、日々一時間づゝの勞働に對して一年二十五弗（三時間なれば七十五弗）の學資を給すべし、望の者は一日幾時間づゝ勞働し得べきやを詳記し豫め校長に願ひ出づべし、

某々學校。

世間は廣し學校は數多なりこの如き廣告に依つて、募に應じかくて一時間なり、二時間なり、將た又三時間四時間、我がおもひ〳〵に勞働して應分の學資を作るなり、扨今玆に其の勞働の種類の一斑を擧ぐれば、食卓の掃除あり、食堂の整理あり、食器の拭洗あり、料理番の手傳あり、是等はすべて食堂に於ける事務なるが、中に就て劇しき勞働を要するもの、又は困難なる仕事は皆通常婢僕の爲す所にして、自活生は毫も其手を煩はすに及はざるなり、其他應接所、音樂室、敎場、說敎場等に於て一應下婢の掃除をなしたる後、拂拭整理をなすも

のあり、或は来客の取次、又は始業、終業の號令を司るものあり、或は衣服、窓掛等の裁縫をなすものあり、總じてこれ等女學生が諸種の勞働に從事する間はそれぞれ監督の老女あれども決して通常の下婢どもと同様の取扱を受くることなし、恰も我國の學婢のやうなれども稍高尚なりと知るべししかくて如何なる事務も圓滑に且つ愉快に行はれて二三十人の自活生の中、毫も喧鬧を見るが如きことなし、尤も一日三四時間勞働に從事するものは普通一般の學生に比して多少時間を損するが如きも、必らずしも然らず彼等が散歩行樂の時間を以て我は優に自營の計をなすべく、これが爲めに別段學科上に差支を生ずる事なく却て自活生は他の富裕なる學生より其の成蹟良好にして滿點を得る者さい多し、彼等は毎日午前には白き大前垂を掛けて食堂の仕事を助け、食器などを洗ひて繊弱なる手指も爲めに凍え痺るも。午後には同一の手もてピヤノ、或はハープを奏づ。午前は下婢の如くにして午後には天女のごとし。斯くて勞働に從事するものせざるものも皆同一の教場にて同一の教授を受く而かも此際勞働せざるものが自活生を見下すが如き事なく、親の貧富によりて殊更に他を輕重することなし、假令心に僻か思へりとも公然口に出すなどの事は決してあらざるなり、勿論此等女學生が自活を爲すは全く必要に迫られ止むを得ざるによるものなれば、富豪の令嬢にして、面白半分に之を爲すものはなし、例令之を爲さんとするも、大學に於て許可せざるなり、是れこの法の獨り貧家の女子の爲めに設けられたるものなるが故なり、學生勞働の時間は種々なれども、多くは一日一時間の勞働にて一年二十五弗を得、之にて課程外の專門科を修むるなり、之に就ては種々興味ある逸話も尠からず、或小女の如きは已に一紳士と結婚の約束をなせるものあり、斯る身にて何故大學に入りて自活生になれるにやと問ひけるに、少女は答て曰ふ、其は他にあらず、妾は妾より遙かに高等なる、且つ才識の俊れたる一紳士と結婚の約を結べり、妾が始めて其人に遭ひける折は未來の良人は既に大學に在り、妾は漸く高等小學を終へて地方小學校の

下級生徒を教授したりき、その時熱々おもへらく、妾は妾の智識が情人の配偶たるに適するまでは決して結婚せざるべしと、情人は高尚なる教育を得て博識の聞へいと高し。さるも妾は全く無學なれば、今倘し結婚しなば情人の助けとならんよりも却て厄介物となりなんされば今妾は彼人の興味ありけに思はる〻學科を研究しつ〻あり、妾は我夫をして無能なる人形を妻とせしむるに堪へず、よりて妾は彼人の妻とならん準備の爲めにかくは大學に入りたるなりと

以上述べたる女子の自治法は米國の南部と北部とによりて著るしき相違あり、北部に於ては一州中少くも二三若しくは五六の大學（自活法を行へる大學）を見れども南部に於ては斯の如き組織を有するものは稀なり、蓋し此の差違あるものは、南部の女子は北部の女子に比して獨立の氣象に乏しく、從てこの法によりて自活せんとするものなく、延て大學に此法を置くの必要を見ざるが故なりとぞ

此の組織たる獨り女子大學に行はる〻のみならず、又男女を混じて教授せる學校に於ても之あり、彼の奴隷廢止運動に關して有名なるオハイオ州のオベルリン大學の如きは即ち此種に屬す、婦人選擧問題の唱首ストーン女史は聖書中「婦人は男子に比して劣等なり」との事を記せる章を讀まんとして、希臘語及び希伯來語を研究するの要を感じ、遂に大學に入りて自活生となりしが、此の時女史の收入は一週五十仙（我が一圓）即ち一年僅かに五磅なりしが故に女史は四年間唯一枚の新衣を調へたるのみなりき。

職業局の周旋――暑中休暇の利用――
下婢社會の恐慌――新聞雜誌の投書

女學生が大學の家政部を扶けて自活するの法はマッサチユセッツ州マウントハルヨース大學の創設者なるメリーライオン女史の始めて實行する處ろにして、實に千八百三十七年（今より六十五年前）なりき、されど當時ライオン嬢の目的は學生に職業を與へて自活せしめ、依て學資を減ぜしむるが爲めにあらずして、僅少の學資を有するものに特別の利益を與へんとするに在りたりき、此の目的を以て日常家内の事務は教師又は監督者の下に學生をして爲さしめたり、而かも當時は毫も地位の高下と貧富の差違とに拘らず、單に貧家の女子

のみならず隨分國中著名なる人々の令孃にしてこの大學の家政部を助けて卒業したるもの多かりし、又目下この大學に於て取扱ふ事務は大抵一日一時間にして、時に劇しき勞力を要するか、或は不快なる事をなすものは多少時間を短かくし、日曜日には半時間を減じて水曜日に之を補ひ、又病氣の時は屆出次第勞働を免せられて補員之に代はる、尤も別に一人の僕と一人の下婢ありて劇しき勞働に從事すれども其他の事務は皆女學生の執る所ろなり、勿論成るべくは器械を用ゐて勞力を省き、いづれの室にも蒸氣管を通じて絶へず室を暖むるなどの用意はおさ〳〵怠りなしとぞ。

近時市俄府に創立されたる大學校の學生自助法は頗る新奇にして且つ有益なり、而して其の種類も又少からず、この法は大學家政部を助くるものにあらずして、多くは大學外の個人の家に仕へ、或は下宿屋にありて朝夕家內の事務を助け以て糊口の道を求むるにあり、而して大學內には職業局なるものありて職業を得んと欲するものは該局に五十仙(我約壱圓)の手數料を納めて周旋を依賴するなり、かくて職業局はそれ〳〵學生の爲めに相當の地位を周施し、或は私立學校又は夜學校の敎師となし、或は新聞社又は私立書籍館に入るゝあり、又大學內に住めるものは、或は其の敎師の兒女の保姆となり、或は敎師の信書發送を掌り、斯くして一日四時間づゝ勞働するなり、斯くする時は一學年の間大抵三百弗乃至三百五十弗(六七百圓)の學費を儲け出す事を得るなり、又大學に在りて速記及タイプライチングをなすものあり、或は敎會唱歌者の仲間に入りて大學全學年の資金を儲くるあり、而して此等學生の儲出したる學費はいつも金錢にて渡さるゝ事なく、唯一學期の終に學資の一部分を渡さるゝものなり、次に暑中休暇中、大學中學生の學資をつくる方法は實に千種萬樣にして凡そ女子の爲し得べき職業は殆んど總て爲さゞるものなし、之によりて二三百弗乃至四五百弗を貯蓄して次學年の學資をつくるものあり、近頃西部の新聞紙が愛耳蘭下婢の「戶外勞働俱樂部」よりの投書を載せたるものを見るに、暑中に際し、大學女學生の部隊が

市府又は田舍を襲撃し、學校にて習ひ覺へし家事經濟を實地に應用するにより通常の下婢は之が爲めに自己職業の範圍內に切り込まれ暑中は其の職業を失ひ、從て糊口の道に窮する事多しといへり無理ならぬ事なり

實にや米國女學生は暑中休暇を以て温泉場或は海水浴に至りて割烹若しくは給事等をなすを少しも恥かしきととなさず、却て我が學びし學問を實地に應用するを以て極めて愉快なる事となせり、中には偶々温泉場等にて來客の給仕などする中に、互に懇親を重ねて才識あり財產ある紳士と結婚するの例なきにあらず、其の他暑中休暇中諸種の事務家の手助をなし、爲めに通常の被雇人等は暫時の手代りを得て暇を貰ふ事さいあり、又或は一時新聞記者となるものあり、或は多少文才を有する者は暑中休業の間温泉場其他に在りて自己の經驗したる事柄を面白可笑しく書き綴りて新聞雜誌に投じ之によりて多額の報酬を得る事あり、

以上述べたる女子自活法は米國に於て普通の事にして毫も怪しむに足らずと雖も、他國に在りては其例少く、唯上級生徒が下級生徒を敎授して僅かに學資を得る位の事に止まれば、或は米國女學生を目して、經驗の爲め面白半分に自活するものならんと思へるものあれども、之れ大なる誤謬なり、彼等は決して數奇の爲めに勞働するにあらず、實際必要の事ありて勞働するなり、而かも其の必要は米國一般の國風として女子も男子と均く勇邁敢爲如何なる事も進んで爲すべく自から營んで自から活き以て自個の運命を開拓せんとする活潑なる國風に依るものなり。

（完）



奥様

黒田湖山

(一)葉風

空には月さやかに照りて、籬にちかう破れそめし芭蕉の葉風いとわびしく、それとしもなき草をたよりて鳴く虫の聲、心こもりてなか〳〵にあはれ深き夜なり。軒の荵の長くたれて、萩おもしろう沓ぬぎを蔽ひかくせし此方、椽にうつれる松かげのうちに、白き衣の袖ほの見えて、年なほわかき女二人端居したり。

一人の丈たかきは、年の頃二十二三、面きよげに品づきて、髪は美しう夜會に結へり。一人は、肉肥りて姿さへ卑しといふにはあらねど島田の鬢いたう亂れて、襟のわたり何處とにもあらで都めかぬ節あり。

旦那様は、ほんとに何うなされたので御座いましよう、もうお歸りなされそうなものをと、肥り肉なるが、そと月影うち仰ぎつゝ言ふ。また御酒めしわがつて、男の方には羨ましと見ゆる、面白い夢を見てゐらつしやるのだらうよと、丈たかき方は俯方きがちなり。

眞個に、此の間から能く續くので御座いますね、と此方もうち沈める聲なりしが、やがてまた、晴れやかなる輕き調子にかへりて、でも奥さまなぞは、全くお幸で御座います、このやうに立派なおくらしを遊ばして、平常是れと申すお心の苦もなし、旦那様、此の頃でこそ少しはお遊びもなされ、あゝいふ好きお方に在せばとまで言ひて、急に首うち傾けつ、それにつけても、わたくしたちは、是れからまあ何となりますやら、此の間母より、ふと縁談のこともれきいて、俄に此のやうなこと考へる身となりましたと、襟かき合せつゝ心ぼそげに言ふ。

よそ目には、何と見えやうか知らねど、斯うして私の身になつて見れば、なか〳〵幸どころのことにはあらず、このやうなくらしも、旦那さまの好きも、心の奥なる苦の消えであらば、胸のやすまる時はなうて、其の切なさ果敢なさ。實を言へば、私は初めより此方へ嫁ぐべき身ではなく、わが中なる姉嫁入る筈であつた

のなれど、故あつて、急に姉へは養子を迎へることゝなつたれば、わたしが此處へ來るやうになつた譯。私は、最初他家へ行く約束があつて、此の家へ來る筈ではなかつたのよと若き奥様は低き聲なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此の月の夜を初めとして、秋雨そぼふる窓のもとに、凩ふきしきる宵の燈火に、降る雪笹の葉に重うかゝる夜半の淋しさに、奥様のこのこと語り出づる度繁くなりて、其の聲次第に細うなりぬ。

世には斯かる奥様もありき。

（二）うしろ影

けたゝましく鈴鳴りて、馬しづかにとゞまれば、車掌は聲振り立てゝ、日本橋ゝゝゝと叫ぶ。

黄金の色見るにかなへる眼光したる商人風の男、高きカラーして賢げに煙草くゆらしつゝありし若紳士、子供つれたる老婆、やゝ色さめたる紹の羽織をいと眞面目に着なしたる人など、心せくさまに馬車を下りたる後を、つと其坐をはなれて、ゆるやかに出て行く一人の女あり。年の頃は、二十七八の鼻たかく、眉細く、殊に眼の色すゞしくて、大きやかなる丸髷いと能く似合ひたり。三つまでも金の指環したる手には、紫の袱紗輕くにぎりて、片かたには、深張のなみ〳〵の品にはあらぬ蝙蝠傘携へつ。側には、女中と見ゆるを連れたり。

此の婦人下りて後、新らしき人ものらず、馬車は、又もやゆるぎはじめぬ。

今まで、何の言葉もあらず、半ば嘲りの眼もて、凝乎と彼の丸髷姿を見つゝありし、藝妓めきし女二人、此の馬車のうちにありき。其のやゝ老ひたる一人は、ね、お前さんも知つて居るでしよう、あれは、新高砂で二三子といつて出てた人よ、ほんとに乙うすましたものねえ、と他の一人を顧みて笑ひぬ。まあ彼れがそうだつたの、そうね、思ひ出して見れば彼の人よく知つてゝよ。彼の人だつて、私らを忘れはしまいに、何てまあすましやうだらう。いやにお高いのねと、其の若きは、口もと

少しくゆがめつゝ言ふ。
　それは、今は立派なお役人さまの奥様になつて居るのなれば、わたしらのやうな者に、彼れ是れ言つたり言はれたりするのは、面白うもあるまじけれど、さりとては亦たあまりのよそ〳〵しさ。　五年昔は、同じ御神燈のもとにてこそなけれ、花にも月にも隣り合ひたる中の、一つ三昧線の糸に、唄ひかはし踊りつれたることも常なりしに、如何に奥様らしうせねばならぬとて、あゝも氣どるには及ぶまじきを。わたしであれば、いくら奥様になればとて、決して昔はわすれぬつもりと口早に言ひて、已に見えずなりたる彼の姿を、そこら此處かと見かへりぬ。眞個にね、まるつきり知らぬ人のやうだものと、わかきも聲をあはしての言葉なり。
　世には斯かる奥様もありき。

(三)花の行末

滊車は、今目黒を出でぬ。
二等列車の中に乘り込める二人の婦人は、尙ほ興ありげに其の物語を續けたり。
　それでは、わたしたちの級に居た方は、もう皆おかたづきになつたので御座いますねと言へるは、束髮に結へる、色蒼白くて、面細く、眼にうるみを持てる一人なり。
　そうで御座いますよ、だけれど、大勢のうちで一番御容色の好かつた山田んんね、彼の方は又實家へ歸つて居有るやうで御座いますよと、是れは丸髷なる、頰のあたり福らかなる、聲などいと晴れやかなるが言ふ。
　まあ、またお歸りにや、何とした事やら、三度めとの事で、おかたづきになつたのは、つい此の間であつたを、あの方もよく〳〵御緣が薄いので御座いますねと、例の瘦けたる方は、溢るゝ同情をもて言へり。
　能くは存じませねど、人の語るを聞けば、あの方が御不緣は、皆あの御容色ゆゑと申すこと、美しう生るゝも、よしあしで御座いますよと、輕ういひなす。
　とは如何いふ譯で御座いましよう、學校でも皆の噂に、殊に美しうお生れなされし彼の方こそ、最も幸多

かるべけれと申し合つて居りましたのに、それはまあ何ういふことで御座いましようと、うち重ねて問ふ。

古い言葉にも、美人美の爲めにおやまると申すこともあるとやら、つまり、御自分の容色にほこつて、たかぶるといふ樣子何うしても包みきれねば、それ故に良人ぎみへの仕むけ惡しく、何處にも落ちつかで、斯うはなるのだと申すことで御座いますと、丸髷に結へるは、靜に說き終りぬ。

そうで御座いましたか、そうで御座いましたと言ひて、思ひありげに、彼の束髮に結へるは、さし俯向く。

幸と申せば、一番幸なのは、菅沼さんて御座いましようと語り出づれば、まあ、彼の方は跛ちやありませんか、彼の方は何うなすつたので御座いますと、慌しう聞けり。

山田さんが、容色の美いのが不幸のもとになつたと申せば、菅沼さんは、あの跛が幸のもとになつたと申すもの斯ういふものには嫁入らん望みもなしとて、學校を出て後は、外をも覗かず只だ家にのみ籠つてゝしたが、その跛者が望みとて、特に緣談を申し込んだ同じ跛者の人がありまして、到頭三年前、めでたく御かたづきになりましたが、其處は、さして財産家といふではなけれど、舅も姑も小姑もなく、ほんの二人て、風も起らず浪を起らず、それは〱譬へやうもない圓滿な家庭をもつて居有るとのこと、それて、昨年男のお子ができたので御座いますよと、丸髷の婦人は、うらやましげなる口振なり。

何どのありてや、滊笛けたゝましう鳴りて、鐵路間ぢかき其方を風慌しうわたるに、物語ふつと切れたり。

(四)狂ひ筆

まだ宵ながら、山の手の夜は更くるに早くて、巷に燈火の影まれに、朝よりの秋雨は何ほやまで、いとゞわびしう降りつゝけり。

街の半ばに、いと嚴しき冠木門立ちたり。何がしの子爵住みたまふ家とや。今しも、くゝり戶を開くる音

たかく響きて、婢女と見ゆる女二人、小さき聲にうち語らひつゝ、門の外へと出でぬ。

眞個に奥樣はお氣の毒ね、それでは、到頭お氣が狂つたのかしら、殿樣も殿樣だねと、番傘さしたる女言へり。

先刻も、硯をと仰有るから、直ぐに持つて行き、何をなさるゝにやとひそかに覗いて居れば、奥樣筆とらせられて、白き紙に數限りもなく妾といふ字を書き、書いたるをまるめて噛み裂き噛みきり、さて後、散りみだれたのを見まはし、また急に筆をおとりなさつて、あのそれ、立派な襖に、大きく妾といふ字をおかきなさるのでは無いか。能く／＼妾のことがお頭について、わゝしたお心におなりなすつたのだらうと思ふと、眞個に、わたしたちも彼の妾の顔が憎うてとばかり、蛇の目さしたるは太息を吐く。

それは眞個、わたしは今まで嘘とばかり思つて居たのに、まあ、紙に妾といふ字を書いてばかり居有るのと、聲はやゝ高うなりて、うち驚きたる顔を、急に此方へと向けぬ。

眞個とも眞個とも、是れ御覧と、一人は袂より紙きれさぐり出でゝ、彼の番傘さしたるに見せつゝ、そして、殿樣の顔を御覧になると、何でをも仰有らず、只ださめ／＼とお泣きなさるばかり、はたから見て居ても、誠に殘念でならぬ位と、うつむきがちなる物語のうちには、物に憤れる氣、明かに其の外にあらはれたりき。

あはれ、世に斯かる奥樣もありけり。

(五)新 ふ す ま

もうお前歸りますか、まだ可いでは無いか、たま／＼のことなれば、少しくらゐは遲れても可いでは無きかと、母なる人ならむ、五十ばかりにもなりたる、品よき婦人の、言葉しづかに言ひ出づ。

難有う御座います。家には、また色々と用もありますれば、今日は是れにて失禮いたしますると、娘なるべし、年頃廿一二の、丸髷美しう結ひたるが言ふ。

お前も大層やせたのね、あんまり躰をつかひすぎると可けませぬ。女中一人では、眞個に忙がしからう。今更言ふのはをかしけれど、彼の時寧そ郷村さんの方へやつて置けば、彼家は財産家のことでもあれば、決して、金の心配なぞはせずともよかりしものをと、此の間も話して居たこと。世の中に金の苦勞ほどいやなものはなきを、能くまあ辛抱ができますねと、母なる人は、少しく首をのばして、親しげにうち語れり。

御心配は下さいますな、その御心配なれば御無用になさつて下さいまし、先祖たちの遺へたものを貰うて、只だ減らさじ〱と守るより外なき今の財産家へ嫁入りたくないのは、わたくしのねがひ。苦勞をしながら、新らしく家をこしらへて行きますのは、是れは私がかね〲からの望みなれば、樂みこそすれ、少しも憂しとは思ひませぬ。まあ、茲五年もたちましたならば、少しは苦勞の効も見えて參りましよう、それが何よりの樂みで御座いますとばかり、娘なるは側における風呂敷手に取りて、早や立ちかゝる。

あはれ、世には斯かる奥様もありき。

（をはり）



文章の話

中郁秋香

私は寒を避けて昨年の暮から當地、即ち駿河の國藤枝在なる此志太温泉に參り居る事で、實は最初は熱海へ行かうかと思ひましたところ、大分雜踏の由に彼地に滯在して居る友人から申越しました故、當地へ來たのであり〼、然るに當地は實に法外の暖氣で、熱海の友人と言合せて寒暖計で計つて見るに大概同樣のありさまで、殊に松風の聲は荒浪の音よりも趣味があり、山中の人は海濱よりも質朴でといふ樣なる温泉外の効能もあるからして、一月中旬までといふ豫定をも變じて、更に彼岸まで遊浴の事としました折柄、女學世界臨時刊行へ揭載したいから、女學生が修學の益となるべき文話一篇をと博文館の編輯所より申越されました、もとより旅中の事故何一つの材料も參考書も手許にはありません、しかし文章の事は平日熱心に研究して居る事といひ又女子教育の事も從來深く注意して居る事故、材料はなくても、參考書はなくても、申述べたい事は澤山あり〼ではあるが此程眼の具合が頗る不出來で、筆を取る事がすこし、ヤ先できかねると言うてもよい程であり〼からして、幸ひ傍に居る書生か自己流の速記をするから、それに託して此一段の御話をする事といたしました、

偖文章につきての御話は、もとより少からぬ事であり〼が、其中に作文上最も肝要の事で、第一番に知らなくては叶はぬものが三ヶ條程あり〼、それは旨趣の事、法則の事、躰裁の事、此三つである、今其大略を御話し申しませう、

○○旨趣とは、精神の事で、即ち一篇の文が依てあらはるゝ趣向取をいひ、○○法則とは其趣向の配置、即ち一篇の文の組立方をいひ、○○躰裁とは、有樣模樣で、即ち一篇の文の姿かたちをいふ、此三つは互に關係して離るべからさるものながら、其内殊に肝要なるは、旨趣である、其故は旨趣、即ち趣向取の筋が立つに於ては、法則なり、躰裁なりは、よし不十分なるにもせよ、なほ其事實をば兎に角達し得べき事なれど、もし旨趣の筋が立たざるに於ては、たとへ法則、躰裁などか整うたとした處が、事實をあらはし得る事ができないからである、之を今假に家作の事に譬へて申さんに、旨趣は圖引である、法則は建築である、躰裁は出來榮の有樣である、圖引が上手に出來たりとて、建築かたが拙く、材木が粗末で有た事ならば、家屋は見るに足る程の事はあり〼まい、しかしながら其家屋は平常住居して不便不都合に堪へられぬといふ程の事は有〼まい、是圖引が上手に出來てをる

からの事である、然るにもし圖引が下手に出來てをる事ならば、建築かたはいか程巧みに、又材木いか程善美を盡したりとて、其家屋は見躰が立派だといふばかりで、常に住居しては不便不都合の事が多いと同一である、故に家作には圖引を第一に注意しなくてはならず、作文には旨趣に主として意を用ひなくては叶ひませぬ、

旨趣の肝要なること右に申す通りの事である、然るに古來作習文上一種の弊風として、往々無用の事に筆を費やして、却て眼目の點に注意する事が少きは、畢竟此旨趣といふ事に深く意を用ひざるに依る事である、今一例を擧げて申さんに、こゝに某の地に遊ぶといふ題にて、一篇の紀事文を作るとせんに、其趣意は大概、誰々と相伴ひ何時に家を出で、汽車、人力車、もしくは船にて何時に其地に至りたるに、櫻花恰も滿開なりしとか、紅葉猶いまだ染盡さずして錦の如しとか、何方にて午飯を志たゝめ何時歸路につきしとか書きつゞるをもて先は通例とし、從來世に行はるゝ類句など集めたる作文書にも多く此類の事ばかりを揭げたるやうに思はれるが、これらは畢竟第二の紀事で、先づ第一には、某の地は何々の何の方角にあたり、何里を隔ち、何郡にて何街道より何の方に向ひて入ること何程、何川の水上又は水下何川は其何を流れ、こゝは農業をむねとすとか、産物は何にて農業の間はこれを營むとか、茶園、又は桑畑多しとか、村のさま賑はゝしくゆたかなりとか、淋しくして、貧しとかいふ事を記す事が肝要である、これは特り此文につきての要點といふばかりでなく、此地に遊び、又は此題を作習するにつきても、これらの事に目を注いで取調べるといふ事が、學生の要點とする所である、徒らに花を見、紅葉を賞して食事して歸るといふやうなる事は無敎育者の花見遊山と更に差別がない、前に申したやうなる要點に着目して、或は實際上に、又は學問上に之を知るといふ事が、後來の心得ともなりて、其身の益となり、隨て敎育の効用も顯はれて、心を樂ましむる事甚深い事である、記事論說をはじめ各種の文を作習するには、すべて此心得が無くては

叶はぬ事である、それ故題に向ふ時に先第一番に此要點に心を用ひ、能く其趣向を定めて、さて後筆を下す樣にいたしたい事である、但し此注意は特り作文上の事ばかりではない、すべての學問の上にも、又一般人間社會の上の事にも何に限らず、先づ第一番に此大躰の要點に着目して、さて後これに應じ、これを處するといふ事は、實に肝要なる事である、旨趣に就ての事は、先大略右の通りである、偖又法則のあらましをお話し申しませう、

諸君も御承知の通り文章には元來照應だの、波瀾だの、又は抑揚頓挫など種々の名稱を有する法則が有て、此法則を履まねば滿足の文章は出來ぬもの丶やうに言習はされて居る事である、夫故に一篇の文を書かんとする時に臨んで、やゝもすると此法則が纒はりものとなりて、兎角十分に筆が伸びないのみならず、わるくすると此法則の爲に窮屈といふ、感情を惹起して、却て終には文を屬ることを厭ふにさへ至る者があるは、甚不都合の事といふべきである、畢竟此法則はもとより獨り文章の上のみにあるべきものと言ふてはない、これは天地自然のもので、凡そ天地間のもの何事に依らず、左樣にあるべきもの、又左樣なくては叶はぬ、もので、世の中にありとあらゆる事實の成行は皆此法則の外に出づる事なく、此法則の支配を受けぬといふことはない、即ち時世の變遷より、四時の移りかはりをはじめ、一月の間、一日の内に經歷する事柄、大小輕重の差別こそはあれども、皆此法則に由らぬといふものはない、といふことは、之を歷史の上に考へても、又人の一生の上に照しても、或は一年中の事に當て丶見ても明かに知り得らる丶事である、

例へて言はゞ、ペルリが浦賀に來つて、交易の談判を申込んだからして、通商、鎖港の論が生じ、一轉して勤王攘夷の説が起り、此勤王攘夷の説、一は貫徹して王政復古となり、他は反對して開港和親となり、此二つが又合併して明治今日の社會の有樣を作り出すに至りしが如きは、最も面白い照應である、そこで又其間に通商と鎖港との論相闘ひ、勤王と佐幕との説が相軋り、俗吏が意

を逞しくして法を弄び志士志を失ひて難に死するなどの事は、抑揚である、波瀾である、伏見の事件徳川氏三百年の事畢り、版籍奉還の一擧王政復古の鴻業成るが如きは最も手際なる頓挫である、又一年間の事で言へば、春花さき、秋實を結び、寒が來て暑は去り、雨降り風吹き、或は時に雷鳴あり、或は時に地震あり、洪水あるといふやうな事があるは、照應である、抑揚である、波瀾頓挫である、此法則は平日無事の時に於て、萬事萬端の上に於て少しの間斷もなく、あるものであれども、珍しくないからして、誰も頓と氣がつかない、唯非常の時に當り、不測の變に出逢ふ時は、其境遇が全く平日と變つて、何事に依らず意表に出づるに依て、隨つて心に感ずる事が深く、事々物々全く此法則に適應るやうに覺ゆるのである、それ故此法則にかゝる事の烈しいものが、人の上から言へば、事が多くて傳に富む人といふべきである、事柄の上から言へば種々の成行、樣々の因縁が有て、面白い話となるのである、小說の筋立、演劇の脚色などは此法則の最も烈しいものからして組立てられるもので、その烈しいうちの最も烈しいもの程が、人の感を惹く事が深いのである、又人が平日談話をする上でも、事の筋柄が能く明かで、善い事はいかにも善く思はれ、惡い事は何さま惡いと聞え、すべてなるほど尤千萬なりと思はれて、同情を表するに至るものは、畢竟其述べかた、話しぶりが、能く此自然の法則を履みて、之を失はぬからの事である、文章の上にいふ法則なるものは、即ち此自然の法則に依て文を屬らしめんが爲に設けたるもので、さて之を指示さんには是非とも種々の名目を立てざるべからず、是照應、波瀾などいふ名目の起る所以である、

右の次第であるからして、文章は此法則に依て組立てるといふものではない、此法則に依て組立てらるゝものである、しかしかやうに言はゞ、學者は、それは甚だ困難の事である、法則に依て組立てるといふ事ならば、たとひ法則は難儀なりとも、しかし之を作る手掛りはある事なれども、法則に依りて組立てらるゝものぢやとあるに於ては、どうして作らばよからん、工風の立て

（一九〇）

かた、手の着け所もなく、一口にいふつらまへ所がないといふの外はない、甚だ困難の事であるといふてあらう、しかしながら此法則は前にも申す通り何事にも離れないもので固より文章ばかりに限るといふものではないから、文章にもせよ、談話にもせよ、何なり、かなり、能く其事實の有姿を其儘に寫し出すからは、此法則はおのづから其中に備はりて、談話ならば、筋の立たる話となり、文章ならば法の正しい文となる事である、今鳥渡例を設けて言はゞ、先此志太に湯治に來たといふ事を紀事文につゞるとせんに、此湯治に來るには病氣に依るか、又は健康保全の爲か、いづれ其來る事となりし趣意がなくてはならん、これが此一篇の要旨であるから湯治中の事は萬事萬端皆此要旨におのつから照應せねばならぬ事である、さて又其ゆくたてを言はんに、その出發新橋よりとして、汽車中某に遇ひたるが、これは鎌倉へ遊ぶといふ事で、大船で別れたとか、熱海へゆくとの事で、國府津で下りたとか、大磯より誰が乘入りて靜岡まで、同車せしが、某氏の志太に遊浴せる由其話に聞きてはからず友を得べき事を喜ぶとか、その外車中見聞する事を述ぶるにつきて、多少要旨に應ずる事あるべきは勿論の事である、偖藤枝より下りては、人力車を雇ひたりとか、稻葉通ひの馬車に入りたりとか、を始として途中の有樣、景物など其時候に應じてかれこれあるべし、さて志太温泉に着せしに、果して某氏にあへりとか、今朝立ちて歸京せりとか、誰々も來り居たりとか、其他病狀、氣分のよしあし、園中の趣、近傍山水の景などすべて、有のまゝに書きつゞる內、おのづから要旨に應ずるものあり、又種々樣々なる事柄ありて、抑揚も波瀾頓挫も、備はるものである、是畢竟前に述べし通り、此法則はもと自然より組立てられてをる物故の事である、但しこれは紀事文躰に就きての事で、論說躰に至つては此法則が一段烈しくなる事であるから、殊に耳目に感じ易い事である、

かやうの譯であるからして、文章の上にいふ法則といふ事は、もと文章の上に限るものでない、何事も此範圍の外に出つる事は得ざるものであるから、唯其自然を

失はぬやうに書つゝるまでぞといふ事を、一と通り心得おき、しひて法則に拘はらず、唯その有姿のまゝを順序よく書きつゞれは、即ち自然に法に叶うた文章が出來る事である、なまじひに法則に拘はる時は、言澁り、筆滯りて、終には言ふべき事をも言ひをほせぬやうの事となるものであり升、

偖又躰裁といふ事の大略を御話し申さんと思ひ升、但し躰裁の事を御話し申すには、先第一に男女に依て其文躰もおのづから差別を生ずる事のあらましを説かざるを得ませぬ。元來文章の上で、男女躰裁を異にすといふ事は、是また自然に出る事で、人の躰格性情は、もとより十人は十人ながら、百人は百人ながら各互に相異なるもので、千差萬別ではあれども、しかし男女の上から之を見る時は、おのづから剛柔強弱の判然たる差別ありといふ事は、誰も能く心得たる事實であるであるからして其自然の差別は、其風度容躰に、進退動作にあらはれて、男はおのづから男らしく、女はおのづから女らしき有樣となるのである、是か其姿形をはじめ言語文章等が由て別るゝ所である、かの男女同文などいふことは、畢竟此自然の差別を知らぬからの説で、もとより論ずるまでの事でもないが、しかし尚此事は後にも申さん、左樣であるから、女子の文はおのづから女子の躰裁がなくてはならぬ、しかしその躰裁において、從來女子の文どいふ時は、病める小町が櫻の枝を携へたりとも形容すべきやうに、いかにもなよ／＼としてみやびやかに且少しも力なき躰を以て至極のものとし、且其文體に於ても、書簡文の外は先概して紀事躰を專らとし、論說文の類は女子には全く思ひもよらぬものとするものゝ有樣であつた、何さま昔の世の女子は左樣でありしなるべく、又左樣でなくては叶はざつた事でもありませう、なれど明治今日の女子の文は決して左樣にはなるべからざる事である、

そも／＼人としては思慮なきものはない、思慮あれば、物に觸れ、事に應じて是非する所なきを得ぬ、是の是たるを述べ、非の非たるを辯ずるは論である、說である、さらは女子といふとも論說文を要せずといふことがあ

ろべき事ならんや、殊には此是非の思慮といふものは、教育をうくるに隨ひて、次第々々に精細に分別せらるゝものなるをや、それ故今日に於ては論説文はもとより女子にもかゝらざるべからざるのである、依て其文躰の如きもます／＼從前の如き有樣に倣ふべきでない、しかしさればとて又「妾何ぞ與り知らんや」といひ、「それ然り豈それ然らんや」といふ類は、あたかも怒れる巴御前が黑栗毛の馬に跨り、長刀小脇にかいこんだるものゝ如く、諸君の爲に取るべきでない、但し學校に依りては左樣なる文躰を主張し、生徒の中にも其文躰を可なりに取廻す者があるやうに聞きし事もあるが、それはおのづから其主義があつての事で有ませう、諸君はもとより男權剝奪、女權擴張など十四五年以前ある女流の間に行はれたりし二の舞を志ざゝるゝ事でもあるまじく、又女英雄、女俠客となるを目的とせらるゝでもなく、畢竟完全の教育をうけて人の婦となり、主婦となり、母となりて、能く其身を修め、家を齊へて後榮を期すといふ事を眼目とせらるゝ事ならんと考へ

升からして、其文躰の如きも、彼の病める小町の樣なる柔弱無力に流れず、さればとて又怒れる巴の豪放殺伐にも失せず、其躰いかにも流暢温和にして、しかも何となく凛々しく犯すべからざるさまがあつて、一讀した上でも淑女貴夫人の手に成るものなりと知られるやうにありたい事である、それには先第一にその「用語」を擇まなくてはならぬ、といふは用語に依て躰裁はおのづから別るものであるからである、譬へば家屋の有樣は用材に依りて上品にも下品にも、又風雅にも、粗野にも見はけらるゝと同樣である、依て用語はなるべく正しくて鄙しからぬものを擇むべきである、しかしいかに正しいとて、目馴れず、耳遠くすべて、普通に通じ易からぬものは、たとへ古語雅言にもせよ、典故あるもの、用例正しきものにもせよ、普通文には斟酌すべく、唯廣く世間に行はれて、いづ方にも通じ、誰にも能くわかるものを擇ぶが肝要である、字音の詞ももとより用ふべしといへども、是また世間一般いづかたへも廣く通用するものに限るべし、書簡文には殊更此注意が肝要

である、淋しき事を昔はさう〳〵しといひたりとて、之を書簡文に用ひて騒がしき事と思はれ、耻かしき事を古くはやさしと云ひしかばとて、その意味の處に用ひて、しをらしき事に解せられたるやうなる話は、まゝ聞く事である、男子の書簡にも、ふき出して笑ふ事を噴飯と書きて、哺を吐く事と見られ、もどかしく思ふ事を技癢に堪へずと認めて、癢ゆくてたまらぬ事と思はれし話もある、これら畢竟は世間一般に通用せぬものを、みだりに用ふるからの誤りで、最も厚く注意せねばならぬ事である

偖それに就いては「紀事」「論說」「解釋」「書簡」などいふ、各種の文の躰裁について大容の事を申さば「紀事文」は其事柄をいかにも順序よく筆が滞らずすら〳〵と書くやうにありたい事である、殊更に文躰を飾り、對句などを取て花やかに書きつゝあるなども、前後すべて其躰裁を變ぜず、一篇を全くする事ならば格別の事であるが、前後の躰裁が相應せぬ以上は却て甚見苦しいものである　古人の文で紀事文の模範とすべきは藩翰譜、折焚柴の記など大かた先よろしい、雲萍雜志、東西遊記、樂訓などいふものゝ内にも取るべきものがある、志かしこれらのものも文法上にはすべて甚誤が多いから、能く〳〵注意せねばなりませぬ、又「論說文」は姿いかにも穏かに、詞づかひか極めて安らかで、文の筋目が正しく、心が明白であるやうにありたい、但し其趣意柄に依ては穏かにばかりも、書き難く、おのづから語氣もせまり、詞づかひ烈しく廉あるやうになる事あるは勿論の事ながら、その詞づかひには、尤も能く注意して、彼の漢文の書崩しのやうなる語氣を避くべき事である、論說文には模範とすべきものが甚少い、秘本玉くしげのうちの文、又讀史餘論、藩翰譜などのある文章などが先よろしいとも言ふべきか位の事である、これも文法はすべて誤が多いから注意せねばならぬ、

「解釋文」は其說き明す事柄を順序よく、いかにも委しく詳かに、志かもくだ〳〵しからずさら〳〵と書き志るすべし、證據などをあぐるには、其書名、卷數は勿論、版本ならば丁數頁數をも記すがよろしい、貝原翁

の五訓のうちには、解釋文および紀事、論説、などの模範とすべきものが少からずある、一と通り讀んでよろしいものである、去かし翁の文には文脈が徹らぬものが往々あるからして、文法と共に能々こゝに注意せねばならぬ、

作習の上に於て最も深く注意を要するものは「書簡文」である、といふ譯は、諸種の文の中に於て書簡文は日用缺くべからぬもので、その上に其體裁恰も今日變化の時にわたるものであるからの事である、從來女子の書簡には、かしく、遊ばされ、遊ばさせられ、なさせられ、おはしましなどいふ敬語を多く挿み、又其文も、冒頭、結尾、或は返し書など名づけられたる一定の套語を用ひ、すべて其文體いかにもくだ〱しく、咄嗟の用をなさず、元來昔の世では女子は全く家の事ばかりを取扱ひ、世間の事に關係する事なく、又其交際も、先づは親族中に限るといふべき有様で、極めて範圍が狹かりし事故に左様なる有様でも別に差支もなかつた事でおり升が、今日では最早かやうの事でははかしがつかぬ、そこで女文改良といふ聲は全社會に滿ち溢れ、随つて男女同文といふ説さへ起る事となつたである、男女同文は前にも述べし通り、男女文體の異なるは、自然の勢に由る事であるから、たとひ男子の文をも何程か改めて、互にかたよらざる體を立てる事とするとしても、尚おのづから區別を生ずべきは免れ難き事であるを、まして今の姿のまゝで男子の文體に依らしめんとするは、取も直さず先年或る學校で作習させて大に批評を招いた、一袱謹修といひ、此旨陳述及び候也と認むる如き事となりて、いかにも不似合の體となりませう、それ故平常の往復には、冒頭、結尾などいふ套語をば勿論の事、其外無用なる敬語の類は成るたけ省いて、專ら要項のみを書きつゞる事とし、前に述べしやうに能く其用語を擇び、文體いかにもさら〱として誰にも解り易く、何方にも通じ易きを第一とすべき事である、

以上が「旨趣」「法則」「體裁」等の三に係る大畧のお話である、さて又之につゝきて緊要なるは語脈である、前にも

述ぶる通り文章の上に於て最も大切なるは旨趣であるが、さて其旨趣の前後貫徹して文理の明かなるは、全く語脈に依る事である、語脈とは詞の言ひまはし、つゞけからの事である、此語脈といふ事は最大切なる事で、語脈とほりてをる文は、たとひ其文に於て、かの抑揚頓挫などいふ諸法は不十分でも、全躰の旨趣は明かに知られる事である、然るにもし一たびこれを誤る時はよしやかの諸法に於て、缺くる所なしとせんにも、全躰の旨趣知り難く、又は反對の誤解をさへ生ずるに至るのである、からして最も能く注意せねばならぬ事である、

此語脈の誤といふは、必しも書生ばかりには、限らぬ、大家先生の文にもまゝ見受くる事である、これは語脈の如何といふを心得ぬといふではないが、畢竟吟味が足らず、推敲が屆かぬに依ることゝ思はれ升、古人の玼瑕をあぐるは好ましい事ではないが、例に依らねば十分の辯解を得ぬから、已を得ず一二の文によりて之をお話し申しませう、

松崎堯臣が窓のすさみ追加に「同國左近丞氏と云ふ姓ありて、予が友だち田浦氏の談なりとて語りしは」とあるは「同國に左近丞氏と云ふ姓ありとの旨田浦氏の談なりとて、予が友だちの語りしは」との意なれど、かやうに書きては筋柄がわからぬばかりでなく、予が友だちなる田浦氏といふやうに聞え升、又馬琴が著作堂雜記に「當貢の春町同心町人の妻娘美服を着て徃來する者を捕ふ」とあるは「町同心が町人の妻娘の美服を著たる者を捕ふ」といふ意なれど、ふと見る時は、町同心や町人などの妻娘といふ樣に聞え、山崎美成が提醒紀談に「其地の質朴思ふべし、寳暦の頃まで庄屋のみ知りて奉行ある事を知らずといへり」とあるは、民皆庄屋ある事のみを知りて奉行ありといふをば知らずとの事なれど、かく書きとりては明かならず、又白石翁の讀史餘論、比企攻撃の條下「能員が子比企三郎云々、一族郎黨命をすてゝ戰ひしかば、寄手の兵多く疵を被りて引退く、畠山二郎重忠入かはりて攻戰ひしに破られて御館に火をかけ云々」とある攻戰ひしに云々は、攻戰ひしか

ばそれに破られての意にて、即ち重忠に破られしことなれど、ふとみる時は攻戰ひしにそれも破られてにて重忠が破られしやうにも聞える事である、これらの類は古今の文に常々多く見受ける事である、又窓のすさびに「或る君宴を設けて、客を得られし時、小童菓子を持出づとて袖の間より柿一つ落し赤面して進退きはまりしに、君叱りて曰く、無頼の小兒、主君の與へしもの其儘に喰ふべきものなり早々に持ち去るべし、彼母のある故におくり與へんとてたくはへたり、さりながら無禮にこそ、となりしかば滿座の客、陸勣の橘にこそと賞しあへり」とあるは、〈の間に「とて、さて座客に向ひ」といふ句を加へざれば旨趣を達せず、これらの類もまゝあることである、

さて又語脉に次きて注意すべきは語氣である、語脉が能く徹り、語法も亦缺くる所なき文でも、もし語氣に於て整はぬ所がある時は、讀者の意を動かして、感情を惹起すに至らず、其文見るに足らざるものとなる、されば語氣もまことに大切なるものである、そもへ語氣とはいかなるものぞと言ふに、これは言語の氣勢を言ふ事である、元來言語といふものは、其喜怒哀樂の境遇場合に依て、又緩急疾舒の事態有樣に從つてこれを口に述ぶる氣勢おのづから異なるものである、それ故に、其の意に在る所を言ひあらはすと、又其すでにありし事を言ひ述ぶるとを分たず、又文章と談話とをも擇まず、これを寫す時に當ては其場合に應じ、其有樣に從ひ、その言語の氣勢に依て喜怒哀樂の情を示し、緩急疾舒の形を顯さんければならぬ、からして辯士が演說、講釋師の講談、落語家の世話など、いづれも悲愴の事には、悲愴の聲を發し、勇猛の狀には勇猛の聲を出し、緩急疾舒のありさま、皆其語勢と態度とを以て之を聽衆に示す事で、これを示すことが上手で、能く其眞を寫しあらはす者を、巧者と稱し、上手と呼ぶ、文章に於ても亦全くかやうでなくてはならぬ、唯かの言談にあつては、聲音に依り、態度に依て示す事が出來るものであるが、文章ではさうはゆかない唯語氣一つに依て之をあらはし示すの外はない事である、夫故に語氣は尤も注意せ

ねばならぬもの、大切なるものである。
語氣が整つて、十分其眞を寫し出す事が出來れば、讀者をして必滿足して同情を表せしむ、事が出來る、即ち論說文に向へば、其論ずる所、說く所こと〳〵く條理判然として、火を睹るよりも明かに、其是とする所はまことに是にして、非とする所は極めて非と感じ、かの謂はゆる麻姑の手をもて痒き所を抓くが如き思あらしめ、又紀事文に記す所を見ては、身其坐に在り、足其地を踏み、親しく其形に接して、直ちに其聲を聞くが如く、慢然として憫み、憤然として怒り、愕然として驚き、手の舞、足の踏むところをも忘るゝに至るものである、文章の能く人を感動するは、主として語氣の眞に適するに依る事である、からして古人も最も此語氣の修練に力を用ひた事である、今その一二を言はゞ、
馬琴が八犬傳、芳流閣條中、志乃が旅宿にて、村雨丸をあらため見るところの文に、「件の大刀を左手に取り、先柄糸の塵を拂ひ、しづかに鞘をおし拭ひ、引拔きて刄を見るに、村雨にはあらざりけり、これはいかにと驚きつゝ又とり直し、つら〳〵みるに、その長短はひとしけれども燒刄無下に似べくもあらず、云々、」
この文中「刄を見るに」の下はじめは「こはそもいかに村雨にはあらざりけり、これはと深く驚きつゝ云々」と書きたりしを、更に右の如くには改めしなりといふ、何さま鞘よりぬきて見た即時に「こはそもいかに」と驚くやうなるは、粗忽あわて者の擧動で、志乃其人の如き膽力ある人物の有樣ではない、先とくと其贋物であるといふ事を見定めて、さて後はじめて驚き怪むが當然の事である又加藤千蔭が、春の山ふみといふを題にてといふ文に「清げなる童の蕨折るさまも所からにぞいと興ある、云々遲しとや尋ね玉ふらんといふ〳〵別れゆく、尻にたちて、しばし行きて、此山本に柴結ひわたしたる門より入るを見つゝ、ありし方へ立歸れば、君散るといふ鐘の聲もしづ心なくて、今なん、求めさせつるとの王ふ、遲かりつるはかゝる事なん侍りてと聞ゑ參らすれば云々」とある此「おそかりつる」の句、初は「かゝる事侍りてなんおそかりつか」と書きしを、春海が說に

よりてかく改めたるものである、(うけらが花の板本には、「かゝる事なん侍りぬる」とあり、かくては文章甚劣れり、何故さやうに訛したる事なるかわからず)何さま君の詞の散るといふ云ことは、俗譯すれば、「入相ノ鐘モ鳴リテ、心忙シケレバ只今人ヲ尋子ニ出シタ處ヂヤ」といふ程の詞をうけての答なれば、春海の修正のやうになくては叶はない、俗譯なれば、「遅ナハリマシタハ、カヤウ〳〵ノコトガ有タカラデアリマス」の意で、入相の鐘の詞に應じて遅くなりし言開をする語氣必かくの如くなくては叶はぬ事で、前の樣では語氣緩くなりて大に妙を減ず これらに依て語氣の大切であるといふ事の一端は知られる事でありませう、

(完)



雜録

姫宮殿下箱根御消息

暑氣殊に烈しかりし今年の夏、箱根離宮へ御避暑遊ばされたる姫宮。昌子内親王、並に房子内親王の兩殿下には、御身體頗る御健勝に渡らせられ、日々の御學問、御運動など缺さず御精勤あらせられたる由なるが、當時御避暑中の御日課並に平素の御樣子等に就き伺ひ奉る處ろに依れば

◉御起床 御床あげは午前五時半と定められしも無論其の前御目覺になる事もあり晝の御座が出來ぬ内に御目覺になれば御側の者困るならんとの思召より必ず其の時間をお守りになる俗御起床になれば先づ「おしまひ衣」といふを着し晴天ならば御手水の後六時の御朝餐前まで屋外の御運動を取らせらるゝが通例にて雨天の節は此の間に御梳を上させられ御朝餐を召上つて後おしまひを遊ばして初めて晝の御服と御更衣になる由

◉晝の御服 は友禪かかすりにて、其の他の縞物は決して着さず、其の上にとき色の御袴を召さる御朝餐の

時間は大概三十分間にて是より八時半までは御隨意の時間と定めて此の間に兩殿下には御室內の飾付御机の周邊の御模樣變などを遊ばさる大概是等は御自分で遊ばしお附の女官の手をお取になる事は極く少なく一躰御更衣にも御食事にも人手を取る事は成丈少なく成丈早く片付る樣に御敎育申上てある御自由が利せらるればとて決して便々とは爲て居らせられぬなり八時半よりは●●●●●●

◎規定の御日課　にかゝらせる御學問の方にては御用掛下田歌子、阪正臣、三田守眞、小川直子、堀江義子、遠山中子の六名が附られ目下は專ら三田守眞が御附なり御學課は華族女學校の課程と同一にて書籍も同樣規定の物を御採用になり只修身書のみは別途のものを進講して居る由、此は其の筈にて一般の修身書は臣民の君に對する心得を說く事を主とし居る故、君の臣民に對せらるゝ心得を記すと云ふ事は無き故なり兩殿下共御學問は餘程御嗜好の方にて御成績は何課に限らず平等に行かせられて居るお歷史物は總じて御愛讀書籍中の第一位を占め御文章にはなか〳〵御熱心が見えるとの事、御歌は早くより遊ばして、兩宮とも御秀逸多く御歲にはませたる御詠わるやに承る斯て御晝餐までに三內の御日課を濟せられて御晝餐後二十分間の御休となる

◎御晝餐は洋食　なり此には四十分間の御食事時間を定め午後の御學問は一時に初まる事となる此より二時頃まで再び日課の御讀習あつて御隨意の時間に移らせらるゝが其の日御使用の鐵筆、筆亦は硯など皆御自分にて洗はせらるゝ由、

◎御隨意時間　午後の御隨意時間には室內外の御遊戲と御運動が主なるものにて箱根にては大概隔日小舟を葦の湖に泛べさせられお附の女官と釣を遊ばす樣に見受け奉れり去る明治二十九年同く箱根に御避暑の折には姉宮殿下がまだ御九歲、妹宮が御七歲に渡らせられし事とて小舟に召して湖上に泛ばせらるると女官等と共に舷を叩いて『風と波』との唱歌を御聲高らかに謠はせ玉ひ御警護の爲に他の舟で御伴申して居たる箱根町役場の者等に宮樣の御歌を斯く近く拜聽するとは勿躰なき次第なりとて難有涙を溢ぼさせたる事もありしが本年は御子樣方とは見上られぬまでに御威嚴を備へ玉ひ去る十五日箱根尋常小學校運動會を御覽に供した時に生徒等に遣はせとて町長を御前近く招き書籍百數十部を賜はりし時なぞは町長は其の思召の難有きと

又其の御威光とに懾れて如何にしても進み得ず漸く養育主任の佐々木伯より御下賜品を頂戴し感涙を共に引下りといふ

◉夜の御寝　御寝は八時半、箱根離宮に於ける姉宮殿下の御座所は天皇陛下の御座所を、妹宮殿下は皇后陛下の御座所を用ひさせられ居る由

◉兩宮殿下の御性質　兩宮共誠に御穩順の御氣質にて總て御附の申上る事に否と云ふ御言葉を賜はりし事なく斯々遊ばせねばなりませんと一度申上し事は決して御違になりし事無く時には餘り堅く御守りになり過ぎは爲ぬやと思はれる事もあり、且つ今日までお附の女官中にて兩殿下の御不興を蒙りたる事は愚か御叱りさへ頂戴したる者無と云ふを以ても御美德の程は推量らるゝなり室內の御掃除などの折誤つて殿下御愛玩の品を毀すやうの事ありても女官が恐る〳〵申上ると御返辭があるのみで一向御氣色さへも變させられず總じて誰に對しても其の面目を失はせる樣の事決して遊ばされずといふ、

◉兩殿下の美德　御避暑地の人民が御慰の爲にとて或は花火又は催物などを御覽に供へるに何日か殿下の御都合宜敷からんと伺出れば殿下の方にては決して何日に爲よと仰出される事は無く何時も其方の都合のよき時を選んで其の時刻を申出ろと御意になる事が御常例なり其の他御散歩御運動の時にも始終御避暑地の人民の邪魔にならぬ樣との御注意の深き事は恐多き程にて或る日、兩宮は葦の湯に成らせられし時途中二子山下の見晴茶屋にて御休憩中に後方より魚屋が呼吸急はしく朝の荷を擔ぎ上て來兩宮殿下の居らせられるを恐入て道傍に蹲りたり兩殿下は此の樣を御覽じて佐々木伯に向はせられ何故魚屋を那麼處に蹲ませた日が當るのに魚が腐るでは無かとの御意なりし佐々木伯は早速右の旨を御警護の巡査に傳へ殿下の御運動が人民の稼業を邪魔しては相成らぬ故早く擔いで行く樣にと注意したれば其の魚屋は感涙にむせびながら御休憩所の前を通りしといふ以て其の一斑を窺ひ知るべく實に畏き御事にこそ、

公園の花屋敷

秋風立ちそめて公園散策の人やう〳〵繁し家族同伴して上野、淺草、向島に筇曳かば花屋敷に立寄りて珍禽の博覽會を見るもよし、例によりてこの頃の賑ひを紹介

すべし、看板の活人形は塚原卜傳にて、路すがら左り一帶に小禽野獸を鐵網に養ひたり淡紅色のインコは餌籠を嘴にてひつくりかへしては故意に餌糠を覆へせり。つゝわり熊は客に尻を向け、猿の摑みたる大枝の下に臥す。少しくゆきて活人形細工の少女紙腔琴をあやつるあり。其の左の岡の石の上に五百羅漢の陶像を置く。岡下には水魚水禽群れ集ひぬ。サンセウウヲあり小スッポンあり、巖に匍ふ。噴水器ありて水を吹ける傍に金網を張り大なる鵜に似たる鳥あり　濠洲産にてペリカンと言ふ。よし頸の長きは鶴にあまり、居すわりさまは家鴨に類せり　嘴の長さ三四尺淡紅色に黄を帶ぶ下嘴は袋張りにて水を含めば太しく脹がる、がふり〳〵と水を吞吐せり是れ等は花屋敷の珍たり猶大鰐あり、水獺は巖の上に横はり忙はしく頭を動かし少しも休みなし、形は栗鼠の大なるもの、狒々の面相は煤けたる老爺のごとし、褪れる毛は雌雄に似、尻の赤きは猿、人を見て動く、氣持の惡き動物なり。エミうは火食鳥に似て足稍〻小さく面相甚だ惡しく鼻の孔は三角火食鳥の頸には孔雀の如き錦斑あり。鳥小屋の前を通る。マーカといふ鳥は赤羽冠に青黄二色の尾あり。熱帶の鳥なるべく色濃厚なり。猩熊といふあり狸に似て色黄なり山あらしは背毛針を逆立るが如し。三足雞は尻より更に一足を垂れ、五足牛は頭上更に一足を戴く、園内に。虎を使ふものあり。虎檻の前にて棒を持ち咆哮せよと言へば咆哮し、牙を露はせと言へば牙を出し、殆ど使者の頭を呑まんとす、使者虎の掌を取りて之を客に示す。駕御自由なるよ猫を使ふが如し。奥山閣の下に白蛇あり、辨天なりとて賽錢箱を備く其の蛇をのぞきたるに白くて尺に三寸あり。箱の隅の棚の上に居たり。水椀など備付てあれど降りて飲むの生氣なきがごとし

動物園の消息

殘暑もやう〳〵過ぎ去りて涼風そよ〳〵と肌冷たきを覺ゆるこの頃さしも一年三百六十日、籠の中檻の中に閉こめられて暑きが上にも窮屈のおもひする動物園の禽獸も、これからは我々の世なりと打寛ろぐべし、いでや園内の消息をものせん、

◉象一日の食量、一度にても東京を見し人にて動物園の象を知らぬものはあるまじ、よしこの象を實見せざる人も象の體格の偉大なることゝ鼻の先を手のやうに

自由自在に搖かすことを知らぬものはあるまじ、さてこの象が平日如何なる者を食ふて活きてゐるかといふ事は一寸想像に浮ばざるべし 現今象の食物として園丁の語る處を聞に、まづ其の主食物ともいふべきは乾草と藁にて乾草が一日の量目、五貫目、藁十貫目、又其の副食物ともいふべきが芋と、砂糖にて、薩摩芋が十二貫目、黒砂糖四百目、その外に飲料水がザッと五斗とは驚かざるを得ず、これが象一日食量なりき。動物園には毛物あり、鳥あり大なるは馬、鹿、虎、熊、鷲、火食鳥の類より小なるは狐、狸、猫、兎に至るまで其の頭數幾百を以て數ふべきか、是等全體の食量の殆んど半分を象一頭にて食ひ盡し得べしといふに至つては何人も其の食量の大なるに驚かざるを得ず、食時は晝、晩夜の三食にて乾草や、藁や薩摩芋は其儘にて與ふる故別段手數を要せざれど、夏季に至れば、乾草の代りに生草十貫目を食はせ、寒中は水を沸かして微温湯となして飲ますだけの面倒あり、但し冬になれば、平生五斗の水は三斗乃至四斗位に減ずるが普通なりといふ、又黒砂糖を與ふるには水に溶かして飲ますこともあり、又四百目を其儘一時に食はせて跡より水を飲ます事もあるといふ。

◉虎、豹、熊、 お小供達の御馴染なる例の大虎、豹、熊は相變らず、元氣なり、印度産の鰐魚は昨今は時節柄とて生氣ありしがこれより段々寒空に向ひて縮みあがるならん。

◉三羽の尾白鷲 北海道なる佐藤、齋藤の兩氏より此程寄附したる三羽の尾白鷲は何れも當歳なれども性質獰猛にして大鷲を凌ぐの勢あり現に其内の一羽をば二羽の大鷲と同棲せしめたるに新參の癖に羽振りを利かせて大鷲を眼下に目下し大鷲の喙める餌を其嘴より奪取るなど己が儘の振舞ひ兇暴の限を盡し居れり又白雀は埼玉縣鯨井和一氏邸後の藪中にて捕へ此頃同家より寄附したるものにして頭毛悉く白し

◉シヤウ 麝香猫の一種にして其形鹿に類せり新潟縣櫻澤孜氏が先年朝鮮守備隊附として勤務中同地にて捕獲せるものにして能く人に馴れ其朝鮮にある頃も朝飼場より外に出せば喜んで彼方此方を逍遙し一日を遊び暮して夕刻立歸るを常とせしが或日の事彼は其頸に一葉の白紙を帶びて歸りたれば櫻澤氏手に取りて之を見れば「作物を荒して閉口すれば以後放園は御注意ありたし云々」との意味を認めあり扨は農民に迷惑を掛けたるかと其後は他出を禁じたるが任期滿ちて歸るに及び遂に同園に寄附したるなりと

◉エミユーの卵　去る二月中走鳥エミユーが三個の卵を産卵したる次第は當時の紙上に記したるが同島の我國にて産卵したるは抑も是が始めてなるより内一個は天皇陛下に献納し自餘の二個は博物館に陳列する事となれり

◉山椒魚を捕獲す　七月二十三日のことなり前日より降頻りたる雨水は動物園内を貫流する小川に滿ち滔々として不忍池に流れ込みぬその時川尻に長さ一尺五寸許りなる山椒魚あり流を溯りて園入に入り來りたれば園丁之を認めて捕獲し目下水族室に放養しあり然るに同園にては曾て飼養の山椒魚を取逃したることなければ或は大學校若くは附近の人家に於て飼ひ置けるものが潜かに脱れて不忍池に入り更に雨水を辿りて園内に入りしものなるべしとぞ

◉大蝙蝠　麹町の山脇、芝の吉原兩氏より三頭の大蝙蝠を寄附したり内一頭は小笠原硫黄島二頭は同母島の産にして擴げたる翅の濶さ二尺に餘れり

◉カルカモの孵化　水禽室のカルカモは去る頃十三個の卵を孵化せしめたるが中七羽は斃死し六羽の成長して今は親鳥程となりぬ又水禽室の後方に棲みたる一羽の孔雀(雄)は去る頃斃死し此外園内にて猪、山羊各一頭づゝ斃死したり

蛇御料理

聞けるのみにても隨分氣味惡しき話なるが米國ロチエスターのピーターシルーバーと云へる人は稀なく蛇が大好にて家に諸種の蛇を飼養し居り此程知人を招きて蛇料理の饗應を爲したり先づ其獻立を見てあるに水蛇のスチユー、響尾蛇のフライ、蟒蛇のボイルド、蜥蛇のロースト、其上に食卓には生きたる響尾蛇、碳製の蛇を並べ四壁亦悉くるに蛇の皮を以つてしたり主人は豫め客の食ひ能はざるを圖りて普通の料理をも備へ置きたるに初めの中こそ人々氣味惡がりたれ後には味の美なるより普通の料理は見返るものだになく別けて響尾蛇のフライの如きは何れも舌鼓にて中には主人の戯れにて鰻を詐りたるものなるべしと稱し見る間に一皿を盡くしたるものさへあり、一つ食膳に列したるもの十八人ありしと

百花園の秋草

夕風たつ比、吾妻橋より舟にのりて小松島に至り、白鬚

明治女傑
十二大家投票募集

明治の昭代、文運の隆盛に伴ひ、女學界の趨勢著るしく發展し、女流名家の輩出近古無比と稱す、此時に際し本誌は新たに當代女流の英傑別紙投票用紙に指定せる十二大家を選ばんと欲し、普く江湖に向つて投票を募る、是れ斯界の先輩を稱揚するのみならず、又以て後進才媛の摸範となし、一般婦女社會の啓發誘掖に資せんとするの趣旨に出づ、讀者請ふ、左の規程に由り公正に投票されん事を

最高點の投票を得られたる諸大家へは精巧なる石膏製の塑像を贈呈し且つ其の肖像は明年一月より毎號女學世界卷頭寫眞版（アートペーパア）に掲載し、且つ其の小傳を掲ぐべし

投票規程

一投票は凡て投票用紙に由る事

一投票〆切は**十二月十日限**の事

一投票披露は來る三十五年一月五日女學世界第二卷第一號に於てす

一投票は封筒に入れ表面に**女學世界投票**と朱書し**博文館編輯局**宛の事

（此投票用紙を切取り記入の上投票すべし）

投票用紙

明治女傑十二大家

教育家	宗教家	著述家	英學家	女丈夫	小説家	事業家	交際家	音樂家	歌人	書家	畵家

投票者氏名及住所

の祠よりほどなくして百花園に至る。門より入る一尺ばかりに、ひき結びたる朝顔の籬あり、花瓣凋みて盡く萎えたり。右の植ゑ込みに秋草繁り合ひて小暗し。尾花、葛花、此の青みのうちに埋もれ、いつれかそれとえ見分くまじきすがたなり。庭石の平なるをひろひ歩るき園亭の前の涼み臺に憩ひ、茶をすゝりてあるに傍への小鉢に藤豆やうの蔓して徑三寸に餘る夕顔やうの花開きたるは夜會草と呼べり。病人の蒼白き顔に似かよひて見えぬ左右を見めぐらすに青き草立ち、よき程の丈ある庭木を隱るゝまで遮ぎりたる間に紅紫爛斑として錦繍を散せるに似たり。

春の初に梅の花見にまかりし折はいと廣らかに見えたりし庭の面の今は足を容るまじき程の植込みなり。萩の枝のさし出でたる左右より亂れ合ひ裾に繞る竹に纏して縛りあげたれど漏れ枝のいかにかはせん。赤に薄紫をさしたる世のつねの花なるは早や五六分咲きたり。筑波萩の白く細かなる、其の外の白き美しき形せる萩の數いと多し。このみそはぎと同じ程の丈けにて桔梗の花、紫、霜置きて多角形の壺を傾け、互に立ち并らぶ。女郎花のところ〳〵中絶えて黄雲をたゝよはせたる、男部志は同じ草種にて色白く葉粗し、雌雄の黄白花、かたみに袖觸れんばかりなるを、妬ましげに分け隔てたるは刈萱なり。繁みの下に伏して、草叢の間より覺束なく頭を擡げ此處に我ありと言ひたげに羞らひたるは、哀れなる撫し子の花なり藤豆の葉して紅白の花を散らし咲きに咲きたるは茉莉花なり。こは唐うたにもなまめかしきものに言ひなせる由なり。その風情を品せば撫子は幽窓の麗人の如く、莉花は綺樓の倡婦に似たり。繁みの暗きまでなるを物とも思はず一きは拔き出で紅白粉を撒きちらしたる穂花を垂れ居るは紅蓼なり。高さ人の丈に餘り、莖木に近かし。此の花の打ち續きたる中々に賑かなる景色を添ふ。同じ穂花なれど赤色淡みて穂足の長く垂れ籬の外に溢れ出で、地に着かんとするは虎の尾なり。日廻りの花は黄ばみ衰へ、花瓣缺けたり。續きて立てるは旋覆花にて丈高く、花は小に、野菊の黄なるに似たり。丁子草は紅き圓瓣入り交りて輪を爲し、丈け撫子より高からず、萩の花とも色まがひてうつくし。此等の幽艶の花むれにありて獨り濃艶の色を揚ぐるはカンナなり、葉蘭に似たる緑の葉より美人草の花の如き紅き瓣を抽きたるは目を輝かすばかりなり。

女學世界第十三號記事要目

每月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢　郵稅一冊二錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……………十二冊
　　增刊四回…三、六、九、十一月價格同一

廣告料

	二十四字詰一行	半頁卅二行	一頁六十四行
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引二十七圓
二等	三十五錢	十一圓二十錢	割引二十二圓
三等	三十錢	九圓六十錢	割引十八圓

▲等級ハ位置ヲ切日等御照會次第御報可致候

注文略規

● 本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
● 御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
● 郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
● 總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込まれ。

明治卅四年九月十五日發行（第一卷第十二號）

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式合社秀英舍（東京市京橋區西紺屋町二十六七番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

英才詞苑

秋の巻

九月二十日發行
寫眞銅版口繪數葉入

季方に秋に入り青年諸氏の机上新讀物なかるべからざるに際し英才詞苑秋の巻は出でんとす、躰裁は例の如く紙數二百四十頁の中其三分の二を以て懸賞文の披露に宛て殘餘を以て附錄とし之れには知名家の佳什數篇を收む、懸賞作品の選評は**大町桂月、中内蝶二**の兩氏主として其任に當られ、公明に、懇切に添削批評せられたれば、當選の文は直に作の模範となすに足る、種目は小說、論文、敍事文、抒情文、英文、新躰詩、漢詩、和歌、俳句等なり、又六號口繪には殊に奇抜の材料を蒐め、表紙は山中古洞氏の揮毫に係り、意匠最嶄新、而して附錄收むる所は左の如し

附錄

● **彼得大帝**（評傳）……在露國 法學士 夏秋龜一

稿を削つと九、紙數四十頁、此東歐の傑傑の一代を詳敍し評論せるものにして大帝即位以前の露西亞より筆を起し、帝の幼時、歐洲の旅行、境土の廓大、東方政界等に至る迄、帝が生前の經營載せて漏すなし、行文殊に流麗

● **復讐**（小說）……德田秋聲

是泰西名家の筆になる面白き軍事小說を秋聲氏の縱逸の筆にて反譯せしものにして快活なる軍人生活紙上に躍動せり、青年諸子には殊に絶好の讀物なり

● 物外の人體 **賣茶翁**（傳記）……宮田木佛

松籟颯々たる下熱腸を濺はんとして玉者を然、たま〳〵茶烟の内に古人高遊外の遺風を見る、此稿は即ち作者が當時の幼覺に筆を起して我國物外の偉人煎茶道の宗祖賣茶翁の高風を描寫せるもの

● **文學としての言語**（論文）……永井金風

英國の名家ローレー氏の「言語及び言語學の方則」中より最適切なる數章を譯出せるものにして、文學に志す者の必讀すべき資料たり

● **文武叢誌**（逸話）……柳緑郎

我國古今の武士が軍旅野外に在りて文學を弄せし幾多の佳話を蒐錄せるものにして亦英雄の雅懷を窺ふに足る

博文館發兌 品切圖書增刷出來廣告

印	版	叢書	書名	正價	郵稅
●	二十七版	中等教育	日本歷史 上下	一圓十錢	二十錢
◎	再版	四書新釋	大學 全	十五錢	四錢
●	十二版	正篇	千山萬水 全	五十錢	十錢
●	七版	帝國百科 十一編	論理學 全	五十錢	十錢
◎	七版	帝國百科 十一編	論理學 全	三十五錢	八錢
●	五版	帝國百科 二十五編	日本歷史 全	五十錢	十錢
◎	五版	帝國百科 二十五編	日本歷史 全	三十五錢	八錢
●	三版	帝國百科 三十四編	近世美學 全	五十錢	十錢
◎	三版	帝國百科 三十四編	近世美學 全	三十五錢	八錢
●	三版	帝國百科 三十五編	哲學汎論 全	五十錢	十錢
◎	三版	帝國百科 三十五編	哲學汎論 全	三十五錢	八錢
●	再版	帝國百科 三十七編	提要造林學 全	五十錢	十錢
◎	再版	帝國百科 三十七編	提要造林學 全	三十五錢	八錢
◎	十版	日用百科 十五編	祝辭演說法 全	二十五錢	六錢
◎	五版	日用百科 四十二編	海軍一斑 全	二十五錢	六錢
◎	三版	日用百科 四十五編	謠と能 全	二十五錢	六錢
◎	十版	文學全書 五編	中務內侍日記 和泉式部日記 其他 全	二十五錢	三錢
◎	十版	文學全書 六編	濱松中納言物語 其他 全	二十五錢	三錢
◎	十版	文學全書 七編	宇治拾遺物語 其他 全	二十五錢	三錢
◎	十五版	文學全書 十四編	榮花物語 中編	二十五錢	三錢
◎	十二版	文學全書 十五編	榮花物語 下編	二十五錢	三錢
◎	十五版	文學全書 十六編	太平記 上編	二十五錢	三錢
◎	十五版	文學全書 十七編	太平記 中編	二十五錢	三錢
◎	十五版	文學全書 十八編	太平記 下編	二十五錢	三錢

注意

●印 洋裝上製符　▲印 和裝美帙入符

◎印 洋裝並製符　△和裝書の符

（後付の二）

印	版	叢書	書名	冊	正價	郵稅
◎	十五版	文學全書二十三編	水鏡、大鏡	全	二十五錢	五錢
◎	九版	支那文學四編	老、呉、孫、列子講義	全	二十五錢	八錢
◎	九版	支那文學五編	韓非子講義	上	二十五錢	八錢
◎	六版	支那文學二十二編	史記列傳講義	上	二十五錢	八錢
◎	四版	支那文學二十三編	史記列傳講義	中	二十五錢	八錢
◎	四版	支那文學二十四編	史記列傳講義	下	二十五錢	八錢
△	三版	家庭文庫三編	詠歌の栞	全	三十五錢	八錢
●	四版	帝國文庫二編	眞書太閤記	卷二	六十錢	十六錢
●	再版	帝國文庫四編	眞書太閤記	卷四	六十錢	十六錢
●	十二版	帝國文庫九編	道中膝栗毛	全	六十錢	十六錢
◎	十二版	名勝地誌二編	東海道の部	上	三十錢	八錢
◎	四版	名勝地誌八編	南海道の部	全	三十錢	八錢
◎	再版	名勝地誌九編	北海道の部	全	三十錢	八錢
△	五版	圍碁全書一編	圍碁入門	全	十五錢	四錢
△	再版	圍碁全書二編	圍碁初步	全	十五錢	四錢

印	版	叢書	書名	冊	正價	郵稅
◎	四版	日本歷譚二十四編	威海衛	全	八錢	四錢
◎	四版	世界お伽四版	魔法博士	全	七錢	二錢
◎	再版	世界お伽十六編	猿智惠小僧	全	七錢	二錢
◎	十二版	日本昔噺十六編	猿と海月	全	五錢	二錢
◎	十二版	日本昔噺十七編	安達ヶ原	全	五錢	二錢
◎	再版	內外遊戲二編	新游泳術	全	十二錢	四錢
◎	再版	內外遊戲三編	ベースボール クリケット	全	十二錢	四錢
◎	再版	內外遊戲五編	銃獵案內	全	十二錢	四錢
●	五版		歐米小觀	全	四十錢	六錢
●	四版		時代管見	全	三十錢	六錢
●	再版		文藝評論	全	三十錢	六錢
●	四版		風月集	全	三十五錢	六錢
▲	十版		日本女禮式大全	函入	一圓	重量四百匁
●	十版		日本女禮式大全	洋裝	七十五錢	十六錢
●	五版		成功要錄	全	二十八錢	四錢

(後付の三)

印	版	書名	卷	正價	郵税・重量
●	再版	カー子ギー	全	正價二十五錢	郵税四錢
◎	九版	蔬菜栽培法	全	正價七十錢	郵税十二錢
◎	九版	果樹栽培全書	一卷	正價三十錢	郵税六錢
◎	三版	佛教大原理	全	正價十錢	郵税二錢
◎	四版	新體詩學	全	正價十五錢	郵税四錢
◎	十二版	西國立志編	全	正價二十七錢	郵税八錢
△	新撰	明治字典	全	正價三十五錢	郵税四錢
▲	新撰	日本字典	全	正價九十五錢	郵税八錢
▲	三音四聲	字貫	帙入	正價五圓卅錢	重量八百匁
▲	三音四聲	字貫	函入	正價六圓	重量一貫目
△		明治女子書簡文	全	正價四十錢	郵税四錢
△		六書通	三	正價七十錢	郵税六錢
◎	五版	日本歴譚十八編 平田篤胤	全	正價八錢	郵税四錢
△	二十版	農業讀本	上卷	正價十四錢	郵税四錢

印	版	書名	卷	正價	郵税
△	十五版	農業讀本	下卷	正價十四錢	郵税四錢
◎	再版	農學講習全書	全	正價四十五錢	郵税八錢
●	再版	軍事小說 戰塵	全	正價三十錢	郵税六錢

秀才文壇

毎號鮮明寫眞版畫像數葉入

毎月一回發行 ◉定期 **第壹號** 十月廿日發兌 ●詳細の事は就て見よ

定價一冊金拾錢○六冊前金五拾七錢○十二
一冊前金壹圓八錢○郵税一冊壹錢宛●郵
便爲替は駒込局振込、郵券代用壹割增

本誌は天下の青年諸君の爲に發行し斯道研鑽の資に供せんとす、四方の諸君陸續愛讀投稿あらんことを乞ふ。本誌の項目は如左

●名家文壇（文學諸大家執筆）●秀才文壇（青年諸君懸募の普通文漢詩新躰詩和歌俳句等）●文苑遊戯●學校案内●受驗案内●餘興●地方通信●奇聞新報●學海一瀾●皆材料豐富にして毎號懸賞應募の披露あり●當撰者の肖像又は筆蹟を寫眞銅版にて印刷挿入紹介す

發行所 東京市小石川區指ヶ谷町一三三 文光堂

賣捌○東京堂勉強堂松邑三松堂其他各地書店

（奥付の四）

帝國大學教授正四位文學博士重野安繹先生序
華族女學校學監正五位下田歌子先生序
帝國大學講師正七位文學博士小杉温邨先生序
帝國大學卒業正七位須藤求馬先生新著

日本女史

（製本出來）
（着金直送）

全一册上製
金壹圓廿錢
郵稅八錢

日本女史を見よ、我國三千餘年間に於ける、女子の經營せる偉業と、其進化せる巨蹟甚だ多し、而し、其經營進化を概見すべき書嘗てあるなし、亦教育界の一大欠典ならずや、弊店之を憾むこと久し、即ち**須藤先生**に乞ふて本書を世に公にせし所以なり、邃古より近世に至る迄、**政治、法律、戰闘、軍事、宗教、道德、教育、文藝、商工、交通、風俗、習慣、**上は神聖帝王より、下は閭巷の賤婦狹斜の遊君白柏子等に至る迄、苟も女子に關する事項は網羅して遺す所なく、**著者高等學校**に從事する十餘年、其經驗せる確說は亦贅せず、今や模倣教育時代は夙に過ぎ去り、女子教育も將に史的研究の新時期興らんとす、當是時教育家、歷史家學生は言ふ迄もなく其他宗教家、政治家等、苟も女子品位の發達と其教育の改善とを圖らんと欲する者は、速かに本書を一讀して、我國女子品性の古今如何に變遷ありしやを知れ、

發兌元
東京京橋區弓町二十番地 松邑三松堂
仝 木挽町九丁目八番地 山中井洌堂

（後付の五）

蠶業叢書

全部拾貳冊

洋裝菊判美本

第壹編九月上旬發兌

發行の趣旨

富國强兵の策は他なし殖產を興し民力を休養するより急なるはなし、本邦古來扶桑國と稱し蠶桑の業を以て名あり宜なり歷朝能く斯業の奬勵に勉め人民亦孜々之れか發達を企圖するや、其現今に至り已に輸出物金額の大半を占むるの盛境に達したる眞に偶然にあらざるなり惟ふに我邦家の消長は蠶業の盛衰に關するや大にして國家は殆んど斯業によりて其運命をトするに似たり、然りと雖も蠶糸は獨り本邦の特有物產にあらず淸國の多產伊佛の精巧尚ほ我を凌いで餘裕あり、去れば本邦の蠶業は將來益々進んで之れが勃興を圖り之れが改善を講せざれば彼の列强に對峙すべくもあらず然るに我國未だ斯業に關する學識經驗共に幼稚の域を脫せず本館於是乎當代斯業界に於て錚々の聞えある農商務省蠶業講習所本科出身者數氏の新著を乞ひ蠶業叢書の名を以て逐次之を刊行し汎く當業の士に頒ち斯業改善の良友たらんを期す其全部の要目左如し

蠶業叢書全部拾貳冊目次

●蠶業通論
●生絲檢查論
●栽桑新論

東京蠶業講習所 三谷徹君著
生糸檢查所技手 池田榮太郎君著
生糸檢查所技手 德田實也君著
生糸檢查所技手 池田榮太郎君著

● 桑樹病害論　東京蠶業講習所技手　岩淵平介君著
● 養蠶新論　宮崎縣技手　望月關馬君著
● 蠶體解剖論　城丹蠶業講習所講師　松下憲三郎君著
● 蠶體生理論　東京蠶業講習所技手　松尾重信君著
● 蠶病新論　東京蠶業講習所技手　岩淵平介君著
● 製絲新論　宮城縣農學校教諭　井上隆君著
● 殺蛹乾繭論　東京蠶業講習所　三谷徹君著
● 多化蠶飼育論　元濱名蠶業學校教諭　大森孫十郎君　山田島次郎君　著
● 蠶業經濟論　生糸檢查所技手　德田實也君著

第一編

蠶業通論

農學士本多岩治郎君校閲
三谷徹君
池田榮太郎君　共著

全一冊洋裝正價金三拾錢郵稅六錢

本書は所謂蠶業叢書の總論にして世界蠶業の起原より蠶業に關する萬般の事項を括論せるものなり本邦從來此に類似せる一二の著書なきにあらずと雖陳腐にして見るに足るものなし然るに本書は本邦蠶業界の既往に鑑み現在に照し以て將來執るべき方針に及ぼせり其卓觀特絕の論鋒人をして奮然蠶業界の活劇に遊はしむるの感を與ふ實に本邦空前の著書なり凡そ斯業に從事する諸氏は其學者たると實業家たるとを問はす本書を一讀せば恰も闇夜に一道の光明を得たるの觀あらむ

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の七）

大法典發刊廣告

侯爵山縣有朋君題辭

司法大臣清浦奎吾君序文　博文館編輯局編纂

増訂十一版

現行日本法令大全

製本既成全部新鑄活字ヲ以テ鮮明ニ印刷

●全部貳册（洋裝背皮上製）函入紙數四千四百餘頁

●定價金五圓●小包送料●百里以内貳拾八錢●百里以外五拾六錢

我『現行日本法令大全』が他店出版の類似同種の法令書類に比し卓然群を拔くの好法典たるは既に江湖の識認を得たる所なり今や其第十一版の發行を爲すに際し新に大增補を加へ第十版に比し紙數を增加する事**千五百頁**携帶閲覽の便を計り分つて上下二冊となし前版發兌後公布の法令即ち**明治卅一年五月**より今**明治卅四年七月**に至る新法令は殆んど細大漏さずして悉く收載したり此に於てか當第十一版の現行法令大全は明治元年より**明治卅四年七月迄**の卅四年七ヶ月間公布の現行諸法令を網羅したる法令大全となるに至れり而して分類最も整正序次配列宜しきに適ひ目次及索引の編製は更に新工夫を用ひ加るに用紙良好裝釘堅牢にして劇しき使用に堪へ校正嚴確にして法則の規定を誤らず實に比類なき最新最良の法典たるは斷言して憚らざる所なり本書印刷部數に限りあり豫約期限中にても品切となる恐あれば大至急御送金御申込あらんことを希望の至りに堪へざるなり

發兌元　東京　博文館

女學世界
定期增刊
第壹卷第十二號
（明治三十四年九月十五日發行）
（明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

東京秀英舍印刷

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑥
明治34年9月（第1巻第11号、第12号）

2005年12月10日　第１刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2840-9　C3321

第壹卷第十二號

少女文庫

華族女學校學監下田歌子女史著

この書は、少女が家庭教育に[illegible]

全部目次

第壹編 お伽噺教訓

第貳編 庭訓お伽噺

第三編 内國少女鑑

第四編 外國少女鑑

第五編 家庭の心得

第六編 學校の心得

（正價[illegible]）

發兌元 東京 博文館